

ああ、神話のスターたち

グラフ・アメリカ映画史



ああ、神話のスターたち

グラフ・アメリカ映画史

朝日新聞社



確かな明日へ長銀の債券

高利回りの1年貯蓄・年7.388%

ワリチョー

ワリチョーは、年7.388%(税引後、年6.45%)と高利回りの1年貯蓄。税金は源泉分離課税一律12%です。また無記名式ですから、だれにも知られずに財産づくりが楽しめます。もちろん確定申告は不要です。

(優)が大きく活きる5年貯蓄・年8.3%

リッチョー

リッチョーは、年8.3%という高利回りです。お利息は半年ごとに5年で10回、どんな景気の変動にもかかわらず当初お約束した金額を確実に受け取りに出来ます。無税の特典優遇をご利用になれば大きなお利息をソックリそのまま活かせます。

日本長期信用銀行

本店／東京都千代田区大手町1-2-4
☎ 03 (211) 5111 〒100

新宿支店 ☎1160 東京都新宿区西新宿1-5(新宿駅北口)
渋谷支店 ☎1150 東京都渋谷区神南1-11-3
池袋支店 ☎1171 東京都豊島区西池袋1-17-10
上野支店 ☎1110 東京都台東区上野4-10-5
横浜支店 ☎2120 横浜市中区北幸3-2-13
札幌支店 ☎0160 札幌市中央区南1条西2-5
仙台支店 ☎9180 仙台市一番町2-1-2

金沢支店 ☎9200 金沢市高岡町1-50
名古屋支店 ☎4600 名古屋市中区丸の内1-17-19
大阪支店 ☎5411 大阪市東区瓦町4-15
梅田支店 ☎5300 大阪市北区本町6-3
広島支店 ☎7300 広島市立町1-20(立町電停前)
高松支店 ☎7600 高松市亀井町1-2
福岡支店 ☎8100 福岡市中央区天神2-13-7

資料急送

詳しいパンフレットをご用意しております。

ご希望の方は、(住所、氏名、年齢、職業、電話番号)をハガキにご明記のうえ、資料請求券を添えて、さっそくお申し込みください。

資料請求券
別冊オスカー50

定価1500円 0074-258107-0042

The true old-style Kentucky Bourbon

EARLYTIMES



アーリータイムズ

Imported by SUNTORY



「彼は顔役だ」
ジェームス・キャッシュ

酒のサカナに映画の話

えと文 和田誠



「男は追跡する」
ジョン・ウェイン

来日した時の記者会見で健康の秘訣を聞かれたジョン・ウェインは、「いいウイスキーを毎晩飲むことです」と答えて会場を笑わせた。ジョン・ウェインの大柄な体軀を見ていると、映画の中の自信にあふれた主人公そのまま、いかにも頼もしいムードも年齢はともなう変わらないし、たしかにウイスキーのイメージにふさわしい。

ジョン・ウェインがアカデミー主演男優賞を受けた「勇気ある追跡」の主人公ルースター・コグバーンは酒好きの保安官で、彼は十四歳の少女が父の仇討をするのを手伝う。強い酒飲みだという設定が面白く、そのため少女に手を焼きながら逆に少女の方も保安官に手を焼く道中記となっている。

この主人公が愛すべき人物だったものだから、数年後に続編ができた。これがジョン・ウェインとキャサリン・ヘプバーン初共演ということで話題をまいた「オレゴン魂」である。今回は少女の代りに老練の、やはり仇討を手伝うのだが、この道中もどちらがどちらをいたわっているのかわからない面白さがあった。

「マクリントック」のジョン・ウェインも夜な夜な酒を飲んで二気嫌になる役だったけれど、「リオ・ブラボ」では酒を飲むのはデイン・マーティンで、彼は飲み過ぎているため手がふるえたりするのだが、大事な対決の前にはいったんグラスに注いだウイスキーをボトルに返して、「一滴もこぼさなかった」と言うようななかなかいい役どころだ。現実にはデイン・マーティンはそれほどの大酒飲みではないのだそうだが、酒好きというイメージで売っていて、映画でもショウでもマーティンとウイスキーはつきものである。

酒を飲まないことで印象的な西部劇のヒーローはアラン・ラッド扮する「シェーン」である。本当は飲めるのだから、彼はよくぞ者だということを隠して農民一家に居候してきた。

バーテンは喧嘩にあつては中立的立場をとる場合が多いが、店を壊されてオロオロするバーテンもいれば、カウンターの陰にショット・ガンなど隠して、無茶な側に銃口を向けるしつかり者もいる。

現代劇でもバーテンは傍役ながら印象的な人物であることが多い。悲嘆にくれて酒を飲む主人公を洒落た言葉でなぐさめたりする。ミュージカル「いつも上天気」は三人のG.I.が除隊し、バーで乾杯して別れるところから始まる。店の名前はタイムズ・バー。タイムという男が経営者兼バーテンである。そんなことを憶えているのも、その店の雰囲気が好きもしくは思え、俺たちにもあんなバーがあればなあ、と観終ってから友人たちと話し合ったからだ。三人は十年後にその店で再会することを約束する。約束は果たされるが、十年の歳月と生活環境の違いは三人をしつくり行かないものにしてしまっていた。ある事件をきっかけに、三人は再び友情を取り戻してハッピー・エンドになるのだが、とにかく一軒のバーがストーリーのかなめになっているのである。

一九二〇年から三三年まで、アメリカには禁酒法というものがあつた。珍無類の法律であるが大真面目に施行されていたアメリカという国も面白と思う。おかげで繁昌したのが密造酒製造販売業者とギャングたちであった。このあたり、映画では絶好の時代背景であり、禁酒法時代を描いた映画はいへんに多い。この時代はローリング・トウエンティーズとも呼ばれ、つまり騒乱の二十年代。それをそのまま題名にした映画もあった。日本では「彼は顔役だ」という題になったが、禁酒法を種にしたギャングの盛衰記である。ジェームス・キャグニイやエドワード・G・ロビンソンがこのギャング映画によく主演していた。最近の「ラッキー・レディ」

いるために酒をひかえたのであろう。そこでバーでもミルクを注文する。それをバカにしていんねんをつける男にベン・ジョンソンが扮していた。

西部劇では、酒場が重要な背景となることしばしばある。酒場の入口はたいていスイング・ドアになっていて、これは西部の町の典型的な風景の一部を形づくる。ジェームス・キャグニイ扮する義賊「オクラホマ・キッド」は保安官のホールド・アップから逃がれるのにスイング・ドアのばねを利用した。この映画を観たのは小学生の頃だが、映画が好きになりはじめて小学生にとっては、こんなシーンが印象深かった。

酒場のカウンター、カウンターをすべってくるグラス。グラスにはもちろんウイスキーが入っていて、飲んだ客は同じようにカウンターをすべらせてグラスをバーテンに返す。これも西部劇らしい風景である。時にはウイスキーの代りに拳銃がすべってくる。その拳銃で、危機に瀕したヒーローが救われるという映画もあった。

カウンターの奥には鏡が張ってある。カウンターで飲んでいるヒーローが、テーブルにいる刺客に狙われる。鏡に映る刺客をヒーローは振り向きざま撃つ。「大平原」ではジョエル・マクリイがアンソニー・クインを「OK牧場の決闘」ではカーク・ダグラスがリー・ヴァン・クリーフをやっつけた。

近頃の西部劇ではあまり見られなくなった光景に、酒場の大乱闘がある。敵味方入り乱れて、というだけでなく、関係ない客までが酔った勢いで喧嘩に加わる。単純すぎる人物が多いところがリアリズムを尊重する風潮に合わないのかもしれない。西部らしいお洒落さがよくは好きだった。ボトルや鏡が派手に割れるし、椅子やテーブルも大いにぶつこられる。二階から男が落ちてくる。金のかかった映画になるとグランド・ピアノが落ちて

も背景をこの時代にとっており、ジョン・ハックマンとバート・レイノルズの密造酒運搬屋が、それを横取りしようとするギャング相手に愉快な大活劇を展開する。

変わったところでは密造酒を作っている農民とそれを安く買い叩こうとシカゴからやって来たギャング、そして調べに来たFBIが三つ巴のたまし合いを演ずる「暗黒街の特使」という映画もあった。農民がもうすぐ禁酒法が解かれることを知り、自分たちの酒をひたすらギャングから守ろうとする。珍しい状況設定であり、興味を持てた。

多くの好きなミュージカルに「七人の愚連隊」というのがある。やくざの跡目相続争いのようなストーリーで、争うのはフランク・シナトラと「コロソバ」で有名になる前のピーター・フォークである。それぞれ秘密酒場を持つギャングで、シナトラの自分にはデイン・マーティン、サミー・デイヴィス・ジュニア、それにビング・クロスビーがいるという贅沢な顔ぶれ。ピーター・フォークに抱き込まれた警察がシナトラの酒場に手入れに行くと、酒場には仕掛けがあつてボタンひとつで教会に早変わりしてしまう、という滑稽なシーンもあった。

この時代を描いた喜劇で傑作なのは何と言つても「お熱いのがお好き」である。秘密酒場のミュージシャン、トニー・カーティスとジャック・レモンが、ギャングの殺しを見てしまったので、ドタバタ逃遁行が始まるのである。女装して入り込んだ女ばかりのバンドにマリリン・モンローがいて、彼女はいつもウイスキーを隠し持っている。金属製の酒瓶をギターにはさんでいるのが可愛らしく色っぽい。

さて、このほかに酒で思い出す映画にはアル中をテーマにしたものがゴマンとあるのだが、これはウイスキーの広告のページゆえ、その話は遠慮することにいたします。

自己主張する70年代スター★

フェイ・ダナウェイ

『チャイナタウン』(一九七〇)

アメリカ・ニュー・シネマの先駆けとなった「俺たちに明日はない」で、一躍スターになったダナウェイこそ、七〇年代を代表する女優といえる。アン・ニユイとデカダンスが、そのセクシーな肢体と個性にただよう。近作「チャイナタウン」「ネットワーク」での演技的成熟ぶりは見事。フアッションのセンスも抜群の人だ。(S)



『おかしなレディ・キラー』(一九七六)
『カッコーの巣の上で』(一九七六)

ジャック・ニコルソン

アカデミー主演男優賞を獲得した「カッコーの巣の上で」によって一躍、脚光を浴びた。反体制派としての気骨ある生き方と、常に新しいものを求める芸術的探求は、アメリカ映画の明日をなうニコルソンを七〇年代の旗手にした。「愛の狩人」「チャイナタウン」などにみられる卑猥なまでの男のセクシーな体臭は彼の大きな魅力だ。(S)



ポール・ニューマン

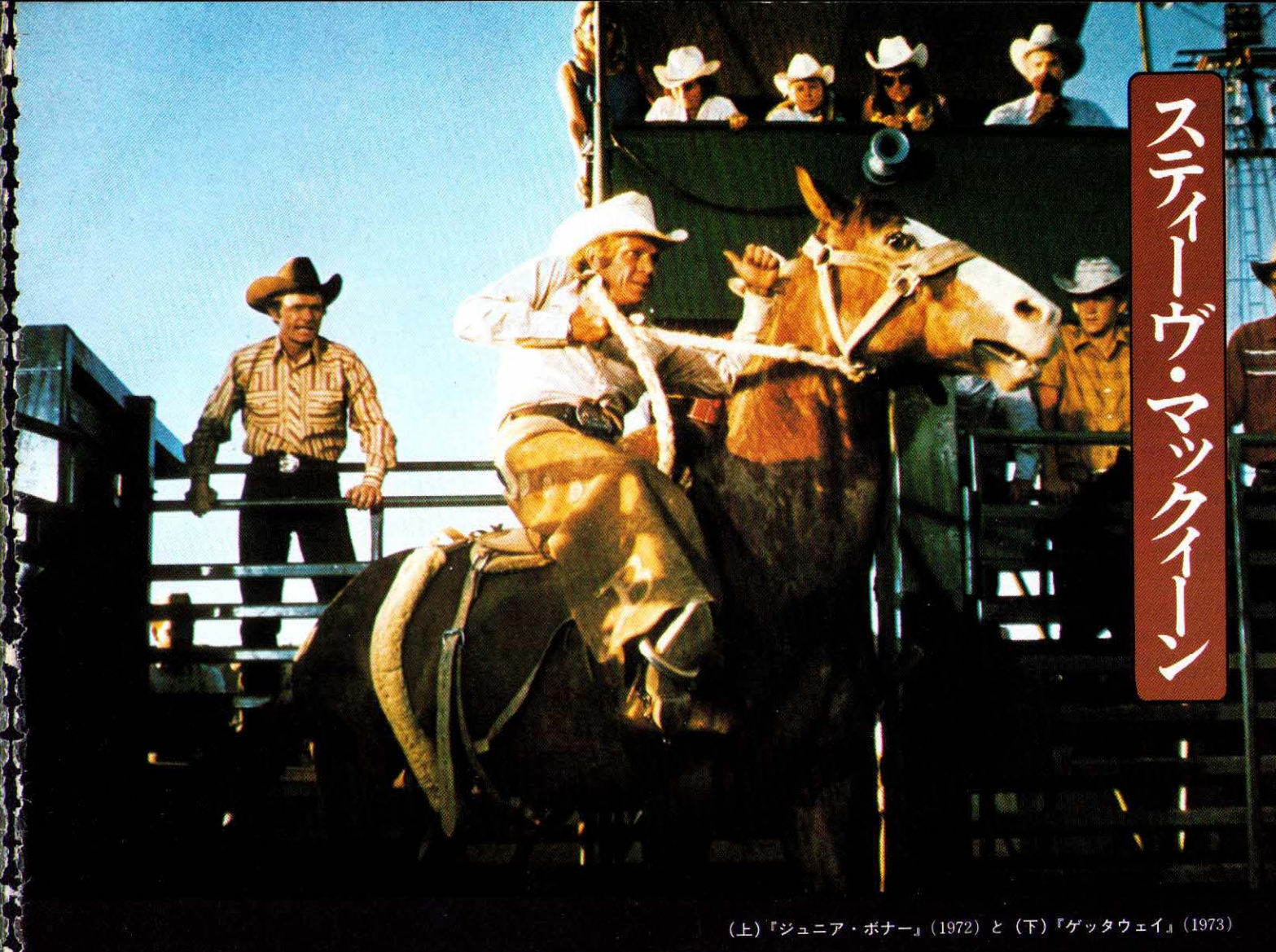


マロン・ブランド、ジェームズ・ディーンにつぐニューヨーク演劇界出身の秀才として『ハスラー』などの名演でスターになった。ハードボイルド映画でのハードな男を演じてはナンバーワン。『明日に向かって撃て!』『ステイキング』での軽妙洒落なダンディズムも彼の魅力は一段と芽える。監督をやっても一流の才能を発揮した。(S)

(上)『ロイ・ビーン』(1973)と(下)『タワーリング・インフェルノ』(1975)



ステイヴ・マックイーン



(上)『ジュニア・ボナー』(1972)と(下)『ゲッタウェイ』(1973)

美男スターに代わる個性派の台頭は、マックイーンなどの登場によって、スターのタイプを一変させた。出世作『荒野の七人』『大脱走』から近作『タワーリング・インフェルノ』まで、彼が演じたヒーローは一貫して行動する男の、華麗でめくるめくアクションだった。スピードに賭けた男も得意役で、七〇年代のスーパー・スターになる。(S)

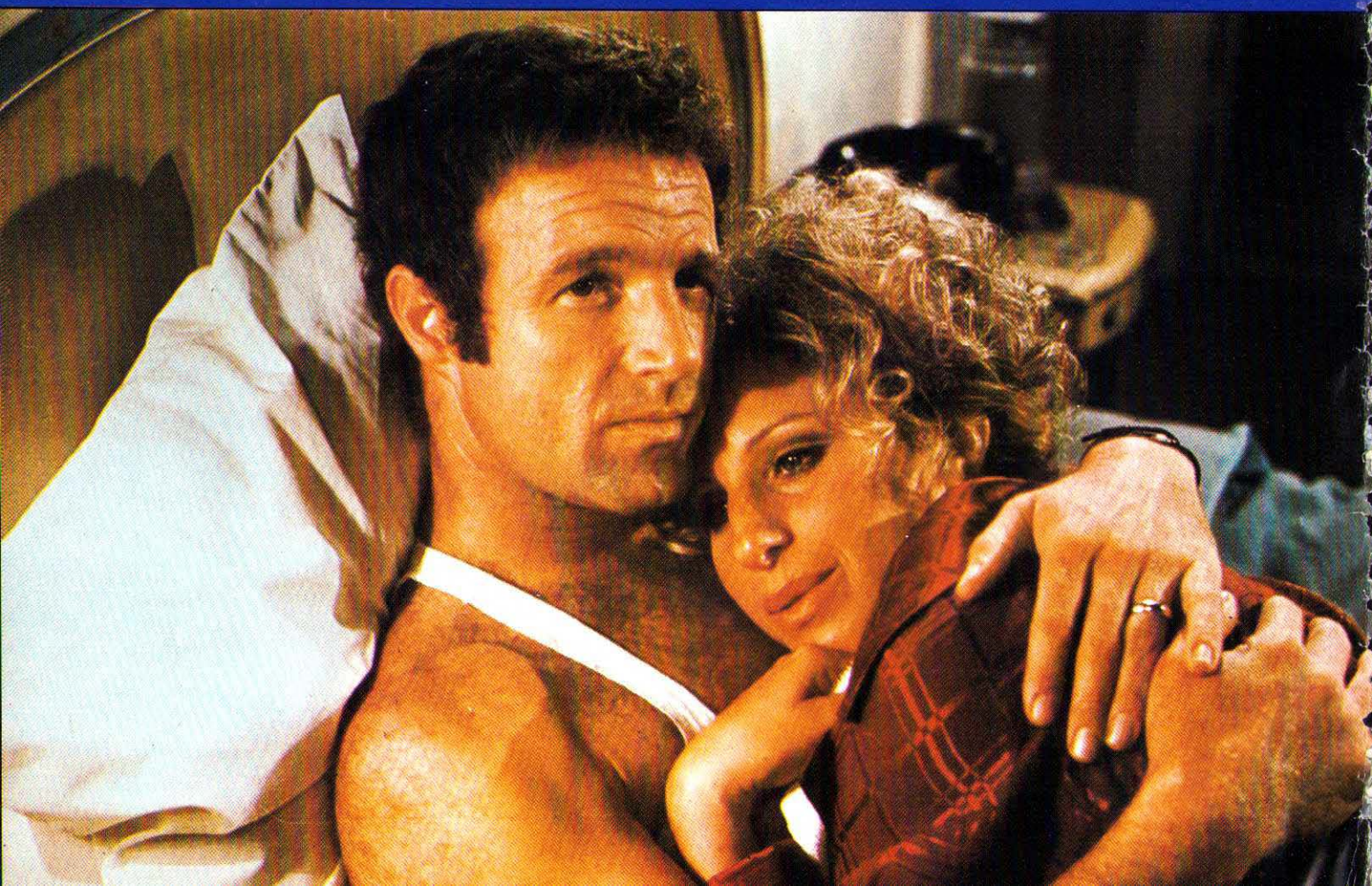


バーブラ・ストライサンド

でっかい鼻、威風堂々たる貴族。強烈な個性と自己主張でアメリカでの人気は現代女優のトップ・クラス。バーブラこそ従来の女優のタイプを変えたウーマン・リブ時代の女優といえよう。『ファニー・ガール』でミュージカル女優としての地位を確立したが、戦中戦後の女の生き方を演じた『追憶』に彼女自身が投影されている。(S)



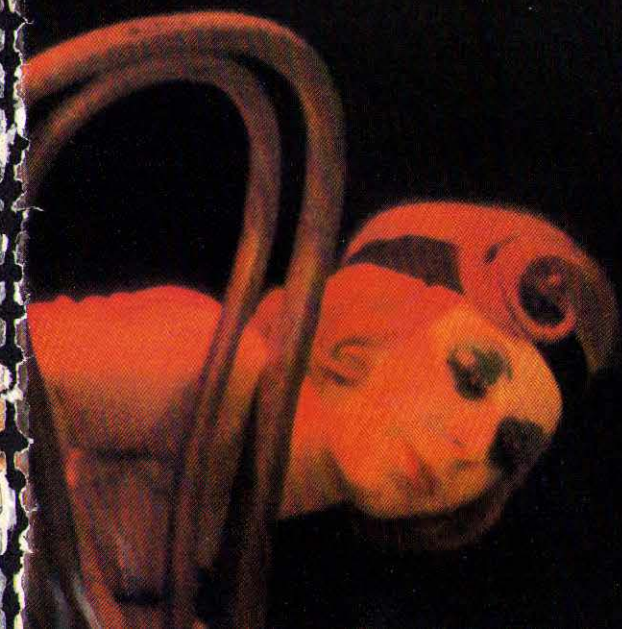
(上)『ファニー・ガール』(1969)と(下)『ファニー・レディ』(1975)



ライザ・ミネリ

『キャバレー』(一九七二)

ミュージカルの大スターだった故ジュディ・ガーランドの遺児として登場したライザは、『キャバレー』でアカデミー主演女優賞を獲得、母に負けない才能を開花させた。美人じゃないが、コケティッシュな可愛い女を演じては抜群に巧いチャールミング・スター。本領はミュージカルだが、歌ぬきの芝居も鋭い力ンでみごとにこなす。(S)



ダスティン・ホフマン

掠奪結婚をする一本気の現代青年を好演した『卒業』で、ヤングの喝采を浴びてスターになったダスティン。『真夜中のカーボーイ』ではニューヨークのどん底を生きる若者を、『レニー・ブルース』では反逆の芸人レニーの生きざまを名演し、ここに彼の真価はきまっていた。体制に背をむけ、反逆の血をひいた男こそ彼の本領だ。(S)



『わらの犬』(一九七二)

『レニー・ブルース』(一九七五)



『ゴッドファーザー』とその続編(Part II)での名演でスターの座を築いた。『スケアクロウ』『狼たちの午後』と一作ごとに演技は熟し、ことに屈折した現代人の心理を演じては、男の悲哀が強烈な説得力で迫ってくる。純粹さをひいた黒い瞳は、澄みきって美しい。憑かれたような男のパッションと狂熱が彼の魅力だ。(S)



『狼たちの午後』(一九七六)

アル・パシノ

ウォーレン・ビーティ

『俺たちに明日はない』『シャンプー』で主演のほかに製作者も兼ねた。時代を先取りする感覚の鋭さでは定評がある。ことに前者はギャング映画にまったく新しい青春の血を吹きこみ、時代からはみだした若者たちの悲痛な心のうめきをとらえて、衝撃のラスト・シーンとともにアメリカニュー・シネマの不滅の先駆作となった。(S)



(上)『おかしなレディ・キラー』(1976)と(下)『シャンプー』(1975)



売りだし当時は、第二のグレース・ケリーといわれた。バグマンやグレース・ケリーが持っていた豪華な雰囲気を受けついで魅力をアメリカ映画界は生かしきれなかった。キャンデイスにとっては不幸な時代だったが、知性派として文筆やカメラ・ルポなどで活躍する一方、近作『風とライオン』で、いよいよ本領を発揮。(S)

キャンデイス・バーゲン



『弾丸を噛め』(一九七五)

ジーン・ハックマン



『スケアクロウ』（一九七三）

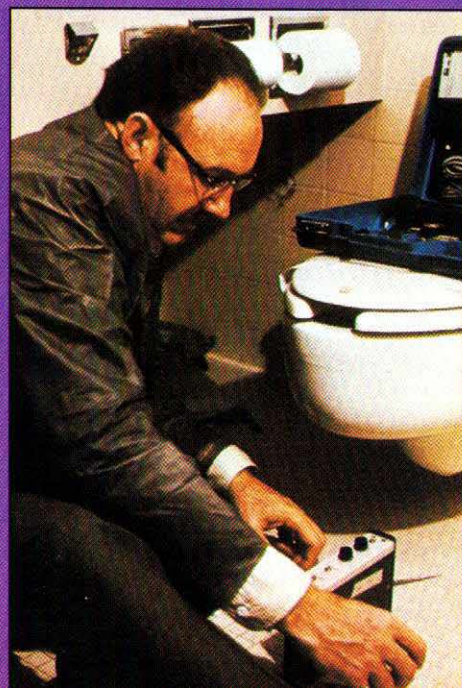
『フレンチ・コネクション』のガッツな刑事ボバイでアカデミー主演男優賞を獲得した。『ボセイドン・アドベンチャー』では、転覆した豪華船のなかで生残った乗客たちを脱出口にリードする神父を好演。ここでは生きることの執念に燃えた男の心意気が深い感動と共感と呼んだ。根性の人を演じては当代随一のスター（S）

クリント・イーストウッド



『ダーティ・ハリー 3』（一九七七）

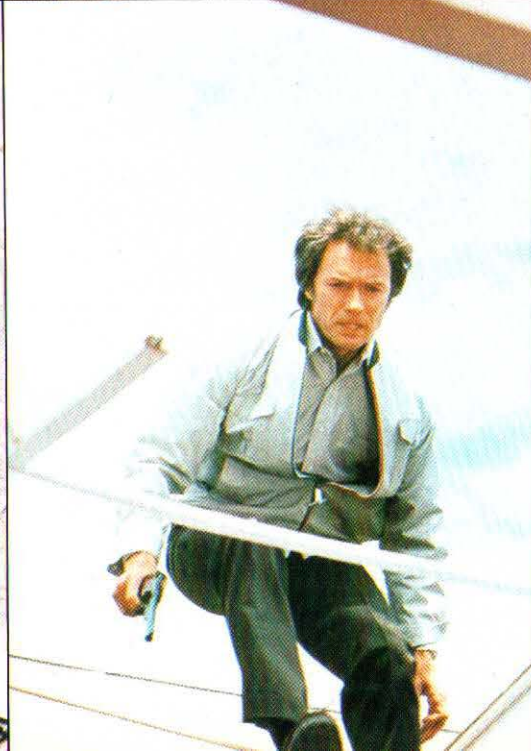
TVの『ロー・ハイド』からマカロニ西部劇『荒野の用心棒』、そして監督もかねて主演し大好評を呼んだ『アウトロー』まで、ジョン・ウェインに代わって、ウェスタンの新ヒーローとして変動期を一筋に生きてきた。一方、荒くれ刑事を名演した『ダーティ・ハリー』ではヒーロー不在時代のヒーローとしての人気を確立。（S）



『カンパセーション/盗聴』（一九七五）



『ボセイドン・アドベンチャー』（一九七三）



ピーター・フオンダ

『イージー・ライダー』では、カスタム・メイドのオートバイでアメリカを旅する若者を演じ、抜群の魅力で七〇年代を先取りした。悩める現代青年の魂のさすらいを、その繊細な、感受性の鋭い個性で演じ、ニュー・シネマ・スターとしての脚光を浴びた。監督もかねた『さすらいのカウボーイ』での映像感覚のよさも本物だ。(S)

(上)『さすらいのカウボーイ』(1972)
(下)『ふたり』(1973)



『軍用列車』(一九七六)

『正午から三時まで』(一九七七)



五〇年代は脇役として地味なインディアン役などをしていたブロンズンだが、『さらば友よ』『雨の訪問者』などでフランス映画界で主演スターになって以来、ブロンズン・ブームを世界に起こさせた。ことに日本ではテレビCMに出演して人気をあおった。男臭い野性の魅力があふれる彼のような個性が一世を風靡するも七〇年代の特色といえよう。(S)

チャールズ・ブロンズン



映画史に残るこのスター、あの名場面。

いつでもあなたのお部屋で楽しめます。



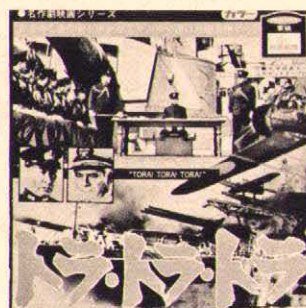
名作洋画シリーズ



主演 R.ミッチャム/C.マルカン/M.ファーラー <20世紀フォックス作品>
白黒90m 15,800円



主演 ジュリー・アンドリュース <20世紀フォックス作品>
カラー90m 15,800円



主演 山村聡/M.バルサム/E.G.マーシャル <20世紀フォックス作品>
カラー90m 15,800円



主演・監督 ブルース・リー
カラー90m 15,800円



主演 ゲイリー・クーパー/グレイス・ケリー <ユナイテッド作品>
白黒90m 14,500円



主演 G.ベック/A.クイン/D.ニーブ <コロムビア作品>
カラー90m 15,800円



主演 W.ホールデン/A.ギネス/早川雪州 <コロムビア作品>
カラー90m 15,800円



主演 ジーン・ハックマン/フェルナンド・レイ <20世紀フォックス作品>
カラー90m 15,800円



主演 ボール・ニューマン/ロバート・レッドフォード <20世紀フォックス作品>
カラー90m 15,800円



主演 シルビア・クリステル <制作 日本ヘラルド>
カラー60m 12,500円



主演 シルビア・クリステル <制作 日本ヘラルド>
カラー60m 12,500円



主演 マリリン・モンロー/ジェーン・ラッセル <20世紀フォックス作品>
カラー90m 15,800円

●名作洋画シリーズの作品はすべてオリジナルサウンド・日本語字幕つき

名作劇映画シリーズ

緋牡丹博徒
カラー60m 9,800円
昭和残侠伝
カラー60m 9,800円
水戸黄門天下の御意見番
カラー60m 9,800円
旗本退屈男蛇姫屋敷の決斗
カラー60m 9,800円
連山金さん捕物帳謎のからくり天井
カラー60m 9,800円

網走番外地 大雪原の対決
カラー60m 9,800円
吉永小百合伊豆の踊子(日活作品)
カラー60m 9,800円
赤木圭一郎 抜き差し電(日活作品)
カラー60m 9,800円
関東やくざ者
カラー60m 9,800円
緋牡丹博徒 お竜参上
カラー90m 13,500円

座頭市と用心棒(勝プロ作品)
カラー60m 9,800円
けんか空手 極真拳
カラー60m 9,800円
●富士フィルムの8ミリ映画は、すべて光学録音ですが、カセットテープもついていますから、サイレント式や磁気式の映写機(タイプS)でも、鮮明な画面とダイナミックなサウンドが同時に楽しめます。

8ミリ映画専用の
光学式8ミリサウンド映写機
フジックスSV65-①



標準価格
■本体82,000円
別売付属品
スピークランプ
3,300円

お求めは全国有名カメラ店・デパートで。

●くわしい資料・カタログご希望の方は、氏名・住所・年齢・職業をご記入のうえ、〒107 東京都港区赤坂1-9-20第16興和ビル 富士映像システム株式会社AO係へどうぞ。

富士フィルムより8ミリ映画で発売中

ロバート・レッドフォード

(上) 『大統領の陰謀』(一九七六)
(下) 『候補者ビル・マッケイ』(一九七六)

故ケネディ大統領に似たハンサム青年として売りだしたレッドフォード。『明日に向かって撃て!』『華麗なるヒコキ野郎』などで男のロマンティズムをあふれさせ、女性を魅了した。しかし、製作もかねた『候補者ビル・マッケイ』『大統領の陰謀』など現代政治を鋭くとらえた映画でのインテリジェンスこそ彼の本領である。(S)



ああ神話のスターたち グラフ・アメリカ映画史



オードリー・ヘップバーン



エリザベス・テイラー



マリリン・モンロー



ハンフリー・ボガート



イングリッド・バーグマン



クラーク・ゲーブル



マルレーネ・ディートリッヒ



グレイ・クーパー



グレタ・ガルボ

うに表現している。「スター」とは最小の演劇的才能でもって、その顔が集団の本能を表現し、象徴し、化身することが可能な人物である。マルレーネ・ディートリッヒはサラ・ベルナルのような女優ではない。彼女は、フイリーネのような神話なのだ」(三輪秀彦訳) 大衆の欲望の化身であるという意味においてスターは神話であると同時に、大衆とは別の世界に住む人種という点でも、スターは神話なのである。

スターがスターであった、つまり神話に生きつづけられたのは、無声映画時代がしばらくであった。おそらくこれは、スターがしゃべらないという単純な理由からである。しゃべらないということは、観客のイマジネーションをかついて触発し、スターをアイドル化させ、神秘化させる。音のない、光と影の効果を生かした映像美も、スターを神聖に輝かせる。またスターと大衆との間にもテレビのようなざつとばらんな媒体が存在しなかったため、彼らは神話の中に生きつづけたのである。

映画が音を持つようになって、かえってスターが栄えたとかんがえるのは、まちがいである。スターがしゃべるといことは、神話の人物からふつうの人間への天降りである。一方、しゃべることのうまい人種、たとえば舞台俳優とか、踊りや歌の達者な芸人が、トーキー映画に起用された。もちろん彼らをもスターと呼ぶことは当然だが、その持つ意味は

映画史のごく初期において、スターは存在しなかった。映画のタイトルにも広告にも、俳優個々の名前すらあらわれなかったのである。映画が誕生してから十数年たった一九一〇年になって、アメリカで映画スターが生まれた。そのいきさつは、こうである。

映画企業家の大物カール・レムレが、自社にひきぬいた女優フロレンス・ロレンスの名をひろめるために、市電にひかれて死んだというたらのめの報道を新聞に出させ、その一週間後に、この記事は対抗会社のでつちあげて、ロレンスはわが社と契約し、新作に出演する、と発表して話題をつくつたのである。

この一件は、スターがつくりあげられるものであることを証明している。映画は、他からの借りものでなく、自分たちの魔力によって、スターをつくりあげることができるとある。しかも、このスターなるものは、やがて映画工場の本拠地にさだめられたハリウッドの目玉商品となった。ある意味で、ハリウッドの映画工場とは、スターの生産工場だったといってもいい。スター・システムというのは、ハリウッドの各社が、スターによって利潤をうるために組まれた映画づくりの方法

いくらかわらわってきている。神話から親近感へ、タイプから芸への移行なのである。

それでも、ハリウッドが映画王国としての威力をうしなう一九五〇年代の後半までは、スターはスターであり得た。神聖「グレタ・ガルボ」、「百万ドルの脚」マルレーネ・ディートリッヒ、「キング・クラーク・ゲーブル」、「デューク・ジョン・ウエイン」、「セックス・シンボル」マリリン・モンロー、「妖精」オードリー・ヘップバーンといったように、スターをキャラクター・フリーズと呼べるということは、つまりスターが一つのタイプを持っていたということである。

六〇年代以後、スターはスターでなくなりつつある。その大きな原因は、ハリウッドの映画づくりの変化と関係してくる。苦境にあえぐハリウッドの各社は、スターをかかえこむというスター・システムを完全に放棄した。スターを育てるのは、会社ではなく、スター個人でしかありえなくなったのである。と同時に、スターのほうでもタイプにはまることを嫌い、自ら作品の企画を立て、自己を主張するようになった。

もう一つの原因はいまでもなくテレビである。お茶の間に大スターが飛びつきと飛び込んできたとき、もう彼らは、あの銀幕の彼方の別世界に生きていた神話の人物ではなくなっている。スターは、人気のある俳優もしくはタレントと同意語になってしまったようだ。(H)

である。

このスター・システムの特徴は、スターをタイプ化させたことだ。たとえば、フォックス社は、それまで無名だった若い女優にセダ・バラという芸名をつけ、彼女にまつわるさまざまな神秘めいたパブリシティをはり、ヴァンプ(妖婦)として売りだし、徹底して妖婦役ばかりあたえた。大衆は、セダ・バラすなわちヴァンプであると信じこまされた。同じように、メアリー・ピックフォードは純情可憐型であり、ルドルフ・ヴァレンチノは鑑賞用美男子であり、そういう固有のタイプで、スターのイメージを定着させた。

観衆がタイプを見いだせないような俳優は、したがってスターの位置を、完全に獲得することはできないのである。そのタイプは時代の性格の反映であり、スター史をそうした側面からとらえていくのも興味ある作業となる。スターになるためには、美貌であることも、すぐれた演技力を身につけていることも必要ではなく、時代の大衆がもめているタイプといかに合致するかがきめ手だったのである。

このことを、アンドレ・マルローはこんなふ

☆永遠の美男

ルドルフ・ヴァレンチノ



おなじみ「カミーユ（糖姫）」(1921)の純情青年アルマン

Rudolph Valentino 一八九五—
九二六）南イタリアに生まれ、
十八歳で渡米し、ダンサーをや
っていたが、一九一八年ハリウ
ッドで端役出演。二一年「黙示録の四
騎士」の主役に抜擢されて人気ス
ターとなる。以後十三作に主演し
たが天逝。最近、二度目の伝記映
画がルドルフ・ヴァレエフ主演で
製作された。



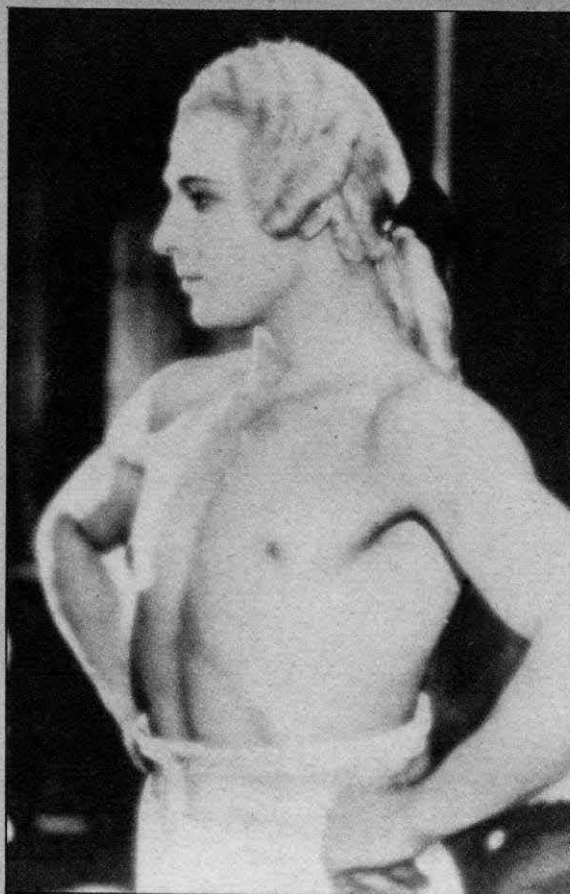
最後の作品となった「熱砂の舞」(1926)のアラビア酋長

ルドルフ・ヴァレンチノの主演作は、いま見るといささか退屈だが、彼自身の甘い美貌はいまでも輝いている。ひきしまった目鼻立ち、リリしい眼光……まさしく二枚目なのである。ハリウッド映画のうちでも、彼ほどの美男子はそうざらにいない。

髪師、「荒鷲」のロシア貴族など、異国の青年が専門である。早川雪洲なども、当時ハリウッドでエキゾチックな二枚目として人気を得ていたものだが、移民の国アメリカはエキゾチックな美にあこがれ、そこにセックス・アピールを見いだしたのであった。葬儀の行なわれたニューヨークの教会には、三万人のファンが押しかけ、百人以上の警官が整理にあたったという。新聞は「王の葬儀」と書いた。スクリーンの生んだ恋人が、他の有名人をはるかに凌いでしまったことを、この葬儀は物語っていた。三十一歳という若さで他界したのだったが、そのことがヴァレンチノをいつそう伝説化させている。(H)



二人の女性との愛に惑い、酒に溺れていくアルゼンチン青年役「情熱の悪鬼」(1924)



裸体も見せて女性ファンを酔わせた「ボーケール」(1924)



出世作「黙示録の四騎士」(1921)ではアルゼンチン・タンゴを踊った



インドの青年に扮した「ヤング・ラジャー」(1922) 相手役はワンダー・ホーレー



「熱砂の舞」の一場面 当り役「シーク」の息子の物語である



一代の当り役「血と砂」(1922)のスペインの闘牛士 相手役はニタ・ナルディ

メアリー・ピックフォード

夢みるような思いこがれているような瞳がチャーミングなメアリー。純情可憐派が大いにうけた時代であった



昨一九七六年のアカデミー賞で、メアリー・ピックフォードは特別賞を受けた。もう八十歳を越えていて、会場には出席できない。だから舞台のスクリーンに、自宅でオスカー像を受け取ったときの模様が映しだされる。堂堂たる邸宅である。メアリーは、自室に静かに坐り、嬉しそうにオスカー像を手にした。アメリカ映画の創成期に女優となり、一九二〇年代末まで「アメリカの恋人」として騒がれたスクリーンのアイドルは、まだ健在なのである。

初期のアメリカ女優は、純情可憐タイプと妖婦タイプに分かれていたが、メアリーは前者の代表的な人気者だった。あどけなく、やさしく、純潔な処女が、逆境におかれながらも勇気をもって立ちむかう、そんな役柄であつた。しかも彼女は少女のように小柄で、だから「リトル・メアリー」と呼ばれたりもしたが、主演作も『小公女』『孤児の生涯』足ながおじさん』『嵐の国のテス』など、少女役や青春映画のヒロインが多い。プロンドの巻き毛、夢見るような瞳、まさに「アメリカの恋人」なのである。



『小公子』(1921)では少年と母親の二役を

Mary Pickford (一八九三) カナダのトロントに生まれ、子役として舞台に立ち、ブロードウェイへ進出。一九〇九年映画入りをし、二〇年代後半まで「アメリカの恋人」として可憐な容姿が愛された。一九年には夫ダグラス・フェアバンクス、チャップリンらとユナイテッド・アーチストズの創立にも参加。一五二センチの小柄である。



警官の娘にふんして大奮戦するコメディ活劇『アンニー可愛や』(1925) お得意の娘役だが このときすでに32歳



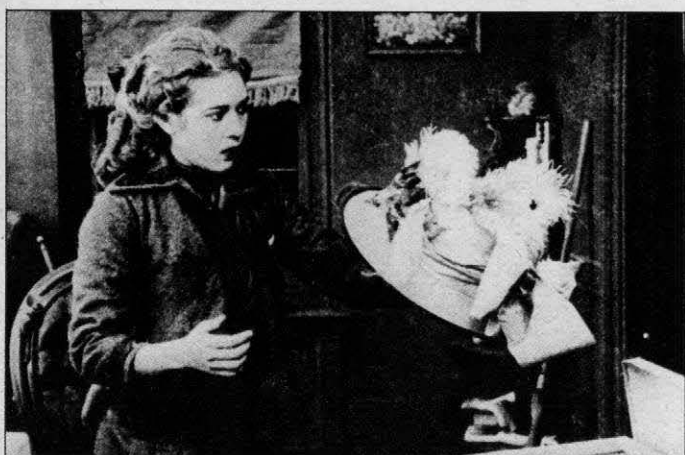
3度目の夫となるバディ・ロジャーズと共演の『デパート女大学』(1927)



「いちばん出来の悪い作品」とメアリー自身のいう『ロジタ』(1923)



メアリー初のトーキー そしてアカデミー主演賞を得た『コケット』(1929)



出世作「ニューヨークの帽子」(1912)

ダグラス・フェアバンクス



ダグラスのイメージに最もぴったりな『三銃士』(1921)のダルタニャン



奇傑ゾロの息子『ドンQ』(1925)

ダグラス・フェアバンクスは、男らしく、明るく、熱っぽく、楽天的なヒーローばかり演じた。躍進する時代にあつて、ヤンキー気質まるだしの快男子なのであつた。一九一五年にはじめて主演した作品の日本題名を「快男子」とつけたのは、まことに的確である。そのころの作品、たとえば『ドリーグの蛮勇』(ダグラスではなく、ドリーグラスと表記した)は、東部の金持ち息子が開拓期の西部にあらがれ冒険旅行を挑むが、西部はすでに未開の地ではない。しかしほんとうにインディアンが襲撃してきて、それを撃退するというおめでたい話である。アクション



『鉄仮面』(1929) M・ド・ラモットと

とコメディをミックスさせ、意気軒昂なアメリカ精神とびつたり一致したのである。二〇年代になってからは、「奇傑ゾロ」を第一作とし、「三銃士」「ロビン・フッド」「バクダッドの盗賊」など、アクション映画の主人公を演じます。まず人気を高めた。メアリー・ピックフォードとの結婚は、人気の頂点を飾るものだった。ヨーロッパへ新婚旅行にでかけたときは何千ものファンに取り巻かれ、二九年に来日したときもたいへんな騒ぎだった。アメリカの恋人たちは、世界のアイドルとなっていたのである(H)



妻メアリー・ピックフォードと初共演したトーキー『じゃじゃ馬馴らし』(1929)



『バグダッドの盗賊』(1924) G・ジョンストンと



南米を舞台にしたロマンチック活劇『ガウチョ』(1927) 相手役はルーベ・ヴェレツ



初期のアクション・コメディ『ドリーグの蛮勇』(1917)



人気絶頂期のダグとメアリー夫妻

Douglas Fairbanks (一八八三—一九三九) プロードウェイの舞台から、一九一五年に映画入りし、はじめ喜活劇、二〇年代には剣戟映画で一時代をつくった。メアリー・ピックフォードとは一九二〇年に再婚したが、三五年に別れている。二七年、アカデミー協会設立に寄与し、初代会長をつとめた。ジュニアもスターとして活躍。

連続活劇のスター



連続活劇の女王パール・ホワイト

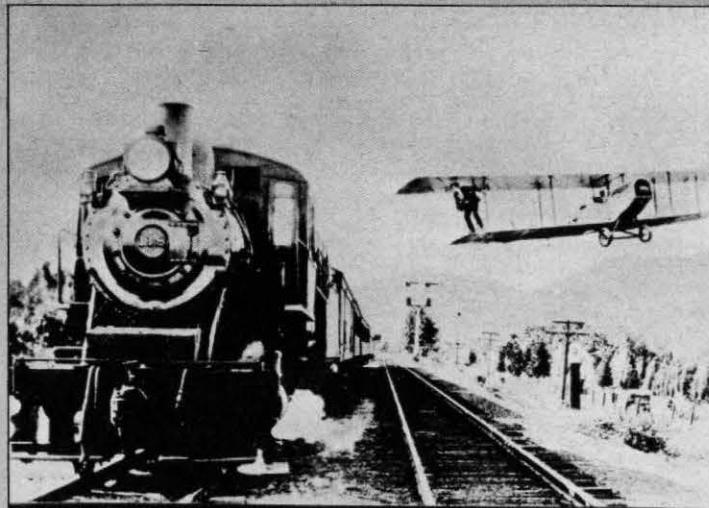
大正期の少年ファンたちを熱狂させた連続活劇とは、ふつう一編が二巻程度で、全部で十編から十二編、巻数にして二十巻から二十四巻の続きものである。各編ごとに主人公の危機が設けられ、二人の運命果たしていかに相成りましうや、今週上映第〇編の終りてあります」と弁士（説明者）の名調子で、次週への興味をつなぐ。ええ、おセンにキヤラムル、あんバンにラムネ……活動写真のダイゴ味をここに思い出す人も多いだろう。（H）



パールはかわいらしい美女であった



パール主演「電光石火の侵入者」(1919)



『名金』(1915)で連続活劇の人気者となったエディ・ポーロ決死の活躍



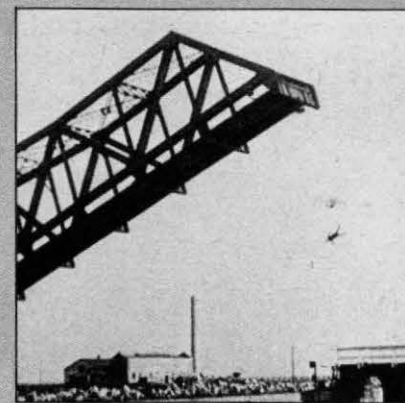
パールと並ぶ人気者ルス・ローランド



果たして彼の運命はいかに？



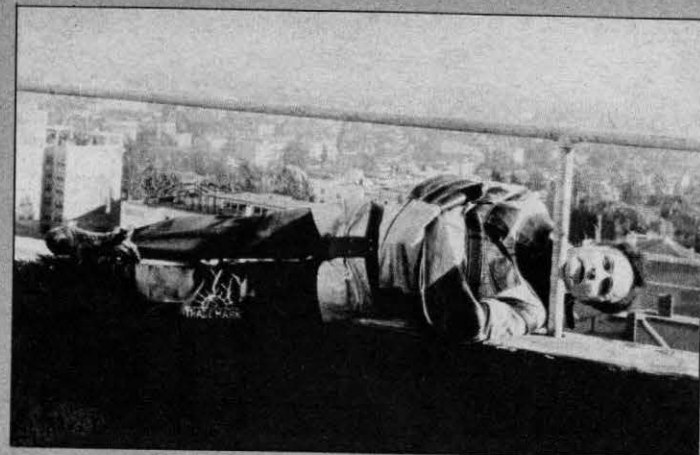
ハリー・フーディニの「氷原より激流へ」(1921)



自転車もろとも奈落の底へ



大ヒットした『ハリケン・ハッチ』の一場面



魔術王フーディニの連続活劇 みごと脱出できますや 次週のお楽しみ



セダ・バラは3年間に39本に出演した。これは『シーザーの御代』(1917)のクレオパトラ



バーバラ・ラマールも妖婦型

ヴァンプ女優

ヴァンプとは、強烈なセックス・アピールで男を誘惑し、金と精気を吸いとれるだけ吸いとするヴァンパイア（吸血鬼）のような女である。一九一五年にセダ・バラが「愚者ありき」に抜擢されたとき、ヴァンプとして大々的に売り出され、一つの時代をつくった。日本では「妖婦」と呼ばれたが、本国のように人気を集めなかった。大正期の日本男子は清纯派のほうが好みだったらしい。（H）

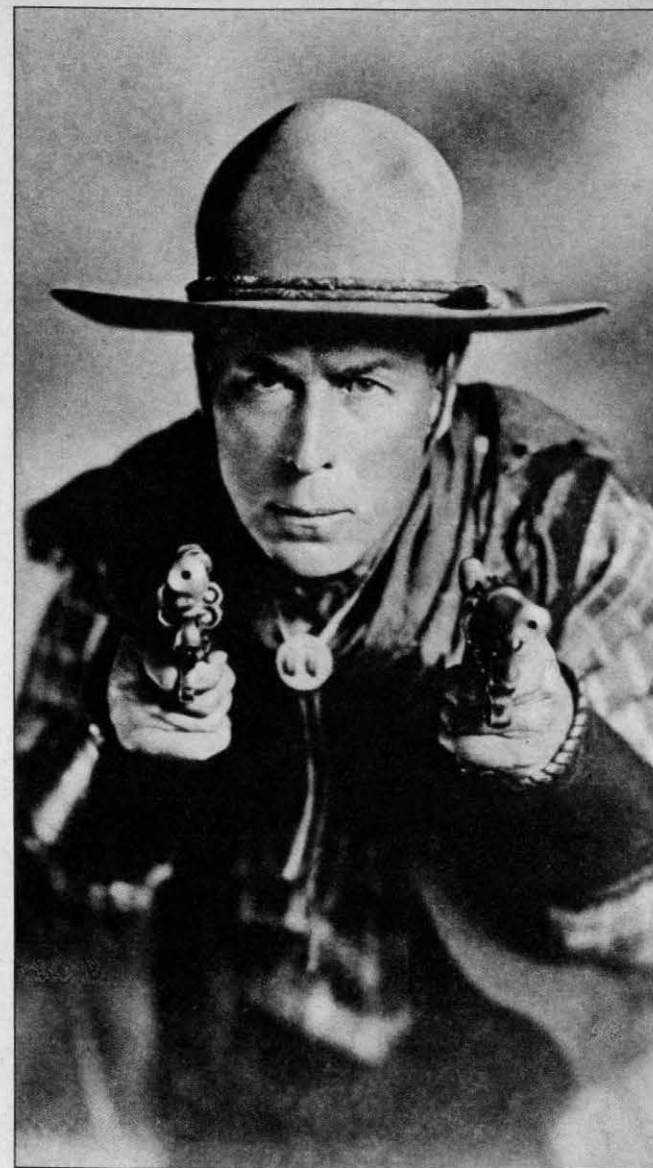


いかにも男の血を吸いとりそうなセダ・バラ



『血と砂』(1922) でヴァレンチノと共演のニタ・ナルディ

ウィリアム・S・ハート



「威嚇的な二挺拳銃とボーイスカウトのような帽子姿のやせた無口な男だった」(M・パーキンソン)

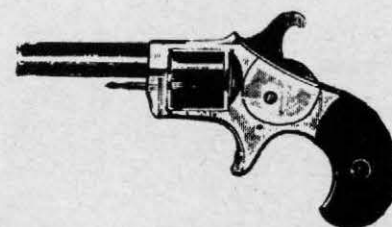
アメリカ映画のヒーローには、グッド・バッド・マン、つまり、善良な悪人、という系譜がある。悪事をはたらきこするが、それが正義のためであつたり、心が善良なことを示していれば、許されるというタイプの男たちである。あるいは、悪人が善良な女性や子供の愛によって正義にめざめ、変貌する男たちである。

ウィリアム・S・ハートの演じた孤独でさすらいの西部男は、このタイプの原形といわれている。彼が映画入りしたとき、すでに四十歳を越していた。それまで舞台で活躍していたが、当時の西部劇のいかげんさに腹を立て、製作者トマス・H・インズに頼んで西部劇に出演させてもらったのだ、と伝説はつ

たえている。少年のころ、西部でインディアと育ち、カウボーイの経験をもったことのあるハートは、本物の西部をスクリーンにもちこもうとしたのである。

馬づらに二挺拳銃というスタイルもいかにも西部男らしいが、孤独感と詩情をいつもたよわせて、独特の性格をつくった。ハートの登場によって、西部劇は初めておとなの鑑賞にたえ得るジャンルになったといわれる。

一九二五年に引退して牧場へ引っこむまで活躍期は十年前後であつたが、最盛期にはメアリ・ピックフォード、チャップリンにつぐ稼ぎ手であつた。無口で、強靱な精神と悲しきをもった男らしい男としてハートのイメージは永遠である。(H)



雄姿と孤独さをもった西部の騎士



初期作品「帰って来たドロウ・イーガン」(1916)の二挺拳銃スタイル



「S・ハートみたいに拳銃がうてる」という流行語が生まれた」(双葉十三郎)



当時のフィルムのコマを引き伸ばしたもので題名不詳



最初の西部劇 エドウィン・S・ポーター監督『大列車強盗』(1903)



「品性が高く信仰精神もあって 一種の男の哲学が感じられる」(南部圭之助)



大きなネッカチーフも独特のスタイルだ

William S. Hart(一八七〇ー一九四六) ダコタで過した少年時代に開拓期西部の生活を味わい、プロードウェイで舞台俳優をつとめたのち、一九一四年に四十三歳にして西部劇俳優として映画入りした。二五年に引退するまで、独特の二挺拳銃姿で漂泊の西部男に多数主演、また自らも監督を手がけた。

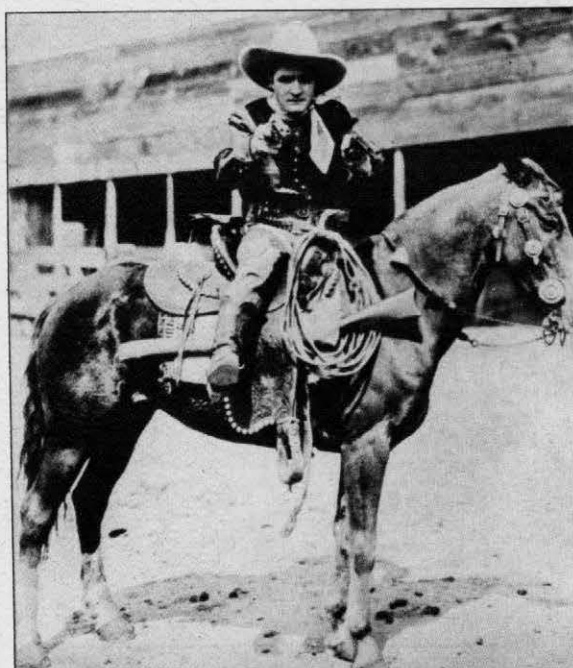
W・S・ハート以前に「ブロンコ・ビリー」物で活躍した最初の西部劇スター G・M・アンダーソン



ホース・オペラのヒーロー



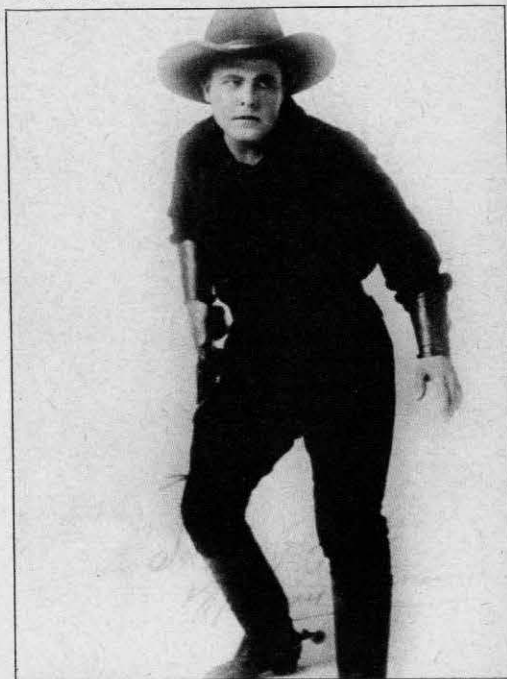
早撃ちや曲馬で年少ファンに人気絶大だったトム・ミックス



ミックスは馬上で二挺拳銃を使うことなどお手のものだった



渋い魅力のハリー・ケリー



格闘の得意なウィリアム・ファーンナム



フート・ギブソンは“西部のおんちゃん”といったところ

☆ハリウッド一代女

グロリア・スワンスン



日本ではモガ(モダン・ガール) モボ(モダン・ボーイ)といわれた時代の最先端のファッションで……

グロリア・スワンスンは小柄である。相手役の男優と並んで立つと背の低さはかくせないが、一人でスクリーンにあらわれると、いかにも堂々としている。美女というより、目鼻立ちが大きく、見栄えがするのである。映像の魔術にびたりとかなう容姿の持ち主なのである。

第一次大戦後の、狂乱の一九二〇年代といわれた時代に、スワンスンは社交界の女王として銀幕を飾った。時代の尖端をいく豪華けんらんたる衣装を着用におよび、最新型の乗用車で夜会場に乗りつけ、男友たちを手玉にとる。そんな、すべてが豪奢さにつつまれた役である。不道徳な愛にも走ろうとするが、けつきよく真の愛にめざめる。豪勢な演出が売り物の大監督セシル・B・デミルの風俗メロドラマのヒロインとして一時代を築いたのであった。

私生活も豪奢そのもので、八百屋の支払いだけで月一千ドルだとか、ゴシップが新聞をにぎわさぬ日はなかった。一九二〇年代の半ばにはハリウッドきっての高給取りとなった。まさに女王だった。

三〇年代以後は時折しか映画に出演せず、やがて映画界から忘れられたが、五〇年になって『サンセット大通り』で復活した。しかも、まるで彼女自身を連想させるようなもと大女優の役とは！さらに二十四年後、『エアポート75』でまた復活。ハリウッド一代女”とよぶにふさわしい大スターである。(H)



大きな目鼻立ちがセクシーだった



デミル監督による代表作『男性と女性』(1919) 上流階級の令嬢が無人島で真の愛にめざめる



大スターに返り咲いたつもりでニュース・カメラの前に立つ『サンセット大通り』(1950)



彼女自身の役で乗客の一人に扮した『エアポート'75』(1974) これも懐かしいマーナ・ロイと



『女王蜂』(1926) とは邦題からしてふさわしい



店員が社交界入りする『懸られ者』(1924)



母物で歌も披露したトーキー初の『トレスパッサー』(1929)

Gloria Swanson (一八九九) 十四歳のときスクリーン・テストを受け、マック・セネットの海軍着美人として映画出演。一九一九年、大監督セシル・B・デミルに抜擢されて彼の風俗ドラマのヒロインとなった。結婚歴五回、公私ともにそのあでやかさ、はなやかさ、話題は多い。



社会性をとりいれたメロドラマ『人間苦』(1920 デミル監督) では後家さんに扮した



サマセット・モームの『雨』の映画化『港の女』(1928) 共演ならびに監督＝ラオール・ウォルシュ



『独裁者』(1940)の相手役ポーレット・ゴダードは3人目の夫人



サーカスの娘(マーナ・ケネディ)へのやさしい愛——『サーカス』(1928)



人妻(マーサ・レイ)を殺害せんとする青ひげヴェルドウ氏——『殺人狂時代』(1947)



躍り子(クレア・ブルーム)との老いたるの恋——『ライムライト』(1952)



『モダン・タイムス』(1936)のラスト



アナウンサー(ドーン・アダムズ)に惚れた『ニューヨークの王様』(1957)

三大喜劇王 チャールズ・チャップリン

チャップリンの名場面集はさほどめずらしくはないだろうから、ここでは女性との共演シーンばかり集めてみた。

初期の作品の中で、チャップリンはいつも孤独にはじまり、美しい娘を愛するが、心をうちあけられずに、あきらめてさびしく後ろ姿で立ち去っていった。「黄金狂時代」「サーカス」とりわけ「街の灯」となると、これはもうひとくちやさしかった。徹底的にフェミニストなのである。「街の灯」で、盲目の花売娘に純愛を捧げるチャップリンのやさしさ、哀しさ。それは魂の絶望をすら感じさせる。それとも素顔のチャップリンは孤独な男だった。そのせいかどうか、女性には弱かった。美しい娘、それも少女のような純情さのなか

に妖艶的な魅力をもった娘に出会うと、たちまちのぼせてしまうのである。会った翌日には、もう求愛した、といったゴシップがよく流れたものである。

離婚三回、結婚四回のほかに、いくつものスキャンダルがある。あるときは法廷に持ちこまれ、チャップリンは稀代の色事師のように責められたりもしたが、彼は青ひげではないのである。永遠の女性を求めてさまよったフェミニストなのである。そのことは、いまあらためて彼の作品を見直すときよくわかってくる。すでに神聖な神話のなかにとじこめられてしまったチャップリンだが、彼自身はあまりにも人間くさい、ごくあたりまえのちっぽけな男なのである。(H)



パントマイム芸のおかしさ哀しさ——『街の灯』(1931)



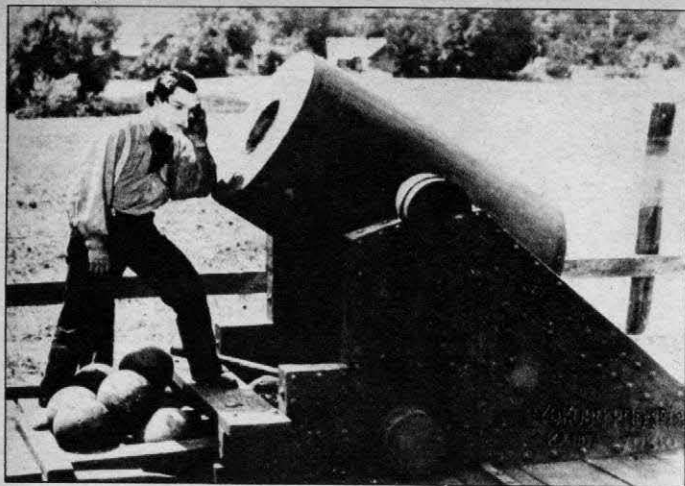
ジョージア・ヘールと共演の傑作『黄金狂時代』(1925)



盲目の花売娘(ヴァージニア・チェリル)への恋——『街の灯』



エドナ・バーヴィアンスとは息の合うコンビ——初期の『スケート』(1916)



この大砲どうなっちゃってるの?——『キートンの機関車』(1926)



なんてよくつくライターなんだろう——『キートンの警官騒動』(1922)



向いのビルに飛び移れますか?——『キートンの恋愛三代記』



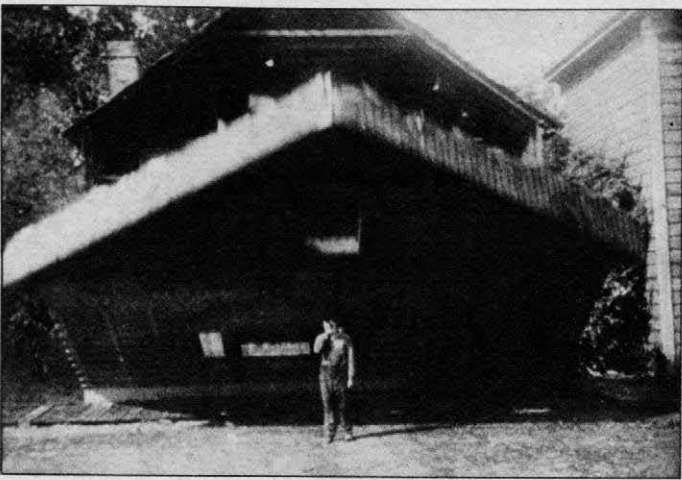
『キートンの蒸気船』



3分間の半熟がボクの好みなんだ——『海底王キートン』



美女を慕うのは石器時代の昔から——『キートンの恋愛三代記』(1923)



家が倒れてくる 危い! でも心配無用——『キートンの蒸気船』(1928)



哲人のごとく無表情なのがトレードマーク——『海底王キートン』(1924)



この柔軟な肉体!——『海底王キートン』



こんなに大勢の花嫁候補に追っかけられるとは!——『キートンのセブン・チャンス』(1925)

三大喜劇王



バスター・キートン
Buster Keaton (一八九五—一九六六) 芸人夫婦の子で、生後九カ月にして初舞台。一九一七年、人気喜劇俳優。でぶのアーバツクル映画の助演とギャグマンをつとめて映画入りし、たちまち一本立ちとなった。サイレント末期に前人未踏のギャグで喜劇映画に偉大なる時代を築いたが、トーキー以後はふるわなかった。

たとえば上の写真は『キートンの蒸気船』だが、家の正面の壁が倒れてくる、あッ危い! と思いきや次のコマでは、キートンは倒れてしまった家の二階の窓から傷つきもせずニョキッと立って平然としている。また左上の『恋愛三代記』の次のコマは、向いのビルに飛び移ったキートンの空中大回転である。キートンのギャグは徹頭徹尾、動きによるものであるから、静止した一枚の写真でおかしさを伝えようとしてもしよせん無理なのである。それを承知で、キートンのおかしさを紹介すべく、この見開きページを構成してみた。

チャップリンの笑いとは悲しさは、人間と人間の関係から生まれる。キートンの場合、彼と物との関係である。傘や帽子や大砲や、もっと大きな物では家や船や機関車とのアクロバティックなたたかいが笑いをひきおこすのである。『セブン・チャンス』では、追っかけてくる無数の花嫁候補すら、人間というより物体なのであった。

キートンは笑わないコメディアン、表情のない男をトレードマークにしていた。考えてみれば、自分自身をすら物体化した、ギャグのネタにしていたのである。といつて、乾燥しきつた、人間味のない笑いではない。どの映画にも、図々しく、すばしっこく、それでいてどこか悲しげなキートンがちゃんといろいろある。人間が演じる漫画として、キートンの右に出るものはあるまい。(H)



サラリーマンはつらいもの——『ロイドの家庭サービス』(1924)



ロイドといえばこの場面 12階の大時計からの宙ぶらりん——『用心無用』(1923)



ラクビーやってもめがねは外さぬ——『ロイドの人気者』

Harold Lloyd (一八九三—一九七二) 巡業劇団で芝居をつづけたのち、エキストラとして映画入り。ハル・ローチと知りあい、チャップリンの垂流から、やがてロイド・スタイルをつくり、一九一〇年の後半から二〇年代いっぱい人気者となる。夫人は初期相手役のミルドレッド・デイヴィス。浮いた話のない人格者であった。



大きいことはよくないことだ——『巨人征服』(1923)



チャップリン、キートンについて、ロイドの連続上映がはじまった。サイレント期の三大喜劇王の復活がなされたわけである。丸い眼鏡、グレイのフランネルのスーツ、ストローハットというのが、ロイドの典型的なスタイルである。ときにセーターを着たり、中折れ帽をかぶったりするが、いずれにせよ奇抜な衣装ではない。つまり彼は、一九二〇年代のサラリーマンや大学生の平均的なスタイルでいつも活躍した。サラリーマン喜劇、学生喜劇のはりなのである。

彼の夢の妨害者があらわれたりするものだから、大冒険へとひっぱりだされる。たとえば十二階のデパートをよじのぼらねばならなくなる。たとえば巨人とたたかわねばならなくなる。チャップリン、キートンと違って、ロイドは芸よりも状況の面白さを観客を誘った。これは彼が他のコメディアンのように芸人出身ではないところに原因しているのかもしれない。しかも彼は底抜けに明るく、チャップリンやキートンのような悲しきピエロではない。狂乱の一九二〇年代において、大衆はその明朗さを愛した。冒険をなしとげ、愛する女性と晴れて結ばれ、家庭の安全を維持するロイドは、大衆の夢の具現者でもあった。(H)



バカとケムリは何とやら ロイドは高いところが好き——『危険大歓迎』(1929)



このめがね 素透しなのだ!



袖丈はどれだけ? 『ロイドの人気者』(1925)



このロープ切るとどうなるのだろう?——『危険大歓迎』

●ロイドめがね
ロイドは、まずめがねである。私たちは、ハロルド・ロイドの名は忘れたとしても、セルロイドの丸いめがねは忘れない。
彼がめがねをトレードマークにしたのは一九一六年、二十三歳のときだったが、めがねで軽快な都会青年のイメージを創造する前の彼は、なんとチャップリンのコピーで売っていた。
ところで、めがねというのは、レンズを入れたら撮影中のライトが反射して光ってしまうものである。
だからロイドのめがねには、当然レンズが入っていない。役者の目が見えなくては困るではないか……。
一九二二年『豪勇ロイド』の彼は、回想シーンで四角いめがねをかけて登場。ひとり二役で祖父と孫を演じたロイドは、祖父の役をいつもと違うめがねで演じたのであった。(W)



白塗りでベビー・フェースのハリ・ラングドン



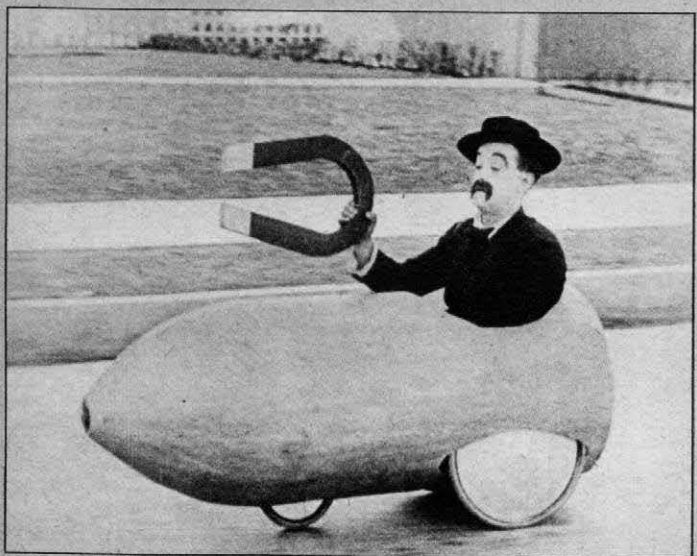
『両夫婦』(1914)のアーバックルとチャップリン



やぶにらみのベン・タービン



チャップリンも育てたアメリカ喜劇の生みの親マック・セネット



“スナップ” ボラードは奇想天外なヒゲおやじ



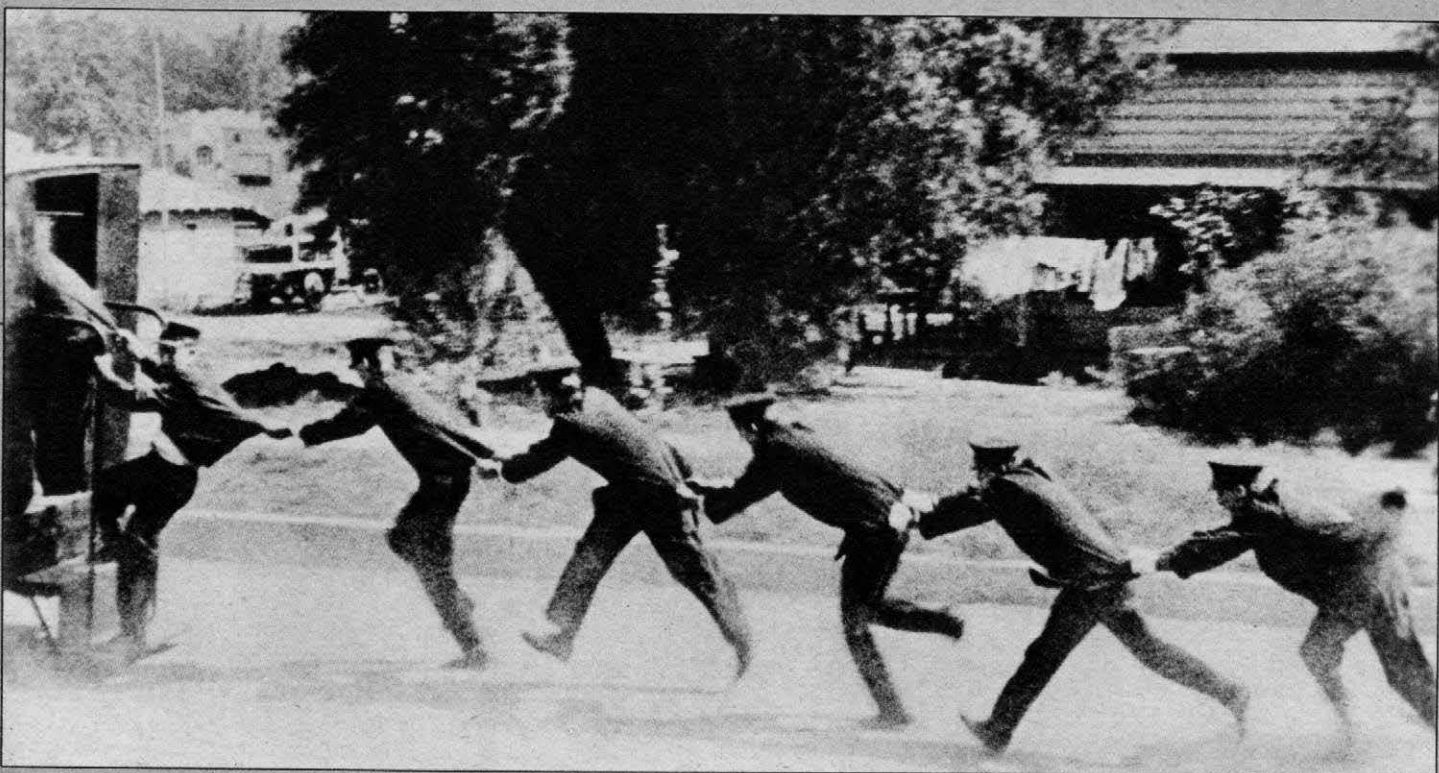
チャーリー・チェイスとはばけた紳士



タービンと珍犬カメオの『呑気な駅員』(1923)



サイレント末期から活躍したローレル/ハーディ・コンビ



“キーストン警官隊”は漫画のように大追跡を展開

サイレント映画のうちでも永遠の生命をたもっているのはコメディである。やぶにらみ、てぶ、白塗りのベビー・フェース、でつかいヒゲの珍優・奇優。おかしい警官隊に、チャリスムの海水着美人。まるで漫画のように動きまわり、大追跡、ドタバタをくりひろげる。これぞ活動大写真ならではの、動き、の、おかしさ。人間がマンガチックになることの珍奇さ。日本では、ニコニコ大会、と称して、お正月やお盆の名物であった。(H)



サイレント喜劇名物“キーストン・コップス(警官隊)”右端は“てぶ”のアーバックル

サイレント・クラウンズ

おかしい
おかしな
喜劇俳優

★千の顔を持つ男

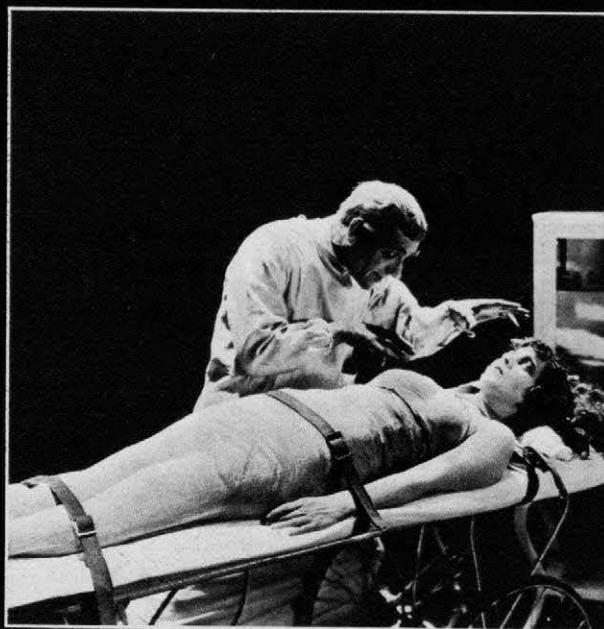
ロン・チャニー



『マンドレイへの道』(1926) では義眼の酒場経営者



『ザンジバーの西』(1929) では中風の商人



『魔人』(1925) では狂える科学者



『オペラの怪人』(1925) では仮面の怪人



『狼の心』(1922) でもギャング



『法の外』(1921) ではギャング



『ミスター・ウー』(1927) では中国人



『ノートルダムの怪男』(1923) ではカジモド



モンティ・バンクスの飛び移り術——『無理矢理ロッキー破り』(1927)



アル・セント・ジョンは曲技の持ち主



“やぶにらみ” ベン・ターピンと海水着美人



常夏の海辺でも はいクリスマス・プレゼント

映画と風俗

●海水着美人
現代ではもはや使われなくなった海水着という言葉は、胸長短足女性が消えていったのと時期を同じくして消え去り、水着という言葉が使われ始めたところから、女性の脚はいっきに伸び、ウエストがくびれたのである——とはいささかこじつけがましいが、海水着美人たちの、なんと素朴で愛らしいことよ！
海水着美人は、大スターの養成機関でもあったわけだ。今日で言うところのブルーマイズとスリッパを一緒にしたような海水着を着た花も盛りの美女たちは、ある時は寄り目のベン・ターピンと、またあるときは、でぶのアン・バックルと共演して彼らの笑いを引き立たせつつ、世の男性の目を、可憐なエロティシズムで楽しませたのであった。(W)

グな女の子たち。彼女たちの出世頭は、初期ならば、グロリア・スワンスン、マリ・プレヴォー。後期はキャロル・ロンバート。海水着美人は、大スターの養成機関でもあったわけだ。今日で言うところのブルーマイズとスリッパを一緒にしたような海水着を着た花も盛りの美女たちは、ある時は寄り目のベン・ターピンと、またあるときは、でぶのアン・バックルと共演して彼らの笑いを引き立たせつつ、世の男性の目を、可憐なエロティシズムで楽しませたのであった。(W)



下着・水着の見本市とござい

クララ・ボウ

Clara Bow (一九〇五―六五)
貧しい少女時代を送ったが、美人コンテストに優勝したのがきっかけでスクリーン・テストを受け、一九二二年映画デビュー。時代の先端を行く性的魅力で人気を得、一九二七年『あれ』(二)に主演したことから、イット・ガールと呼ばれた。スキヤンダルも多く、三〇年以後は不遇であった。



細い眉 大きな眼のメーキャップは娘たちの間にも流行した



『つばさ』(1927)の従軍看護婦
チャールズ・ロジャーズと



若い人妻役で大ヒットした『人霞』(1926)



ハワイ娘のアバンチュール『フラ』(1927) 共演クライヴ・ブルック

●カーリー・ヘア
いわゆる「ポブ(断髪)」が知性を強調したヘア・スタイルであるなら、この「ポブ」に柔らかなふくらみをそえたクララ・ボウの「カーリー・ヘア」(一)とは、当時は言わなかったが、愛らしさを強調した「カワイ子ちゃん」用のヘアである。
一九二七年に『あれ』のヒロインとしてチャイニングなデパート・ガールを演じたクララは、そのころ、社会に出て働いていた女性たちのおしゃれに大きな影響を与え、家に引きこもる良家の子女たちと違って、何ごとにつけても積極的で前向きな彼女たちの格好のお手本となったのだ。
このクララ・ボウ・スタイルを取り入れた女の子たちは「フラッパ・ガール」と呼ばれて、モダンでちょっとイカレた当時の働く女の代表的存在となり、甘ったれと可憐さを武器に殿方のほほをゆるめ、口やかましいおばさま族のひんしゆくを買ったのである。(W)

「フラッパ」という言葉がある。今でもちよつと古い人は「うちの娘はフラッパでね」などと言う。一九二〇年代の後半、日本では昭和の初期、フラッパたちがアメリカ映画にはつぎつぎと登場したのであった。お酒を飲み、チャイルドストンの踊りに明け方まで興じ、ボーイフレンドと適当に楽しむ、そういう娘たちのことである。
クララ・ボウはその代表格だった。デパート・ガール、ウェイトレス、看護婦など、仕事を

もつ娘の役が多く、だから小遣いには不自由しない。女性の地位が向上した当時の風潮を反映していたといっている。キユービッドのような唇、細くえがいた眉、大きな眼の化粧法、びちちと躍るようなセックス・アピールの可愛い娘だった。その性的魅力は英語でイット(二)と表現され、映画の題名にまでなり、日本では「あれ」という題名で公開された。そこで彼女のことを「イット・ガール」と呼ぶようになった。(H)



パリを訪れたヤンキー娘の恋 チャールズ・ロジャーズ共演『恋人強奪』(1927)



アイスクリーム売り場の娘とフレドリック・マーチの恋
『アイスクリーム艦隊』(1930)



最後の作品『フーブラ』(1933)では踊り子役

★怪物俳優

エーリヒ・フォン・シュトロハイム
フォン・シュトロハイム

Erich von Stroheim (一八八五—一九五七) ウィーンに生まれ、渡米して一九一四年映画入り。助監督、美術、俳優、軍事監督と多才ぶりをしめし、一九九年『アルプス嵐』で監督をつとめる。以後いくつかの秀作を発表、みずから主演もしたが、ハリウッドの規格にあわず、三〇年代以後は脇役に甘んじねばならなかった。



貴族の息子に扮した『アルプスの悲劇』(1928) 相手役はフェイ・レイ



上記作品の前編にあたる『結婚行進曲』(1928) 相手役はザス・ビット

エーリヒ・フォン・シュトロハイムを怪物と呼ぶのは、彼の風貌が怪物を連想させるからだだけではない。アメリカ映画史上の異彩であり、ハリウッドの生んだ怪物の一人である。彼は監督であり、俳優であった。一九二一年の『愚なる妻』、二三年の『グリード』といった秀作で、強烈で執拗なリアリズム描写によって人間の本能、愚昧さをえぐり出した。これらの作品は常識をはるかに越えた長尺で

そのために会社といくたびかもめごとを起こし、結局、監督としてはハリウッドから締めだされた。俳優としては『愚なる妻』など自作に主演しているほか、一九五七年に没するまで、多数の作品に出演したが、坊主に近い短い髪、モノクルめがねの残忍なドイツ将校役や貴族役で独特のキャラクターをつくった。前身が謎につつまれていたことも、まさに怪物である。(H)

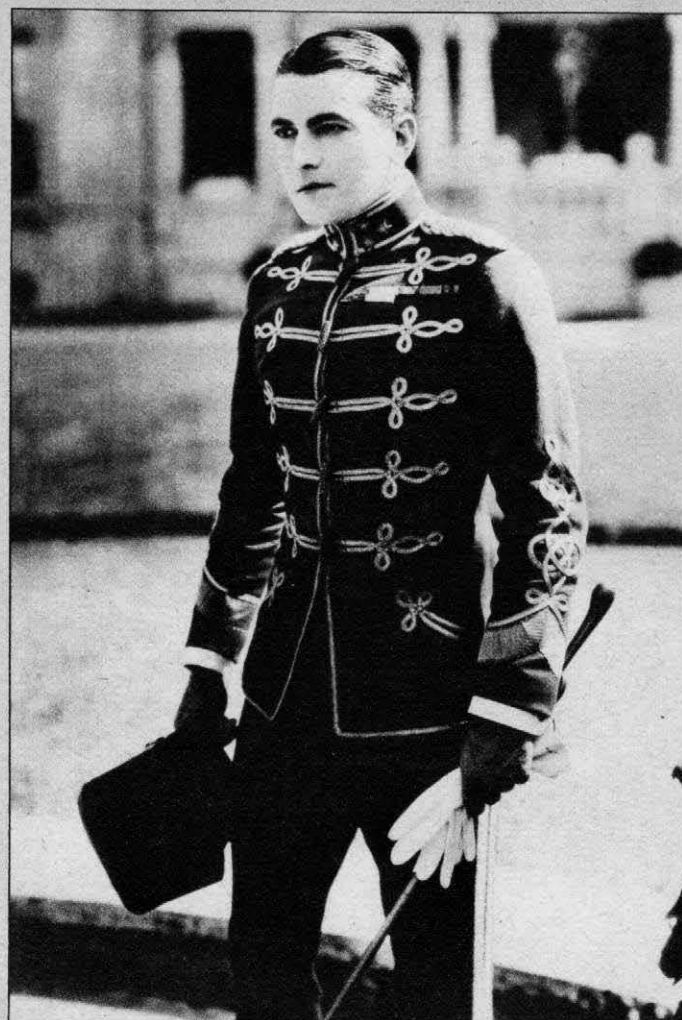
サイレント時代の「一枚目と名花」



美男ジョン・ギルバートと聡明な美女ノーマ・シアラー『殴られる彼奴』(1924)



31歳で夭逝したウォレス・リードとライラ・リーの『剣の輝』(1922)



美男の代表リチャード・バーセルメスの『ブライト・ショール』(1922)



『大いなる幻影』(仏1937)のドイツ将校



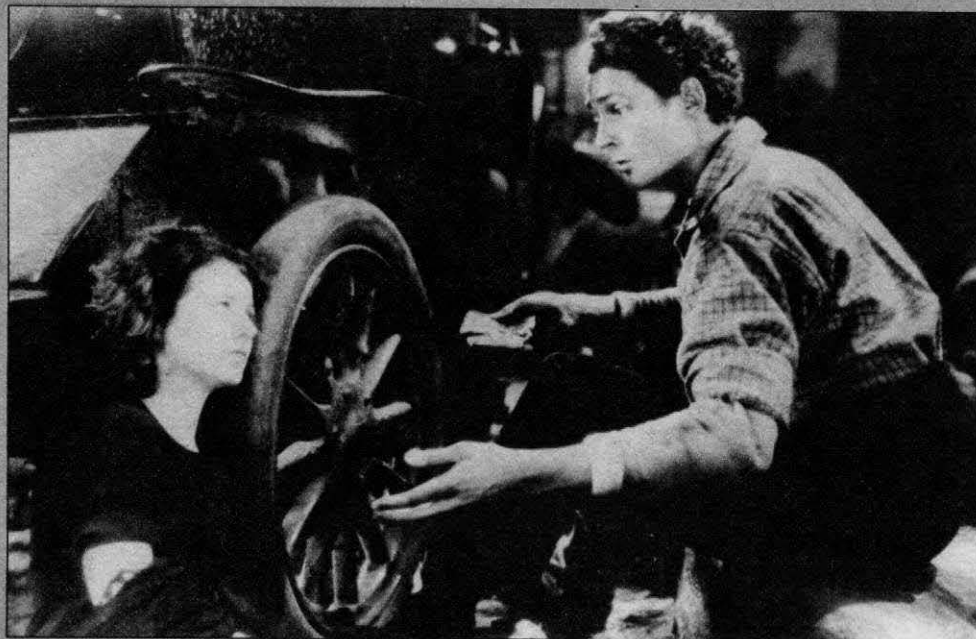
『サンセット大通り』(1950)のもと大監督



傑作『愚なる妻』(1921)では好色漢に扮して下女デール・フラーを誘惑

●コルマンひげ
かつてフランスでは、「ひげのない男性なんて、デザートのないデイナーみたい」と言われたそうだ。
まさにそのとおり、か、そうでないかは好き好きだが、格好いいひげというのは、時として女心を狂わせる。いや、大変に狂わせるものであることは、一九二〇年代にハリウッドのロナルド・コルマンが、女性ファンを熱狂させたことで十分に証明されることだろう。

貴族的な風貌プラス、よく手入れされたコルマンのひげは、クラーク・ゲーブルのひげがセックス・アッピルの象徴であったのとはいささか趣きを異にし、紳士の象徴として、女性ファンの熱いため息を誘ったのであった。
コルマンが、そのひげを落としたのは『戦う巨象』(一九三五)がただ一度。なぜ落としたのかその理由を知りたいが、もはや彼はこの世にいない……。 (W)



名コンビ ジャネット・ゲイナーとチャールズ・ファレルの『第七天国』(1927)



『ベン・ハー』(1926)のラモン・ノヴァロ



異国情緒あふれるメキシコの美女ドロレス・デル・リオ『紅の踊』(1928)



ポーランド出身の大女優ポーラ・ネグリ(右端)『禁断の楽園』(1924)



純情可憐で薄幸のヒロインとして日本でも人気の高かったリリアン・ギッシュ 左『ホワイト・シスター』(1923) 右『東への道』(1920)



異色の二枚目ジョン・バリモアの『ドン・ファン』(1926)



美貌の演技派アラ・ナジモヴァ



これも断髪で可愛いコリン・ムーア



断髪女優ルイズ・ブルックス

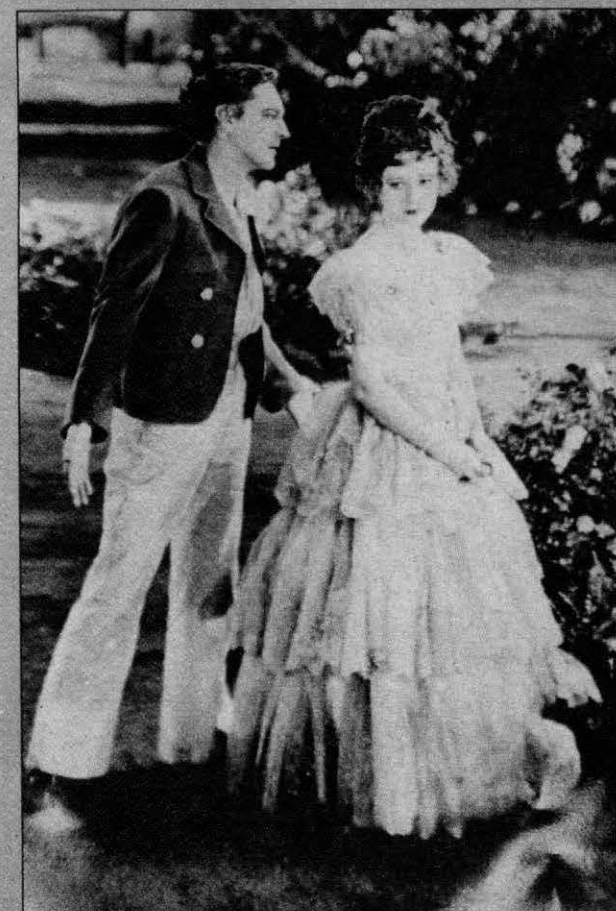
●ポプ・ヘア

大正時代から撮影所の髪ゆいさんとして働いていた伊奈もとさんは、その著書『髪と女優』の中で、「大正末期に恐慌をきたしたのは、断髪の流行でした」と書いていらつしやる。そして、「撮影所では女優各位に、断髪を禁ず」の厳命が貼紙となって出ました」のだそう。

このポプ・ヘアつまり断髪ブームの火元になったのがルイズ・ブルックスという一九〇〇年生まれハリウッド女優だった。

彼女は、フロレンツ・ジグフェルドが主宰するジグフェルド・フォリーズの一員から映画界入り。一九二五年『或る乞食の話』で映画デビューしたが、このときの売り物が、ほっそりとしたやかな肉体とポプ・ヘアであった。

以来、断髪といえは彼女の名が上がり、ルイズの名は当時のモダン・ガールの象徴となったのである。(W)



バリモアと妻ドロレス・コストロの『海の野獣』(1926)

★神聖
ガルボ帝国

グレタ・ガルボ



『アンナ・クリスティ』(1930)



妖婦ぶりが魅力だった『肉体と悪魔』(1927) 名コンビのジョン・ギルバートと

神聖ガルボ帝国——と、かつて人々は彼女の優すべからざる美しさをこう評した。グレタ・ガルボの美しさは、顔であつた。北欧のスフィンクス、北欧のモナ・リザとよばれたグレタ・ガルボの、あの蒼ざめた、ひややかなナゾめいた微笑、あの大理石の彫像を想わせる伝説の顔、ハリウッドが洗練した異常なまでの——非人間的なとさえ言つていいくらいの——クールな美しさ。ガルボの顔は、世紀の顔とよばれ、ただ一度しか生まれない、まさしくユニークな美でありながら、同時にその後の女の顔の美しさの基準ともなつた。たとえば、イングリッド・バーグマンがハリウッドに出現したとき、まず、第二のガルボ、という表現で、その顔の美しさが絶賛された。カトリヌ・ドヌーヴのひややかな顔の美しさもまた、第二のガルボと形容された。ドミニク・サンダも、第二のガルボと言われ、つい最近では、『バリー・リンドン』のマリサ・ヘレンソンも、第二のガルボと絶賛された。そして、これからもずっと、第二のガルボの出現は跡を絶たないにちがいない。ガルボの顔は、女の顔の永遠の美の典型になつてゐるのである。ブリムの垂れた帽子をかぶつてえりを高く立てたトレンチコートを着れば、ガルボ・ルックと言われた時代もあったほど、ガルボがファッションに与えた影響も大きい。(Y)



ロシアの女スパイが悲恋に泣く『女の秘密』(1928)



放縦な男性遍歴をへて真実の家庭愛にめざめる『船出の朝』(1929) 共演ジョン・マック・ブラウン



ガルボ・ファンにとってはこれぞ完璧な美『クリスチナ女王』(1933)



ロバート・テイラーのアルマンを相手に『椿姫』(1937)



ガルボ最後の作品『奥様は顔が二つ』(1941) このとき36歳



ソ連のおかしい女闘士をめぐるラヴ・コメディ『ニノチカ』(1939)



女間諜の悲恋『マタ・ハリ』(1931)



農夫の娘に扮しクラーク・ゲーブルと激しい恋を演じる『スザン・レノックス』(1931)



困われ者のプリマドンナ『ロマンス』(1930) 共演ゲーヴィン・ゴードン

Greta Garbo (一九〇五) デパートの売り子、モデルをへて出演した映画がきっかけでスウェーデンからハリウッドへ渡り、一九二五年、週給三五〇ドルでMGMと契約。冷えた美貌と、ナゾに包まれた私生活で、神聖ガルボ帝国と呼ばれる大スターになった。四年「奥様は顔が二つ」を最後に銀幕から去っている。



はじめてガルボがしゃべった!『アンナ・クリスティ』(1930)

映画と風俗

●ガルボ・ハット

釣鐘型のクロッシェよりすこしツバの広がった帽子を称してガルボ・ハットと呼んでいるが、全盛期のガルボが愛好したのはベレーだったという。

大柄で、肩幅が広がった彼女は、専属デザイナーだったリタ・カヴァリニニ、アドリアンのすすめにしたがって、シンプルなセーラーとスラックス・スタイルを愛用。スクリーンでも、レースや宝石をあまり使わない地味なドレスで、神秘的な美貌を際立たせていたのであった。

ガルボの人氣が絶頂だった一九二〇年代から三〇年代にかけて、女性たちは帽子をかぶるのが常識で、だから、映画の中のガルボはほとんど帽子をかぶっているのだけれど、それらの帽子の大半は、いわゆる「ガルボ・ハット」ではない。

「ガルボ・ハット」とは、一体だれが理想したのだろうか?(W)

☆百万ドルの脚
マルレーネ・ディートリヒ



『ブロード・ヴィナス』(1932)

百万ドルの脚——といえば、まず文句なしにマルレーネ・ディートリヒだ。一九三〇年代に、実際彼女の美しい脚には百万ドルの保険金がかけていたそうだし、たしかに、百万ドルの脚の伝説もそこから生まれたのかもしれない。

マルレーネ・ディートリヒの神話の創造者は、言うまでもなく、ジョゼフ・フォン・スタンバーク監督である。ドイツで撮った『嘆きの天使』からはじまって、『モロッコ』『間諜X27』『上海特急』『ブロード・ヴィナス』そしてふたりのコンビの最後の作品になった『西班牙狂想曲』に至るまで、スタンバークあつてのディートリヒか、ディートリヒあつてのスタンバークかと言われるくらい切

つても切り離せない関係であつた。一九三〇年代前半のこのスタンバーク映画の時代に、マルレーネ・ディートリヒの妖婦的なイメージ、いわゆる『ブロード・ヴィナス』(男たちを破滅に追いこむ女)の伝説が確立された。しかし、同時に、死を賭けても愛する男の命を救う『間諜X27』のヒロインや砂漠の熱砂を裸足で踏んで愛する外人部隊の男を追って行く『モロッコ』のヒロインのように、狂恋の女の伝説も生まれた。

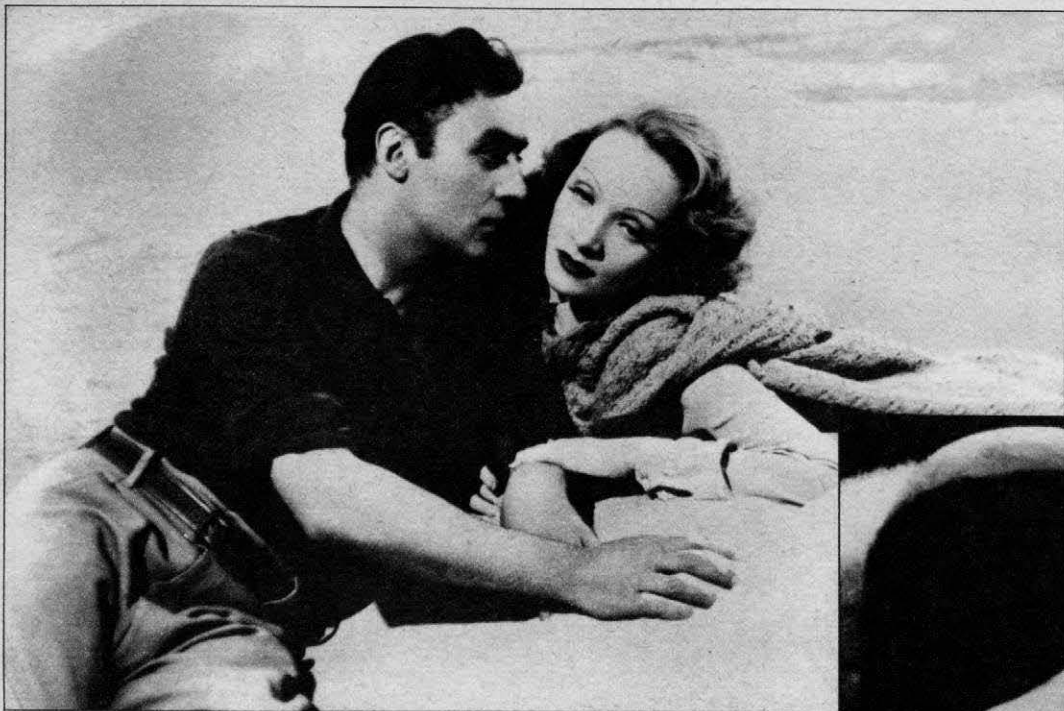
脚線美以上にディートリヒのトレードマークになったもの——それはタバコであつた。くすぶる煙の中からじつとにらむ神秘的な瞳の魅惑。タバコはディートリヒの芸術とまで言われた。(Y)



もらった名刺を海に捨て さいはてのモロッコへ向かう歌姫アミー・ジョリー 『モロッコ』(1930)



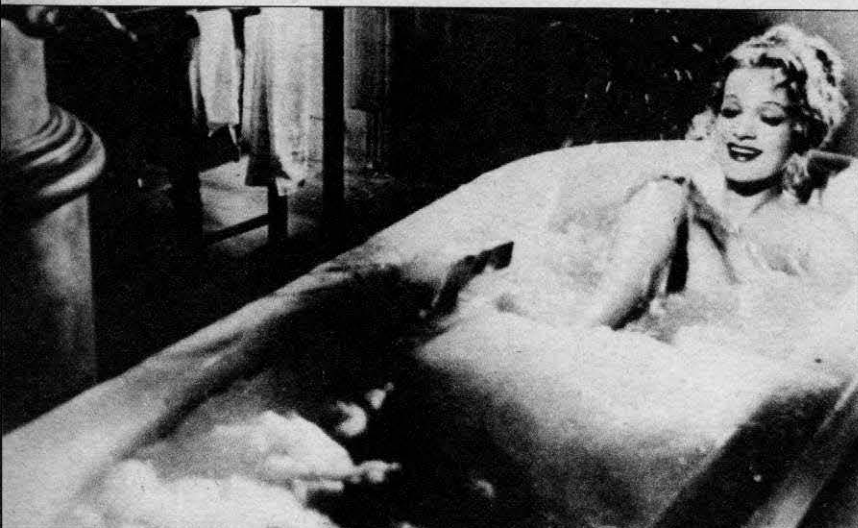
『嘆きの天使』(独1930) 下賤なキャバレーの歌手ローラ——ディートリヒの出世作



灼熱の砂漠での修道僧（シャルル・ボワイエ）との悲恋 『砂漠の花園』（1936）



セビリヤの歌い女で 妖婦と噂されるコンチャ 『西班牙狂想曲』（1935）



女伯爵に扮し 話題の入浴シーン 『鎧なき騎士』（英1937）



「都会の娘はディートリッヒのおしゃれを真似たものです」(淀川長治)



57歳にしてこの脚線美！ 『情婦』（1958）

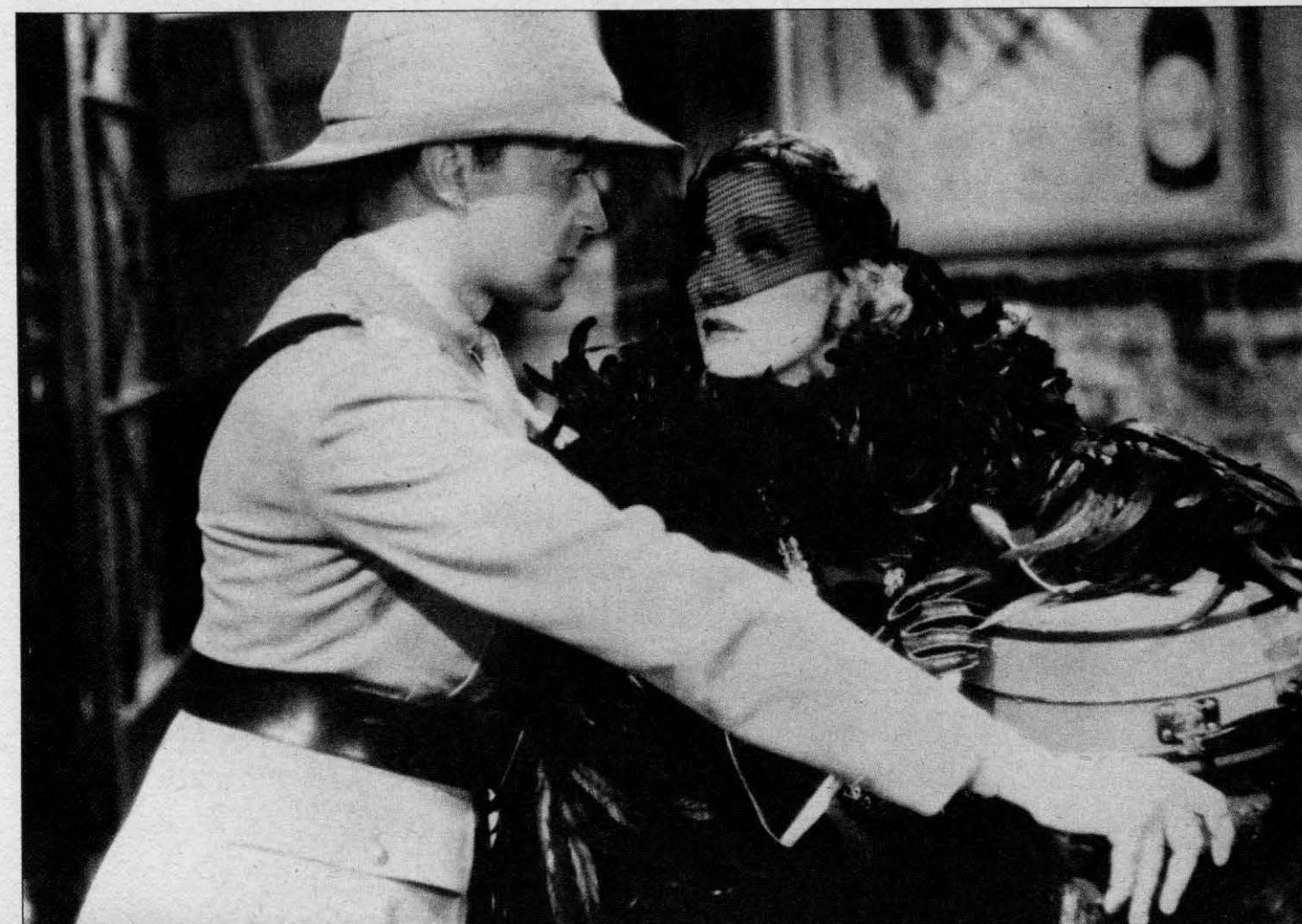
Marlene Dietrich（一九〇一）
ドイツ中流貴族の娘に生まれ、演
劇で名を売ろうと、ジョゼフ・
フォン・スタンバーグ監督とめぐ
りあい、一九二九年『嘆きの天使』
に出演。これがきっかけで三〇年
渡米し、見事な脚線、退廃的な美
貌、反骨の精神で世界中の人びと
の共感を呼ぶ大女優、そして歌手
にのし上がった。



夫と子のある地方のカフェの歌手 『ブロード・ヴィナス』（1932）



宝石泥棒ディートリッヒのこの妖艶さ 『真珠の頸飾』（1936）



中国大陆を走る特急列車で クライヴ・ブルック扮する英軍大尉は過去ある女“上海リリー”に再会した 『上海特急』（1932）

☆永遠の
ヤンキー青年
ゲーリー・クーパー



『海の魂』(1937)

永遠のヤンキー青年——ノットボて人がよくて
照れ屋で健康的で、正義感が強くて愛国心に
燃えるさわやかなゲーリー・クーパーは、老
年になっても、『永遠のヤンキー青年』のイメ
ージを失わなかった。『ヨーク軍曹』に次いで
二度目のオスカーを受賞した『真昼の決闘』
のクーパーは、すでに五十歳、初老の保安官
の役で、若き日のさつそうたるイメージこそ
なかったが、『アメリカの良心』を一身に背負
って、澄んだ瞳の永遠のヤンキー青年の面影
を失ってはいなかった。けっして悪役を演じ
ることのできなかったスターだ。クーパー自
身も、つねに『平均的アメリカ人』を演じる
ことを心がけ、そう評価されることを望んだ
という。

マルレーネ・ディートリッヒと共演した『モ
ロッコ』は、アメリカではディートリッヒが
主役で、クーパーが準主役というランクであ
ったが、日本のファンは承知せず、ランクを
逆転させてしまった。アラン・ドロンの場合
と同じように、ゲーリー・クーパーをスター
にしたのは、ある意味で日本のファンであつ
たとも言える。それほど、ゲーリー・クーパー
の健全で清潔感にあふれた二枚目ぶりは日
本人好みの毒のないタイプであつたというこ
とにもなる。

一見無器用な感じで、ちよいとあみだにウエ
スタン・ハットをかぶつたカウボーイ姿がよ
く似合った。(Y)



うぶでひとすじな外人部隊の若者トム・ブラウン『モロッコ』(1930)



「悪く思うなよ」のセリフをはやらせたちんぴらギャングのキッド『市街』(1931)



クーパーはやっぱり西部劇 若き日のさつそうたるガンマン『テキサス無宿』(1930)



上海を舞台にした『將軍晩に死す』(1936)



スペイン戦争の義勇兵となったロバート 『誰がために鐘は鳴る』(1943)



初老の保安官役で2度目のオスカー 『真昼の決闘 (ハイ・ Noon)』
(1952)



娘のようなオードリーとの恋 『昼下りの情事』(1957)



民主主義をうたいあげる『群衆』(1940) バーバラ・スタンウィックと



3人の無法者に1人で挑戦する『真昼の決闘』のクライマックス



『平原見』(1936) のワイルド・ビル・ヒコック

Gary Cooper (一九〇一—一九六二)
商業美術家志願からエキストラを
へて一九二六年『夢想の楽園』で
映画界入り。三〇年バラマウント
の『モロッコ』に出演したのがツ
キの始まりで、以後はアメリカの
良心を代表する大スターとして世
界中から愛された。四八年『摩天
楼』で共演のバトリシア・ニール
との悲恋が唯一のゴシップだ。



無法者のテキサスの馬泥棒『西部の男』(1940)



歯科医が貞淑な妻(フランセス・フラー)との愛を確認するまで『或る日曜日の午後』(1933)



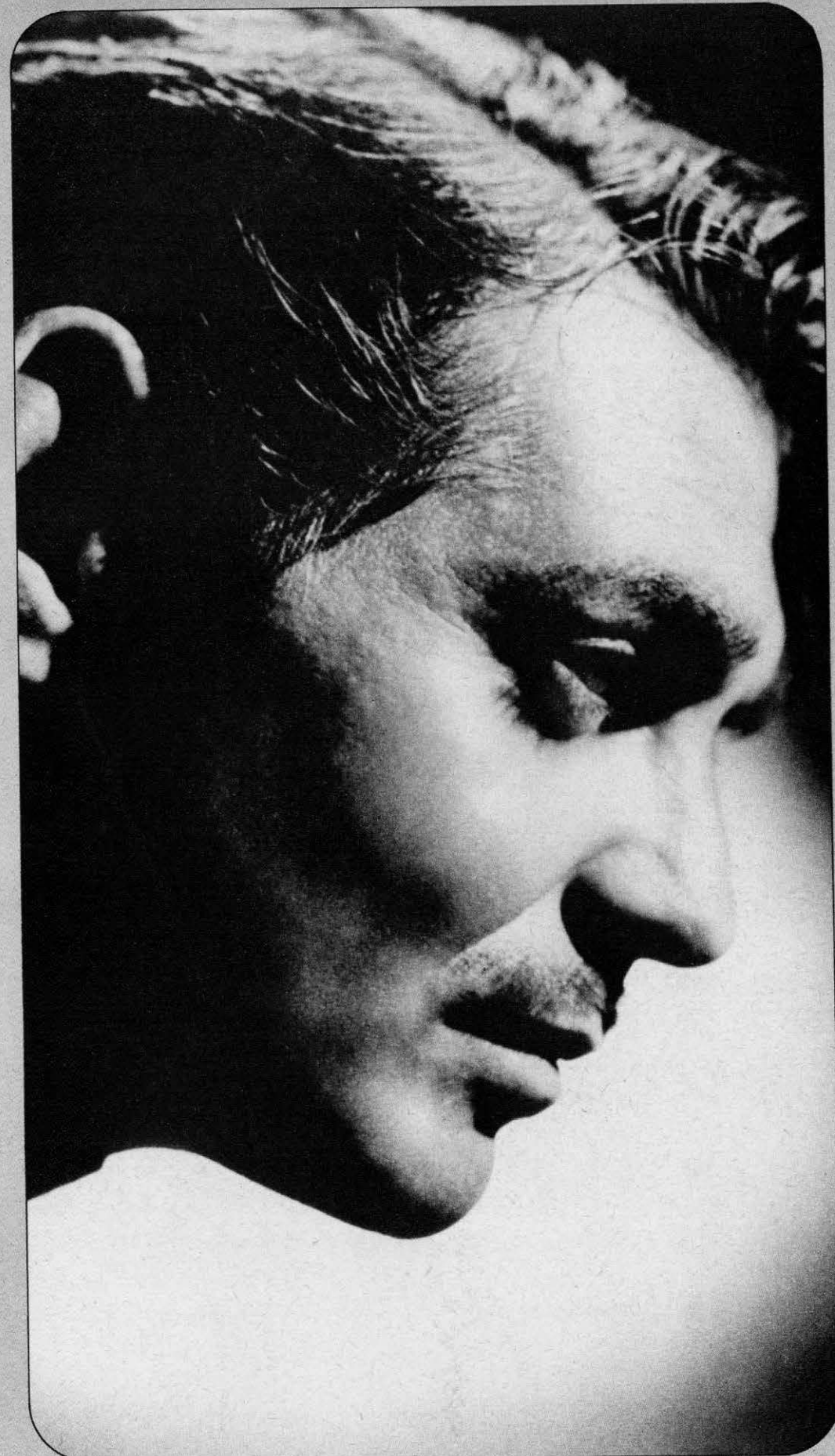
ヘミングウェイの名作の映画化『戦場よさらば』(1932) 共演ヘレン・ヘイズ



第1次大戦の武勲者の実伝『ヨーク軍曹』(1941)でアカデミー主演賞 共演ジョン・レスリー

★ハリウッド
のキング

クラーク・ゲーブル



1945年（スナップ）



地下組織の若いボスに扮し ひげのない『自由の魂』(1931)



海の男で半裸のセクシーぶり 『南海征服(戦艦バウンティ号の叛乱)』(1935)



社長秘書ジョーン・クロフォードを愛する牧場主 『私のダイナ』(1934)



ゲーブルのめずらしいミュージカル・シーンは日本未輸入『愚か者の楽園』(1939)

ハリウッドのキング——というニックネームをクラーク・ゲーブルにつけたのは、ゲーブルの親友であったラオール・ウォルシュ監督であった。『ながれ者』『南部の反逆者』という二本のラオール・ウォルシュ監督作品のクラーク・ゲーブルは、いずれも、キング・スナッチ・王様」とよばれるにふさわしいヒーローを演じた。『ながれ者』の原題は「キングと四人のクイーン」。ゲーブルは、もちろん、キングの役である。これはすでに一九五〇年代の半ばすぎ、すなわちほとんど晩年の作品のイメージだが、彼のキャリアそのものが、ハリウッドのキングにふさわしい重みをもっていた。一九六〇年代末にクラーク・ゲーブルが死んだ時、ハリウッドのリポーター

「私たちは、こぞつて、ハリウッドのキングが死んだ……」と書いて、その死を悼んだのであった。一九三〇年代、ギャング映画の悪役としてそのキャリアをはじめた当初から、クラーク・ゲーブルは女性ファンにとってセックス・アピールのシンボルであった。『或る夜の出来事』で喜劇的才能をさらめかせ、アカデミー主演男優賞を受賞。やがて『風と共に去りぬ』というハリウッド史上最大の超豪華作品が、キングの名にふさわしいクラーク・ゲーブルのために企画・製作された。私生活でも、キングの名に恥じない寛大さと正義感と統率力をもっていた男性だったそうである。(Y)



10万ドルの金貨を追う『なぐれ者』(1956) ますます男っばい初老のゲーブル



富豪と奴隷女(イヴォンヌ・デ・カーロ)の愛『南部の反逆者』(1957)



ゲーブルの死後『面影』(1976)で映画化されたゲーブルとキャロル・ロンバード夫妻



右手にガン・ホルダー 左手にカード『無法街』(1941)のイカサマ賭博師

Clark Gable (一九〇一―六〇)
舞台の端役、エキストラ、悪役の下積みを経て一九三四年、或る夜の出来事でオスカー受賞。当り役は『風と共に去りぬ』のレット・バトラー。キングの愛称で呼ばれ、結婚歴は五回。三人目の妻キャロル・ロンバードを飛行機事故で失った傷は癒えることなく、晩年の彼に暗い影を落とした。



きわめつけ『風と共に去りぬ』(1939)のタラ農園でのラブ・シーン



この『荒馬と女』(1961)完成4日後 他界した



アフリカのゴリラ狩りと三角関係『モガンボ』(1953) エヴァ・ガードナーと



令嬢(クローデット・コルベール)との愛の道中『或る夜の出来事』(1934) オスカー受賞作



多言無用 レット・バトラーとスカーレット・オハラ

フレッド・アステア&ジンジャー・ロジャーズ



アステア&ロジャーズ最盛期の一作『艦隊を追って』(1936)



戦後再共演の『ブロードウェイのバークレイ夫妻』(1949)

踊るカッパル——といえば、フレッド・アステアとジンジャー・ロジャーズだ。カッパルとは言っても、二人が夫婦もしくは恋人を演じたのは、一九三〇年代のスクリーンの上だけの話。しかし、ミュージカル映画史上、スクリーン上でこれほど見事に息の合ったダンスを披露してみせたすばらしいパートナーはいないだろう。『空中レビュー時代』『コンチネンタル』『ロバート』『トップ・ハット』『艦隊を追って』『有頂天時代』『踊らん哉』『気儘時代』『カッスル夫妻』と、珠玉のナンバリーがならぶ。

一九三〇年代を代表するダンス・チームであると同時に、ドル箱コンビでもあった。軽快でさわやかなタップの音色が、この踊るカッパルには欠かせない要素だが、このコンビのイメージが上流階級のファッション、社交界の恋愛遊戯、ソフィスティケートッド・コメディの粋のセンスにさええられていたことを見のがすわけにはいかない。その意味では、ハリウッドの黄金時代のたわいのない夢にあふれたロマンティック・コメディであった。歌って踊れば、たちまち人生が明るくなるという、まさに楽天的なムードが、このダンシング・カッパルの魅力であった。

踊らん哉！——まさにこれこそアステア&ロジャーズの魅力の力ギである。(Y)

Fred Astaire (一九〇九—)
Ginger Rogers (一九一—)
ともに舞台出身で、三〇年代初めから映画に出ていたが三三年、空中レビュー時代で初共演してダンス場面を演じたのが好評で、三九年にいたるまで九本の作品に共演し、踊るカッパルとして人気を得た。それぞれ単独でも話題作が多い。



この『空中レビュー時代』(1933)によって黄金コンビが誕生した



壁から天井へさかさまになって踊る有名な『恋愛準決勝戦』



シンド・チャリシーと粋な踊りをみせた『バンド・ワゴン』(1953)



これはジェーン・パウエルとのデュエット『恋愛準決勝戦』(1951)



『ザッツ・エンタテインメント PART 2』(一九七六)でもジン・ケリーと踊りまくる。すでに七十六歳だ。



甘く軽快で 流れるようなデュエット みごとに息のあったコンビだった『カッスル夫妻』(1939)



トーキーならではの魅力 アル・ジョルソンの歌が聞こえる!『シンギング・フール』(1928)



エディ・カンターの『カンターの闘牛師』(1932)



トーキー第1作『ジャズ・シンガー』(1927)のアル・ジョルソン



パリジャンなまりで歌いしゃべるモーリス・シュヴァリエの代表作『ラヴ・パレード』(1929) 共演ジャネット・マクドナルド

歌つて、踊つて、笑わせて



マルクス兄弟はナンセンスな笑いの宝庫 これは『オペラは踊る』(1935)の ぞくぞくご来室 押すな押すなの傑出ギャグ



シュヴァリエとマクドナルドの小粋な『メリイ・ウィドウ』(1934)

一九二七年、アル・ジョルソンが「マイ・マイ……」と歌う『ジャズ・シンガー』をもつてトーキー時代がはじまった。舞台から歌や踊りや笑いの芸人たちが、ぞくぞくと映画入りした。昨日まで音を持たなかったハリウッドは、いまや陽気な歌の都だ。にぎやかなザッツ・エンタテインメント時代のはじまりである。(H)



W・C・フィールズも30年代の人気者「デーヴィッド・カッパーフィールド」(1934)

ジェームズ・キャグニー



ギャング俳優としての出世作『民衆の敵』(1931)

汚れた顔の天使——というのは、ジェームズ・キャグニー主演のギャング映画の代表作の題名で、じつはこの映画に出てくる不良少年たち(アッド・エンド・キッズ)を指しているのだが、いつのまにかキャグニーそのひとの代名詞になってしまった。『汚れた顔の天使』が世界中で最も愛されたジェームズ・キャグニーの映画なのだ。

『民衆の敵』から『白熱』に至るまで、キャグニーはスリッパを履きながら、世にも極悪非道な——しかもつねにマザー・コンプレックス気味のひねくれた——悪党やギャングを演じたスターはいなかった。残忍な微笑の中に、多くの女性ファンが、やさしさに飢えた悲しい男の顔を見た。

女性の顔にグレートフルーツを押しつけた(『民衆の敵』)、レディの尻を思いっきり蹴飛ばしたり(『拳闘のキャグニー』)、若い女の髪をひっぱって引きずりまわしたり(『スタア悩殺』)、とにかくこのチビの大スターがやることは直情型で兇暴であつたが、その反面、母親にはひざまずいて泣きさがるという弱さをはげしく表現した。

ウオードヴィリアン出身のキャグニーは、ギャング映画のスターであることとをさらい、ソング・アント・ダンス・マン(歌と踊りの人間)であることを主張する。ミュージカル『ヤンキー・ドゥードル・タンデー』(日本未公開)でアカデミー主演男優賞を受賞した日こそ、彼の生涯の最良の日であつたという。(Y)



映画スターになってしまうギャング『スタア悩殺』(1933)



暗黒街にのしかかってくる若者『民衆の敵』



ギャングとたたかう『Gメン』(1935)にも主演した



極めつけ『汚れた顔の天使』(1938) 共演ハンフリー・ボガード



これはボクサー役『栄光の都』(1941)でアン・シェリダンと



『白熱』(1949)でヴァージニア・メイヨと

James Cagney (一八九九) ニューヨークの下町生まれで、いくつもの職についたあとウオードヴィルの舞台に立ったが、一九三〇年以後ハリウッドでギャング映画の主人公として売れた。しかし、あくまで彼は歌と踊りの芸人である。と主張しつづけていた。六一年以後引退している。七六年、自伝が邦訳された。



1920年代のギャングの一代記『彼奴は顔役だ!』(1939)でボガードと



ジョージ・ラフトと共演の囚人役『我れ曉に死す』(1939)



脱獄ギャングの兇暴さ『明日に別れの接吻を』(1950)



いなせなギャング役で人気のあったジョージ・ラフト 『パワリー』(1933)

マシ ン ギ ヤ ン グ 俳優

一九三〇年代のハリウッドはギャング映画の時代でもある。ついこのうまで新聞の社会面をにぎわしていたカボネやデリンジャーをモデルにしたギャング映画が続き登場し、兇暴なギャングを演ずるキャグニー、ジョージ・ラフト、エドワード・G・ロビンソンらのスターが誕生した。クーバーやゲーフルもギャング映画に出演したことがある。(H)



めずらしい西部劇 『追われる男』(1955)



歌手ドリス・ディにつきまとうボス 『情欲の悪魔』(1955)



ギャング映画の傑作『暗黒街の顔役』(1932)のホール・ムニ



にが虫を噛みつぶしたようなエドワード・G・ロビンソン 『夜の大統領』(1931)



ギャング映画第1作『暗黒街』(1927)のジョージ・バンクロフト

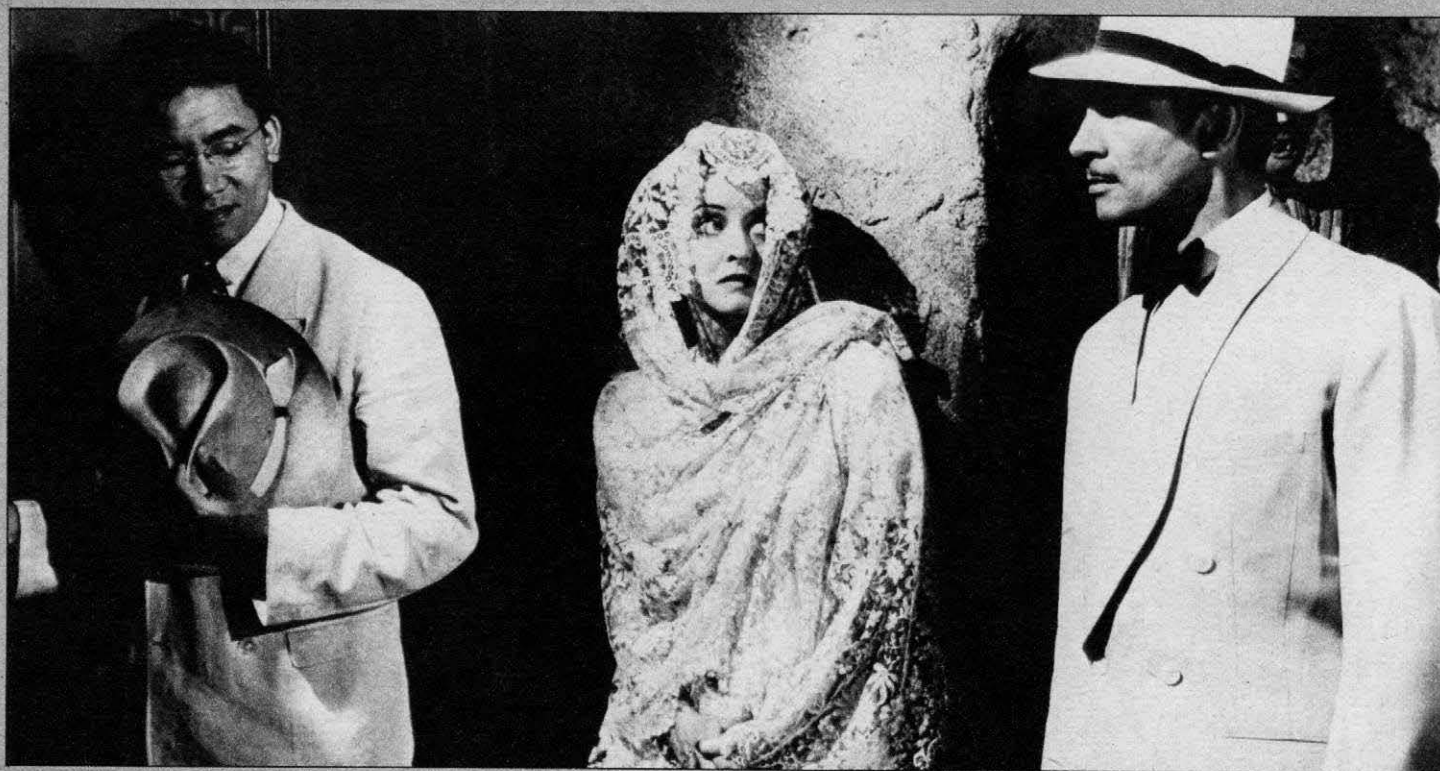


“歌と踊りの芸人”を称していたキャグニーは『ヤンキー・ドゥードル・ダンディー』(1942)でアカデミー賞を受賞した

ベティ・デイヴィス



モームの「人間の絆」の映画化『痴人の愛』(1934)の奔放なミルドレッド役は出世作 レスリー・ハワードと



これもモームの戯曲による『月光の女』(1940) ある男を殺害した人妻役で 一種の悪女である



79 『何がジェーンに起ったか?』(1962)でジョン・クロフォードと



『イヴの総て』(1950)も代表作 M・モンローの顔も見える



アカデミー主演女優賞の『青春の抗議』(1935) 酒で身をもちくずしたもと女優がフランチャット・トーンの愛に助けられる



当り役の一つ『化石の森』(1936) レスリー・ハワードと

Bette Davis (一九〇八) ニューヨークの舞台から、一九三一年映画に進出。はじめ雑多な役が多かったが、一九三四年の『痴人の愛』で演技派女優として認められ、三〇年代に二度アカデミー賞を受賞し、戦後の『イヴの総て』にいたるまで、いくつかの名演技を残している。最近も映画や舞台で活躍している。

七五年の秋、ニューヨークとロンドンで、ベティ・デイヴィスのタベなる公演がおこなわれた。見た人の話によると、第一部は彼女の名演技の数々をつなぎあわせたアンソロジー・フィルム、第二部では彼女自身が舞台上にあらわれ、歌うてもなく芝居するでもなく、観客とおしゃべりをくりひろげるという趣向だったそう。

は「何がジェーンに起ったか?」から『妖婆の家』にいたる一種の怪奇趣味の老練役をすくぐに思いついてしまいが、三〇年代から四〇年代にかけての名演技の数々は、いまでも語り草になっている。はじめのうちこそ、喜劇からミュージカルまで、そして平凡な娘役が専門だったが、三四年に『痴人の愛』で演技力を買われてからは、売春婦、ギャングの情婦、殺人者など、汚れ役が多くなった。

「悪女スター」と呼ぶこともある。他のスターたちがいやがってやらないような悪女や汚れ役にすすんで挑戦し、精緻な計算で自分のものにしてしまふのである。演技力ももちろん、大スターの地位についたのは、この人が最初であろう。(H)



ギャングの情婦に扮した『札つき女』(1937)

★三人の演技派スター

ジョーン・クロフォード



当り役の一つ モーム原作『雨』(1932)のサディ・トンプソン

モームの原作を映画化した『雨』で三〇年代の性的デカダンスを代表するスターとなったクロフォードは、てつない目玉の放つ強烈な個性が、年とともに凄味をおびてくる。このころが彼女のスターとしての全盛期で、クーパーと共演した『今日限りの命』、『螢の光』などで、妖麗な美しさを開花させた。売れた当時は、フラッパー・ガールとしてミュージカルなどにも出演し、MGMの代表的スターになったが、アカデミー主演女優賞を獲得した日本未公開の『ミルドレッド・ピアース』(一九四五)のころから、野心満々の演技派へ転じ、悪女役や、ドラマティックな女性映画でスターの座を守った。(ユートモレス)

ク「『哀しみの恋』などが日本でも公開されているが、このころの代表作は、『ジョニー・ギター』の哀愁のメロディとともに、男まじりのカンざばきを見せた西部劇『大砂塵』が忘れられない。一方、実生活ではベブシコーラの副社長となつて、金銭にはこまかく一代で財産を築いたが、とても副社長の座におさまっている人ではなく、三〇年代の好敵手だったヘティ・デヴィスと老醜をさらして大競演した『何がジェーンに起ったか?』は、往時を知るファンには、まさに衝撃の一作で、女優執念に憑かれた二人の『女の闘い』は、鬼気森々ものがあった。その後も、恐怖映画に出演してファンをこわがらせている。(S)



出世作『三人の踊子』(1925) ダンサー役はクロフォードの得意とするものだった



ジャズ・エイジを象徴するフラッパー役『踊る娘達』(1928)



夫(ジャック・バランス)にいつ殺されるか……『突然の恐怖』(1952)



“ジョニー・ギター”で有名な『大砂塵』(1954)



金に執着する女性の役も多い『大都会の女たち』(1959)



ゲーブル主演の『暗黒街に踊る』(1931)では記者の役



『初陣ハリー』(1926)ではハリー・ランドソンの喜劇の相手役だった



二枚目ラモン・ノヴァロとの恋愛物『シンガポール』(1929)

キャサリン・ヘップバーン



初のオスカーを得た『勝利の朝』(1933)は女優志願の娘



Katharine Hepburn (一九〇九) フロイドウエイの舞台で脚光をあびるや、ハリウッドから声がかかり、一九三二年『愛の鳴咽』でデビュー。三作目の『勝利の朝』で早くもアカデミー賞を受賞し、現在にいたるまで名演技の数々を残している。アカデミー賞はのべ三度受賞。舞台でもいくつもの名演がある。

ミスが、ヴェネツィアで初めて体験した恋を名演して主題歌「サマータイムイン・ヴェニス」とともにファンを酔わせた。思い出のくちなしの花を持って駅頭にかけつけるロックス・ブラッツイとの別れのラスト・シーンには、まさに名場面だった。また、ハンフリー・ボガードとの共演で、気の強い女を演じ、アフリカの川を蒸気船でくぐる冒険物語『アフリカの女王』での迫力ある演技も彼女ならではの魅力。『冬のライオン』では、ヘンリー二世時代の王位継承をめくつて、王室の骨肉の争いを壮絶な演技で見せて、ここに演技派女優キャサリンの真骨頂を発揮し、見るものを圧倒した。まだやる気十分で、いまも新作が作られている(S)

ことし六十七歳——ジョン・ウエインと初の共演を実現させた『オレゴン魂』でも健在な姿を見せている。『勝利の朝』『冬のライオン』『招かれざる客』での三度にわたるアカデミー主演女優賞の受賞は、アカデミー賞史上の記録で、彼女の演技派女優としての地位を不動のものとしているが、スベンサー・トレイシーとの名コンビ作『女性No.1』『アダム氏とマダム』などでの『中性的な魅力』は、ハリウッド女優のなかでも異色中の異色。美人とはいえないが、いまの個性派時代の先駆ともいえるべき強烈さだ。彼女の息の長い人気の秘密は、この個性がともNOWだからだ。ことに戦後は、『旅情』で、アメリカのハイ



ジブシー娘に扮した『小牧師』(1934)



女優を志す金持娘『ステージ・ドア』(1937)



舞台も映画も大ヒットの『フィラデルフィア物語』(1940)



中年のオールドミスに扮して いっそう洗練された魅力の『旅情』(1955)



『若草物語』(1933)の小説家志望の次女ジョーは活発な娘で キャサリンのイメージにぴったり

☆偉大なる名優

スペンサー・トレイシー



2度目のオスカー『少年の町』(1938)のフラナガン神父



キップリング原作『我は海の子』(1937)の船長役で2度目のオスカー



ひとり海とたたかう『老人と海』(一九五八)も当り役



デビュー直後の暗黒街もの『速成金』(1931)

スペンサー・トレイシーは、はじめのうち持ち味を十分に発揮させる機会がなかったが、三七、八年につづけてオスカーを手にいれてからは、ハリウッド一の演技派スターとしてどんな映画に出演しても、持ち味と演技力で見せ切ってしまうような、そんなすごい俳優になった。演技をしてないようについて、ちゃんと計算している、そういう演技だった。(H)



白髪になってますます味を出した『おかしなおかしな世界』(一九六三)

名コンビ

●トレイシー & ヘップバーン
●パウエル & ロイ

今日では名コンビというのはあまり存在しなくなりましたが、黄金期ハリウッドでは呼び物の一つだった。なかでも私的に無二の親友だったスペンサー・トレイシーとキャサリン・ヘップバーンのユーモラスなコンビは、九本もつくられて、ファンを湧かせた。



『影なき男』シリーズで夫婦探偵を演じたウイリアム・パウエルとマーナ・ロイも呼吸がぴったりだった。(H)



結婚した新聞記者カップルのユーモラスなやりとり『女性No.1』(1942)はコンビの傑作



最後のコンビ映画『招かれざる客』(1967)では老夫婦



日本未公開の『パットとマイク』(1952)



パウエルとロイの夫婦役『巨星ジークフェルド』(1936)



パウエルとロイと名犬アスタの『影なき男』(1934)

ジーン・ハーロー



こんなグラマな秘書がいればゲーブルでなくとも浮気したくなる『妻と女秘書』(1936)



これもゲーブルと共演の『紅塵』(1932)



『晩餐八時』(1933)でマリー・ドレスラーと



ハーローの代名詞となった『プラチナ・ブロンド』(1931)



プラチナの女王 セックスのシンボル

プラチナ・ブロンド——といえば、ジーン・ハーローの代名詞。もちろん、まばゆいばかりのプラチナ・ブロンドの髪をしていたが、プラチナ・ブロンドという彼女の主演する映画も作られた。

一九三一年、ハリウッドきつての謎の大富豪ハワード・ヒュースに抜擢されて出た『地獄の天使』ではブラジャーなしの豊かな胸のふくらみでファンを圧倒した。プラチナの女王、セックスのシンボルとして、全米に——次いで世界中に、その名をとどろかした。

ジーン・ハーローは、その輝くばかりのプラチナ・ブロンドで、ハリウッド映画史上にまったく新しいヴァンプのイメージを出現させた。ハーロー以前の『ヴァンプ』はすべて黒褐色(あるいはむしろ黒)の髪、毒婦であつた。ヴァンプはヴァンパイア(吸血鬼)から来ていることもあつたからにちがいない。黒髪はエキゾチックな官能的魅惑にも結び

ついていたらしく、セダ・バラにしても、ニタ・ナルディにしても、エステル・テイラーにしても、黒髪(もしくは黒褐色の髪)の美女たちであつた。

ジーン・ハーローが、その意味では、ブロンドの肉体系の模範を作つた。マリリン・モンローやブリジット・バルドーが褐色の髪をブロンドに染めて成功するのは、もちろん、もつとあとの話だ。(Y)

Jean Harlow (一九一三—一九三七)
不幸な家庭に育ち、エキストラ稼業のち、一九三一年ハリウッド・ヒュース製作の『地獄の天使』の端役でセンセーショナルに売り出す。まばゆいばかりのプラチナ、豊かな乳房で三〇年代のセックス・シンボルとなつたが、二十六歳で病死。猟奇的なエピソードにいろいろとられた短い生涯だつた。

ここにもハリウッドの人気者



6代目ターザン ワイズミューラー



『ターザンの狂襲』(1939)も6代目の主演



カーロフのフランケンシュタインの怪物

一九三〇年代、黄金期のハリウッドからはこんな人気者も登場した。ターザンは無声映画以来つくられていたが、六代目ジョニー・ワイズミューラーが「アー・アー」と叫び声をあげて人気沸騰した。ボリス・カーロフのフランケンシュタインの怪物、ベラ・ルゴシの吸血鬼ドラキュラ、そしてあのキング・コングもこの時代の人気をさらつた。(H)



ベラ・ルゴシの『魔人ドラキュラ』(1931)

★ハードボイルド・スター
ハンフリー・ボガード



『カサブランカ』(1943)



『マルタの鷹』(1941) といえは私立探偵サム・スピード

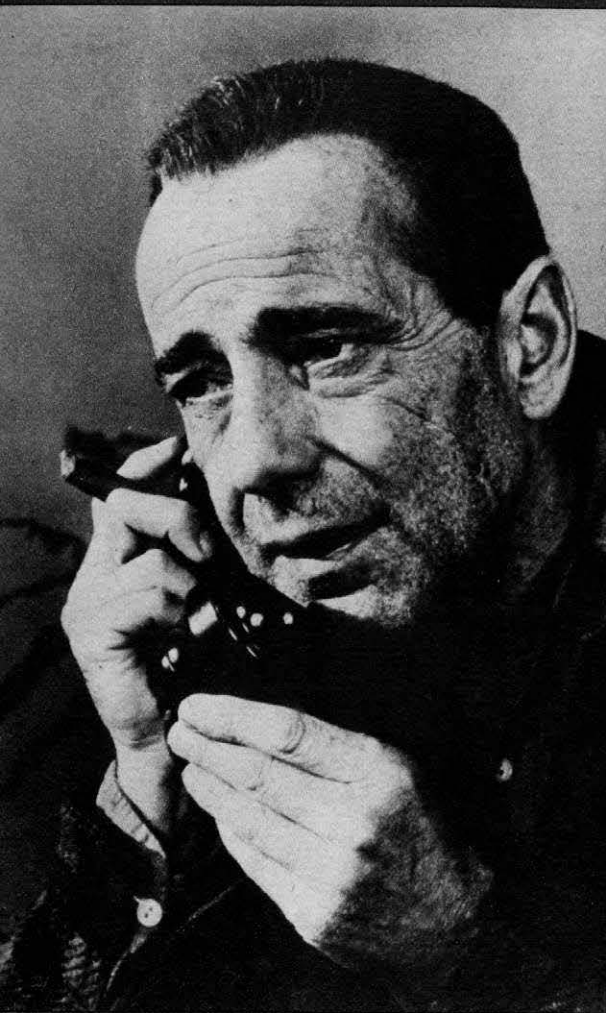
Humphrey Bogart (一八九九—一九五七) 無名出演のかたわら一九三〇年から映画出演。はじめは無個性の若者役だったが、三〇年代半ばからギャングの脇役としての性格をつくる。四〇年代になると私立探偵役などでハードボイルドな魅力を輝かせ、トップ・スターとなった。四度目の妻ローレン・バコールとの愛も有名。

ハードボイルド・ヒーローといえは、やはり、なんといつても、まずハンフリー・ボガードだ。タフなヒーローはたくさんいる。ダンディなヒーローもたくさんいる。だが、タフで、しかもダンディなヒーローとなると……ハンフリー・ボガードをおいて他にいないのである。『マルタの鷹』の私立探偵サム・スピード、『三つ数えろ』の私立探偵フィリップ・マローは、もちろん、ダシル・ハメット、レイモンド・チャンドラーという二人の別々のハードボイルド小説の主人公であるにもかかわらず、ハンフリー・ボガードが演じることによって、そのイメージが定着してしまった。最近の『さらば愛しき女よ』のロバート・ミッチャムが出現するまでは、だれもボギーのイメージを崩せなかった。拳銃、ソフトハット、トレンチコート、タバコ、電話、そして女(ローレン・バコール)——ハードボイルド・ヒーローのボガードに欠かせない七つ道具だ。しかし、ボガードをボガードたらしめた永遠の名作は、『カサブランカ』であった。タフでダンディなボガードが真にロマンティックなヒーローになった決定的な映画であった。(Y)

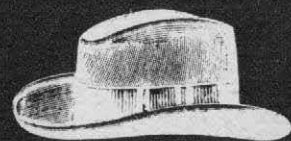
ハードボイルド調の出世作となった『ハイ・シエラ』(1941) は日本未公開



ボギーの決定的名作 ロマンティックな魅力で女性ファンも陶醉させた『カサブランカ』



最後のギャング役『必死の逃亡者』(1955)



映画監督に扮して涙味を見せた『裸足の伯爵夫人』(1954)も名作の一つ



愛妻ローレン・バコールとはじめて出あったのが、ヘミングウェイ原作の『脱出』(1945)



ギャングに占領されたホテルを救う『キー・ラーゴ』(1948)もハードボイルドの魅力にあふれていた



ヘップバーンと共演の『アフリカの女王』(1951)の飲んだくれ船長でオスカー獲得

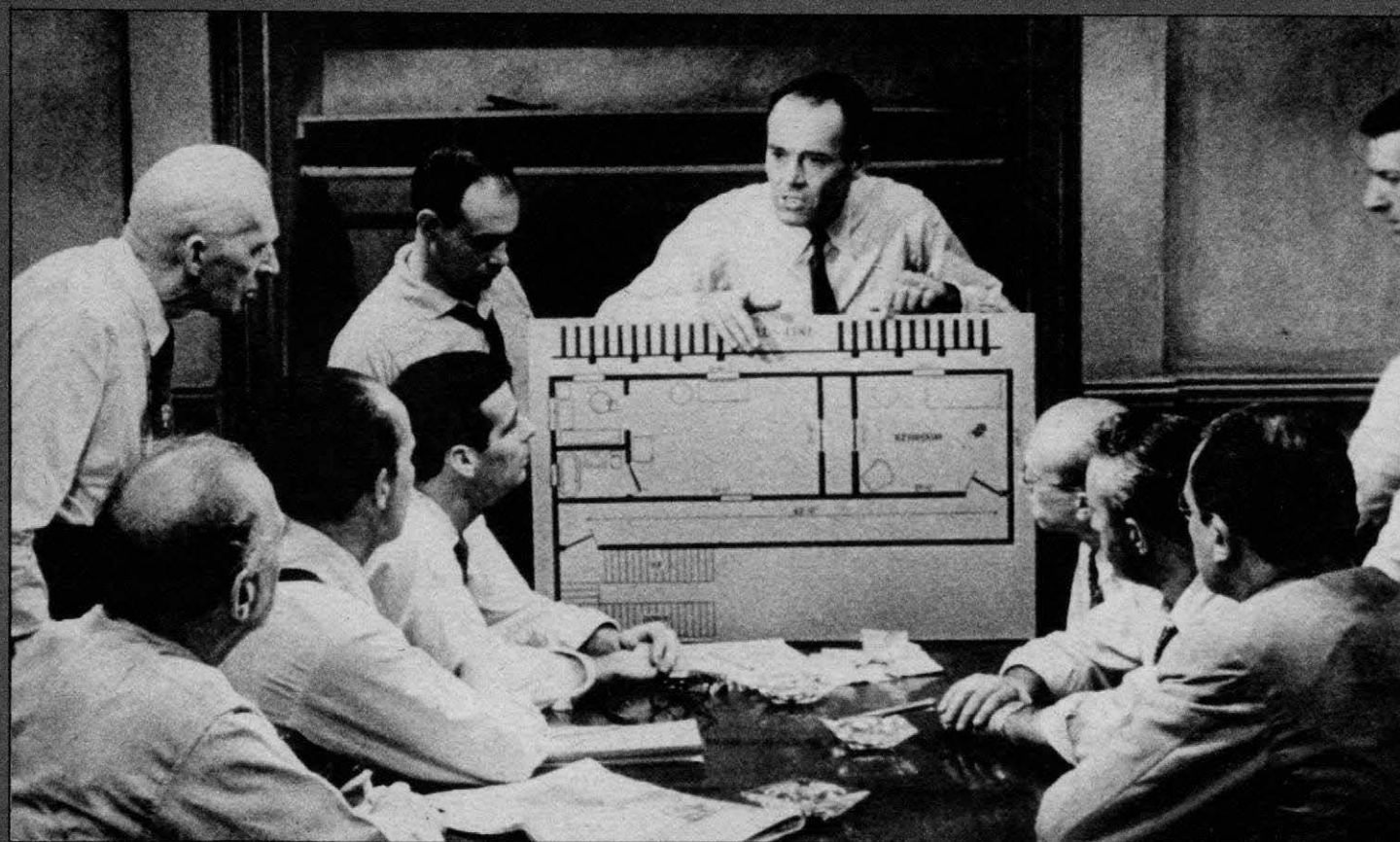


『三つ数えろ』(1946)といえば私立探偵マロー



名作『黄金』(1948)では黄金発掘に憑かれた男

ヘンリー・フォンダ



粘り強さと人間性をつらぬいた陪審員『十二人の怒れる男』(1957)



無実の罪に問われた前科者の悲劇『暗黒街の弾痕』(1937) 名女優シルヴィア・シドニーが愛妻役



女優志願の娘とあやまちをおかす演劇プロデューサー『女優志願』(1958)

「スミス都へ行く」素嗜らしき殺人人生！
におけるジェームズ・スチュアートや、ジョン・フォード作品(『怒りの葡萄』『荒野の決闘』『ミスタア・ロバート』など)のヘンリー・フォンダは、アメリカン・デモクラシーの良心そのものであり、人間の真心を信じつづけるナイーブな精神そのものだった。そのナイーブな心が傷つけられた時、彼らは怒りをナイーブにぶちまけた。『怒りの葡萄』『地獄への逆襲』『十二人の怒れる男』のヘンリー・フォンダ、アンソニー・マン監督の西部劇(『ウインチェスター銃73』『怒りの河』『遠い国』など)のジェームズ・スチュアートが感動的なのも、まずそのナイーブさのゆえだったのではないかと思われる。(Y)



『バルジ大作戦』(1965)のアメリカ中佐

アメリカの真心——それは、ある意味では、ハリウッドのあらゆる二枚目のスターがいくばくかともち合わせていたものだ。だが、ジェームズ・スチュアートやヘンリー・フォンダは、いわゆるヒーローほどに強くたくましくはない。したがって、ヒーローにおいてはストリート正義感として表現されるものが、彼らの場合は、もうすこしヒューマンに、デリケートに、ときには日常的に変容されて現われるような気がする。それだけ親しみやすく、感情移入がでる存在だとも言える。アメリカン・デモクラシーの最も素直で最もセンチメンタルな部分を体現するスターだと評されたこともある。たしかに、フランク・キャプラ監督の映画『我が家の楽園』



『若き日のリンカーン』(1939)もう一つつけの役

Henry Fonda(一九〇五) プロードウェイから一九三五年映画入り。ジョン・フォード作品をはじめ数々の名作で、好まぶりを発揮しているが、アカデミー賞を一度も獲得していないのは奇妙という他ない。五度の結婚歴があり、夫人連はあまりよくない。娘ジェーン、息子ピーターも映画スターとして活躍しているのは有名。



きわめつけワイアット・アープ『荒野の決闘』(1946)



名作『怒りの葡萄』(1940)では農民のたたかいと悲劇を

ジェームズ・スチュアート



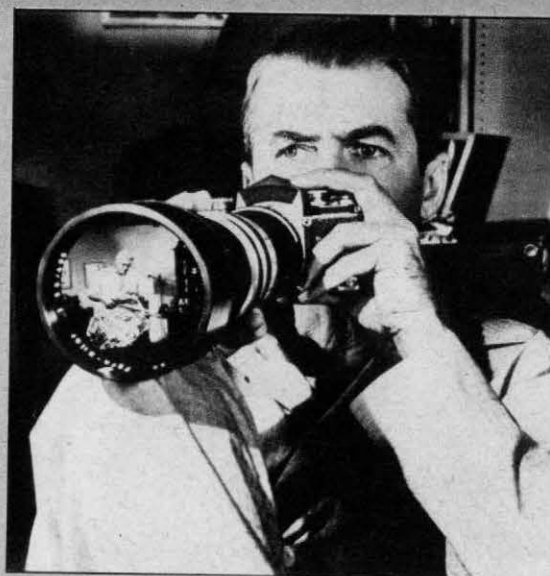
大きな白兎ハーヴェイの幻覚をみる『ハーヴェイ』(1950)



『ウィンチェスター銃'73』(1950)の主人公は銃をとりもどすためたか



大西洋横断飛行に夢を托した『翼! あれが巴里の灯だ』(1957)



ヒッチコックの名作『裏窓』(1954)

James Stewart (一九〇八)
ヘンリー・フォンダたちと演劇活動に参加後、一九三五年映画デビューし、フランク・キャプラ作品などで、ヌーボールとした、しかし誠実な持ち味が生かされ、六〇年代半ばまで主演作は多い。アカデミー賞は四〇年『フィラデルフィア物語』で受賞。最近も舞台などに活躍している。



『ファイヤーワークの決闘』(1968)では老保安官



完全犯罪をあはく『ロープ』(1948)の教授



議事堂で正義をつらぬく『スミス都へ行く』(1939)



誠実に生きたる青年『素晴らしき哉、人生!』(1946)



音楽と夫婦愛にみちた『グレン・ミラー物語』(1954)はジミーの暖い人柄をにじませた

ジュディ・ガーランド

ミッキー・ルーニー



ジュディ・ガーランドといえば『スタア誕生』(1954) 歌とドラマの両面で彼女の魅力を生かした



子役スターのマーガレット・オブライエンと麗子ジュディの『若草の頃』(1944) 監督はのちにジュディの夫となったヴィンセント・ミニリ

ジュディ・ガーランドという名のスターが誕生したのは、一九三九年『オズの魔法使』によってであった。はじめ製作者は人気絶頂だった名子役シャリー・テンブルをドロシー役に考えていたようだが、ジュディを起用することによって大成功し、彼女はアカデミー特別賞まで受けるほど話題となった。一五八センチの小柄で、美人でもなかったが、大きな瞳、チャーミングな容姿、しかもこんな歌で四〇年代の人気者となった。

一方のミッキー・ルーニーは子役として活躍していたが、一九三七年からはじまった『アンディ・ハーディ』シリーズで、ますます人気がたかめた。アメリカの典型的な地方都市の判事の息子を主人公にした青春映画である。

ジュディ・ガーランド(一九二一―一九六九) ヴォードヴィリアンの子として生まれ、三歳から初舞台、十四歳で映画デビューしたが、彼女の名をいっぺんに高めたのは、『オズの魔法使』で『オズの魔法使』の結晶五回 監督ヴィンセント・ミニリとの間に生まれたのがライザ・ミニリ。乱脈な私生活であった。



『スタア誕生』で「スワニー」を歌うジュディ



十三歳、少年スターとして売りだしのミッキー・ルーニー『紐育・ハリウッド』(一九三三)



17歳のジュディの出世作『オズの魔法使』(1939)



『イースター・パレード』(1948)のアステアとジュディ



6歳の名子役 シャーリー・テンプル 『可愛いマーカちゃん』(1934)



『久遠の誓』(1934)でクーパーと共演した
テンプル



マーガレット・オブライエン 12歳のときの『若草物語』(1949) 右から2人目



6歳のオブライエンの初主役
『迷える天使』(1943)



ジョン・フォード監督によるテンプルの『軍使』(1937)

☆二人の名子役

シャーリー・テンプルとマーガレット・オブライエン

いつの時代にも可愛らしく、達者な子役はスクリーンの人気者である。シャーリー・テンプルは一九三〇年代、マーガレット・オブライエンは四〇年代に、およそ十年の差をもつて、おとな顔負けの人気を得た名子役であるが、そのあどけなき、チャーミングさ、小憎らしさは、一枚看板の大スター並みであった。(H)

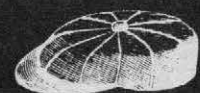


ルーニー／ジュディのコンビで30年代後半から40年代にかけて人気を呼んだ“アンディ・ハーディ”シリーズ。その1本『二人の青春』(1941)



“アンディ・ハーディ”シリーズの1つ『ブロードウェイ』(1941)

Mickey Rooney (一九二〇年)
芸人の子として生まれ、二歳から
舞台に立ち、七歳から短編映画に
出演。十四歳でMGMと契約し、
少年スターとして『少年の町』や
『アンディ・ハーディ』シリーズで
人気を得る。同シリーズでは、三
八年アカデミー特別賞受賞。戦後
は特異な脇役として活躍している。
結婚歴五回。



『青春一座』(1948)も2人のコンビ作

エロール・フリン



フリンの魅力はやはり剣戟 『バラントレイ卿』(1953)

Errol Flynn (一九〇九-一九五九)
若いころから冒険好きで探検隊に参加。このときの記録映画がきっかけで映画界入り。三五年『海賊ブラッド』が大ヒット。軽快にしてハンサムな剣戟スターとして四〇年代後半まで人気の座に。晩年は不遇で、五七年『陽はまた昇る』の助演が好評だったが、華やかさがよみがえらぬまま世を去った。

ハリウッドのドン・ファン——それは、エロール・フリンだ。美男の剣戟スターとして、『海賊ブラッド』『ロビン・フッドの冒険』『シー・ホーク』など、ハリウッド黄金期の海賊映画や剣戟映画の永遠のヒーローとなったエロール・フリンだが、銀幕の中で美女を口説くこと、私生活においても無類のプレイボーイであり、色事師であった。そんな公私相乱れる華麗な伝説的イメージの結晶が、『ドン・ファン』の冒険。て、剣戟にして色豪のエン



『壮烈第七騎兵隊』(1941)のカスター將軍



西部劇スタイルも持った『サン・アントニオ』(1945)

ロール・フリンのひとつの頂点を行く作品となった。
ボクシングとジャングルの探検で鍛えた彼の肉体は、スピーディーで優雅でしかも耐久力があり、事実、その身軽さとユーモアは、ダグラス・フェアバンクス(特にその『ロビン・フッド』のイメージ)の後継者と評された。ハリウッドの活劇スターに必要な欠けからざる底抜けに明るい楽天的なムードを生来もち合わせていたことが、色事師エロール・フリンを単なる「やけ男」の退廃的なイメージから救っていたともいえる。
『海賊ブラッド』『進め竜騎兵』『ロビン・フッドの冒険』『無法者の群』『カンサス騎兵隊』『壮烈第七騎兵隊』など……清潔感あふれる美女オリヴィア・デ・ハヴィランドがいつもパートナーであったことも、エロール・フリンにさわやかな活劇スターのイメージを与えるのに役立ったのではないかと思われる。(Y)



海洋活劇『シー・ホーク』(1940)



『印度の放浪児』はキップリング原作のキム物語(一九四九)



みずみずしい剣俠『ロビン・フッドの冒険』(1938)でデ・ハヴィランドと



インディアンの矢をうける『勇魂永遠に』(1949)の1場面



フリン剣戟場面のきわめつけ『ドン・ファンの冒険』(1948)



『円卓の騎士』(1952)のロバート・テイラーは戦前戦後を通しての二枚目の代表 相手役はエヴァ・ガードナー

ハリウッドの黄金時代——夢の工場——から送りだされた美男美女たちが、戦雲たちこめる暗い世相をしばし忘れさせ、人々に夢を与えた。スターの条件が、美男美女だったこの時代の華麗な花々の、匂うがごとき豪華ケンランさ。なかには今は亡きなつかしのスターもいる。しばし、追憶にひたり、若き日の彼と彼女にため息をどうぞ……(S)



『勝鬃』(1937)のタイロン・パワー 端正な美青年スターとして売りだすきっかけとなった 相手役はマデリン・キャロル



『ミニヴァー夫人』(1942)のグリア・ガースン(左)とテレサ・ライト ともに戦後の日本で人気があった



『椿姫』(1936)でガルボと共演のロバート・テイラー 美男美女映画の極めつき



『三人姉妹』(1942)のバーバラ・スタンウィック(右) 悪女役では定評ある妖麗の美女



クロード・ドット・コルベールは喜劇にうまみを見せたが これは『クレオパトラ』(1934)のあて姿



『地獄への道』(1940)のタイロン・パワー ジェシー・ジェームズを好演し西部劇にも意欲を見せた 共演ナンシー・ケリー



『嘆きの白薔薇』(1941)のロレッタ・ヤング 清潔な娘役で人気を集めた白薔薇のような人

ヴィヴィアン・リー



『風と共に去りぬ』(1939)のスカレットは永遠に……

「神様、私は人を殺しても生きて見せます」と、南北戦争の戦乱のなかを雄々しく生きぬいたスカレット・オハラ。愛するレット・バトラーを失い、「明日は明日の風が吹く……」と、暮れなずむ南部の夕陽を浴びてスクリーンに消えて行った「風と共に去りぬ」のスカレット——ヴィヴィアンこそ、スカレット・オハラを演じるために生まれてきた人。ノーブルな美しさと、誇り高い女の激しいパッションを演じて、グレッタ・ガルボとともに一代を築いた名女優——ヴィヴィアンは死すとも、スカレットは永遠に生きる。

作品の数こそ少ないが、ヴィヴィアンは緻密な演技でファンを心をとらえた。さしもの美しさも、寄る年波には勝てず、誇り高い女が、失われ行く美しさにいらだつ悲哀にみちた女の役を得意とするようになり、「欲望という名の電車」「ローマの哀愁」「愚か者の船」などに主演し、演技力では抜群のスターだった。夫だったローレンス・オリヴィエとの数々の名舞台で、舞台での仕事を本領としたが、もつと映画で、あの絶世の美しさをフィルムに刻んでおいてほしかった。晩年はオリヴィエと別れ、持病の結核で看とる人もなくロンドンのアパートでひっそりとなくなった。佳人の最後には、思わず涙がでる。(S)

Vivian Leigh (一九一三—一九六二) ロンドンの王立演劇学校に学んだイギリス娘。天性の美貌と演技力で舞台生活をはじめ一九三四年からイギリス映画に出演。名優として売出し中のローレンス・オリヴィエに従って渡米し、「風と共に去りぬ」の大役を射止めた。その後はアメリカとイギリスで活躍したが、神経のもろい性格だった。



世界の女性ファンの涙をあつめた『哀愁』(1940)では薄幸のバレリーナを可憐に演じた。キャンドル・クラブで「螢の光」にあわせて踊るシーンは陶醉に誘う名場面



アカデミー主演女優賞の『欲望という名の電車』(1951)も不朽の名演技



『ローマの哀愁』(1961)では若さを失った女優の哀愁をせつせつと……



幸せの絶頂だったとき、最愛の夫ローレンス・オリヴィエと……



『哀愁』でも共演するロバート・テイラーと顔あわせの『響け凱歌』(1938)



若々しい初期の『間諜』(1937)

オーソン・ウェルズ



アントン・カラスのツイッターが奏でるあの名曲 あの名場面——『第三の男』(1949)は俳優ウェルズの持ち味を生かし切った

ハリウッドの神童——オーソン・ウェルズはかつてそう呼ばれ、そしていまなおそう呼ばれるにふさわしい存在だ。全米をパニック状態におとし入れた有名なラジオ放送「火星襲来」以来、「ワンダー・ボーイ」(神童)の名で呼ばれ、ハリウッドに招かれて、わずか二十六歳で、自作自演の『市民ケーン』を撮った。

ほど、世界の若い映画人に、強烈な新鮮な刺激を与えた作品もなかった。オーソン・ウェルズが『市民ケーン』で描いた主人公、チャールズ・フォスター・ケーンは、ひとこと言えば、まことに傷つきやすい「巨人」であった。幼年期の幸福な思い出バラのつぼみ——を心に抱きつづけて崩おれてゆく巨大な怪物ケーン。それは、実生活のオーソン・ウェルズそのひとのイメージと重なり合って、ひとつの伝説になった。前衛劇の演出家、俳優、魔術師、腹話術師、詩人、小説家——この万能かつ永遠の神童の怪物性にも、やさしさというアキレスの踵がある。(Y)



『マクベス』(1948)で監督・主演 シェイクスピアものに意欲を燃やした



新聞王ハーストをモデルにし 世界を震撼させた『市民ケーン』(1941)は26歳の若者の偉業



カフカ原作の『審判』(1962)を監督も兼ねて



『ジェーン・エア』(1944)ではジョーン・フォンテインと共演



チャールトン・ヘストンと共演の『黒い罠』(1957)も監督を兼ねた



『わが命つきるとき』(1966)では怪物的な演技で枢機卿を演じた

Orson Welles(一九一五—)
舞台俳優から三八年センセーショナルなラジオ・ドラマ「火星襲来」の製作で注目を集め、四一年監督・主演した『市民ケーン』で天才とたたわれるに至る。ときに彼二十六歳。俳優としてまた監督として鬼才の名を欲しいままにし、異様な風貌、堂々たる体軀にものを言わせて欧米映画界に君臨する。



渡米第1作『別離』(1939)は妻ある音楽家(レスリー・ハワード)との忍ぶ恋のヒロイン

憐れ! 彼女は狂人の餌じきに『ジェキル博士とハイド氏』(1941)



たて! 聖ジョーン『ジャンヌ・ダーク』(一九四八) 彼女の憧れの役



『誰がために鐘は鳴る』(1943)

グレタ・ガルボが戦前を代表する北欧美人だとすれば、戦中出現した典型的北欧美人はイングリッド・バーグマンである。彼女の代表作『カサブランカ』を見るまでもなく、品性、知性、感性をそなえた聡明な女優である。バーグマンの登場によってメロドラマの甘さが格調あるものになるという例といえる。つまりバーグマンの魅力はさまざまに形をわける中、飛びこんで来たのだ。それは艶麗とか妖艶とかまたあるいは絶世の美女とかそんな形容の当てはまる女優たちとは異なつたもので、じつに楚楚とした美しさの中に輝きをみせていた。勇気とか情熱とか優しさという、精神から生ずるものに彼女の魅力があつたといえるだろう。『カサブランカ』にしろ『誰がために鐘は鳴る』、『ガス燈』あるいは『汚名』、『サラトガ本線』などにしろ役柄が変わつても必ずやハッとするような美しさをみせる一瞬があつた。スクリーンを支配する大女優たる資格である。清楚でかつ凛々しく、さらに情熱的に燃える恋多き女という真にヒロインとしてふさわしい優雅な女優として活躍したのだが、スターの持つ虚像としての価値観よりむしろ実像に近いものを感じさせる女優でもあつた。内面的な心映えの美しさから発せられる香気は、彼女の持つみずみずしい理智と感性を伴つて画面にさわやかな落ち着きとか品性を持たせていたのだ。ハリウッド女優史の中でも最高にランクされる大女優である。(一)

★ドラマティック女優 バイングブリジット・ バーグマン

Ingrid Bergman (一九一九) スウェーデンから渡米して三九年『別離』でアメリカ映画デビュー。四四年『ガス燈』でアカデミー賞を受賞し大スターの地位を確立したが、夫である身でイタリアの監督ロベルト・ロッセリーニと恋に陥つたためスキャンダルの渦中に。五六年『追想』で再度アカデミー主演賞受賞。第一線に復帰した。



パリはベル・エポックを舞台にしたロマン『恋多き女』(1956)



大人の男と女の恋のかけひきが粋だった『無分別』(1958)



悲惨な過去を秘めた女の復讐が恐ろしい『訪れ』(1964)



アカデミー助演賞を受賞した『オリент急行殺人事件』(1974)



若者のひたむきな愛に揺れる女ごころ『さよならをもう一度』(1961)



バーグマン/ロッセリニ・コンビの第1作『ストロンポリ』(1949)



2度目のオスカーを手にした『追想』(1956)で再びハリウッドへ



時のすぎゆくままの調べも悲しい男女の出会いと別れ『カサブランカ』(1942) 夫役 ポール・ヘンリードと

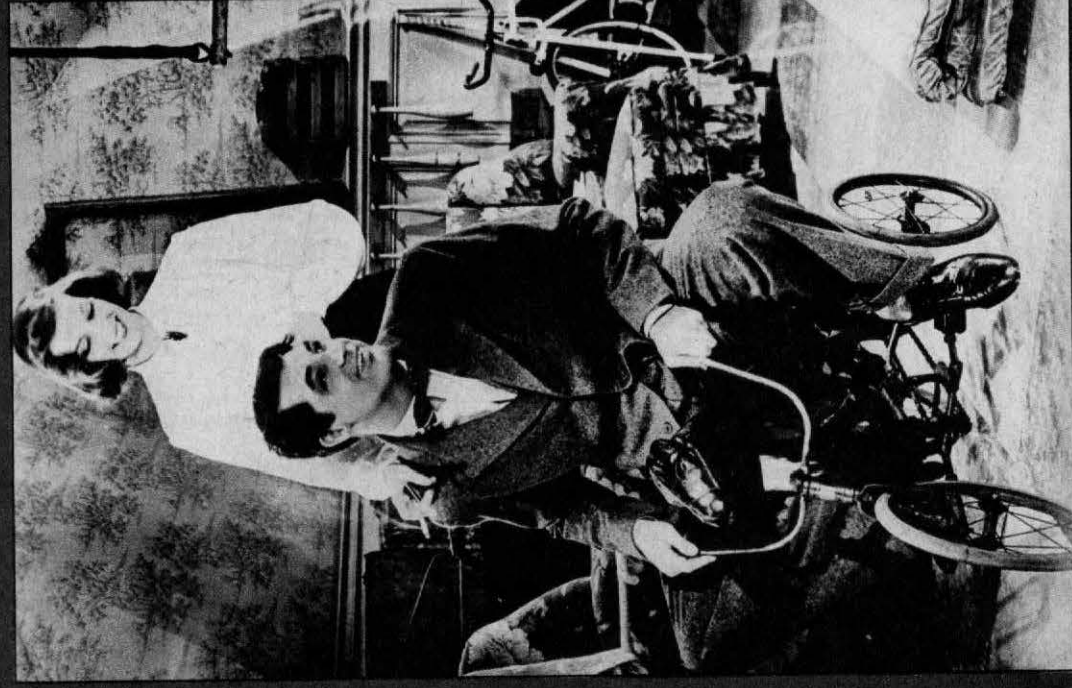


カルバドスも懐しいレマルクの原作『凱旋門』(1948)は悲恋物語 シャルル・ボワイエと

ケリー・グラント



19世紀インドを舞台にした冒険活劇『ガンガ・ディン』(1939)



ヒット芝居の映画化『素晴らしき休日』(1938)は、当時の話題作



独立戦争直後を舞台にしたコスチューム・ブレイ『明日への戦い』(1940)112

ギザなことをしても嫌味つたらしがなく、二枚目でありながら二ヤクにおらず、都会的なソフイスティケイトされたセンスを持つて西脱な味をみせてくれたスターの一人。女優殺しの二枚目は多いが、この人と共演した女優はみんな素晴らしくみえるのはどうしたところだろう。『めぐり逢い』(デボラ・カー)、『北北西に進路を取れ』(エヴァ・マリイ・ロイント)、『ジャレット』(オードリー・ヘッpbarton)、『泥棒成金』(グレース・ケリー)、『汚名』(イングリッド・バーグマン)といった具合である。女優を最も美しく見せるヒットコック監督が多用了原因もここらにあるのかも知れない。中年を過ぎてからも若い

時とほとんど変わりのない役柄が多い。というより若い時から持つていた涼味が年々いってかえって若々しさを感じさせる伊達男。ただし二枚目自然とした風貌にもかかわらず平気でハンツ一枚の姿になつたりするユーモアに少しは驚かされることもある。シリアスな作品よりもウイットに富んだ明るい作品が多いのもそのせいであろう。それではないからジャック・レモンのようにならないのは、さりけな知性とか品の良さをただよわせる風格に大スターとしての貫禄が秘められているからだ。どんな型の女優が共演してもヒツクともしないフエニスト振りを発揮するところにも、グラントの魅力が生きているのだ。(一)

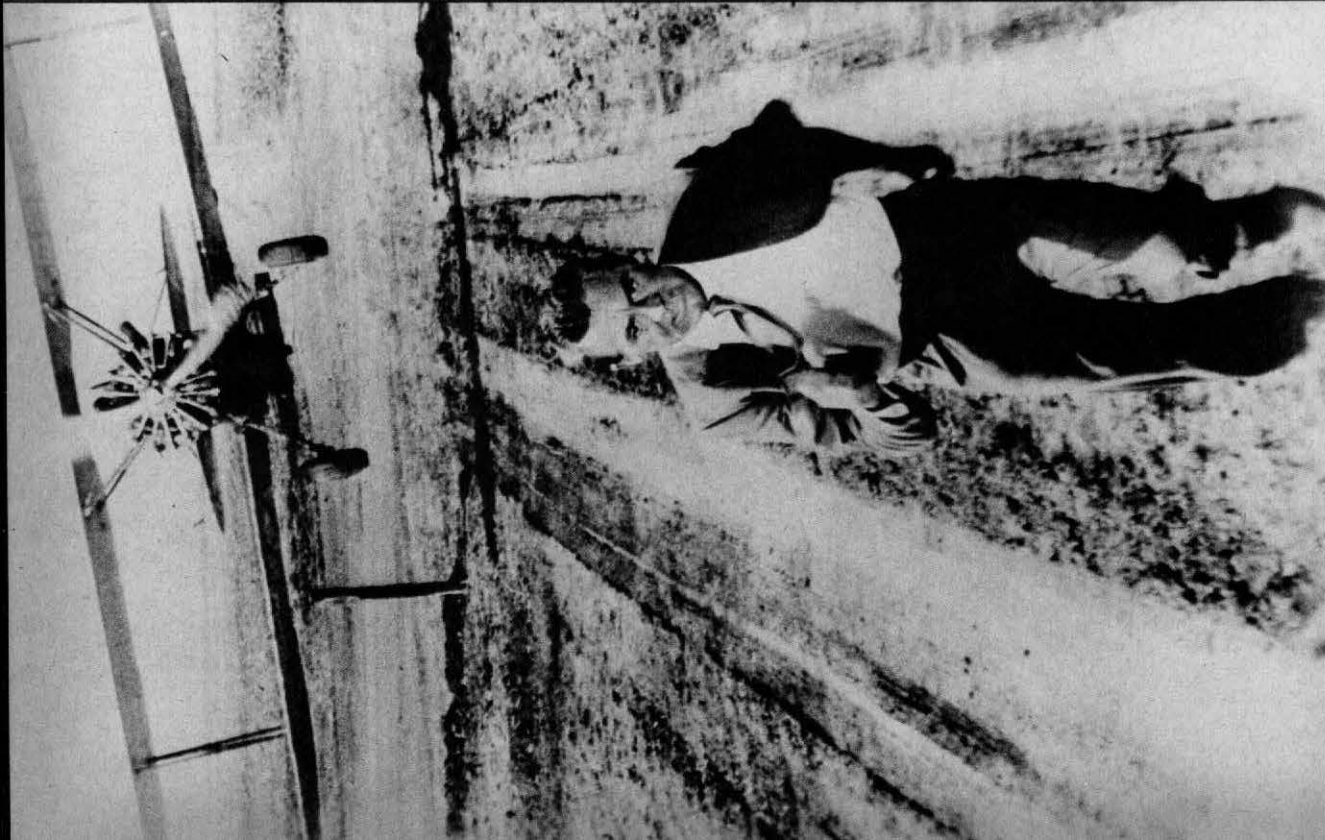


無邪気な人殺し老練に悩まされた『毒薬と令嬢』(1944)



名作曲家コル・ポーターに扮した『夜も昼も』(1946)

Cary Grant(一才〇四一) イギリスのスクロベット芸人としてアロッドウェイの舞台に進出。映画界入りは三年『その夜』(日本未公開) 軽妙な二枚目半として売り出したのち、次第に洗練された涼しい二枚目に移行。ヒットコック映画の典型的な主人公であり、そのソフイスティケイトッドな魅力で女性ファンを魅了した。



突然事件に巻き込まれる男 ヒツチコックの『北北西に進路を取れ』(1959)



元泥棒がヌレギヌを晴らすヒツチコック・サスペンス『泥棒成金』(1955) グレース・ケリーと

エヴァ・ガードナー リタ・ヘイワース

はなやかに五〇年代を彩った二人の女優。セクシーな肢体で、ファンを狂気させた艶やかな大物。色っぽさのなかに気品をのぞかせたエヴァ・ガードナーと、姐御肌の性格も見せたリタ・ヘイワース。ともに結婚・離婚のベテランだが、情熱のままに生き、そこに打算の見えないところが好ましい。思えば大物の時代だった。(一)



インド独立の動乱を描く『ボワニー分岐点』(一九五六)での混血の美女 この程度の露出でも当時は大ショック



きわめつけ『裸足の伯爵夫人』(一九五四) とりわけ圧巻、裸足のポレロ。



アフリカへ流れて来たジョー・ガール役の『モガンボ』(一九五三年)



人気絶頂 五〇年代半ばのエヴァ・ガードナー 三十?歳

Ava Gardner (一九二二) モデル出身で、一九四二年に映画デビューし、四〇年代半ばから妖婦的グラマーとして売り出す。ミッキー・ルーニー、フランク・シナトラなど、離婚歴三度。
Rita Hayworth (一九一八) ダンサー出身で、一九三五年から映画出演しているが、四〇年代半ばから強烈なセックス・アピールで人気を得る。インドの王子アリ・カーンはじめ、五度の離婚歴でも有名。



世界的なプレイボーイ アリ・カーンと離婚後 変わらぬ妖艶さを見せた1953年のリタ・ヘイワース『雨に濡れた欲情』(上)はモームの小説『雨』の映画化 (下)は まさにはまり役『情炎の女サロメ』

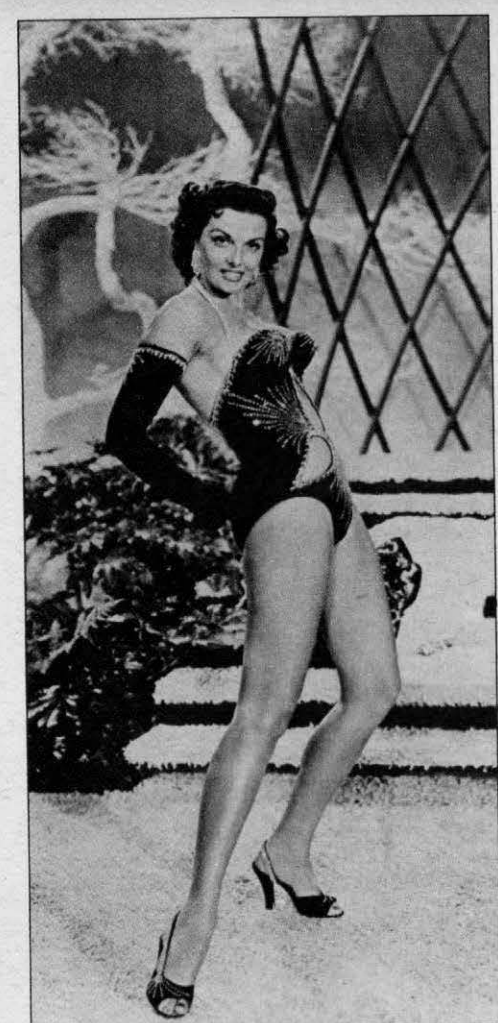


ピンナップ・ガール

紳士は
グラマー
がお好き



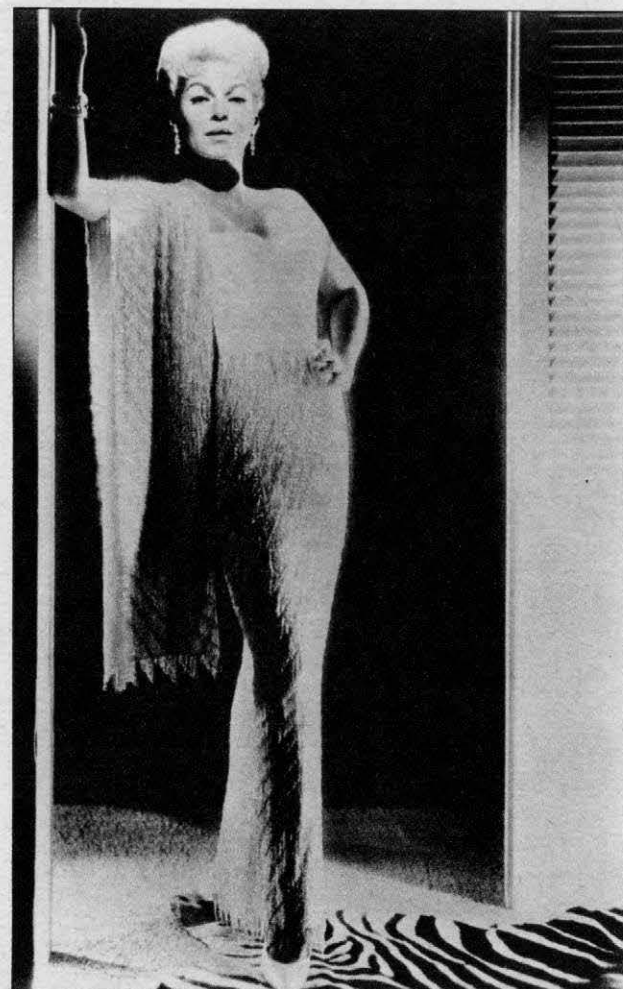
胸の大胆な露出(?)で検閲問題を起こした『ならず者』(1943)の
ジェーン・ラッセル (デビュー作)



ジェーン・ラッセルは歌と踊りにも才能を見せた
『紳士は金髪がお好き』(1953)



演技よりも まず肉体ありき ジェーン・マンスフィールド



結婚・離婚・スキャンダルの女王でもあったラナ・ターナー



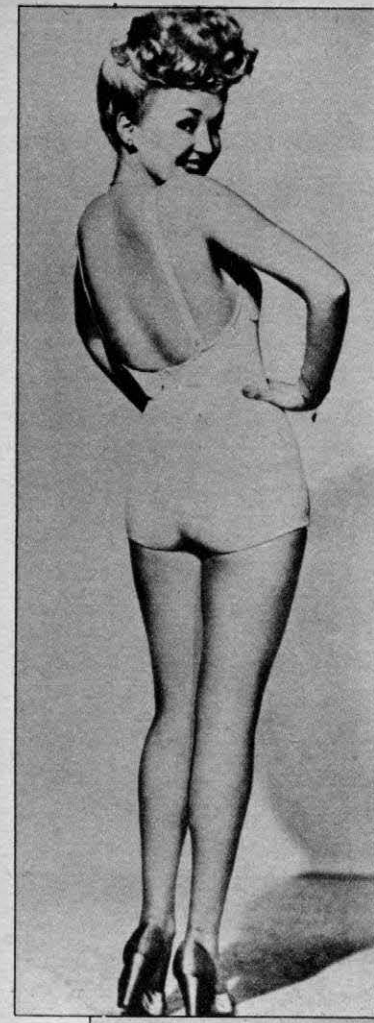
チャップリン3人目の妻となったポーレット・ゴダード



フォード映画にバラー輪 赤毛美人のモーリン・オハラ

前線の兵士たちにとって、グラマー女優の写
真は貴重な財産、そして大きな楽しみでも
あった。それは同時に、その時代の、女優の
人気のバロメーターでもある。ここに集めた
写真は、第二次大戦と、その前後のスターた
ち。必ずしもピンナップ・ガールばかりでは
ないが、ひとつの時代を象徴するスターたち
である。(K)

ピンナップ・ガールの第一号 脚線美のミュージカル女優ベティ・グレイブル



終戦直後の映画ファンを熱狂させたヴァージニア・メイヨ

★西部のデューク★ ジョン・ウェイン



『拳銃の町』(1944)

ジョン・ウェインの名を高めたのが、ジョン・フォード監督の『駅馬車』におけるリンゴ・キッドの役であつたのはいうまでもないことだが、それまでの彼はB級西部劇の俳優でしかなかった。今やよき時代のハリウッドの香りを残しながら活躍しているスターは彼くらいのものであろう。近ごろはハードボイルドものなどにも出演しているが、面白いことに拳銃さばきにも出ているスタイルが、なが年の習癖から西部劇スタイルそのままだといふことだ。

にしたがってジョン・ウェインの世界は出来あがる。無骨で口下手で曲がったことは大嫌いだという男のイメージ。理屈で説得なんてとんでもない、いつも腕ずくで説得してしまふ荒っぽさ、女なんて尻をひっぱればなんともなるさ、てな調子の西部男を四〇年も続けているのだから彼のファンにまでそれがしみついてしまふわけだ。ジョン・フォード、ハワード・ホークスという男つきの強い監督にその魅力を生かされた時は存分の働きをみせるが、ちよつと間違えると単なるデクの棒になりさがらるあたりにジョン・ウェインらしさがあつた。自分で製作・監督・出演をした『アラモ』がその典型であることをみればジョン・ウェインの本領がなんたるかはおのずと知れてくるのだ。(一)



『ビッグ・トレイル』(一九三〇) 当時二十三歳



これは珍しいジョン・フォードの海洋劇『果てなき船路』(1940)



おなじみ『駅馬車』(1939)のリンゴ・キッド ジョン・ウェイン時代の始まりでもあった



酒場の歌姫ディートリッヒと恋を語った『妖花』(1940)



当時の新鋭モンゴメリー・クリフトと共演『赤い河』(1948)



恩師フォード監修 ジョン・ウェイン製作・監督・主演の『アラモ』(1960) テキサス独立の最初の戦いアラモ砦に向かうデイヴィ・クロケット



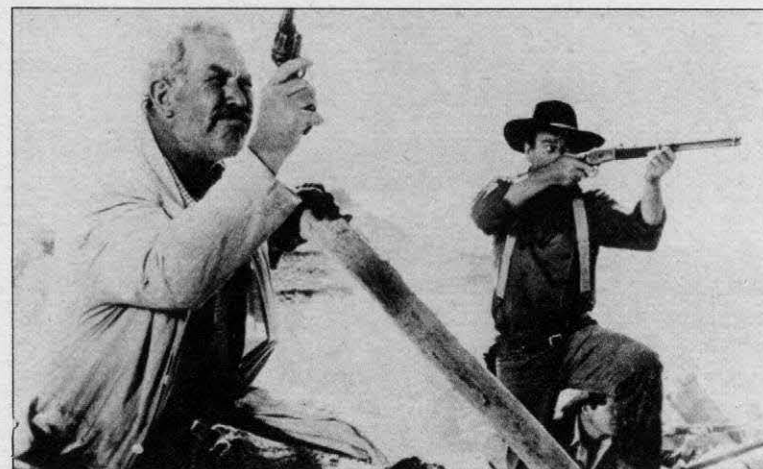
退役まじかの守備隊の大尉ジョン・ウェイン インディアンを相手に最後の戦いを挑む もう若くはない男『黄色いリボン』(1949) は傑作だった



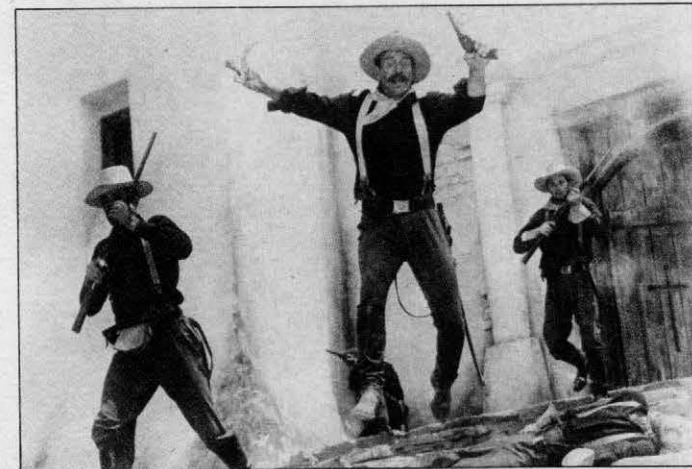
ダイナミックな野獣狩り『ハタリ!』(1961)



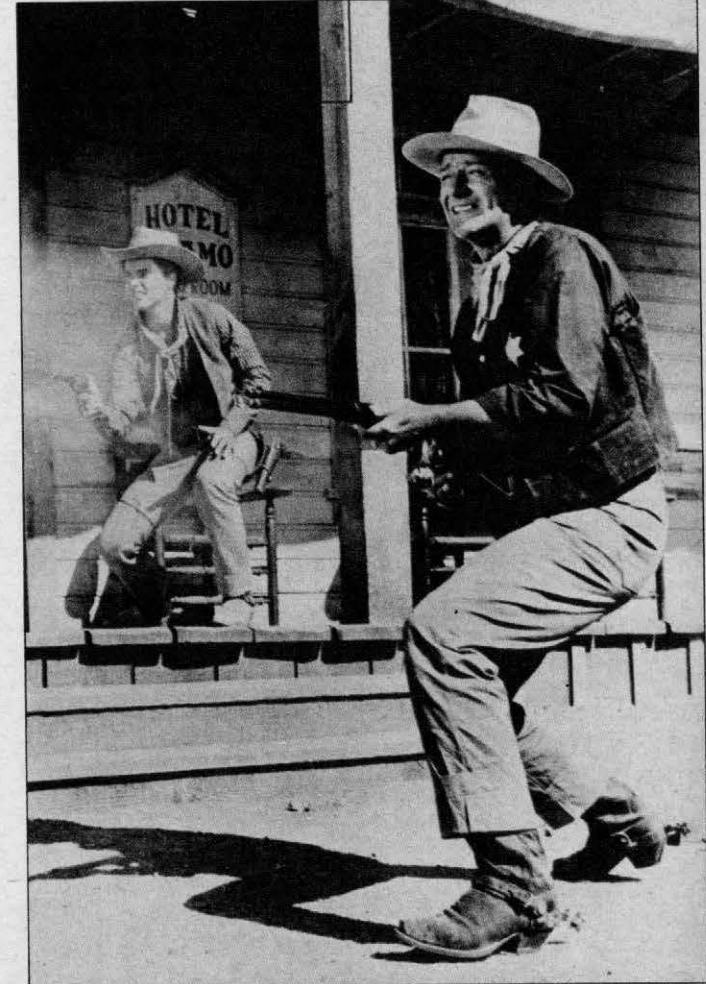
John Wayne(一九〇七)はア
ルバイトに撮影所の小道具係をや
ったのが縁で、ジョン・フォード監
督と親交をもち、一九二八年エキ
ストラとして映画入り。B級西部
劇からフォード映画の主人公とし
て個性を輝かす。デューク(公爵
爵)の愛称は、はじめは愛犬の名
であった。タカ派としても有名。



コマンチ族に妻を殺され娘2人を誘拐された男の激しい憎悪『搜索者』(1956)



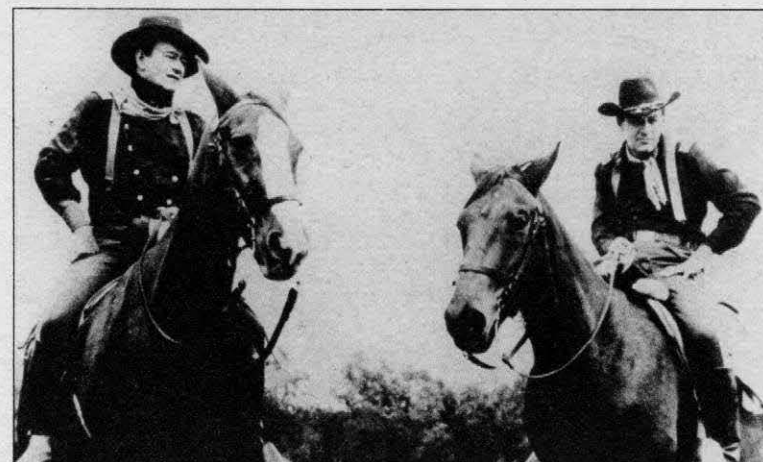
闘う騎兵隊将校の老境を描く『リオ・グランデの砦』(1950)



豪快ハワード・ホークスの男の世界『リオ・ブラボー』(1959)



大酒飲み保安官でアカデミー賞『勇気ある追跡』(1969)



北軍の大佐になる南北戦争劇『騎兵隊』(1959) ウィリアム・ホールデン共演



アイルランド人気質を暖くユーモラスに『静かなる男』(1952)

グレゴリー・ペック



モービー・ディックを捕えることに命をかける『白鯨』(1956)の船長

Gregory Peck (一九一六)
ブロードウェイの舞台に立ったのち、一九四四年映画デビュー。ハンサムなスターとしてたちまち人気を得た。素顔はおだやかなジェントルマンだが、映画の中では意志の強く謹直な性格をつらぬいている。リンカーン大統領をどうしても演じてみたい。そうして、リンカーンの関係者千冊を所蔵している。



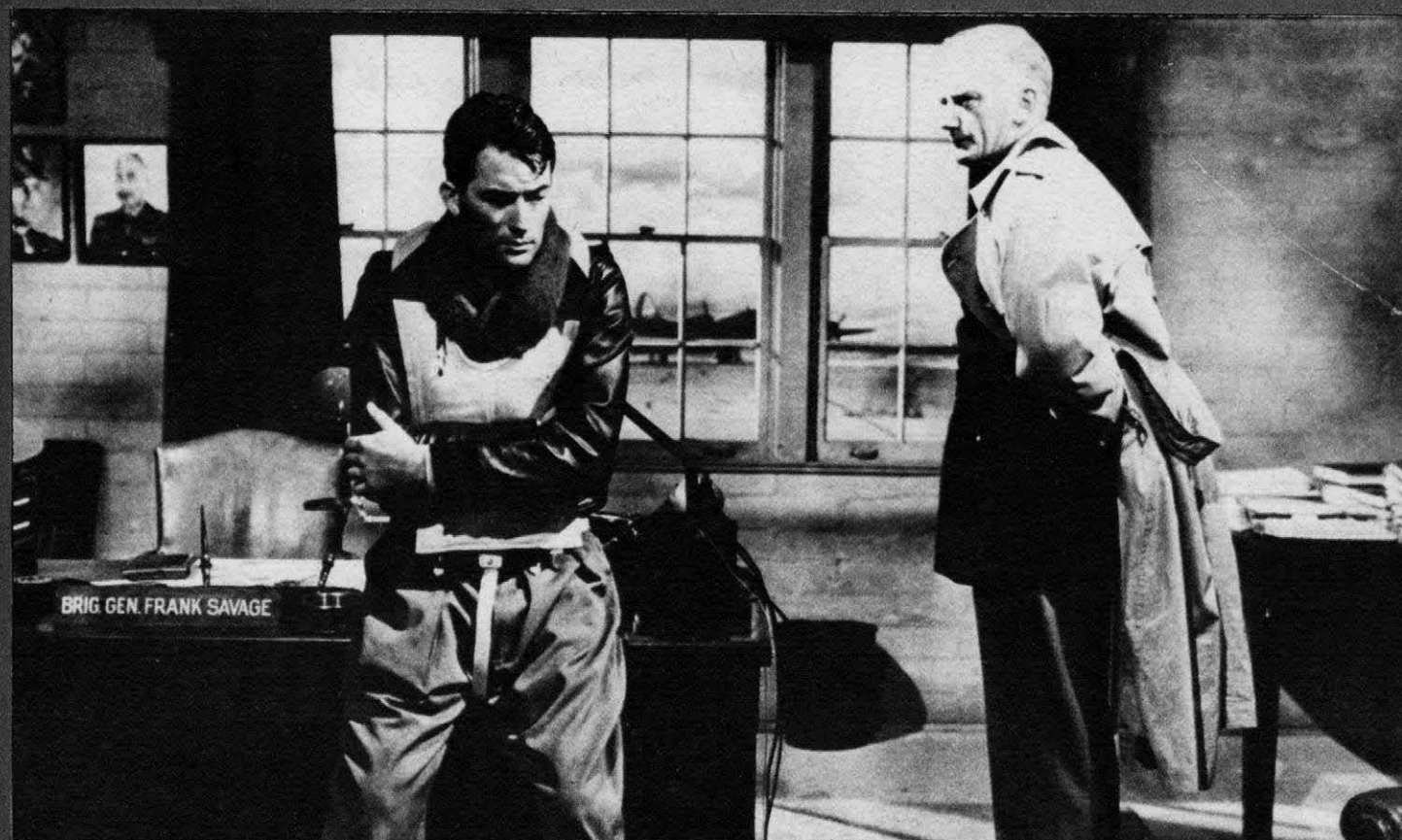
デビュー2作目 スターの地位を約束された『王国の鍵』(1945)



ヒッチコック・スリラー『白い恐怖』(1945)

大根役者といえは相場が決まっている。この人の大根振りには有名である。だが、なにもてきない大根ではなく、なにもなくないという奇妙な味を見せてくれるのも、この人ならではのところだろう。こうなると大根も一流である。謹厳実直、石部金吉を演じたら、この人の右に出る者はいないほど大真面目な人柄がスクリーンに反映して、頼もしいような、こそばゆいような気持ちにさせてくれる。ながいあいだスター稼業をしていて、この人くらい気のきいたセリフを何ひとつ吐いたことのない人も珍しい。つまりシナリオにそれがあってもこの人が口に出すと全く別な形に変わってしまうほどの力量(?)を備えているわけだ。だからといって嫌な気分にはさせるス

ターではない。むしろ好感を抱かせるすがすがしさがあつて、実に気持ちがよいのだ。人柄をしるのには温かい雰囲気、政治的な取引を感じさせない清潔な感じ、これもまた人格ある大根のゆえんであろう。そのかわり頑固ぶりも相当なもので、これぞと思つたら絶対に曲げない信念の持ち主。こんなキャラクタも、はまり役である。『アラバマ物語』『日曜日には嵐を殺せ』『白鯨』『レッドムーン』などで、その一徹振りを発揮している。ワイラー監督の『大いなる西部』のいいところはベックが東部男だという点にあつたはずだ。西部劇の中に朴訥さを持ち込んで成功したのである。このような大型大根役者は、そうザラに出るものではないだろう。(一)



空戦映画の傑作『頭上の敵機』(1949) 指揮官ベックは隊員に猛訓練をほどこし 対独空戦に向かう



どう猛なチャック・コナーズとの格闘もなつかしい『大いなる西部』(1958)



エヴァ・ガードナー共演『キリマンジャロの雪』(1952)



独軍の基地爆破に向かう『ナバロンの要塞』(1961)の勇士たち



オードリー・ヘプバーンと『ローマの休日』(1953)



『白昼の決闘』(1948)では珍しく不良っぽい次男坊に扮し 混血の美女ジェニファー・ジョーンズを争う

ボブ・ホープ&ビング・クロスビー



シリーズ第2作『アフリカ珍道中』(1941) ドロシー・ラムーアと3人 人食人種に食われそうになったり ゴリラと闘ったり

ビング・クロスビー——歌手生活五十年、いまだ現役である。四二年の『スイング・ホテル』で歌ったアーヴィング・バーリンの「ホワイト・クリスマス」は各国で親しまれているが、ハリウッド喜劇界を代表するボブ・ホープとのコンビで始められた。珍道中ものは、当時の映画ファンにとって忘れることのできない傑作シリーズであった。

ハメを外すことにかけては天下第一のボブ・ホープに對抗しての熱演がうまくかみ合っており、とても面白い喜劇になってしまったのだが、そこで生まれたギャグの傑作は数えきれないほど多く、スクリーンから飛び出してくる勢いを帯びたボンボンとはね回っていたものだ。オツにすましたクロスビーとその顔を見ているだけで笑いを誘うホープの奇妙な顔合わせであったが、シリーズにみるそれは実にスマートなもので、それまでのドタバタ喜劇から脱皮した新しい喜劇性を打ち出していた。このシリーズの成功からディーン・マーティン、ジェリー・ルイスの底抜けコンビ、シリーズが誕生したとみてもさしつかえなからう。とにかくクロスビー、ホープ両者の八方破れの熱演は、一つのニュー・シネマであったかも知れないのだ。それほど新鮮であり、また大きな感化を受けたことも事実である。とにかくエンド・マークが出てから、まだやり合っているなどという映画をそのとき初めて知った驚きは大きなものだった。(一)

Brig Crosby (一九〇一) 一九二一年以来、美声の歌手として活躍し、三〇年代から四〇年代にかけて歌手のみならず、映画スターとしても人気のトップに立った。ホープとの『珍道中』シリーズの他に、持ち味を生かした『我が道を往く』ではオスカー受賞。

Bob Hope (一九〇一) 一九三三年から喜劇の舞台に立っているが、下積み時代は長かった。『珍道中』で大ヒットを飛ばし、四〇年代にクロスビーと並ぶ人気者となる。単独の『腰抜け二挺拳銃』などもおかし。アカデミー賞の司会を何度もつとめ、人望家でもある。



第6作『バリ島珍道中』(1952) 女王ラムーア



第3作『モロッコへの道』(1942) 密入国の2人が 宮殿の姫君をめぐる大騒動



ジェーン・ラッセルと『傑作腰抜け二挺拳銃』(1948)



ヴォードヴィルのスターの伝記『エディ・フォイ物語』(1955)のホープ キャグニーとの踊り



歌もたっぷり『ピンクの皇帝円舞曲』(1948)



ニューヨーク下町 オンボロ教会の牧師クロスビー アカデミー主演賞の『我が道を往く』(1944)

ザッツ・エンターティナー

世界 芸人の



『バンド・ワゴン』(1953)のシド・チャリシーとフレッド・アステア



『アニーよ銃をとれ』(1950)のベティ・ハットンとハワード・キール



『くたばれ! ヤンキース』(1958)のジェーン・ヴァードンとタブ・ハンター



『百万弗の人魚』(1952)のエスター・ウィリアムズ



24時間の休暇をもらった3人の水兵がニューヨーク見物 『踊る大紐育』(1949)博物館のシーン



作曲家シグムンド・ロンバグの伝記『わが心に君深く』(1954) ゲスト出演ケリーの名舞台の再現



“ハイ・リリー・ハイ・ロー”でおなじみ レスリー・キャロンの『リリー』(1953) 共演メル・ファーラー

歌の専門家、踊りの専門家、そして演技の専門家。でも本当のエンターティナーは、この三つを、すべてこなす。そう、本当の芸人さんたち。フレッド・アステア、ジーン・ケリー、フランク・シナトラ、レスリー・キャロン、まだまだいる。ダニー・ケイにドリッス・デュー…… かつてスクリーンは、そんな芸人さんたちの宝庫だった。映画とは、まぎれもなく、芸能の一分野でもあることを、もういちど考えてみたい。(K)



ジーン・ケリーの『雨に唄えば』(1952) メイン・テーマを歌い踊るハイライト



フランク・シナトラとジーン・ケリーの『猫を上げて』(1945)



『巴里のアメリカ人』(1951)のケリー 幻想のバレエ



シナトラが下町育ちの青年になる『下町天国』(1947)



『上流社会』(1956)のフランク・シナトラとビング・クロスビー



ドリス・デイがソフィストケイトなコメディで大あたり これはケーリー・グラントと見せた『ミンクの手ざわり』(1962)



『二人でお茶を』(1950)はD・デイとコードン・マクレー



ウェスタン・ミュージカル『カラミティ・ジェーン』(1953)のドリス・デイ



アボット／コストロ凸凹コンビの日本初登場だった『凸凹お化け騒動』(1941)



ダニー・ケイ日本初登場の『虹を掴む男』(1947) 夢の中でのみ英雄になる気の弱い男 彼のあこがれはヴァージニア・メイヨ 右はボリス・カーロフ



マーティン／ルイス 底抜けコンビ日本初登場の『底抜け艦隊』(1952)



『あの手この手』(1954)では腹話術師のダニー・ケイ

ウィリアム・ホールデン



戦後第一線に立つ前の西部劇『荒原の女』(1948) 共演ロレッタ・ヤング



『サンセット大通り』につぐビリー・ワイルダー作品『第十七捕虜収容所』(1953) 演技派への確実な歩みをみせた



ジェニファー・ジョーンズと香港を舞台に『慕情』(1955) これで人気は最高潮



キム・ノヴァクと『ピクニック』(1955)

なんの変哲もない柔和な顔でありながら、みごと二枚目が続いてきたスターである。しかしその役柄たるや実に幅広く、なんでもこなすという器用さを持ち合わせた優等生でもある。例えば『サンセット大通り』とか『第十七捕虜収容所』の如きビリー・ワイルダー監督に目をかけられるアカ抜けた雰囲気を持つている。それは『月蒼くして』や『ピクニック』にも存分に生かされて都会的イメージを作りあげてはいるけれど、女性の紅涙をしほった『慕情』『クリスマス・ツリー』とかシリウス・ドラマ『喝采』、あるいは『トコリの橋』『ロケット』

ト・パイロット』戦場にかける橋』などの軍人、『ブラボー』の脱出、『騎兵隊』、『ワイルドバンチ』にみる西部劇など、いずれもホールデンの持ち味を生かしたものである。特に『ピクニック』とか『麗しのサブリナ』、『月蒼くして』、『第十七捕虜収容所』はホールデンなくしては語れぬほどのしゃれたソフット・タッチの感覚を発揮した作品であった。どちらかというと調子の良さそうな軽さを持ちながら、内に秘めた知性が三枚目になることをはばんでいるというあたりにホールデンの個性があるだろう。大体において陽性の作品になるので、最も日本人好みのスターだといえるだろう。適度な明るさに加えて嫌みがないインテリジェンス、キザにならない都会性と、すべての条件においてサラリとした肌ざわりであるが、そこがまたホールデンの存在価値を高める決め手にもなっている。(一)

William Holden (一九一八)
舞台の端役からタレント・スカウトの目にとまり、一九三九年『ゴードン・ボーイ』でデビュー。喜劇、戦争もの、西部劇、恋愛もの、サスペンス、なんでもこなす好漢で、五〇年代に人気のピークをつかった。近年は老け役で活躍している。ハリウッドの稼ぎ頭で、事業家の才腕もある。



デイヴィッド・リーンの『戦場にかける橋』(1957) では 脱走成功のアメリカ人捕虜に



戦争アクション『コマンド戦略』(1967) では 特殊レンジャー部隊員に



涙の父性愛『クリスマス・ツリー』(1969)



サム・ペキンパーのヴァイオレンス『ワイルドバンチ』(1969) で初老のガンマン

マーロン・ブランド



ジーンズに皮ジャン 集団でオートバイを走らせる50年代の反抗児『乱暴者』(1954)

Marlon Brando (一九二四) 舞台の有望な若手の評判を背負って映画界入り。五四年『波止場』でアカデミー主演賞を受賞して人気は頂点に達した。強烈なセックス・アピールと、反逆のイメージで五〇年代ハリウッドに君臨したが、六〇年代に入ってから不調となり、七一年『ゴッドファーザー』の圧倒的な名演で驚異の復活を果たす。



メキシコの若き騎士の栄光と挫折『革命児サバタ』(1952)



舞台から映画へ 大出世『欲望という名の電車』(1951)



『ジュリアス・シーザー』(1953) ではアントニーに

●皮ジャンとブランド
皮のジャンパーは、映画草創期から下町のア
ンちゃんご愛用の衣装として登場して来るが、
とても印象的に着こなされていたのは、『乱暴
者』のマーロン・ブランドによってである。
まだ、『ゴッドファーザー』の日が来るのも知
らず、アクターズ・ステュディオが生んだ天
才として世に出たばかりのブランドは、しな
やかな肢体を皮のジャンパーに包み、むせか
えるセックス・アッピールを振りまいたのだ

った。
それにしても、ブランドにはなんて皮が似合
うのだろう。精悍なからだにキリッと締まっ
たハンサム(のときもあったノダ)な顔に支
配された皮のジャンパーは、草原を駆けめぐ
るもののときめきを放ち、生命をよみがえ
らせる。ブランドが着たジャンパーは、彼の
体臭と一体となって、ここに生命あるものと
して精彩を放つのである。(W)



不正に対しひとり立つ アカデミー主演賞の『波止場』(1954) 左はエヴァ・マリー・セイント
初めての監督・主演作品『片目のジャック』(1960) 旧友の裏切りで報復する西部劇だった



マフィアのボス『ゴッドファーザー』(1971)



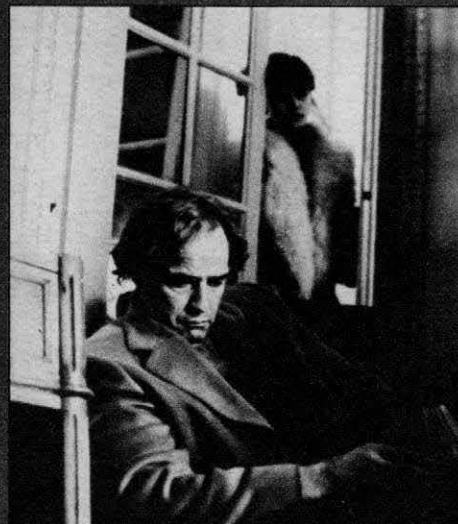
初めて歌った『野郎どもと女たち』(1955)



沖縄ロケで『八月十五夜の茶屋』(1956)

戦後のハリウッドで最も個性的なスターはマ
ーロン・ブランドと、マーロン・ブランドに
つきるであろう。ともに役柄が一貫してい
たことも、その個性が、いかに強烈であつ
たかがわかる。ねちっこいふてぶてしさにな
つたら、ブランドは天下一品。彼の出世作、
『欲望という名の電車』の鮮烈な印象は近作
の『ミスリ・ブレイク』に至るまで続いてい
る。一つの型に於いて、作品による歴史を見
てみると、初期の作品『乱暴者』でワイルド
・エンジェルという暴走族を演じ、チンピラ集
団のボスであったブランドは、やがて『ゴッ
ドファーザー』という全米を支配するマフィ
アのドンを演ずるに至っているのに気づくの
だが、役柄上とはいえない一つの線を持続して、

あたかもその世界でのキャリア十分と思わせ
るだけの力量とイメージを創り上げている。
こういうスターは西部劇ならいざ知らず現代
ものでは実に珍しい存在であるはずだ。
ブランドが演じてきた役柄や性格づけは意固
地なまでに頑強な精神力とか、ねばつこさが
身についているが、私生活でも、そんな感じが
たびたみられるので、多分、彼の地そのもの
とみていいだろう。アカデミー主演男優賞を
拒否したあたりには一筋縄ではいかない個性
がみられる。若い時から存在そのものがとて
も大きくみえたが、最近では、ますます風格が
にじみ出て無気味な感じというか、凄味を加
えてきた。その健在ぶりは、やはりハリウッ
ドを支えている大物のひとりだ。(一)



性描写で話題騒然の『ラスト
タンゴ・イン・パリ』(1972)

モンゴメリー・クリフト



モンティの人気急上昇した『女相続人』(1949)



ハワード・ホークス監督『赤い河』(1948)でデビュー



リス・テイラーとアメリカ青年の野心を描く『陽のあたる場所』(1951)

マールロン・ブランドとは対照的に繊細な、そして陰を持った虚弱的なイメージで、戦後の映画ファン、特に女性ファンに圧倒的な人気を持つていた二枚目である。エリザベス・テイラーの最高の美しさを発揮した『陽のあたる場所』の相手役として、これ以上はないと思われる演技をふくめたキャラクターであったことはファンなら当然わかっていただろう。この作品にみるテイラー、クリフトの呼吸の見事さは、やがて現実面でも二人の恋愛関係が噂されたほどであったから、おして知るべきだ。デビュー作がハワード・ホークス監督の西部劇『赤い河』で、これはジョン・ウエインとの共演。この時だけ攻撃的な強い性格を演じていたが、それ以後の作品はたいてい屈折した陰影にとんだ、一種の性格俳優的存在であった。



『地上より永遠に』(一九五三)でドナ・リードと

在でもあった。だがその甘いマスクから発散する色気は従来の二枚目が持っていたセクシーなものとは異なっており、少年のとき未成熟な部分から発散する魅力を感じさせる。『地上より永遠に』で見た意地っ張りな性格はそれだけに実に印象的であった。前記の作品とヒッチコックの『私は告白する』、『ティンカー・エドワーズ』などが代表作になるが、四十六歳で死去。五〇年代の活躍は圧倒的なものを持っていたが、六〇年代に入ってから自動車事故などによる障害のためハッとせず、単に内向的な面だけをのぞかせていた。そういった点でもマールロン・ブランドとは実に好一対の存在であった。(一)

Montgomery Clift(一九二〇ー六六)

ブロードウェイの名子役から四八年『赤い河』でハリウッド入り。鋭い感受性と、端正な二枚目ぶりで五〇年代を代表するスターになった。時に偏狭とすら見える強い個性が災してトラブルも多く、また、自動車事故による顔面負傷など、恵まれぬ晩年を過ごす生涯独身を貫いている。



『若き獅子たち』(1957)ではナチと戦う最前線のアメリカ兵に



リス・テイラーとロマンスの噂も高かった『愛情の花咲く樹』(1957)



ヒッチコックに請われてスリラー『私は告白する』(1953)でカソリックの神父に扮した 共演アン・バクスター



デネシー・ウィリアムズの『去年の夏突然に』(1959)

バート・ランカスター



獄中の鳥類学者 実話の映画化『終身犯』(1961)



粗野な魅力で海賊船の船長『真紅の盗賊』(1952)



『真昼の暴動』(1947)では集団脱獄のリーダーに

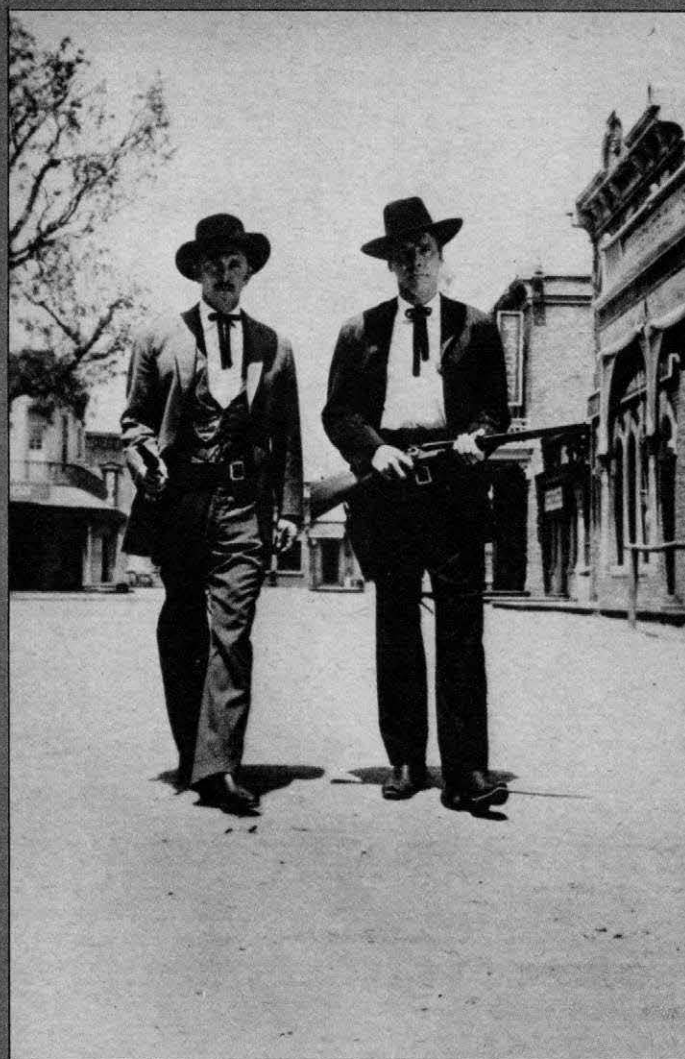
Burt Lancaster (一九二一—)
四六年『殺人者』でデビューしたとき、すでに三二歳。スタートの遅れを、スター・プロの走りであつたヘクト・ヒル・ランカスター・プロの成功でカバー。六〇年『エルマー・ガントリー』でアカデミー主演賞受賞。六三年『グリスコンディ』の『山猫』に出演するなど、幅の広い柔軟な姿勢が見事。



シャーリー・ブースと ウィリアム・インジの名戯曲『愛しのシバよ帰れ』(1952) アクション派ランカスターとしては異色作だ



ルーヴルの名画を守れ! 鉄道員たちの総決起『大列車作戦』(1964)



さっそうワイアット・アープ 『O K牧場の決闘』(1957)

ハリウッドを代表する硬派である。つまり二枚目としての価値は全くなく、豪快なアクションものを得意とする男性映画向きのスターだということだ。海賊、山賊、曲芸師、ガンファイターなど、強奪、破壊、脱獄、殴りあい、射ちあいなどあれば、ただガムシヤラにやっちゃんえ式のアクションを好んでいる感じなのである。

私生活面での知的な雰囲気とは裏腹に、スクリーンに登場するランカスター自身は、知性もなければ感性もない、あるのは本能のみという行動性を示すのだが、そのかわり強欲さとか野望を抱いた人物を演じたらこれまた右に出る者がいないほどの味をみせてくれる。

『山猫』とか『成功の甘き香り』などでアクション・スター・ランカスターとは異なる特殊なキャラクターの存在を認識させてくれたのも、彼がアクションで築き上げた地位を確保する大きな要素となっている。まるでレース展開をしてきた馬のごとき大きな鼻孔を広げ、そしてまた鉄格子くらしいなら噛み切つてしまふような丈夫な白い歯をむき出しにして奮闘するランカスターではあるが、そうした表情ひとつがトレードマークになるスターもほとんどいなくなつたいま、実に貴重なスターといえるだろう。(一)



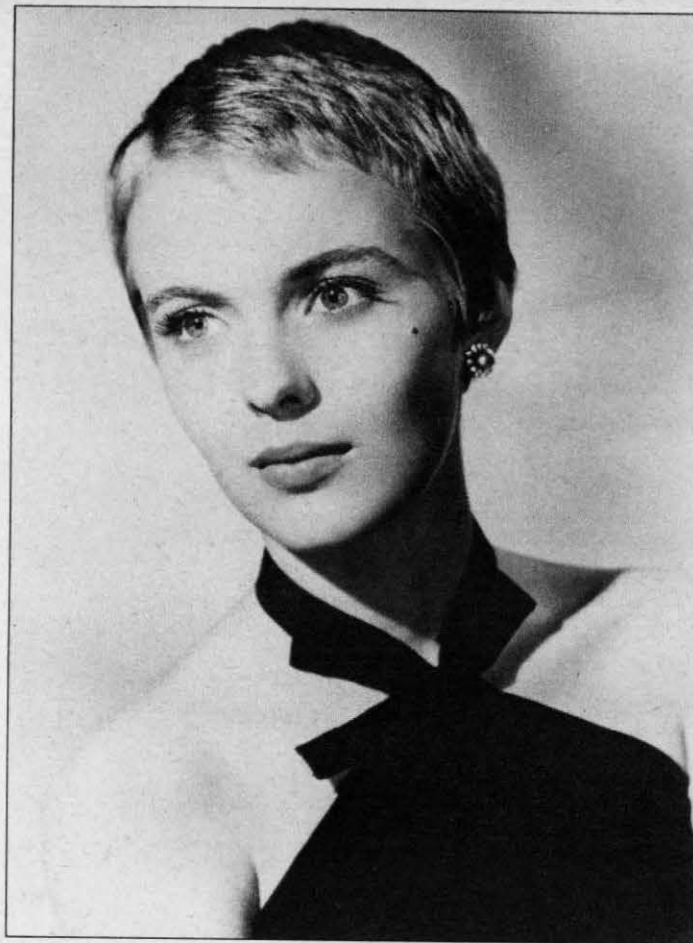
大物ゲアリー・クーパーと丁々発止の西部劇『ヴェラクルス』(1954)



『エルマー・ガントリー』(1960)ではアカデミー男優主演賞に



『愛情物語』(1955)で薄幸の美男美女タイロン・パワーとキム・ノヴァク



『悲しみよ こんにちは』(1957)でセシル・カットのジーン・セバーク



しゃれ者デーヴィッド・ニヴンと知性派デボラ・カー『悲しみよ こんにちは』(1957)より



『チャンピオン』(1949)で世に出たカーク・ダグラス

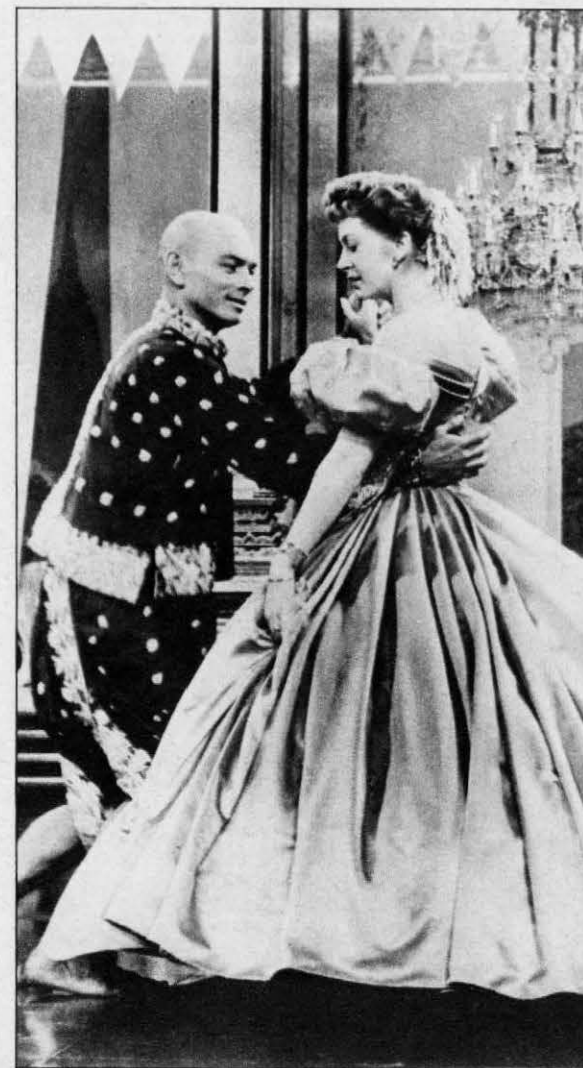
個性的で華やかに……



女死刑囚の実話『私は死にたくない』(一九五八)に賭けたスーザン・ヘイワード

●セシル・カット
「セシル・カット」が、一九五八年に作られた『悲しみよ こんにちは』のヒロイン、セシルのヘア・スタイルであることは、よく知られている。そして、このヘア・スタイルは、一世を風靡したばかりでなく、ヘア・スタイルの「パターン」として、映画を離れてヘア・モードの世界に定着した。いまでは、「セシル・カット」といえば「悲しみよ こんにちは」や、セシル役を演じたジーン・セバークを思い出すこととなる。

すこともなく、あのボーイッシュなヘア・なのである。少年のように華奢な女性によく似合う「セシル・カット」は、残念ながらだれにでも似合うというわけにはいかない。また、手入れが面倒なところからその名ほど大流行したわけではないが、優れた映画音楽がいつかスタンダード・ナンバーになるように、スタンダードなヘア・スタイルとして、永遠に残ることになったのだ。(W)



『王様と私』(1956)でデボラ・カーと踊るユル・プリンナー



悪役に新世界を確立したリチャード・ウィドマーク『街の野獣』(1950)

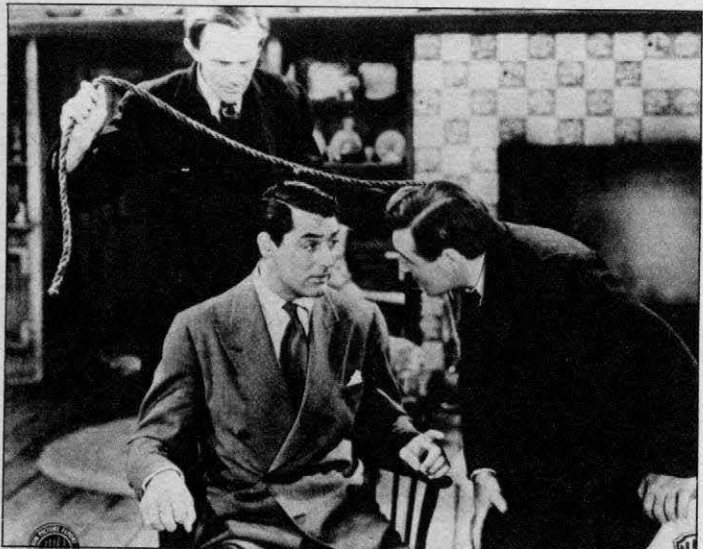


『シェーン』(1953)のアラン・ラッドは股旅西部劇永遠のヒーローだ

とりわけ戦後、リアリズムの世界に目を向けたハリウッドは、従来のものさしとは、ひと味ちがう個性的なスターを、たくさん世に送り出した。同時に、いわゆる美男美女が、特異な役柄に挑みだしたのも、大きな特徴のひとつである。それは作品にヴァリエーションをもたせ、さらに大きな豊かさを、とどけてくれたのである。(K)



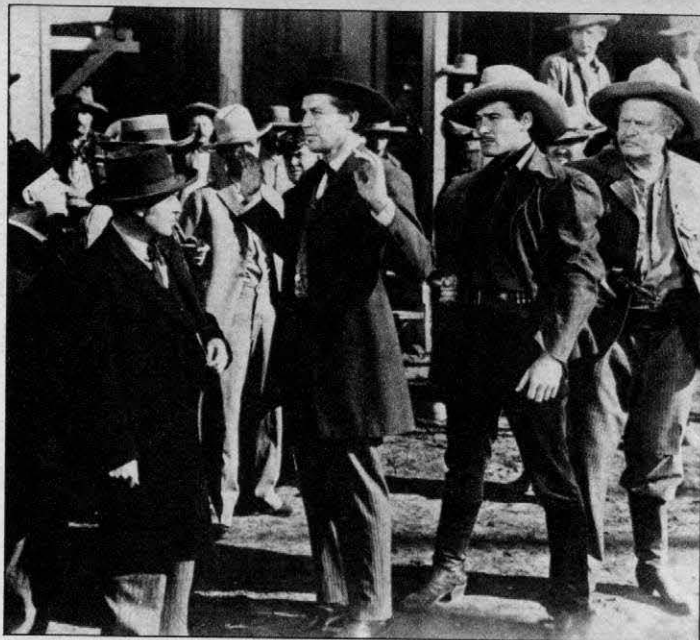
ジャック・ブキャナン(左)は ギンギラギンのオーバー派 『バンド・ワゴン』で アステアを悩ます演出家を怪演した



ピーター・ローレ(右)は特異な容貌を生かして活躍した 『毒薬と老嬢』では殺人狂を整形手術した医師



『マルタの鷹』にはピーター・ローレも出演 大小性格俳優の対決がみものだった



『無法者の群』のブルース・キャボット(右から3人目) 西部の町の悪がしこいボスが役どころ



マイク・マズルキ(中)は元レスラーの肉体と貫録で主役をおびやかす 『凸凹持ち逃げ騒動』



謎の大男シドニー・グリーンストリート 『マルタの鷹』で 黄金像争奪戦に役買う



『西部の男』のドリス・ダヴェンポートは フロントアの健康美人



『チャップリンの独裁者』のジャック・オーキーはムソリーニがモデル 悪夢の時代を再現した



懐しのピヤ樽おばさんハティ・マクダニエル 『風と共に去りぬ』で忠実な召使いに



善意の理解者 良き隣人 『打撃王』のウォルター・ブレナン 暖かくクーバーを見守る

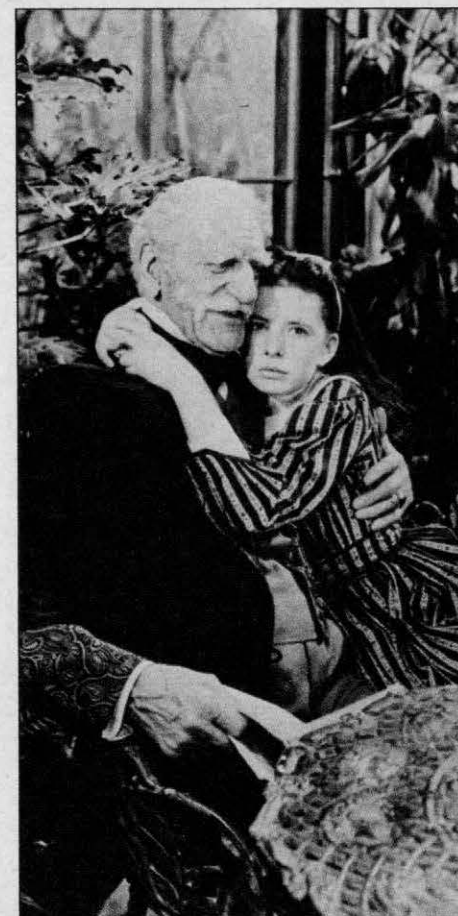
映画を料理にたとえると、すぐれた脇役は調味料にあたる。ただし添加物をいっさい含まない天然自然のまろやかな味でなければならぬ。人生の年輪が演技のはしほしにみえて、わずかな力での出番でも心に響くことが望ましいのである。実際、脇役のおかげで記憶に残る映画は少なくない。

私の場合、『カサブランカ』がそれにあたり、ハンフリー・ボガードもイングリッド・バーグマンも、クロード・レイנסとのからみで脳裏に浮かぶ。つまり、思い出の名シーンには必ずレイנסが顔をのぞかせていて、主役だけというわけではない。レイנסのいない『カサブランカ』なんて……である。

脇役にもさまざまなタイプがあるから、すべ

てがレイנסのようにはいかない。が、その場合も、料理の隠し味のように、表にあらわれないで映画を香り高いものにしていく。私たちは、毎日の生活と同じように、スクリーンでたくさんの脇役と出会い、別れる。彼らの大部分は、一瞬のうちに視界を通りすぎるが、そうしたむなしさがある部分がある。人生の定めなら、私たちと脇役の出会いは、主役との上映時間中へつたりのつきあいより、リアリティがある。そして脇役調味料論も、つまるところ、わが人生論の一環なのである。

ご紹介する名脇役のひそみに、私もいつかまろやかな味を、と願いつつ……ふたたび、脇役は映画の調味料である。(増淵健)



『若草物語』のセシル・デミル・スミス 退役軍人が役どころ 謹厳な人情家



『拳銃の報酬』でのエド・ベグリー(中)には 老勝負師の面影がある



『荒野の決闘』のジョン・アイアランド やせぎすで口も八丁手も八丁のタイプ



『レベッカ』ジュディス・アンダースン(右)の死のささやき 恐ろしいですネ 怖いすネ



おとぼけ弁護士チャールズ・ロートンが活躍する『情婦』は 文字どおり人を食った映画



『第十七捕虜収容所』のロバート・ストラウス(左) こついが愛嬌のあるマスクで売る



脇役になってもボリス・カーロフ(右)の怖さは変わらない 『虹を掴む男』でも主人公を大いに苦しめた



フロラ・ロブスン(右から2人目)は苦勞人のおばさまがびったり 『嵐ヶ丘』では乳母



エイキム・タミロフ(右)は善玉をやってもすこ味がある 『誰がために鐘は鳴る』ではゲリラの首領



古代史劇の暴君はピーター・ユスティノフの独壇場 『クオ・ヴァディス』ではネロ



ダイナマイトを投げ ウェインに協力する老助手ウォルター・ブレナン 『リオ・ブラボール』でやる気十分



腹にイチモツの策士をやらせると天下一品 『カサブランカ』のクロード・レイנס(右)は警察署長



エドモンド・グウェン(左)は『三十四丁目の奇蹟』で現代のサンタクロースに 心やさしい理想主義者



一見好々爺のレオ・G・キャロル(右から3人目) 『砂漠の鬼將軍』でロンメル將軍を扇動する



『我が道を往く』のバリー・フィッツジェラルドは教会を再建する老神父に ひょうひょうたる持ち味



砦の夫に会いに行くけなげな将校夫人ルイズ・ブラット 『駅馬車』の忘れ得ぬ佳人である



アーサー・ケネディは ひねくれ者をやらせると第一級 『チャンピオン』ではカーク・ダグラスの兄になった



ワード・ボンド(左)は悪役からスタート 年をとってから頼り甲斐のある好々爺が持ち役に 『若き日のリンカーン』



これぞ悪役! レミントン・リボルバーをふりまわしゲーリー・クーパーにせまった 『ダラス』のステューヴ・コ克蘭(左)



『若草物語』(1949)では お洒落な3女エミーに 当時17歳だった



デビュー3本目 12歳で出演の『ジェーン・エア』(1944)



このころはまだ純情可憐 ウェディング・ドレスで『花嫁の父』(1950)

Elizabeth Taylor (一九三二) ロンドン生まれのイギリス人だが、一家とともにハリウッドへ移ったのが縁で十歳にして子役として映画デビュー。天性の美貌で五〇年前後からトップ・スターの地位に立つ。さまざまなゴシップにいろいろとられ、戦後スター史を象徴するスターとして、いまなお話題がたえない。



モンティとの『陽のあたる場所』(1951)

MGMの人気スター ミッキー・ルニーと『緑園の天使』(一九四四)



フィッツジェラルドの小説から『雨の朝巴里に死す』(1954)



『クレオパトラ』(1963)

☆ スクリーン
の女王 エリザベス・テイラー



初めてオスカーをとった『バターフィールド8』(1960) 4度目の結婚相手エディ・フィッシャーとの共演でコールガール役だった



脱体制の女流画家『いそしぎ』(1965) このころ相手役はバートンばかり



政情不安な中米ハイチを舞台に バートンと『危険な旅路』(1967)



古典に挑んだ『じゃじゃ馬ならし』(1967)

「バーシニア・ウルフなんかこわくない」(一九六六)

二作『家路』では、早くも少女スターの地位を約束され、若草物語では、もう一人前の女優だった。『花嫁の父』、『陽のあたる場所』、『黒騎士』——ごく若いころの、ピンと張りつめたような、あの美しさはどうだろう。まさに輝くような美しさ。子役からの完全な脱皮。そんな彼女が、きれいな装いの装いから清濁あわせのみ、そしてなおかつ頂点をめざし始めたのは五〇年代の終りからである。『バターフィールド8』で初のオスカーをとったバートンと四本目の共演作『バーシニア・ウルフ』なんかこわくない。二度目の受賞。かくもよかれ、狂気のごとき熱演を見せながらも、スターとしての華やかさは失われない。女王の、女王たるゆえである。(K)



ジミー・ディーンの最後の作 大河ドラマ『ジャイアンツ』(1956)



輝くような美しさ M・クリフト共演『愛情の花咲く樹』(1957)



バートンとの2本目『予期せぬ出来事』(1963)



ポール・ニューマンと デネシー・ウィリアムズの『熱いタン屋根の猫』(1958)



「魅惑のワルツ」にのってパリジェンヌのアヴァンチュール『昼下りの情事』(1957) お相手はゲリー・クーパー



ファッション界に大革命 第2作『麗しのサブリナ』(1954)



赤道下のコンゴで看護尼になった『尼僧物語』(1959)



メル・ファーラーの演出で まさに妖精『緑の館』(1958)

●サブリナ・シユーズ
オードリー・ヘップバーンの名を聞くと、彼女の全盛期(一九五〇年代後半から六〇年代はじめ)に流行った「おどろきコッペパン」という駄じやれめいた言葉をおもい出す。こんな言葉が多くの人の口の端に登ったことでもわかるとおり、オードリー・ヘップバーンの存在は、単に映画スターであることをこえて、より社会現象的存在だったのだ。
ヘップバーン・スタイルといえば、ヘア・スタイルであり、アリアヌ巻きは、スカートの巻き方。シャレード・グラスは、サンGLASSで、サブリナ・シユーズとはノッポの彼女が『麗しのサブリナ』で履いていたベタンコな靴。そして、それプラス、パリのデザイナー、ジヴァンシーのドレスをすてきに着こなすオードリーは、いまでいうところの、ファッションのオビニオン・リーダーだった。ヘップ履き、というおばさん愛用のつかいも、語源は、どうやら彼女のようなものである。(W)

映画と風俗



『ローマの休日』(1953)

★輝ける妖精
オードリー・ヘップバーン

Audrey Hepburn (一九二九) パレリーナから映画入り。五三年『ローマの休日』でスターになり、妖精スターとして、ことに日本での人気は絶的なもので二十余年にわたってトップ・クラス。メル・フアラールと離婚後、ローマの精神科医と再婚しスクリーンを離れたが、七六年に八年ぶりにカムバックした。



世間の口が人生を狂わせる 珍しくリアルな『噂の二人』(1962) 恋人役はジェームズ・ガーナー



さしもの妖精も いささか年月を感じさせた『いつも2人で』(1967)



ウィリアム・ホールデンと『パリで一緒に』(1964) 仮装舞踏会の場



意表をついて盲目の妻に『暗くなるまで待って』(1967)



ついにイライザは大使館の舞踏会へ『マイ・フェア・レディ』(1964)



パリを舞台にハイ・センスなスリラー『シャレード』(1963)



伯爵家の令嬢ナターシャを気品で見せた『戦争と平和』(1956)



『パリの恋人』(1957) ではビートニクなダンス・ナンバーを披露



いつもながらファッションは圧倒的『ティファニーで朝食を』(1961)

今こうして『ローマの休日』に始まるオードリーの足跡をみてみると、この人が、驚くばかりに美しかったことに、改めて気がつく。本当に、この世の人とは思えないほどである。妖精と言われているくらいなのだから、それは当然なのだけれど、妖精などという存在を、はるかに越えた輝きである。

面を見せたような気がする。だが妖精が天上から舞い降りたついでにはない。私たちが、みんな年老いていくように、オードリーも、また老いていく。何かオードリーに起こったついでにはない。たとえオードリーに何が起きようとも、かつて私たちが染いた神話が、くずれてしまうわけではない。そんなことで、くずれてしまう神話なら、くずしてしまえばいいではないか。オードリーが、かつて確実に持った、この世のものとは思えない、あの輝き。それは決して消えはしない。もし、それを消してしまつたら、それは私たちの、これまでの生そのものを消してしまうことになる。何故なら、かつて私たちは、確実にオードリーとともに歩いたのだから。(K)



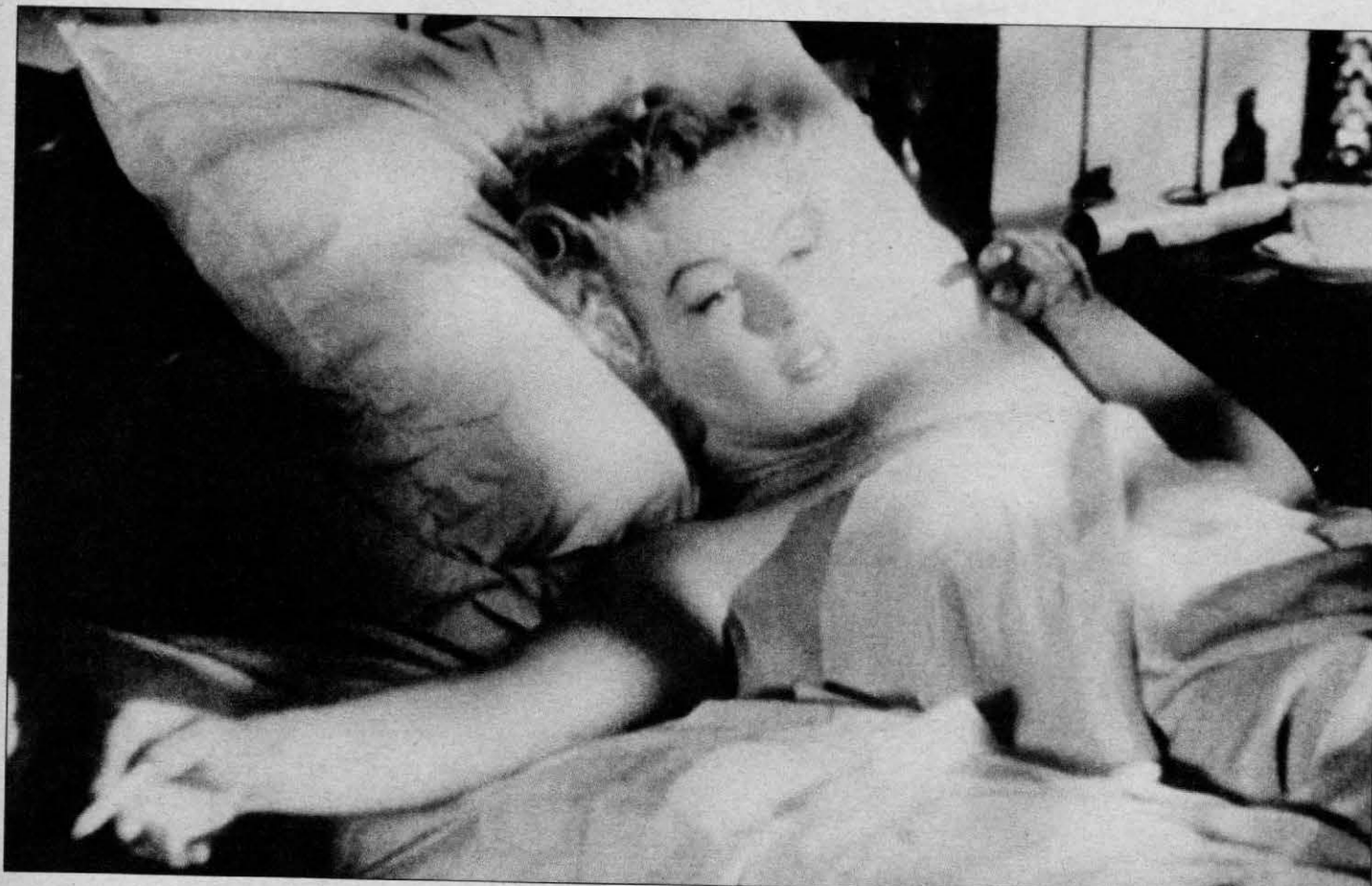
オムニバス『人生模様』(1952)ではチャールズ・ロートンと



ジェーン・ラッセルとセクシー旋風『紳士は金髪がお好き』(1953)



情婦役で注目された『アスファルト・ジャングル』(1950)



滝も壮観なら モンロー・ウォークもまた大評判だった『ナイアガラ』(1952) 当時マリリン26歳



『七年目の浮気』(1955)

☆ 帰らざる肉体
マリリン・モンロー



クラーク・ゲーブルと『荒馬と女』(1961) ともに最後の作品となった



『恋をしましょう』(1960) ではセクシーな踊りを

Marilyn Monroe (一九二六—六二) 私生児としての暗い生い立ち。悲惨で飢えた少女時代のセックス・モデルからハリウッドのセックス・シンボルとしてのスター生活。虚像に傷つき、ノイローゼから、いまも自殺・他殺説が流れる謎の死へと、波瀾の一生を送った。三度の離婚歴。六一年の『荒馬と女』が最後の作品となった。



演技派をめざした『バス停留所』(1956)



ローレンス・オリヴィエと恋を語った『王子と踊子』(1957)



いまや歴史的な名シーン『七年目の浮気』(1955) より

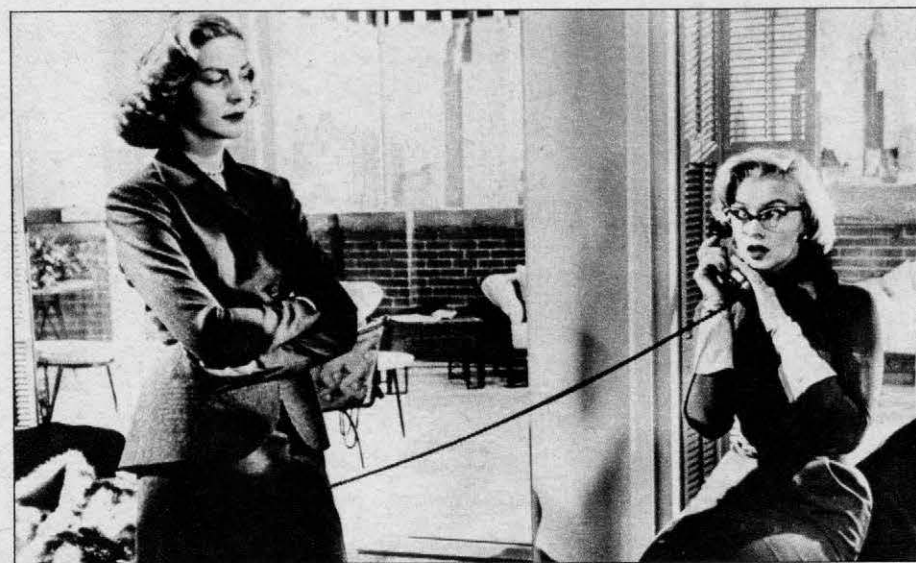


ロバート・ミッチャム共演『帰らざる河』(1954) 酒場のグラマー歌手マリリンが ギターかかえて歌ったテーマ曲が大ヒット

マリリン・モンロー、ノー・リターン——映画のセックス表現がどんなに進んでも、マリリン・モンローを超えるセックス・シンボルは現れない。今日のセックス・スターたちがいかに露わなボーズをとつても、七年目の浮気』の地下鉄の風でスカートを翻らせるモンローを凌駕するエロスのアイコンとはならない(ちなみに、都会のビル谷間などに突風が発生することを、学者の間で「モンロー効果」と呼ぶそうだ。もちろん、このシーンに由来しているのである)。

マリリン・モンローはエロスの女神であった。あるいは、女神に捧げられたいにえてあつた。私生児として生まれ、幼女期に中年男からイタスラされ、十六歳で結婚したが、すぐに離婚、スターとなつてからも、アメリカを代表するプロ・スポーツ選手、大作家と、結婚、離婚をくり返す。寝るときはシャネルNo.5しか身につけない……彼女の人生のすべての細部が、セックスの女神としてのモンローの神話に組みこまれた。それがハリウッドであつた。無名時代の全裸写真は、彼女が全身全霊をセックスに奉じたスターであることの証明書となつた。それ以上の証明は無用だつた。

ハリウッドは、マリリン・モンローの巨大な神話をつくり上げた。世界中の男たちの願望を一個の現人神に集約したのだつた。ハリウッドのスター神話も帰らない。だからこそマリリンは永遠の祭壇に祭られたのである。(U)



コメディエンヌの味も見た『百万長者と結婚する方法』(1953) 共演ローレン・バコール



歌と踊りと脚線美と『ショウほど素敵な商売はない』(1954)

グレース・ケリー

Grace Kelly (一九二八—) フィラデルフィアの上流階級の娘として生まれたが女優を志願し、ニューヨークの舞台に端役出演したところ、五二年に抜擢されて映画デビュー。のべ十一本の作品に主演したが、五六年モナコのレーニエ国王に見染められて結婚。カムバックの話が何度あったが実現していない。



大抜擢ゲリー・クーバーの『真昼の決闘』(1952)に



ヒッチコックに請われて『ダイヤルMを迴せ!』(1954)



再びヒッチコック作品『裏窓』(1954) ジェームズ・スチュアートと

グレース・ケリー・グレース(優美なる白鳥)——グレース・ケリーとモナコ国王レーニエ三世との結婚は「世紀の結婚」といわれ、世界中にざわついた。この「世紀の結婚」なる言葉は、それに先立つウィンザー公とシンプソン夫人、マリリン・モンローとジョー・ディマジオの結婚の際にもつけられた。前者は王室関係、後者は芸能関係である。グレースとレーニエ三世の場合はその二つをいっしょにしたものであった。この結婚はエドガール・モラン(「スター」の著者)が言うように「王とスター」の神話の類似をはつきりと示した。映画スターから王妃へ——しかし、その身の変転はグレース・ケリーなら当然というふうにも、わたしたちの眼にうつった。彼女がスターと

して築いた神話が現実になっただけの話で、『白鳥』の題名どおり優美なイメージは、ストップ・モーションをかけられたように、そこでそのまま固着したのであった。スターを「王に祀り上げる」二〇世紀は、王をまた「スターに仕立てあげる」(モラン)。グレース・ケリーは、スターから別のスターへと変身した、まさに「世紀のスター」であった。彼女の「グレース・ケリー」は、白鳥のようなエレガンスは、その裏に、生身の血の温かさを感じさせるセクシーな魅惑を秘めていた。この彼女の本当の魅力、セックスとそれを包むユーモアを最もよく引き出したのが『ダイヤルMを迴せ!』『裏窓』『泥棒成金』のヒッチコックだった。(U)



ケリー・グラントと南仏のサスペンス『泥棒成金』(1955)



地味ながら舞台人の妻を演じてオスカー『喝采』(1954)



『白鳥』(1955)は貴族の娘グレースが 家庭教師ルイ・ジュールダンをあきらめて皇太子に嫁ぐ話だった このあとモナコ国王との婚約発表



最後の作品『上流社会』(1956)でシナトラと



『泥棒成金』ではニースの海岸で水着姿も見せた

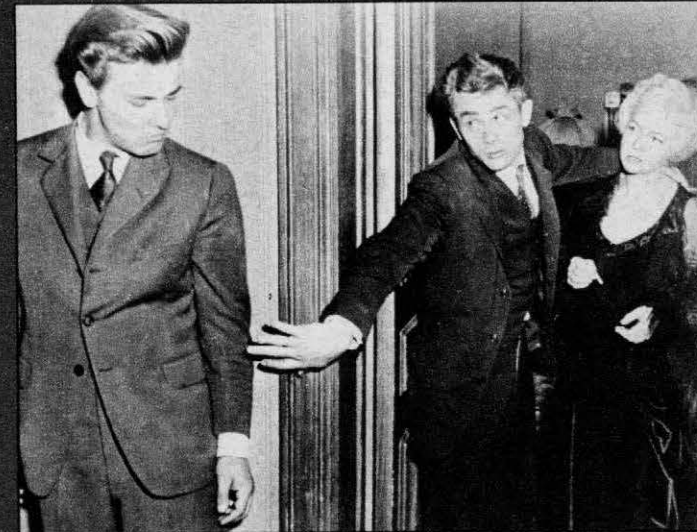
ジェームズ・ディーン



『エデンの東』(1955) これ1作で50年代の寵児に ジミー・ディーンの この眼千両 共演ジュリー・ハリス (下2枚も同作品)



母(ジョー・ヴァン・フリート)の秘密を兄にばく



父の愛を得られず 次男カルは家を出ている母を訪ねたのだが……



第2作『理由なき反抗』(1955) も大好演で人気は決定的に



グループのひとりナタリー・ウッドと愛が芽生えて(『理由なき反抗』)

James Dean (一九三一年—一九五五年) 演劇青年から、五〇年エキストラとして映画へ。ニューヨークへ出て演技の勉強をしているときにイリア・カザン監督にみとめられて『エデンの東』に抜擢され、センセーショナルな話題を呼ぶ。ついで二作に主演したが、五五年九月三十日、愛車の激突事故で二十四歳の生命を終えた。

新人のデビューとしては空前にして絶後という評価を受けたのも当然である。わが国では『エデンの東』が公開され、ジェームズ・ディーンの話で持ちきりだった最中に、突然の死を迎えてしまったのだから。その死がいかに衝撃的であつたにしろ、やはり桁外れの人物であつたことは間違いない。新人のまま、あつというまに去つてしまったにもかかわらず、ハリウッドを代表する大スターとして、今日まで、その神話的存在が絶えず話題になっているのだから。

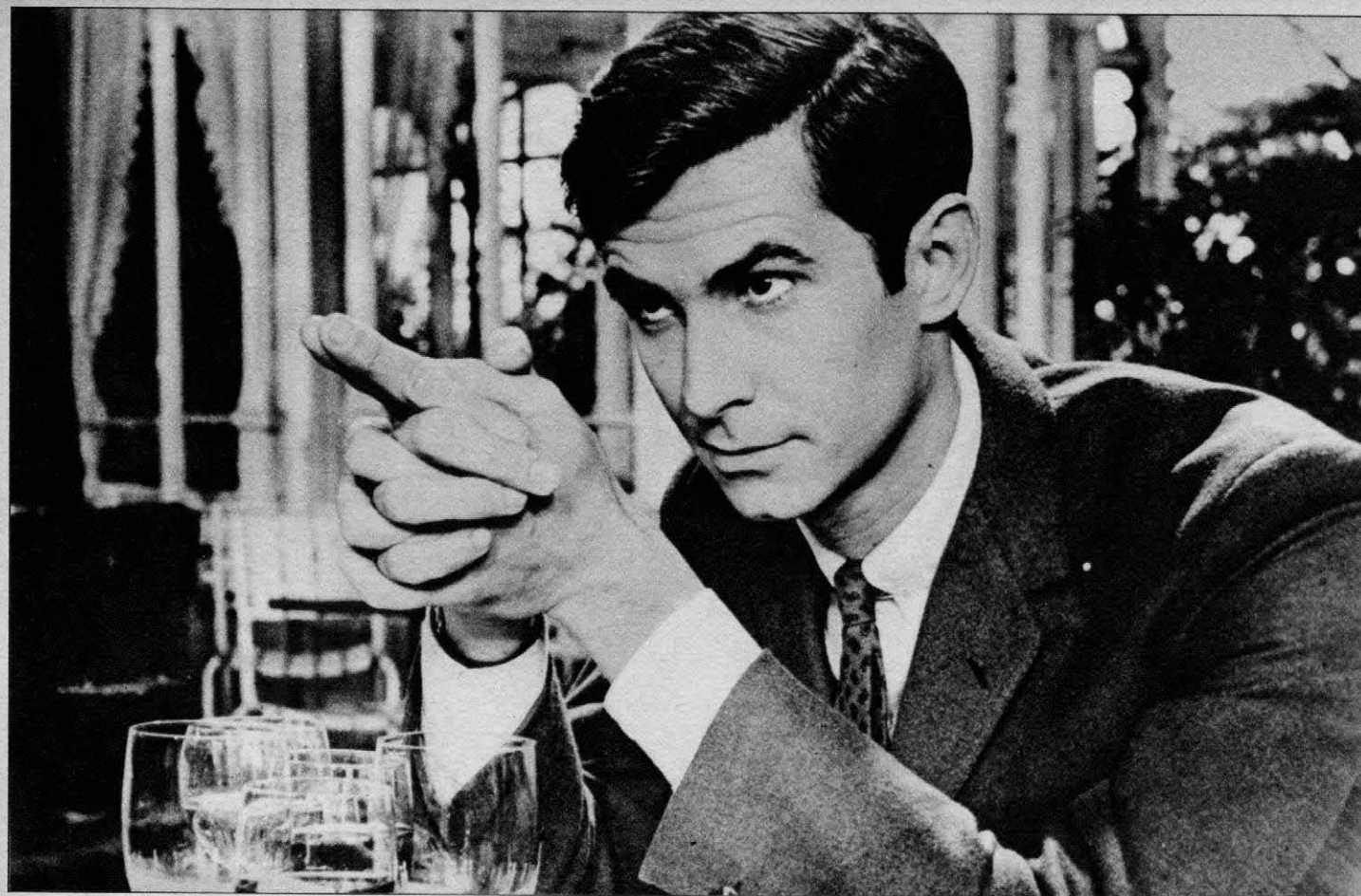
かつてハリウッドのヒーローたちは何ごとにもめげぬ強固な意志を貫くことによつて成立していた。これに対してジェームズ・ディーンはしいたげられた者の屈折した心情を、かたくなに守り通すという青春像によつてヒーローになった。これは新しいタイプのスターである。同情されることを拒否しつつも同情されてしまうという特異な個性が実に新鮮であつた。スクリーンという魔術が見せてくれる虚構の世界にあつては、ナマナましい現実感と存在感を發揮して、新しい映画の誕生に対する期待感を抱かせるに十分な迫力があつた。かりに現在活躍していれば、ハリウッド自体の流れもまた大きく変わつていたのではないかとさえ思われる。おそらく今後このようなタイプの新人は出て来ないだろうし、また、それが不可能なハリウッドでもある。(一)



最後の作品『ジャイアンツ』(1956)では 牧童から石油成金に



主家の夫人リズ・テイラーへの30年間の秘めたる想い(『ジャイアンツ』)



サガンの世界『さよならをもう一度』(1961) パーキンスは年上の女イングリッド・バーグマンの心を波立たせた



トニー・カーティスお得意の軽喜劇『ムッシュ・コニャック』(1964)

一九五〇年代から六〇年代半ばのハリウッドを代表する三人の二枚目——ロック・ハドソンは軽妙なロマンティック喜劇の人気者。トニー・カーティスは喜劇からアクションまで幅広い。アンソニー・パーキンスはいくらかわり者。こうしたハリウッドの二枚目スターは、例外を除くと、今のスクリーンから姿を消した。(H)



『スパルタカス』(1960)のカーティス(左端)



軽いコメディはハドソンの独壇場『男性の好きなスポーツ』(1964)



ロック・ハドソンは明るい二枚目『武器よさらば』(1957)



禁じられた恋『死んでもいい』(1962)のパーキンス



じっくりと芝居を見せた『ジャイアンツ』(1956)のハドソン



『のっぽ物語』(1960)の人気学生アンソニー・パーキンス



「ハスラー」のバイパー・ローリーはポール・ニューマンとの恋に傷ついた



脇役時代のピーター・フォーク(中)はチンピラ専門『ポケット一杯の幸福』



キャシー・ダウンス(右)は『荒野の決闘』で永遠の生命を得た。ヘンリー・フォンダの心ひかれた麗しのひと



コーヒーを飲み黒手袋をはめると 殺しの準備OK ジャック・パランス(中)は『シェーン』で名をあげた



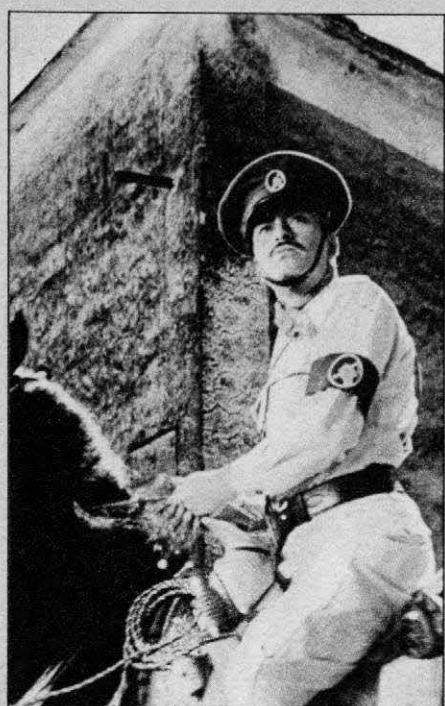
ジャッキー・グリーン(右)は一芸に秀でた人間だけがもつ迫力を全身で表現『ハスラー』



太鼓腹が売りもの(?)のロバート・ミドルトン『必死の逃亡者』で好演



アーネスト・ボーグナインは悪役に限る!『大砂塵』ではあのスターリング・ヘイドンがタジタジ



『逃亡者』のペドロ・アルメンタリス 無神論者の警官がびったりのクールな性格演技



しっかり者の中年夫人ならお任せ『静かなる男』のミルドレッド・ナトウィック(中)



リー・J・コップ(中)は偏執狂的性格を演じて第一人者『十二人の怒れる男』では有罪を主張する陪審員



劇壇に隠然たる力を持つ劇評家ジョージ・サンダース(右)『イブの総て』でみせた俗物インテリの印象鮮烈

正・続・続々
私の映画の部屋
チャプリンの世界、ジエームス・デューン：懐かしの名場面をここに
TBSの人気番組「淀川長治のラジオ名画劇場」でおなじみ淀川節をそのまま再現。
「世界の黒犬」男の世界」「キャンピング映画」など話題沸騰のスクリンエッセイ集
淀川長治のRadio名画劇場
●好評発売中各¥1,200



TBSブリタニカ
東京都千代田区三番町28-1 秀和三番ビル 振替東京1-131334

“オスカー”を8ミリで
ご覧になりませんか？
暖かい部屋でお食事がすんだ後は、ご家族のかたと懐しい映画をご覧になったら如何？美味しいモンブランに紅茶も添えて。映画談義に花が咲くかもしれませんよ。



■ポセイドン・アドベンチャー

夢の大冒険、ポセイドン号が海底地震の大津波により転覆。床に散るシャンデリア、ステンド・グラスに撃砕する人。その地獄図を劇場そのまゝの迫力でお楽しみいただけます。フィルム購入をご希望の方は、書留送料として 600円切手を添えて現金書留にてお申し込みください。

●カラー・磁気サウンド版
●96m/16分 ●¥14,800

提供：20世紀フォックス映画会社

■ビートルズ：

ワシントンD.C.コンサート(1964)

1964年、初のアメリカ大陸で会場は興奮の嵐。キミにひと昔前の彼らの活躍を観せてあげたい。プリーズ・プリーズ・ミー、ツイスト他シャウト他10曲以上の歌が抽入されています。フィルムの購入をご希望の方は、書留送料として 600円切手を添えて現金書留にてお申し込みください。

●白黒・磁気サウンド版
●240m/40分 ●¥25,000

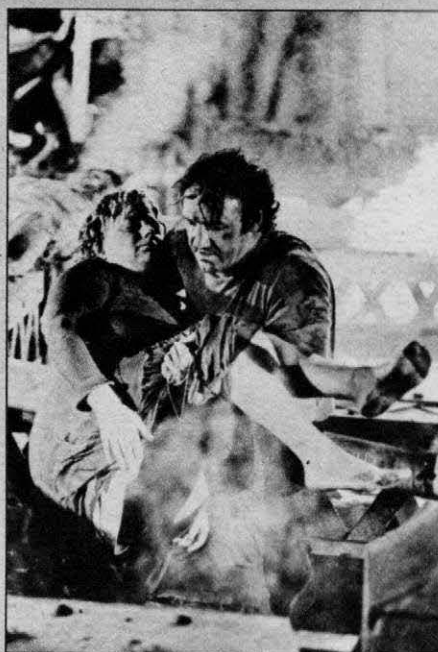
ジュネス企画

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-10-7
新大宮ビル9階 ☎03(463)8750

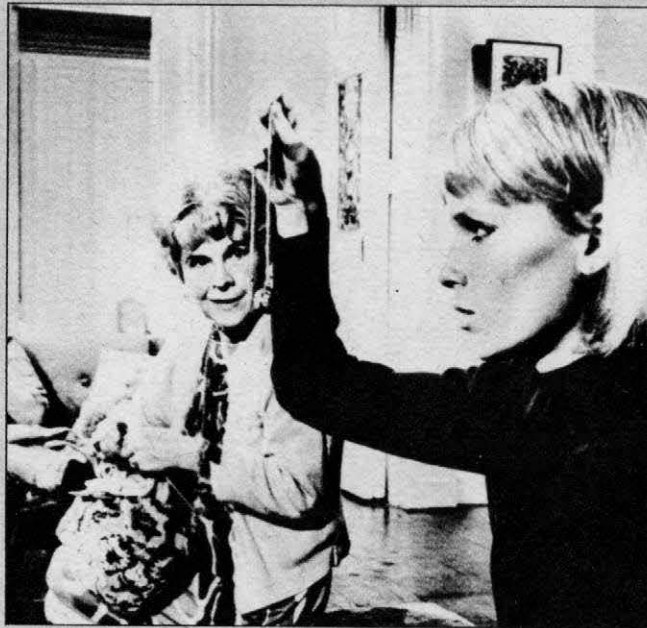
新カタログ・要300円切手



ウィンターズがいじらかった『陽のあたる場所』 ふとちよおさんの22年前



『ポセイドン・アドベンチャー』の熱演は今も語り草 シェリー・ウィンターズ(左)



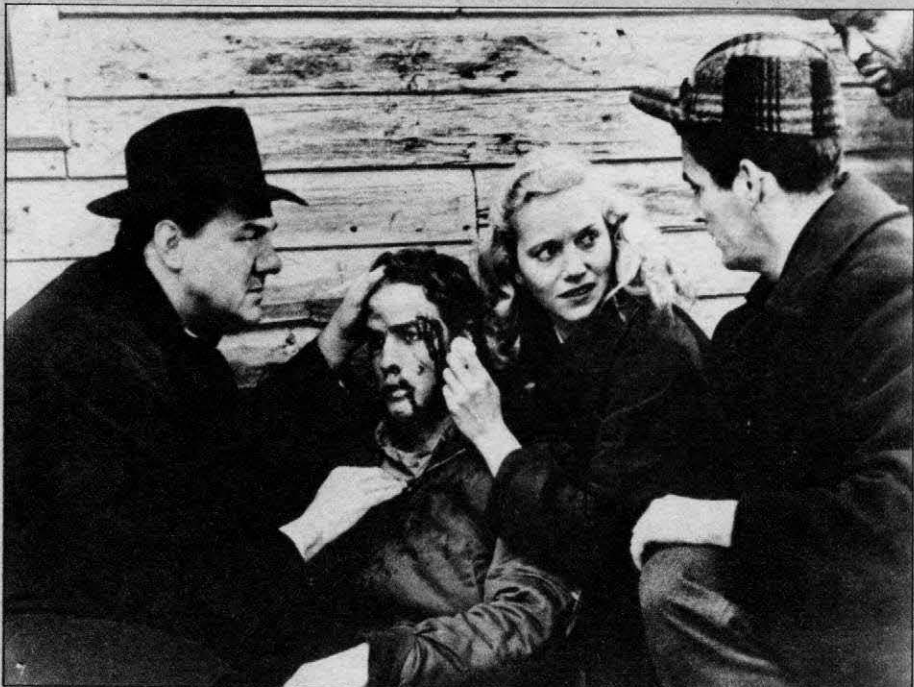
ルース・ゴードン(左)はハッスルおばあちゃん 『ローズマリーの赤ちゃん』ではミア・ファローを魔族にひっぱりこむ



『エアポート'75』のジョージ・ケネディ



シド・シーザーも『エアポート'75』に



カール・マルデン(左)のトレードマークは団子鼻 アクの強い演技で主役を食ってしまう『波止場』では珍しく正義派の神父



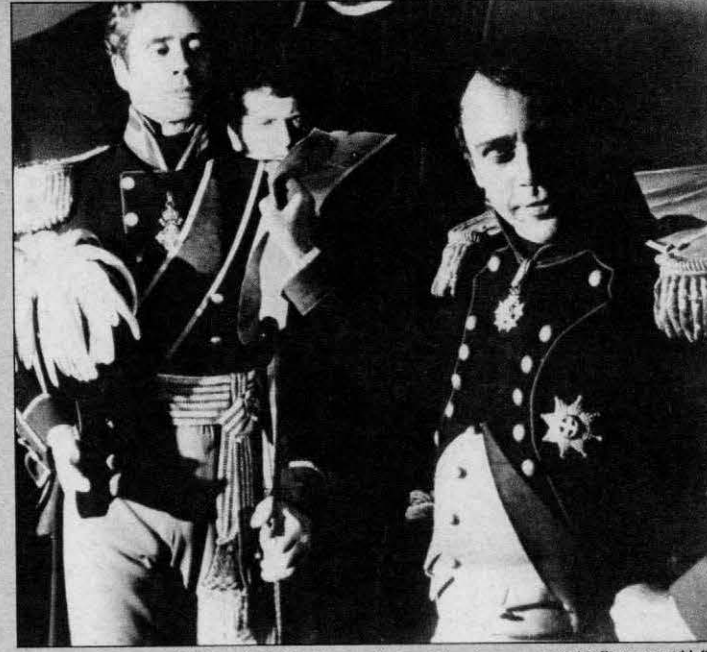
心やさしい娼婦ドナ・リード しっとりした持ち味を生かした『地上より永遠に』



エドモンド・オブライエン(左)は新人女優を探す宣伝マン『裸足の伯爵夫人』でのシニカルなキャラクターで名をあげた



『ジェニーの肖像』のエセル・バリモア ライオネルの妹で名門バリモア家に生まれた



ハーバート・ロム(右)は行動派ボスのイメージ ちょっぴり軽薄なのが特徴『戦争と平和』ではナポレオン



エディ・アルバート(左から2人目)は『ローマの休日』で恋のあと押し好人物のヤンキーおじさんが十八番の役どころ



古い西部への挽歌を奏でた『白昼の決闘』でライオネル・バリモア(左)は老牧場主になった

ジャック・レモン&シャリー・マックレーン



夫婦で日々酔いしれる『酒とバラの日々』(1962)のレモン



人の好きすぎるのが欠点『スイート・チャリティ』(1968)



ニール・サイモン原作の喜劇『おかしな二人』(1968)のレモン



レモンの大型喜劇『グレート・レース』(1965) ピーター・フォークも共演



ベル・エポックのバリを再現『カン・カン』(1960)のシャリー



『あなただけ今晚は』(1963) 英国紳士に変装したレモン



コンビの最高作、やがて悲しき『アパートの鍵貸します』(1960)

ジャック・レモンとシャリー・マックレーン。この二人は、いつもコンビを組んでいたわけではなく、この『アパートの鍵貸します』、これ一本あるがゆえに、永遠にとどまる、そんな二人である。ビリー・ワイルダー作品でも一本『あなただけ今晚は』もあるが、なんといつも『アパートの鍵貸します』につきる。自分の部屋の鍵を上役に貸して、情事の場を提供していた彼。上役のおぼえめでたくなり、ボンボンと出世していった彼。上役の情事の相手が自分の恋人とも知らず、自分とはとてもいいことをしているのだと思ひこんでいた彼。サラリーマン悲喜劇の変型だが、ジャック・レモンも、シャリー・マックレーンも、どんなにおかしいことをやっても、それが悲しさにつながってしまう、そうチャップリン・タイプの俳優なので、この悲哀は実にうまく出た。

ジャック・レモンが、おはことして、よくやるキャラクターは、とにかく表向きうざうざしく、それを押しまくるというタイプが多い。だが、その裏、なんとも気が弱くて、もうどうしようもないという……。そこから、わき出る笑いである。マックレーンとなると、これはもう完全に悲劇女優である。あの顔からしてすでに、べそをかいているみたいではないか。面白くて、やがてかなしきなんとなら……。二人の映画をみていると、日本の、こんな表現を思い出してしまうのである。(K)



パリの裏町カサノヴァ横丁『あなただけ今晚は』は心優しき街角のお姐さんと、どうしてもヒモになりきれない男の話だった

チャールトン・ヘストン



セルシ・B・デミルの聖書からの物語『十戒』(1957) モーゼ役のヘストンは紅海を真二つに割ってみせた

人類ナンバー・ワン——『ナンバーワン物語』という題のヘストンの映画があったが、彼には常に、ナンバー・ワンという代表選手的な晴れがましさがつきまとっている。特にアタマが切れそうというのではなく、際立つてハンサムなだけでなく、腕力・行動力も彼に勝る者がいないというわけではない。しかし、檣舞台にのぼるのは彼でなくてはならない。スマートな者は、むしろ晴れの場に出ることの損得を計算して身を避けるのだらう。武骨さの皮膚が義務と責任の筋骨を包んだヘストンこそ、やはり代表選手——ナンバー・ワンにふさわしいのだ。

『十戒』のモーゼに扮し、紅海を切りひらいて以来、チャールトン・ヘストンは歴史劇の偉大なるヒーローとして一時代を画してきた。『ベン・ハー』『エル・シンド』『北京の55日』『偉大な生涯の物語』『華麗なる激情』『大將軍』『カイツーム』『ジュリアス・シーザー』『アントニーとクレオパトラ』……まったく、人類の代表選手のような活躍ぶりであった。『猿の惑星』では人類と猿の間をつなぐミッシング・リンクを演じるかと思われた、というのは冗談だが、このSFのヒット以来、ヘストンはガラリと未来志向に転じた。しかし代表選手たることは相変わらず、ハイジャック、食糧危機、大地震、飛行機事故などなどの、現在から未来に向けての危機に、人類を代表して闘いを挑んでいる。

彼は俳優協会の会長でもある。(U)

Charlton Heston (一九二四—)
製材所を営むイリノイの田舎に生まれ、舞台をへて五〇年に映画入り。大型映画時代の到来とともにデミルやワイラーの超大作でスターになる。謹言実直な人柄で、四四年、学生演劇の仲間だった、まのリアディアン夫人と結婚して以来、スキャンダルの一つもないマジメ派。監督も手がけたことがある。



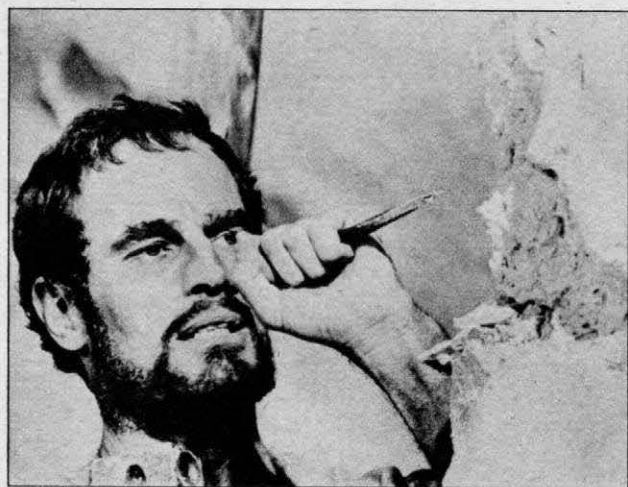
スペインの英雄の生涯『エル・シンド』(1961)



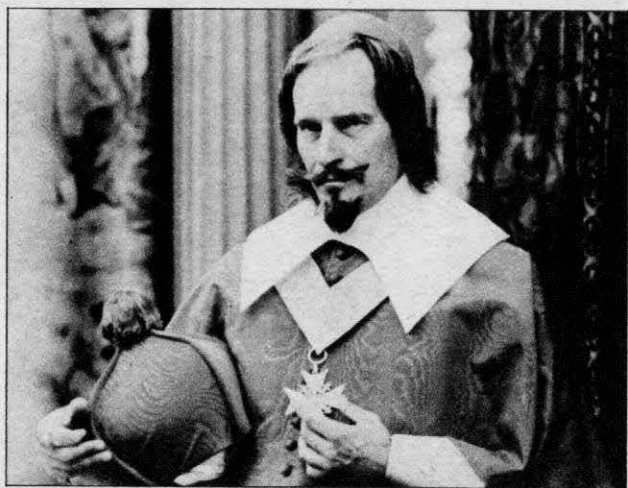
予言者ヨハネになった『偉大な生涯の物語』(1965)



戦車競走のスペクタクル 母や妹への思い オスカー受賞の『ベン・ハー』(1959)は やっぱり彼の代表作だ



ローマ法王と葛藤するミケランジェロの『華麗なる激情』(1965)



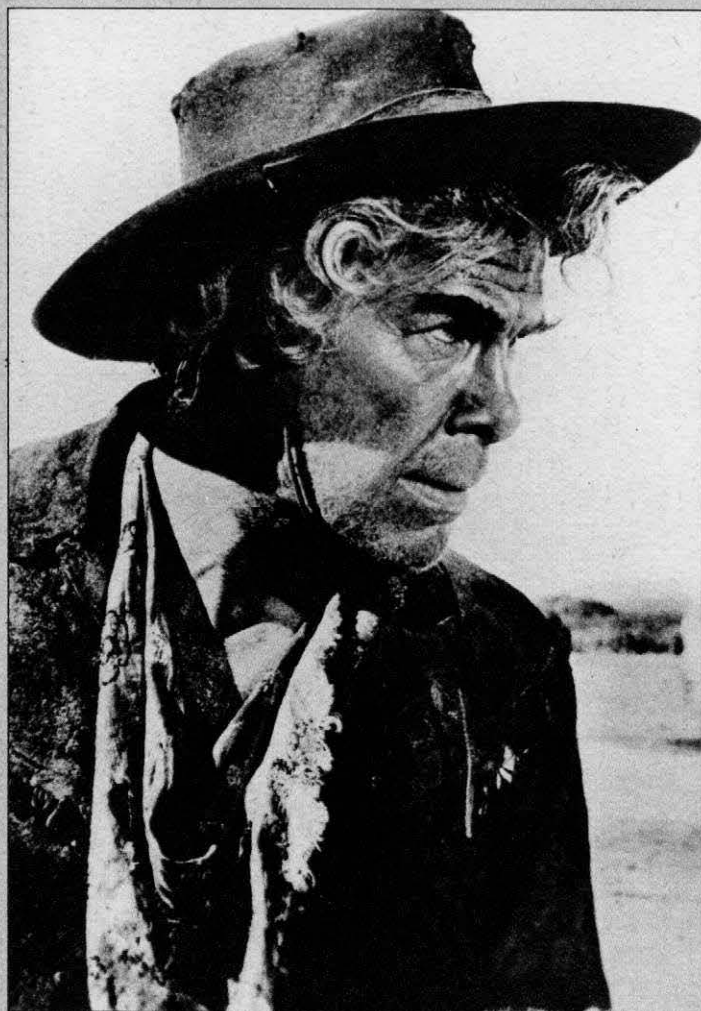
『三銃士』(1973)では腹黒の枢機卿リシュリュエに

『アントニーとクレオパトラ』(一九七二)では初めての監督・主演





シドニー・ポワチエ(左)の切れ者刑事と まったくダメな警察署長ロッド・スタイガー 『夜の大捜査線』(1967)は黒人優位の秀作だった



『キャット・パルー』(1958)でオスカー受賞のリー・マーヴィン



ポワチエが黒人初のアカデミー主演賞『野のユリ』(1963)

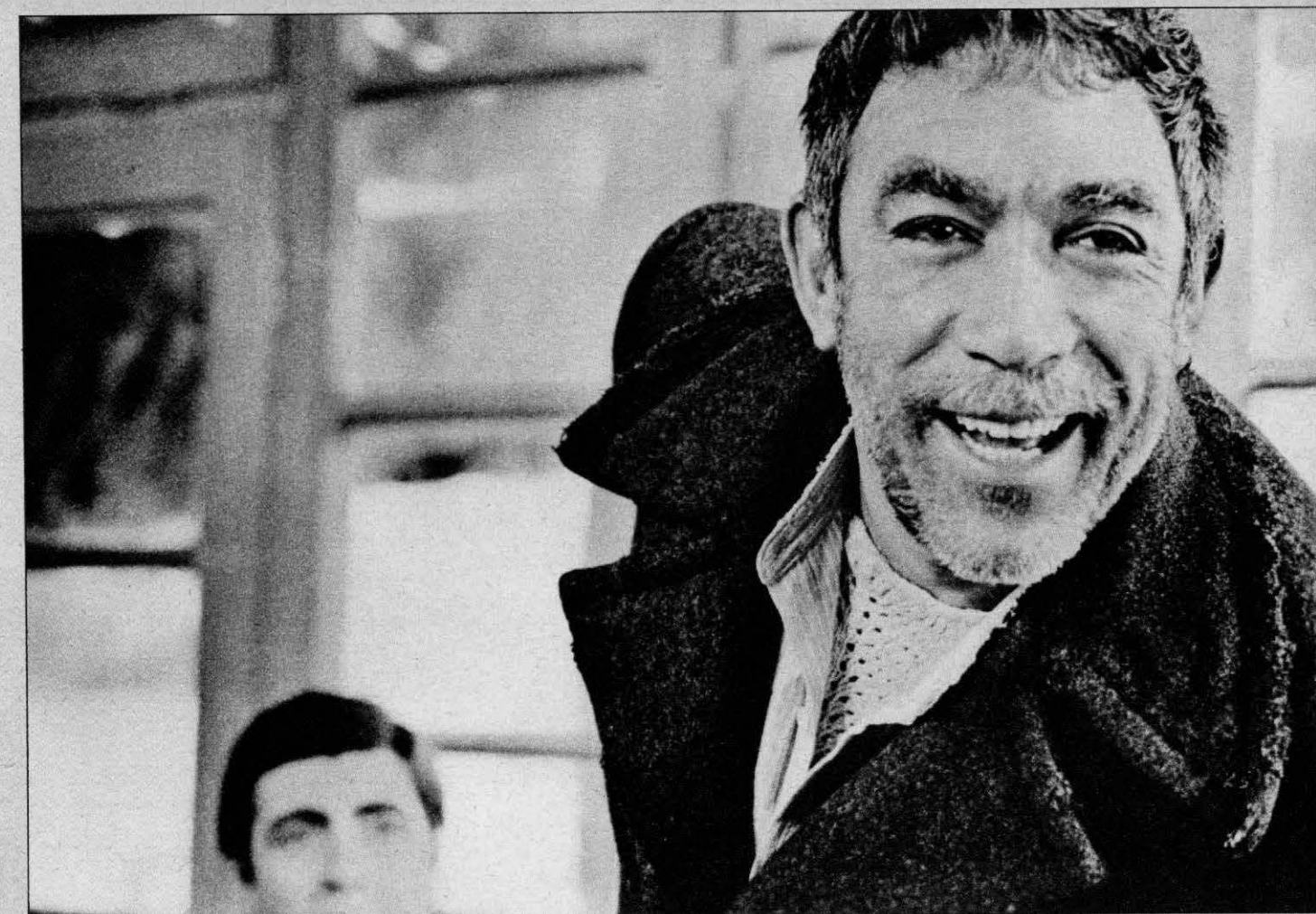


エジプト出身 『ゲバラ!』(1969)の
オマー・シャルフ

ここに並んだ六人の男たち。いずれも息の長い実力者ばかりである。ひとくせも、ふたくせもありそうな男たち、そしてツラがまえ。映画のリアリズムは、こういう男たちを徴用し、作品の面白さを倍加させた。従来の、スターのワクには、はまらない。いや、ワクそのものを革新させた、そんな新しい時代のスターたちである。(K)



『バットン大戦車軍団』(1970)のジョージ・C・スコット(右) 狂熱の軍人を演じてアカデミー賞 でも彼は受賞を拒否



『その男ゾルバ』(1965)のアンソニー・クイン 土着の人間のしぶとさを見せるとき彼の力量は最大に発揮される

実力派スター

悪役出身から
黒人俳優まで



『サウンド・オブ・ミュージック』(1965)のジュリー・アンドリュース



エルヴィスのスクリーン初登場『やさしく愛して』(1956)



アン=マーグレットはつらつ そしてエルヴィス・プレスリー・ミュージカルの最高作『ラスベガス万歳!』(1963)



『メリー・ポピンズ』(1964)はジュリー・アンドリュースの第1作



チャールストンもにぎやかに ジュリー『モダン・ミリー』(1967)

「ザッツ・エンターテインメント」を飾ったキラ星の如き芸人さんたち。彼らの後継者として、かつての時代の子、そしていま時空を超えたエルヴィスと、同い年だが少女時代からの芸界育ちジュリー・アンドリュースなどをあけてみた。彼らがスクリーンで歌い、そして踊るとき、映画の世界は、より豊かなものになるだろう。(K)



ロック歌手の徴兵をテーマに『バイ・バイ・バーディ』(1963) これもアン=マーグレット好演

ポール・ニューマンvsステイヴ・マックイーン



ポール・ニューマンの出世作『傷だらけの栄光』(1956)



イスラエル建国のエピソード『栄光の脱出』(1960)

ツイン・タワーリング・スター——パニック超大作『タワーリング・インフェルノ』で、東西大横綱の取組みといった感じで競演したポール・ニューマンとステイヴ・マックイーンは、ふたむかし前に一度同じ映画に出たことがあったが、その「傷だらけの栄光」では、主演スターのニューマンに、ホンのチョイ役のマックイーンがナイフで挑みかかっていた。その奮闘のかいあってか、その後この邦題「傷だらけの栄光」のイメージはマックイーンがニューマンから奪い取ってしまった感がある。ともにアクターズ・ステュディオ出身の俳優として、反逆的ヒーローとして、ふたりはマローン・ブランド、ジェームズ・ディーンが築いた王国の周辺から出発しなくてはならなかった。マックイーンの演技は、へんにディ

ーンを気どっていると評され、「エデンの東」の役をディーンと争って敗れたニューマンは、ブランドの亜流とおとめられた。しかし、60年代にはいつて、ふたりはついに独自の帝国を築き上げたのだ。彼らは別々の物を持ち出していったようである。「大脱走」と「脱走大作戦」の脱走方法、「スティング」と「シンシナティ・キッド」のボーカルのやり方、「バビロン」と「暴力脱獄」の刑務所内でのすごし方などを比べてみれば、差異はおのずと明らかであろう。ニューマンは知性とユーモアを、マックイーンは獣性と執念を、それぞれ持ち出していったのであった。(U)



のちのスターが勢ぞろいした『荒野の七人』(1960)



ステイヴ・マックイーンの評価さまる『大脱走』(1963)



非情な勝負師の世界『ハスラー』(1961)

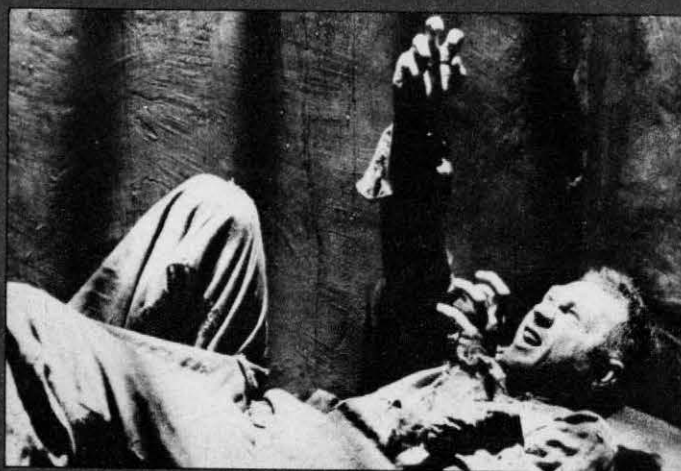


『傷だらけの栄光』で ちよつとからんで18年 別の道を歩きながら再び顔を合わせた『タワーリング・インフェルノ』(1974)

Steve McQueen (1910-) 生後六カ月に両親が離婚。母が再婚した父となじみず非行少年となつたが、軍隊生活を経てネイヴ・アフッド・ブレイハウスで演劇を学ぶようになって立ち直る。TV『拳銃無宿』でスターに。一度離婚。女優アリ・マクローと再婚。彼女のカムバックを許さず、離婚のウワサが流れている。



ハードボイルド探偵ルー・アーチャー『動く標的』(1966)



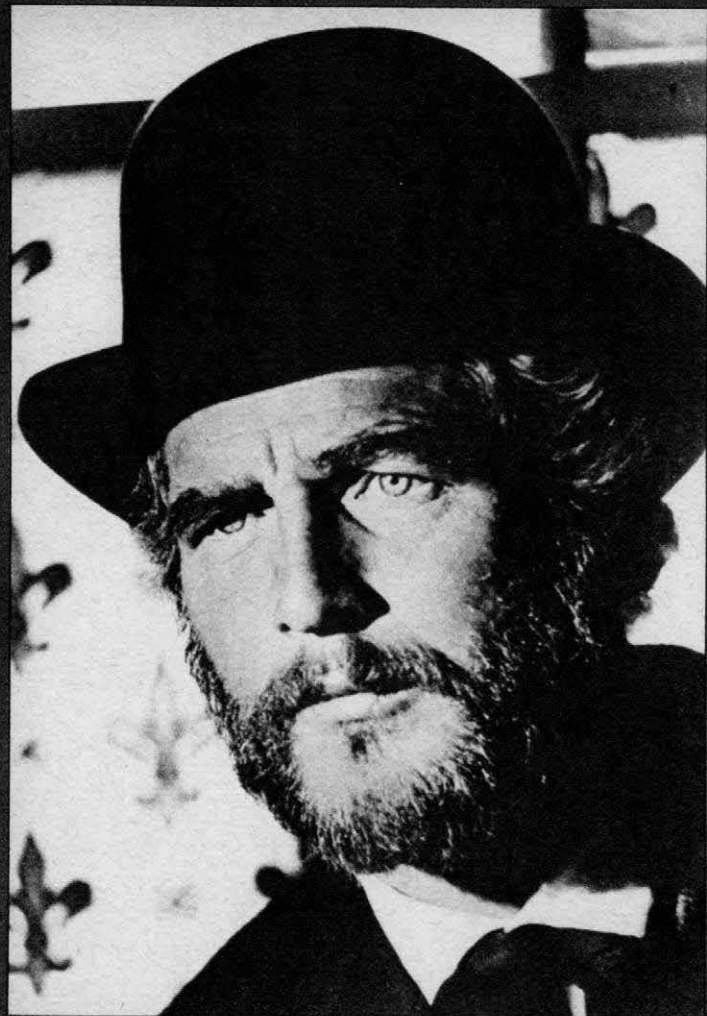
胸に蝶のいれずみ 脱獄こそわが人生『バビロン』(1973)



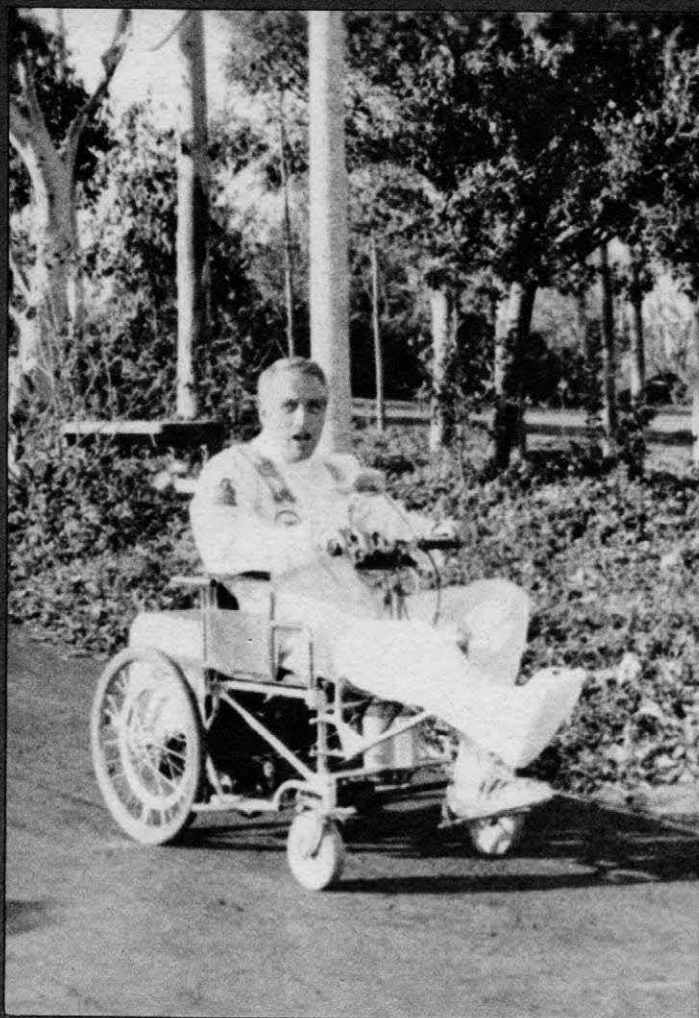
静かなる男の旅立ち『ジュニア・ボナー』(1972)



若き西部の反逆児『ネバダ・スミス』(1966)



西部の叙事詩 開拓期の判事を描く『ロイ・ビン』(1972)



特別出演の『サイレント・ムービー』(1976)では車椅子のカー・チェース



風格が粹ににじみ出た魅惑の『スティング』(1973)



ニュー・シネマ西部劇 快調『明日に向かって撃て!』(1969)



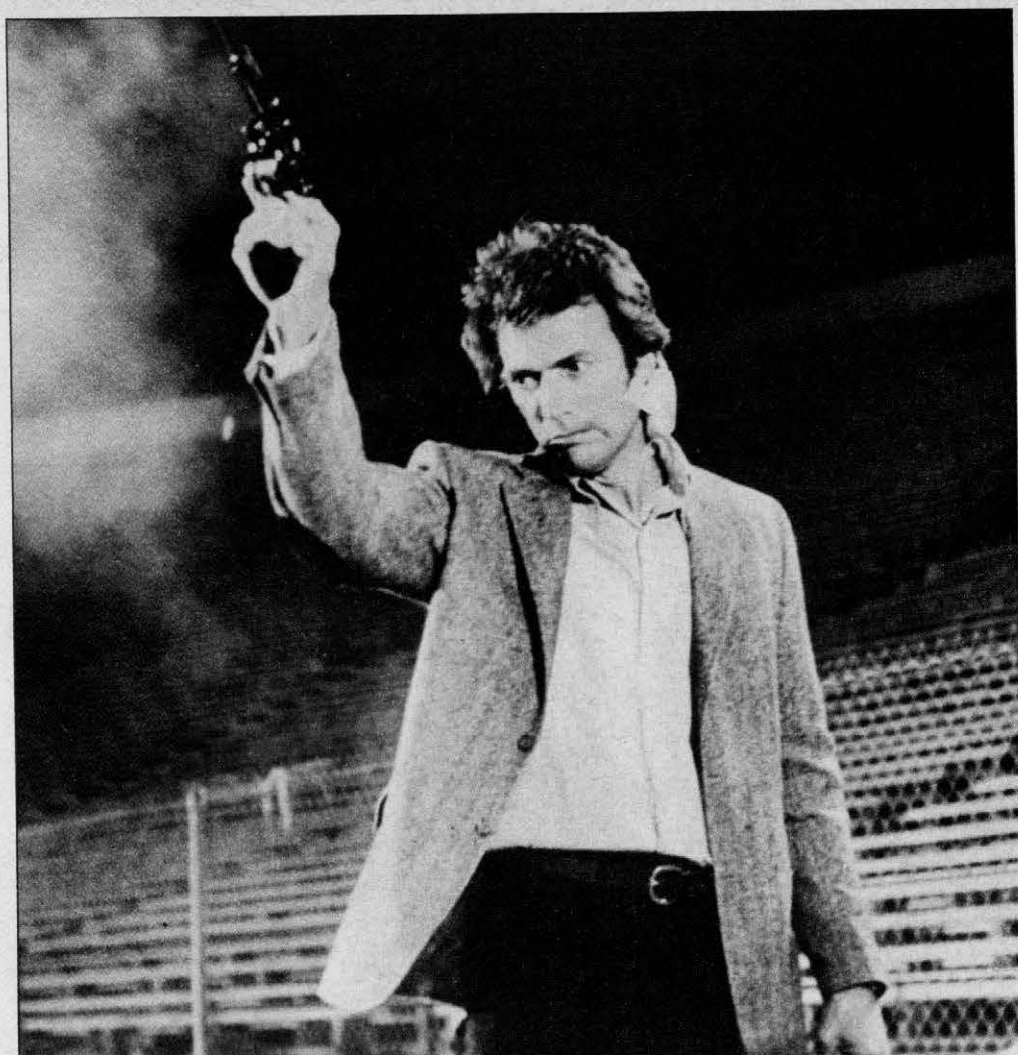
よく動きまわる刑事『ブリット』(1968)はマックイーン代表作のひとつ



スピード狂マックイーンが24時間レースに挑んだ男の闘い『栄光のル・マン』(1971)

クリント・イーストウッド

チャールズ・ブロンソン



マカロニからハードボイルドへ『ダーティ・ヒーロー』(1971)は新しいイーストウッドを確立した

Clint Eastwood (一九三〇)
オクラホマの工業学校を卒業し、軍隊生活を経て帰った若者が、売れないモデルだったマギー・ジョンスンに惚れて五三年に結婚。いままで一度も浮名がない。この賢夫人の努力で、下積みからTV『ローハイド』の主演に、いまでは人気上位をしめる大スター。

Charles Bronson (一九二〇)
ロシア系移民の子として貧しい生活を送った。さまざまな職業を経て、五一年映画入り。長い地味な脇役の下積みを経て六〇年の『荒野の七人』のあたりから認められ、いまでは百万ドルのスター。親友デイヴィッド・マッカラムから奪ったジル夫人にはべったり。



まだB級時代のブロンソン いかにゴツイ『機関銃ケリー』(1958)

アメリカ正統派アクションを貫く二人のタフガイ——正統派のアクション・スターとは腕つぶしが減法強く、行動的であることはもちろんだが、まず何よりも寡黙であらねばならない。連綿とアクション映画に出演し、次から次へと危機をのりこえて、そしてファンからの支持を勝ちとるためには、沈黙は金という鉄則を守らねばならない。アクション・ヒーローは、ファンに向かって愛を求めるそぶりを見せてはならないのである。

『さらば友よ』でブロンソンは、ただ「イエー」と呻くのみだった。『荒野の用心棒』でイーストウッドの口は、ちびたシガーをつなぎとめておくためにだけつかわれていた。ブロンソンのロヒゲ、イーストウッドの不精ヒゲは、彼らをヒーローにするために必要な「ロカセ」。

なにかも知れなかった。ヒゲは口に代わって、能弁に彼らのアイデンティティに関する何かを物語った。

特にブロンソンのヒゲは、彼のシンボル・マークとなった。悪役・わき役時代にはなかったこのヒゲが、かえって彼に、悪役上ガリの行動性に富んだ男くささのイメージを与えた。太いヒゲは、『ホワイト・ハット』の間のボーダー・ラインであり彼はその上に立っている。一方、イーストウッドは、ヒゲを捨て、44マグナムを彼のスポークスマンとすることにより、いつそうダーティな行動力を強化した。『ローハイド』の白い帽子は、ドン・シーゲル監督との出会いの映画『マンハッタン無宿』で都会のハキタメに脱ぎ捨てたのだ。た。(U)



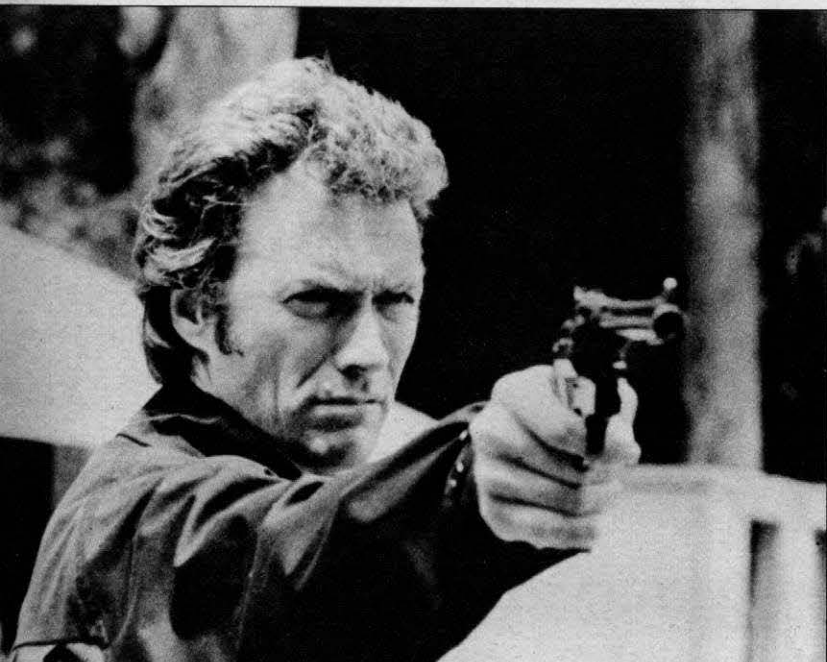
『大脱走』(1963)はブロンソンにとっても記念作だ



マフィアの組織のすべてを告白した『バラキ』(1972)



寡黙に だが無類に強く イーストウッドの『夕陽のガンマン』(1965)



イーストウッドのきわめつけ 刑事『ダーティ・ヒーロー2』(1973)



ブロンソンのアクション『軍用列車』(1975)

★脇役ありて映画は楽し★

③



男の体臭がにおう硬骨漢 悪役もうまいロバート・ライアン『ダラスの熱い日』



チャールズ・ビックフォード(左)は西部に根をはやした生活人のイメージ『テキサスの五人の仲間』



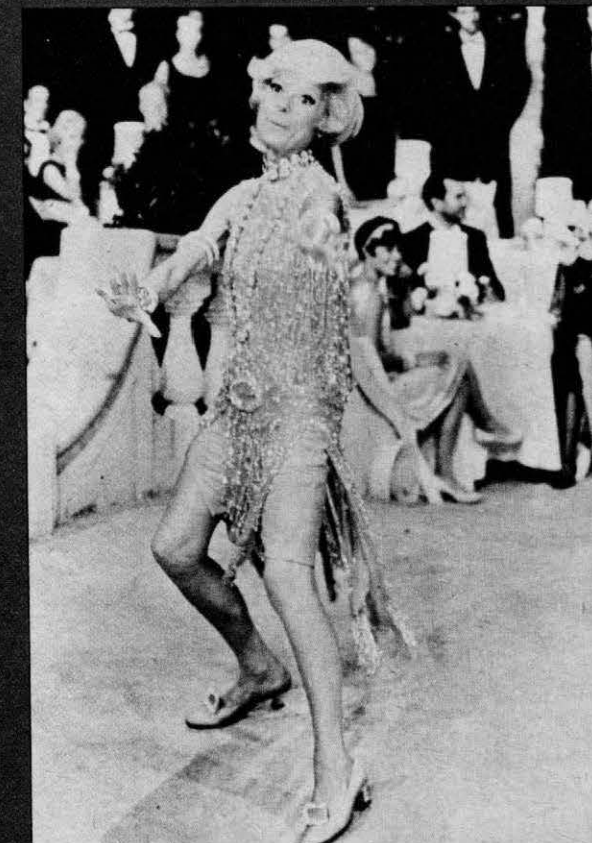
ベビー・フェースのマイクル・J・ポラード(左)は『俺たちに明日はない』で売り出した



レイ・ウォルストン(右)は喜劇的なキャラクターの万能選手ミュージカルもイケます『南太平洋』



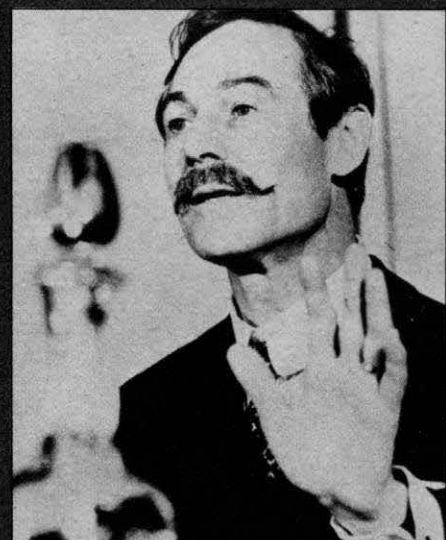
マルセル・ボズフィー(右)はフランスのギャング映画の常連だった『フレンチ・コネクション』でアメリカ進出大成功



ガラガラ声のキャロル・チャニングは『モダン・ミラー』で大奮闘 舞台では主役スター



『引き裂かれたカーテン』の謎の老女リラ・ケドロヴァ ジュリー・アンドリュースもハテナ?



ジョセフ・ワイズマンは教祖的な人物に扮すると抜群『バラキ』ではマフィアの首領



『ベビー・ドール』でヒロインを口説くイーライ・ワラック ねちっこさが身上



『ウェスト・サイド物語』を支えたのはこの脇役2人 ジョージ・チャキリス(左)とリタ・モレノ



『ウェスト・サイド物語』はジョージ・チャキリス(中)を主役の座に引き上げた といってそのことが彼に必ずしも幸せをもたらさなかったのは皮肉である 栄光のひとは今どこに?

名作映画にも似た
「確かな味わい」



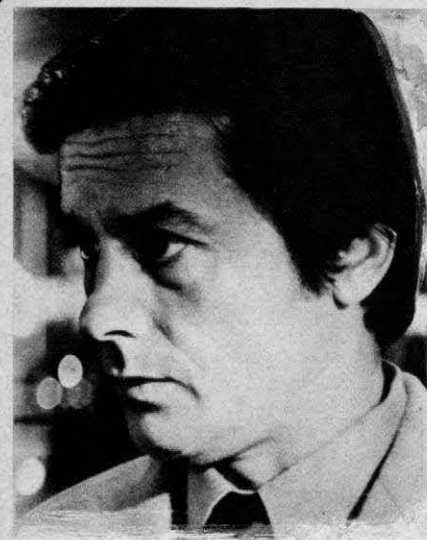
ブルックボンドアルミ包装ティーバッグは、ブレンドしたての繊細な
香りと味を、そのまま密封。フレッシュそのもの。



香りと味が調和した
「セイロン」……20袋入 ¥350
独特の気品ある香り
「ダーズリン」……20袋入 ¥350

世界でいちばん愛されている……
ブルックボンド紅茶
LONDON ENGLAND

’77へ向ってゴージャスに
世界の傑作群で彩る
東映洋画
ビューティフル・セレクト11



●カラー作品／フランス映画 COMME UN BOOMERANG

ブーメランのように
監督ジョゼ・ジョヴァニニ 出演アラン・ドロン／シャルル・ヴァネル

●カラー作品／イタリア映画 LEZIONI PRIVATE

課外授業
監督ヴィットリオ・デシステイ 出演キャロル・ベイカー他

●カラー作品／アメリカ映画 CANNONBALL

キャノンボール
監督ポール・バーテル 出演デヴィッド・キャラダイン他

●カラー作品／イタリア映画 BLUFF

ブラッフ
監督セルジオ・コルブッチ 出演アドリアーノ・チェレンターノ／コリン・スクレーリー

●カラー作品／アメリカ映画 DEATH RIDERS

デス・ライダー
製作デヴィッド・アダムズ／フィル・タッカー —ドキュメント—

●カラー作品／アメリカ映画 THIS IS AMERICA

アメリカ大陸の恥部
監督ロマン・ヴァンゲープ —ドキュメント—

●カラー作品／ソビエト映画 BLOKADA 2

レニングラード解放戦
監督ミハイル・エルショフ 主演ユーリー・サローミン

●カラー作品／フランス映画 POLICE PYTHON 357

ポリス・ピトン357
監督アラン・コルノー 出演イブ・モンタン／シモーヌ・シニョレ

●カラー作品／アメリカ映画 DEATH STUNT

デス・スタント
スタントマン総出演

●カラー作品／フランス映画 VOYAGE TO THE EDGE OF THE WORLD

地の果てへの旅
監督ジャック・イブ・クストー —ドキュメント—

●カラー作品／イタリア映画 SWEEP AWAY

スウェプトウェイ
監督リナ・ヴェルトムラー 出演ジャン・カルロ・ジャンニーニ



『ダーティ・ハリー』の動機なき殺人者アンディ・ロビンソン（右）は現代のアメリカを象徴するキャラクターといえる 恐るべき脇役！



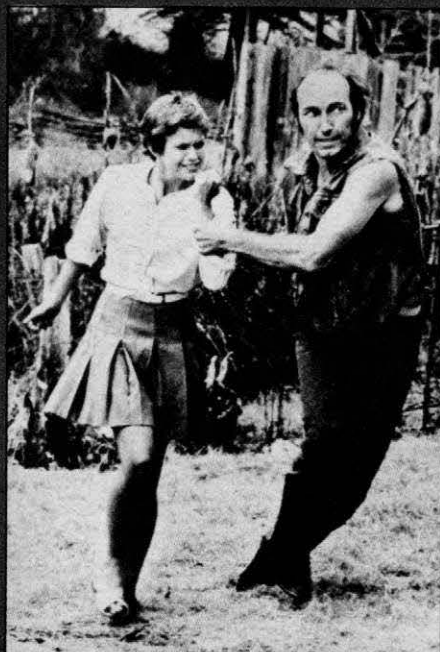
『Bird★Sht』のステイシー・キーチ 奇想天外映画の車椅子怪人



最近主演作品もあるジョー・ドン・ペイカー（左）『突破ロ！』の殺し屋がすごい



サリー・ケラーマンはブラック・ユーモア映画『M★A★S★H』の紅一点



人気上昇エド・ローター（右）まともな役が多くなった『ロリ・マドンナ戦争』



『キャバレー』のヘルムート・グリーム（左）は同性愛の男爵 悪夢の時代の退廃的なムードを表現



イタリア人でもないくせにイタリア人を演じると抜群の変な俳優クライブ・レヴィル（右）『お熱い夜をあなたに』



ギョロ目のおっさんマーティ・フェルドマン（中）いかに演技するかよりいかに地を生かすかが見どころ 『サイレント・ムービー』の目玉商品



ロバート・デュヴァル（左）は『ゴッドファーザー』のようにクールで思慮深い役がびったり ブランドの有能な参謀役



女の業を実感させる得難い女優クロリス・リーチマン 『ラスト・ショー』



『わかれ道』のマーティ・メリア（中）は人種の偏見の犠牲者 外国映画の子役はどうしてああ自然なのだろう

ジェーン・フォンダ



父親を殺され復讐決意の大姐御『キャット・バルー』(1965)

唯美の世界から政治闘争の場へ——『バーバラ』におけるジェーン・フォンダの美しさは異常なまでのものがあつた。彼女をとり囲む、SF的怪奇世界はグロテスクな生物や風景に満ちあふれていて、彼女はそなたに狂い咲いた鮮やかな花弁をもった花のようであつた。バーバラの白く長い脚は、地を這う醜怪な宇宙生物を蹴散らし、その手にかかえた光線銃は、ほしほしに美の光線をまき散らした。実は、その世界で彼女こそ異常な存在なのであつた。彼女は、美のモンスターであつた。

しい蝶に脱皮した。『輪舞』『獲物の分け前』『バーバラ』。『世にも怪奇な物語』でその美は結実した。彼女とヴァン・クラムの美の帝国であつた。しかし、ジェーンはもうひとつの世界を求めてヴァン・クラムのもとを去つた。七一年にFTA(フランク・ジ・アーミー)慰問劇団を率いて世界中をまわり、日本にも立ち寄つた彼女は、やはり美しかった。彼女は父ヘンリーが『暗黒街の弾痕』や『怒りの葡萄』で示した、理想主義的な反抗的なイメージを、スクリーンからとび出して、現実の世界で演じてみせた。

急進的政治活動の場にもスターという花の移植が可能であることを、ジェーン・フォンダは示した。(U)



マラソン・ダンスに生の執念をみせる『ひとりぼっちの青春』(1969)



アカデミー賞をとったセクシーなサスペンス『クールワールド』(1971)



『人形の家』(1973)のノラは時代をこえて 闘士ジェーン・フォンダにはふさわしい



ニール・サイモンの戯曲『裸足で散歩』(一九六七)ではちよつぱりセクシーに

Jane Fonda (一九三七) 女優
ヘンリーを父に、ピーターを弟に
もつ二世スターだが、六〇年に映画
入りして以後、フランスに渡つて
ロジェ・ヴァディム監督と結婚。
政治運動にめざめて離婚し、反戦
運動家のトム・ヘイドンと再婚。
変身につぐ変身で、激動の時代を
みごとに生きぬく。『クールガ
ル』でアカデミー主演賞獲得。



『裸足で散歩』はニューヨークの新婚夫婦の話

★哀しき女の性

フレイ・ダナウェイ

Faye Dunaway (一九四一—)
 職業軍人の子としてフロリダ州に生まれ、イリア・カザンに出あって舞台をへて六六年に映画入り。ジェリー・シヤッツバーク、マルチエロ・マストロヤンニなどの恋愛遍歴の後、七四年にミュージシャンのピーター・ウルフと結婚。舞台にこみ込みの演技力と、退廃的な性的魅力で、いまやトップ・ブースター。



無数の弾丸に倒れ壮烈なラスト 『俺たちに明日はない』(1967)



ボニーとクライド (ウォーレン・ビーティ) の短い真に生きた人生



『アレンジメント』(1969)の社長秘書役では強烈な淫蕩さを見せた

●ボニー・ルック

ボニー・ルックとは、もちろんあのアメリカン・ニュー・シネマの原点ともいえるべき『俺たちに明日はない』でフレイ・ダナウェイふんするヒロインのボニー・バーカーが着ていたドレスの数をさす。

カーットの世界に、突然出現したミモレ丈。それはまさに、おとなの女のためのものであり、おとなの女は、やはり、おとならしくしたほうがいい、という一種の警告であったのだ。優雅で、なまめかしく、そしてしどけなく。一九三〇年代の衣装を適当に今ふうのアレンジしたボニー・ルックはこの役のために十キロもやせたという、フレイ・ダナウェイにとってもよく似合って、おしゃれな世界中の女性に鮮烈な印象を残したのだった。(W)

時画と風俗

淫蕩さの美学——『俺たちに明日はない』はラストの、マシンガンの銃弾が雨霞と降りそそいでふたつの青春のいのちを散らしていくシーンが、やはり鮮烈な印象なのだが、ファースト・シーン——ボニーが登場する、けだるい暑さのたれこめた部屋の中のシーンも、それに勝るとも劣らない強烈なインパクトがあった。フレイ・ダナウェイは、この田舎町の暑さの中で、全裸でベッドから起き上がって来た。窓の外のクライドと初めて眼と眼を見交したボニーの汗に濡れた、少し骨はつた背中が、淫蕩さの匂いを香わしく発散してやまなかった。『俺たちに明日はない』は、生き急いだ青春の記録であるが、また、不能な青年と淫蕩な女のやさしく哀しい、愛のコリ

ーダーでもあるのだ。ここで、フレイ・ダナウェイは完全に勝利を手におさめる。『俺たちに明日はない』の鮮烈なエロティック・ショック以来、フレイ・ダナウェイはさまざまな女性像を演じてきたが、彼女が演じるヒロインの身内には常に淫蕩の血が底流し、それが哀しい女の性として表わされるとき、彼女はロマンチズムとリアリズムを同時に体現した。私生活においても、彼女はイリア・カザン、ジェリー・シヤッツバーク(監督)、マルチエロ・マストロヤンニ、ハリス・ユーリン(俳優)、ピーター・ウルフ(歌手)と恋の遍歴を重ね、イリュージョンとリアリティの間に橋を架けている。(U)



血で血を洗う『チャイナタウン』(1974)のラストは迫力いっぱい この作品でまた新しい面をみせた



『三銃士』(1973)では腹黒い妖艶夫人



レッドフォードとアメリカの裏面『コンドル』(1975)



大作『タワーリング・インフェルノ』(1973)にも顔をみせた

ロバート・レッドフォード



舞台でも同じ役を演じた『裸足で散歩』(1967)



ハリウッドの内幕もの『サンセット物語』(1966)

限りなく透明に近いヒーロー——すきとおったブルーの瞳、明るい金髪のレッドフォードのマスクは、白いアメリカを代表する美貌である。レッドフォードの整ったルックスは、それだけでは今日のスターに十分な条件とはならない。むしろ、それはそのままだけは明るすぎて、信用のおけない白々しさに映ってしまっただろう。

として成熟していく彼に、原初的体験の記憶の悪夢としていつもつきまとって離れないのだった。その敏速な行動と健脚は、逃走に用いられた。南米の山中にまでひたすら逃げまくり、あるいはロッキーマウンテンの雪の中に沈黙を友として棲んだ。社会に対する懐疑、集団意思を代表することの忌避——言ってしまえば、シラケ。だが、それをレッドフォードほど美しく表現した者はいなかった。彼の美貌は美しき逃走者というアイデンティティのなかに活用された。

そして、その逃走者としての前歴が、レッドフォードを、いまアメリカ民主主義の良心をイメージするスターとして信用のおける存在にしているのである。(U)



『夕陽に向かって走れ!』(1969)ではインディアン青年を追う保安官

Robert Redford (一九三七—)
牛乳屋から石油を掘りあげて石油会社
の副社長になった父をもつが、
いわば成り上りの父とどうも行
かず青春時代はヨーロッパを放浪。
舞台をへて六二年に映画入り。最
近は知的な政治映画での製作もか
ねた主演が見事。二一歳で結婚し
愛妻家として有名。仕事のない時
はユタ州の山で思索にふける。



バーブラ・ストライサンドと 赤狩りを背景としたアメリカの青春『追憶』(1973)



シカゴのボスを罠にかける華麗なる『スティング』(1973)



1920年代アメリカの風俗をとらえて『華麗なるギャツビー』(1974)



世紀の巨編!!
世紀の
サウンドトラック盤!!



キング
King Kong
キング



＜LP＞YX-7032 ¥2,500
★豪華カラーポスター付

SIDE・1 SIDE・2
序曲●●とらわれているコング
メイン・テーマ・ダウン・バード●●キングコングショー
謎のスカル島●●暗黒のニューヨーク
キングコングのテーマ●●ニューヨーク世界貿易センタービル
水中の女神●●最後の闘い
コングの恋人/コングVS大蛇●●エンド・タイトル
嵐(わな)●

＜シングル＞YT-4010 ¥600
＜カートリッジ＞TYP-3001 ¥3,000
＜カセット＞TYC-4001 ¥2,600

Tam
発売元■東宝レコード株式会社



製作も兼ねた『俺たちに明日はない』(1967)のクライドはウォーレン・ビーティの青春そのもの



『ファイブ・イージー・ピーセス』(1970)のジャック・ニコルソンとカレン・ブラック



かかしのよう放浪する若くもない男『スケアクロウ』(1973)のジーン・ハックマン



ドナルド・サザーランドとエリオット・グールドにとって『M★A★S★H』(1970)のフーテン軍医は出世作



ピーター・フォンダの時代は『イージー・ライダー』(1969)とともに



ダスティン・ホフマンとキャサリン・ロスの新鋭な魅力『卒業』(1967)



ホフマンとジョン・ヴォイト『真夜中のカーボーイ』(1969)



『ローズマリーの赤ちゃん』(1968)のミア・ファロー

七〇年代のニュースター

★ニューシネマから現代まで

「愛の狩人」(一九七二)のキャンディス・バーゲンは性に積極的

感動しきり……
甦る名場面が
生きる！

オリジナル・サウンド
貴重盤



オリジナル・サウンドトラック・スコアによる
カサブランカ
ハンフリー・ボガードの世界
●SX-88 ¥2,500

カサブランカ／波瀾万丈の黄金／三つ数えろ／ケイン号の暴走／
脱出／第二の妻／麗しのサブリナ／ザ・レフト・ハンド・オブ・ゴ
ッド／サハラ戦線／ヴァージニアの血闘／キー・ラーゴ



オリジナル・サウンドトラック・ス
コアによる映画音楽の巨匠たち
摩天楼
マックス・スタイナーの世界
●SX-90 ¥2,500

ワーナー・ブラザーズ映画ファンファ
ーレ／情熱の航路／キング・コンク／
サラガ本線／進め竜騎兵／他全10曲



オリジナル・サウンドトラック・ス
コアによる映画音楽の巨匠たち
追想
アルフレッド・ニューマンの世界
●SX-91 ¥2,500

20世紀フォックス映画ファンファ
ーレ／百万長者と結婚する方法／征服への
道／嵐が丘／海の男／他全10曲



オリジナル・サウンドトラック・ス
コアによる映画音楽の巨匠たち
レベッカ
フランツ・ワックスマンの世界
●SX-92 ¥2,500

MGM映画ファンファアーレ／フィラ
デルフィア物語／炎と剣／陽のあたる場
所／サンセット大通り／他全8曲

RCA Records and Tapes
発売元/RVC株式会社



演技力と甘さをもちあわせたアル・パシーノ 『スケアクロウ』(1973)



『キャバレー』(1972)を最高作とするライザ・ミニネリは歌も踊りも芝居もよしの万能の大家



『おもいで夏』(1971)のジェニファー・オニールはセクシーなおとなの魅力



濡れたような瞳と黒い髪がたまらない 『経験』(1969)のジャクリーヌ・ビセット



鼻のバーブラ・ストライザンドの喜劇『おかしなおかしな大追跡』(1971)

スターはどこへ行く
この五ページにあげたのが、ニュー・シネマ以後のすべてのスターではない。映画ファンなら、たどころにこの倍くらしいスターの名をあげられるだろう。では、現代はスターの氾濫時代なのだろうか。逆である。いわゆるスーパースターは五指に足りないくらいしかいないし、そのスターの質も黄金時代とは変わってきている。映画と個性がうまくかみあえばたちまちスターになれるし、うまくいかないスターの座をおりねばならない。そういう時代に変貌したのだ。
ニュー・シネマとともに、ドロップ・アウトもしくは反体制派俳優が続出した。映画の中だけのみならず、実生活でもそうした思想をつらぬき、それがスターたるもののアイデンティティのごとくみられる時代が生まれた。スターのイメージは、かつての神話時代とすっかり変わってしまったのである。
スターはどこへ行くのか？(H)



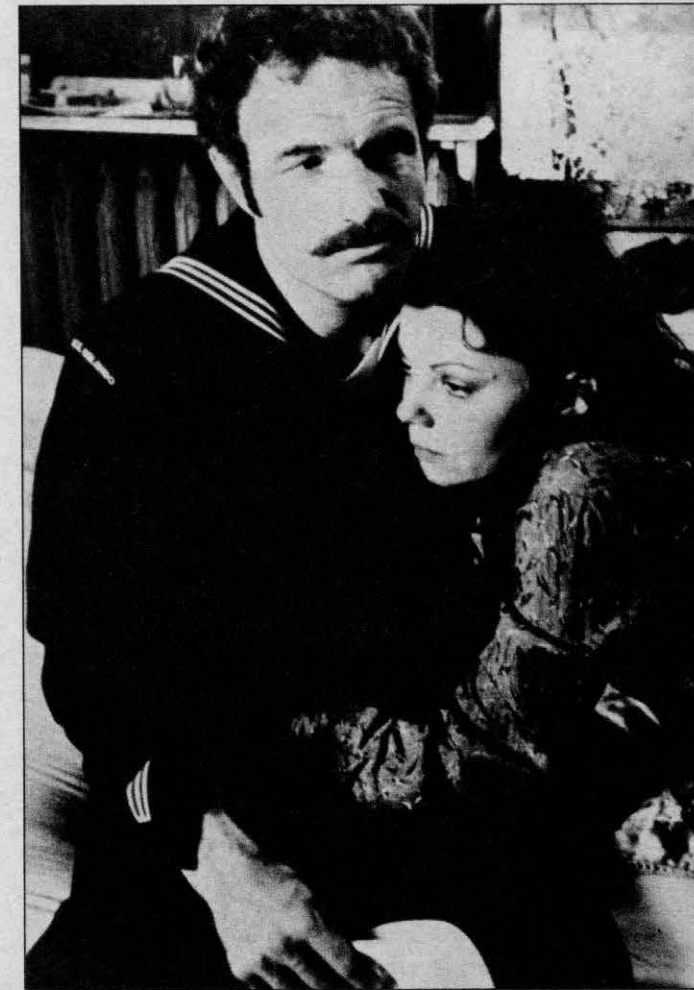
『脱出』(1971)でセックス・アピールを見せたバート・レイノルズ



『ある愛の詩』(1970)のライアン・オニールとアリ・マッグロー



『ふたり自身』(1973)のシビル・シェパードはいかにも割り切った美女



『シンデレラ・リバティ』(1973)でジェームズ・カーンは人気爆発

懐しの映画主題歌

アカデミー賞音楽部門主題歌賞受賞作品(1934~1975)



1934年

The Continental (「コンチネンタル」)
作曲||コン・コンラッド
作詞||ハーブ・マジソン

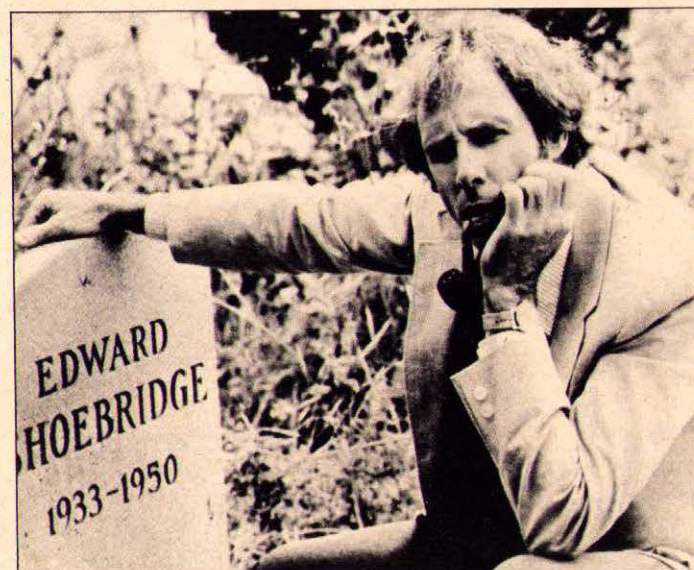
映画がサウンド時代を迎えてから、今年でちょうど五十年。それまでのサイレント映画時代にも短編トリーキーは幾つかあったようだが、歌やせりふを入れた劇映画としては、昭和二年に制作された、アル・ジョルスン主演の『ジャズ・シンガー』が、トリーキー映画の幕開けとされている。

今日いうところの映画主題歌は、当然のことながら、トリーキーの産物である。アカデミー賞が設定されたのが、トリーキー時代突入とほぼ歩調を合わせた昭和三年(一九二八)のこと。六年後の昭和九年に、音楽部門の賞が加えられた。主題歌賞とベスト・スコア賞である。主題歌賞授賞の対象は全米一般公開を目的に制作された商業映画で、該当年度の元日から十二月三十一日までの間に、ロサンゼルスで一週間以上連続興業を行なった三五ミリまたは七〇ミリ映画に使われた、歌詞つきの曲ということになっている。それも、映画用の録音前に舞台や放送などで使われていない、その映画のためのオリジナル・ソングでなければならぬ。選抜方法は、映画芸術アカデミー会員の投票により五曲以内のノミネート曲が選ばれ、その中の一つが受賞曲となる。過去四十二年間の受賞曲四十二曲すべてのオリジナル楽譜の表紙をここに紹介してみた。

川上博



現在最も期待されている男 ロバート・デニロ 『ゴッドファーザー PART II』(1974)について主演作が目白押し



『ファミリー・プロット』(1976)のブルース・ダン



『ラスト・アメリカン・ヒーロー』(1973)のジェフ・ブリッジス



＊巻末の「年表」を除き、日本で劇場公開された映画作品は「」で包み、それ以外のものには「」を付した。

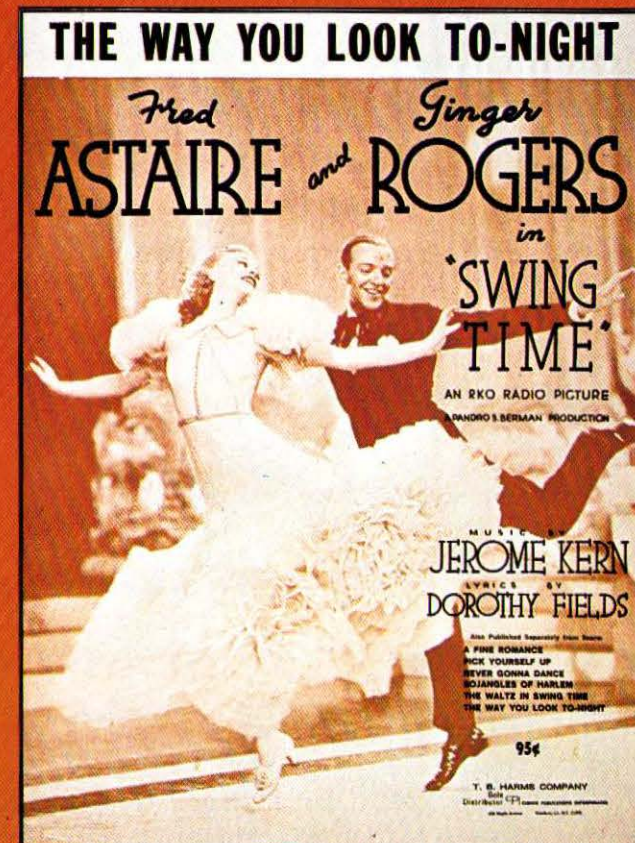
『ラスト・ショー』(一九七二)で演技力も認められたティモシー・ボトムズ



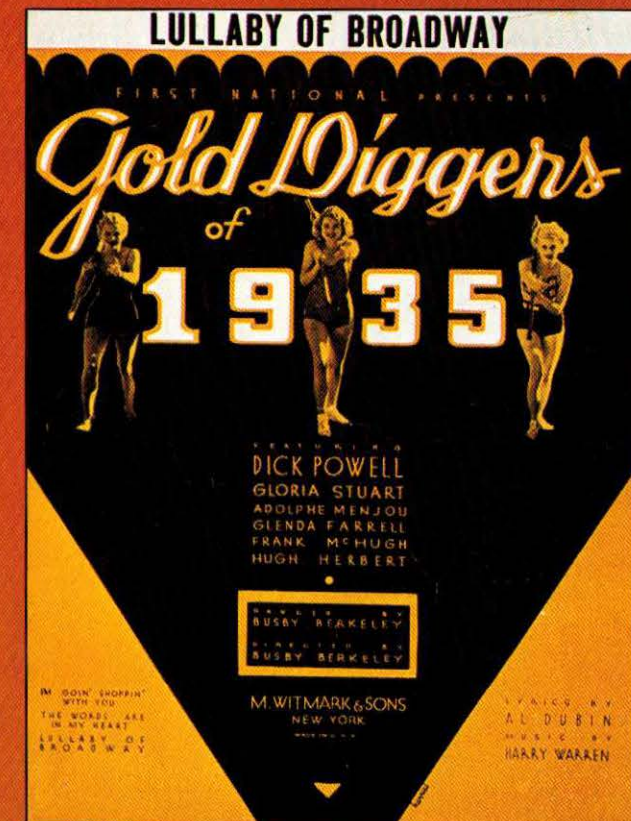
『明日に処刑を……』(1972)のデイヴィッド・キャラダイン



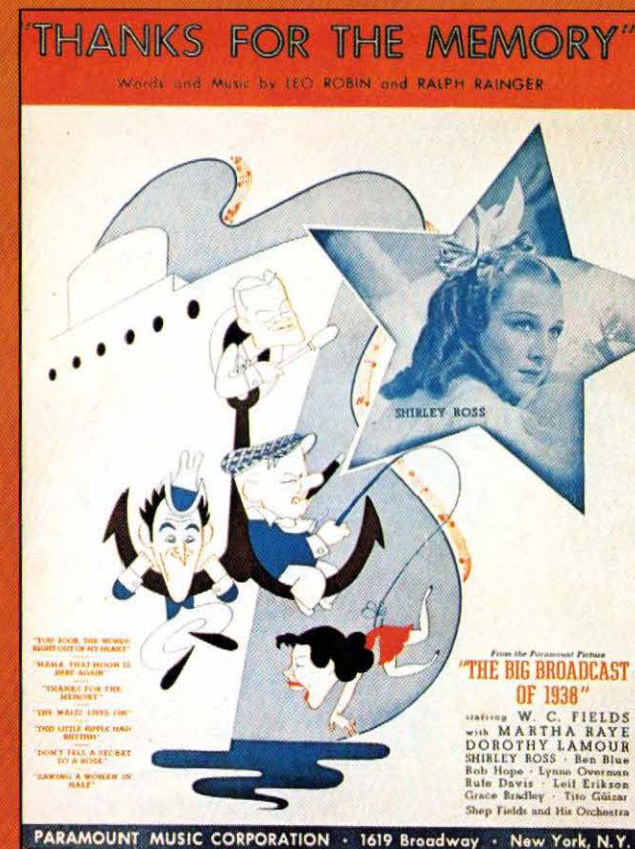
1939年 Over the Rainbow (『オズの魔法使』)
作曲=ハロルド・アーレン
作詞=E・Y・ハーバーク



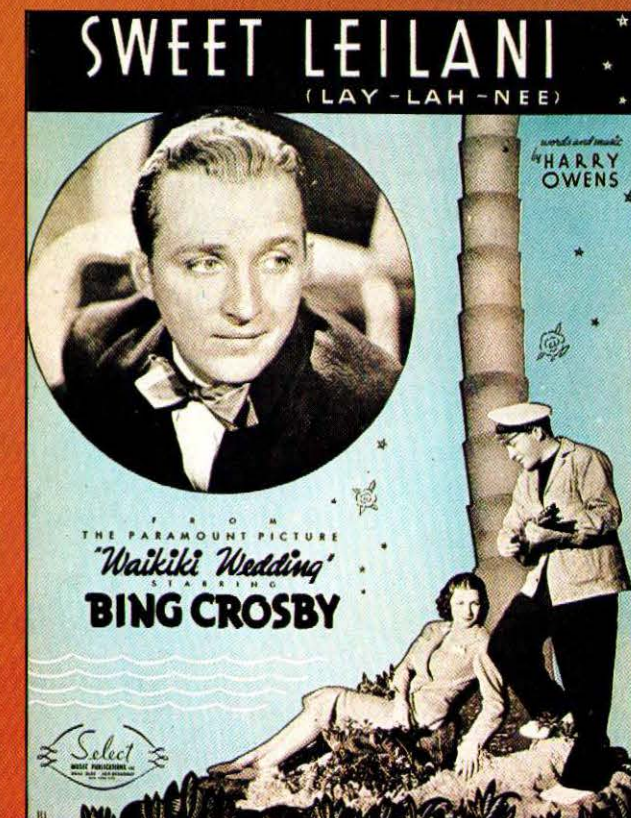
1936年 The Way You Look To-night (『有頂天時代』)
作曲=ジェローム・カーン
作詞=ドロシー・フィールズ



1935年 Lullaby of Broadway (『ゴールドディガース』)
作曲=ハリー・ウォーレン
作詞=アル・デュービン



1938年 Thanks for the Memory (『三八年の大放送』)
作曲=ラルフ・レインジャー
作詞=レオ・ロビン



1937年 Sweet Leilani (『ワイキキの結婚』)
作曲・作詞=ハリー・オーウェンズ



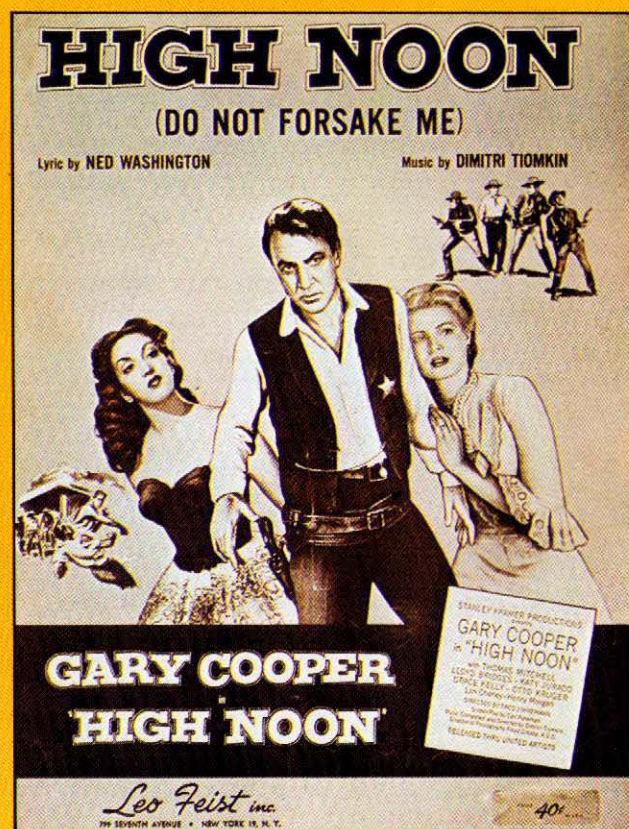
1951年 In the Cool, Cool, Cool of the Evening (『Here Comes the Groom』)
作曲=ホーギー・カーマイケル
作詞=ジョニー・マーサー



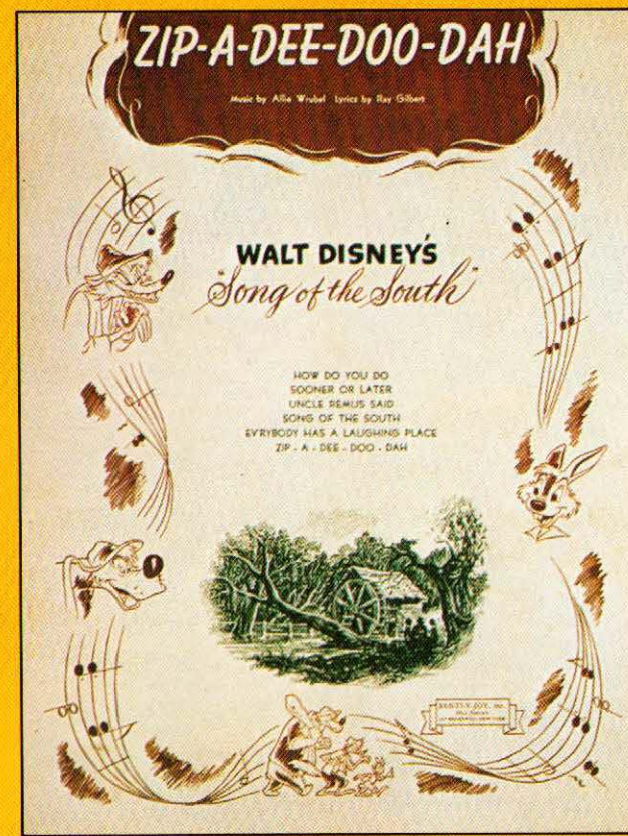
1950年 Mona Lisa (『別働隊』)
作曲・作詞=レイ・エヴァンス,
ジェイ・リヴィングストン



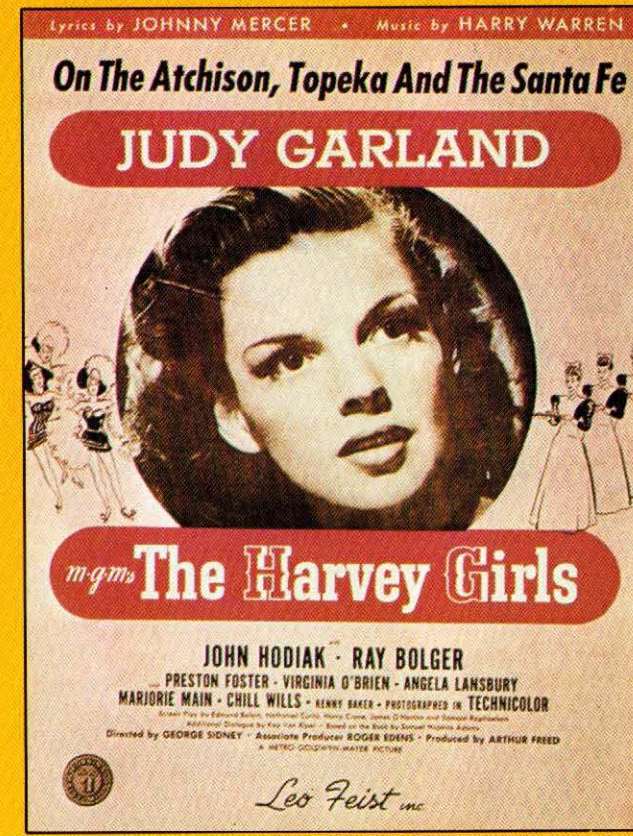
1953年 Secret Love (『カラミティ・ジェーン』)
作曲=サミー・フェイン
作詞=ポール・フランシス・ウェブスター



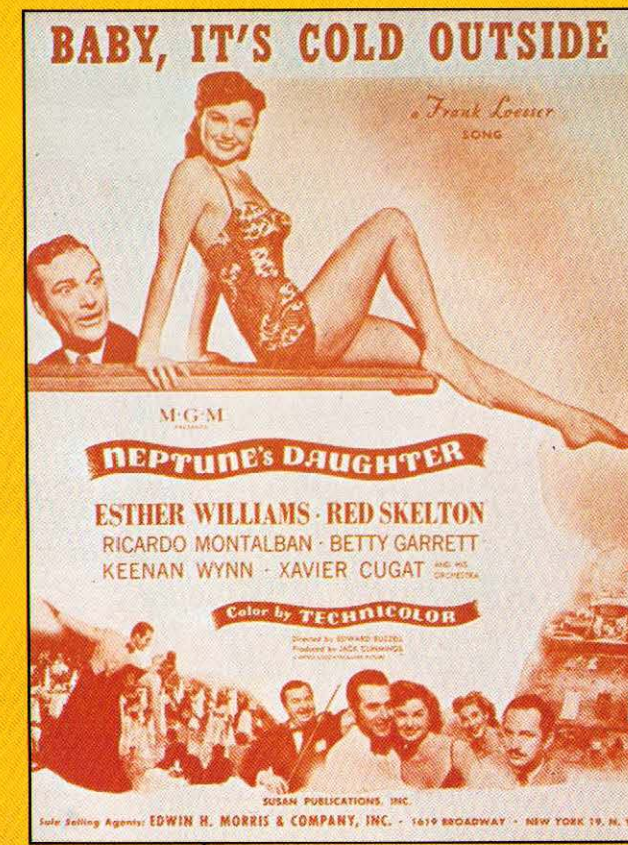
1952年 High Noon (『真昼の決闘』)
作曲=ディミトリ・ティオムキン
作詞=ネッド・ウォシントン



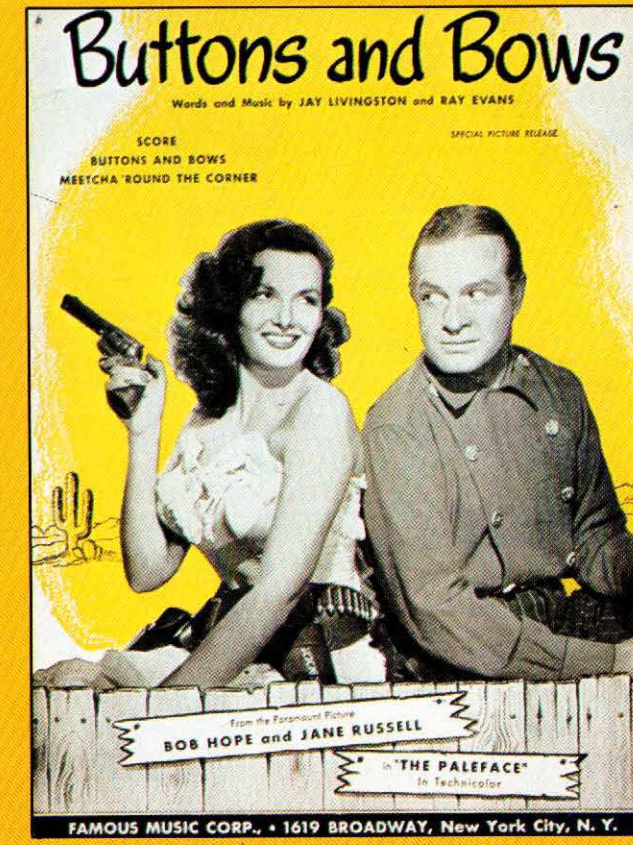
1947年 Zip-a-Dee-Do-DAH (『南部の唄』)
作曲=アリー・ルーベル
作詞=レイ・ギルバート



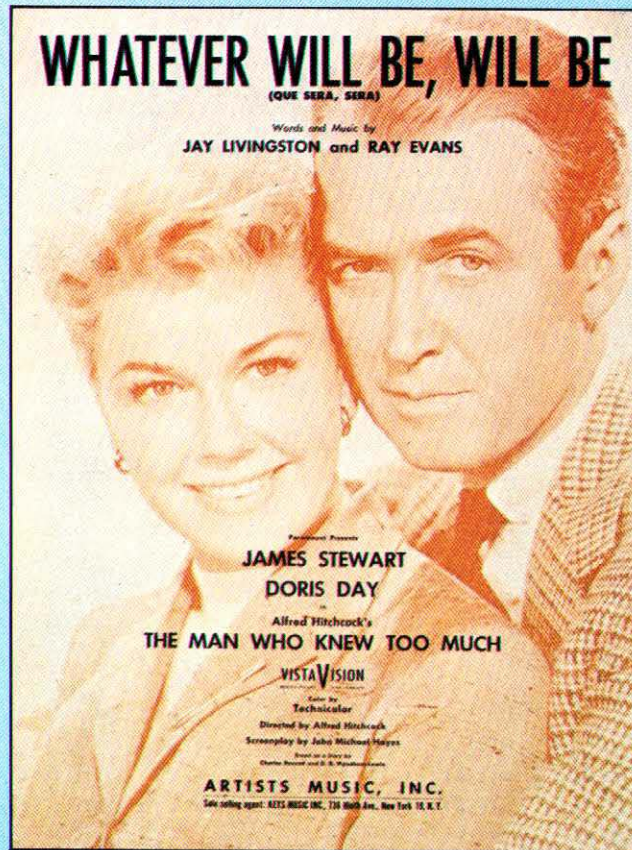
1946年 On the Atchison, Topeka and Santa Fe (『The Harvey Girls』)
作曲=ハリー・ウォーレン
作詞=ジョニー・マーサー



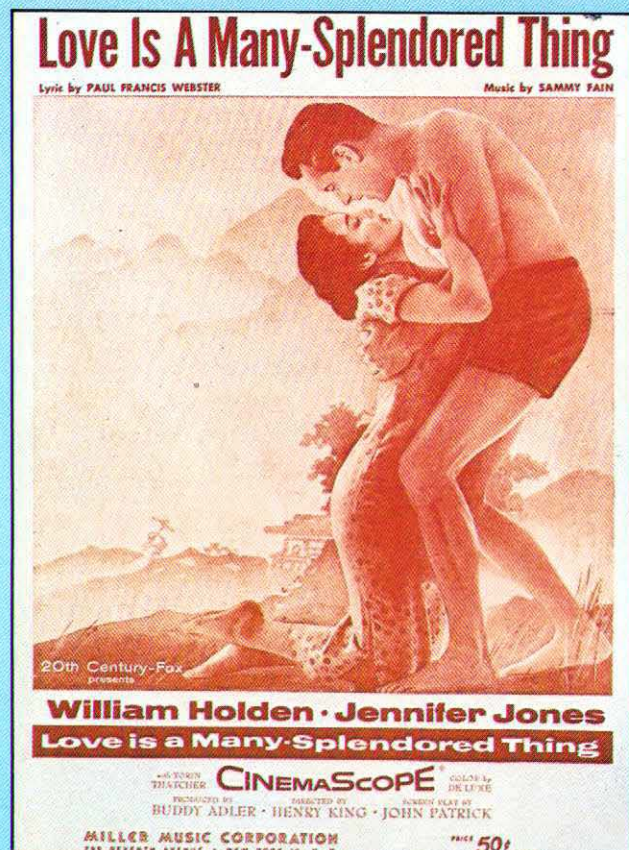
1949年 Baby, It's Cold Outside (『水着の女王』)
作曲・作詞=フランク・レッサー



1948年 Buttons and Bows (『腰抜け二挺拳銃』)
作曲・作詞=ジェイ・リヴィングストン,
レイ・エヴァンス



1956年 Whatever Will Be, Will Be (Que Sera, Sera)
(『知りすぎていた男』)
作曲・作詞=レイ・エヴァンス、ジェイ・リビングストン



1955年 Love Is A Many-Splendored Thing (『慕情』)
作曲=サミー・フェイン
作詞=ポール・フランシス・ウェブスター

この四ページに並んでいるのは、昭和二十一年から三十一年までのオスカー・ウィナーである。この十一本の作品中、「ハーヴィ・ガールズ」と「ヒア・カムス・ザ・グルーム」を除く九本がわが国でも上映され、「ボタンとリボン」「モナ・リザ」「ハイ・ヌーン」「シークレット・ラブ」「慕情」など、ヒットした歌も多く、おなじみのはず。

アラン・ドロンが出ていた映画『別働隊』は、さほど評判にもならなかったが、劇中、バルチザンの合図の口笛として印象的に扱われた「モナ・リザ」は、『シンデレラ姫』の中の「ビディ・バビディ・ブー」や、マリオ・ランザの「ビー・マイ・ラブ」を凌いでオスカーを獲得、映画とは直接関係のないナット・キング・コール吹込みのレコードで大いにはやった珍しい例。ゲイリー・クーパの『真昼の決闘』に、テックス・リッターの波い声で流れた「ハイ・ヌーン」は、『腰抜け二挺拳銃』や『カラミティ・ジェーン』のような、西部を舞台にしたコメディやミュージカルは別として、本格的西部劇主題歌として、初めての受賞曲といつてよい。「水着の女王」でエスター・ウィリアムズとリカルド・モンタルバン、そしてレッド・スケルトンとベティ・ギャレットが掛け合いで歌った「お外は寒い」は、面白い歌ではあったが、オスカー・ソングには『愚かなり我が心』のほうがふさわしいというのが、当時の一般の評価であった。

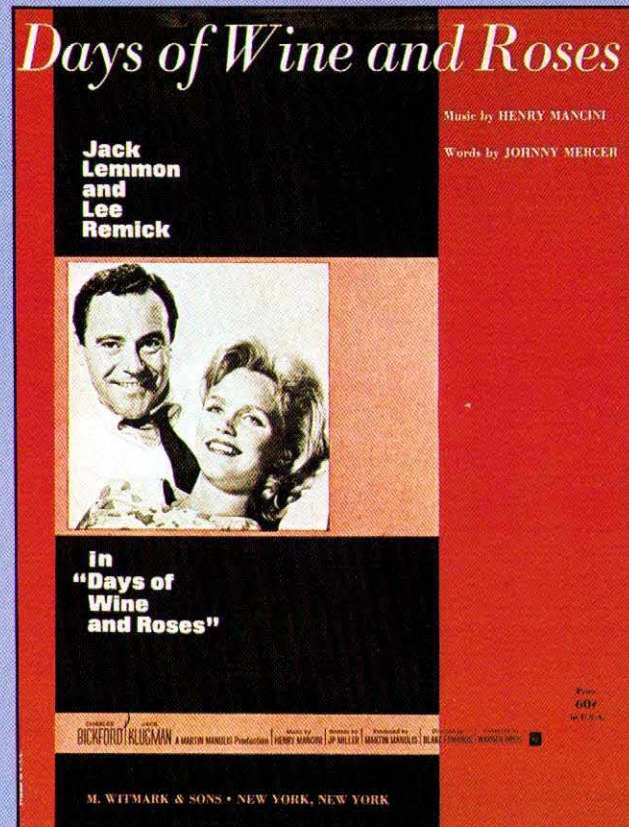
「ボタンとリボン」は、ジェーン・ラッセルとボブ・ホープの傑作コメディでボブが歌ったものだが、わが国でも、ダイナ・シヨアのレコードや、あやしげな歌詞の替え歌がはやった。

アカデミー主題歌賞を生んだ映画で黒白からカラーに移ったのは、昭和十四年の『オズの魔法使』からで、大型スクリーンになるのは、昭和二十九年のシネマスコープ作品『愛の泉』から。この年、『愛の泉』の受賞に異論はないが、『ホワイト・クリスマス』から『眠れぬ夜は』、『スタア誕生』から『去り行く君ゆえ』の有力なノミネートがあった。この二曲とも、最近のTV放映版『ホワイト・クリスマス』、『スタア誕生』からはずされていたのは、どうしたことか。

『慕情』は、イントロのメロディが、ブッチーニのオペラ『お蝶夫人』のアリア「ある晴れた日に」に似ていると騒がれたが、一部似た旋律になったとしても、すばらしい新曲に違いはなく、授賞対象として支障はなかった。この間に、ドリス・デイが歌った曲「シークレット・ラブ」「ケ・セラ・セラ」の二曲が選ばれている。



1954年 Three Coins in the Fountain (『愛の泉』)
作曲=ジュール・スタイン
作詞=サミー・カーン



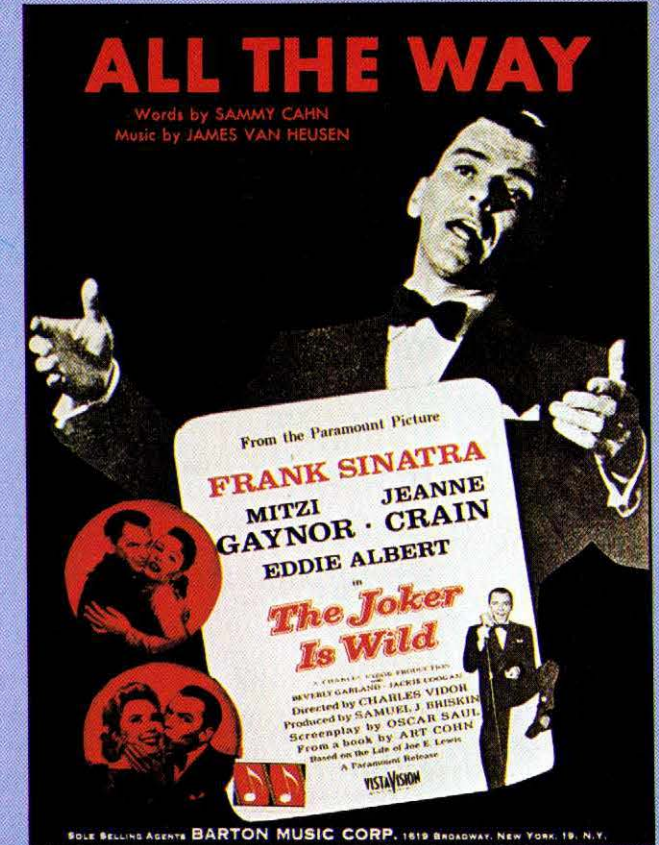
1962年 Days of Wine and Roses (『酒とバラの日々』)
作曲=ヘンリー・マンシーニ
作詞=ジョニー・マーサー



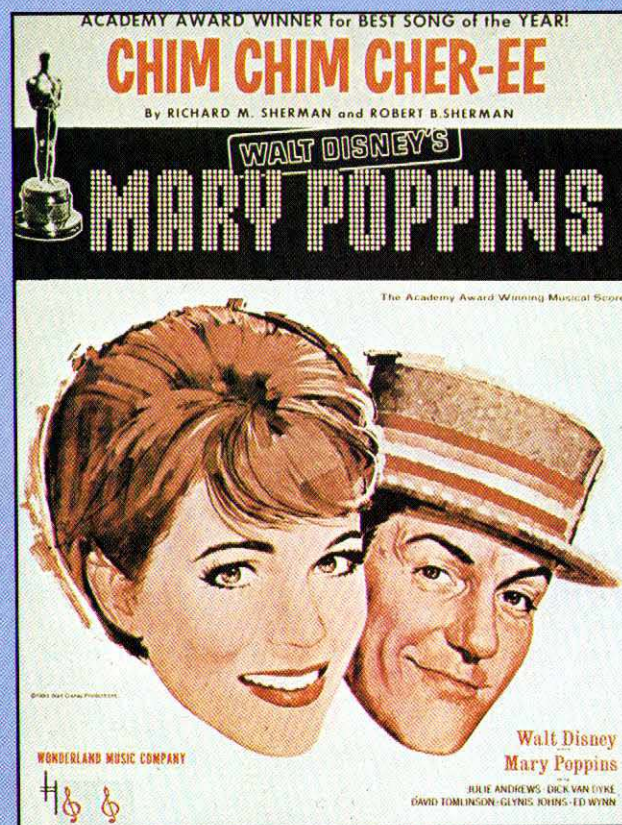
1961年 Moon River (『ティファニーで朝食を』)
作曲=ヘンリー・マンシーニ
作詞=ジョニー・マーサー



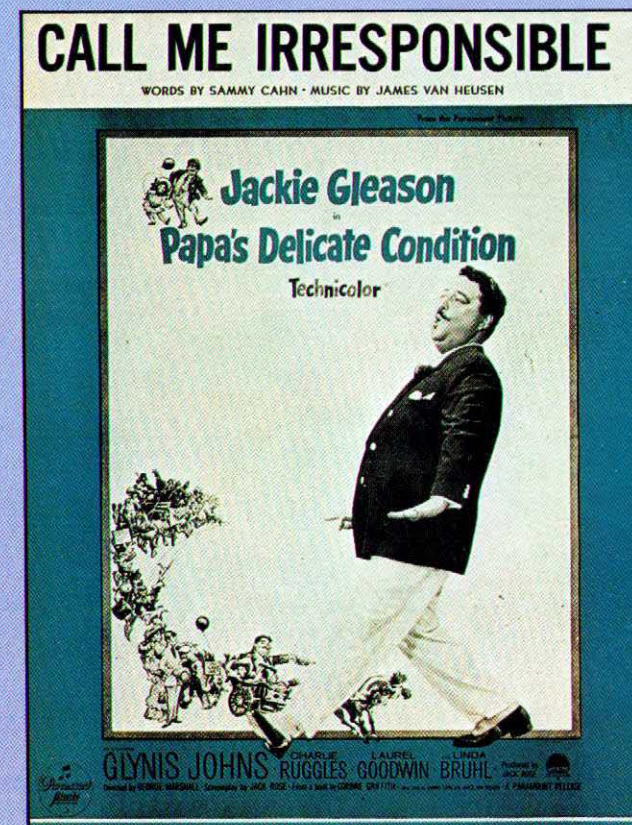
1958年 Gigi (『恋の手ほどき』)
作曲=フレデリック・ロー
作詞=アラン・ジェイ・ラーナー



1957年 All the Way (『抱擁』)
作曲=ジェームズ・ヴァン・ヒューゼン
作詞=サミー・カーン



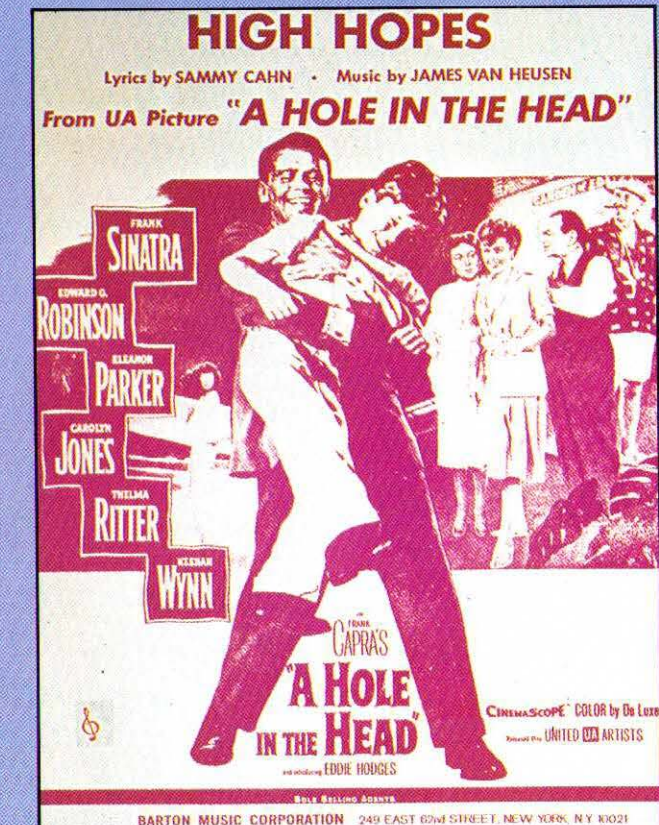
1964年 Chim Chim Cher-ee (『メリー・ポピンズ』)
作曲・作詞=リチャード・M・シャーマン、
ロバート・B・シャーマン



1963年 Call Me Irresponsible (『パパは王様』)
作曲=ジミー・ヴァン・ヒューゼン
作詞=サミー・カーン



1960年 Never on Sunday (『日曜はダメよ』)
作曲・作詞=manos・ハジダキス
英詞=ビリー・タウン



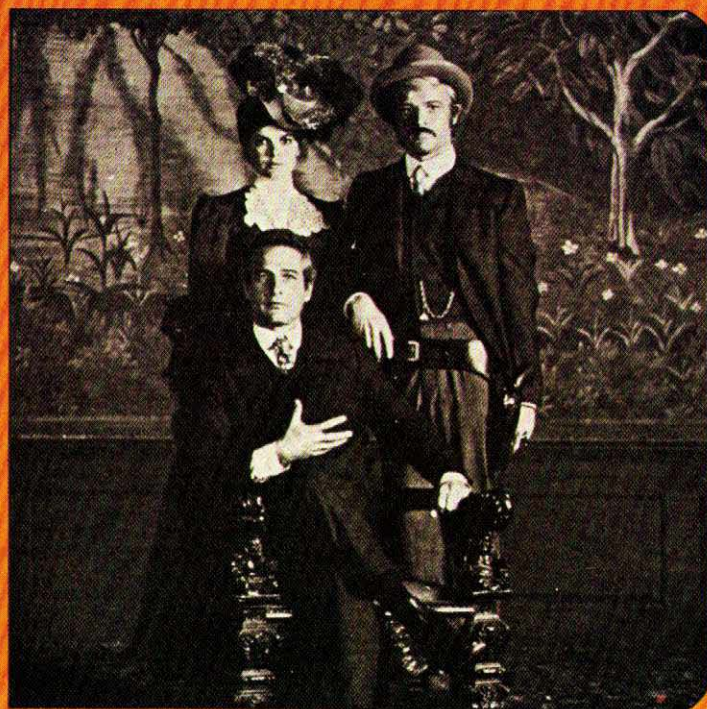
1959年 High Hopes (『波も涙も暖かい』)
作曲=ジェームズ・ヴァン・ヒューゼン
作詞=サミー・カーン

X52026b (From the 20th CENTURY-FOX Film 'BUTCH CASSIDY AND THE SUNDANCE KID')

RAINDROPS KEEP FALLIN' ON MY HEAD

Lyric by HAL DAVID

Music by BURT BACHARACH



20TH CENTURY-FOX PRESENTS
PAUL NEWMAN
ROBERT REDFORD
KATHARINE ROSS

"BUTCH CASSIDY AND THE SUNDANCE KID"

A GEORGE ROY HILL-PAUL MONASH PRODUCTION
Co-starring STROTHER MARTIN, JEFF COREY, HENRY JONES
EXECUTIVE PRODUCER PAUL MONASH - PRODUCED BY JOHN FOREMAN
DIRECTED BY GEORGE ROY HILL - WRITTEN BY WILLIAM GOLDMAN
MUSIC COMPOSED AND CONDUCTED BY BURT BACHARACH
A NEWMAN-FOREMAN PRESENTATION - PANAVISION® - COLOR BY DELUXE



ACADEMY
AWARD
WINNER

BLUE SEAS MUSIC, INC., JAC MUSIC CO., INC. and TWENTIETH CENTURY MUSIC CORP.
BLUE SEAS MUSIC, LTD., JAC MUSIC CO., LTD. and TWENTIETH CENTURY MUSIC CORP., LTD.

CHARLES HANSEN MUSIC and BOOKS / 1860 Broadway / New York, New York 10023

\$1.00
20p

1969年

Raindrops Keep Fallin' on My Head
(「明日に向かって撃て」)
作曲リチャード・バカラック
作詞ハル・デイヴィッド

Columbia Pictures and Carl Foreman present

VOCAL



BORN FREE

Lyric by Don Black

Music by John Barry



CHARLES HANSEN MUSIC and BOOKS
1860 Broadway, New York, New York 10023

SCREEN GEMS-COLUMBIA MUSIC, INC. \$1.00
SCREEN GEMS-COLUMBIA MUSIC LTD. 20p

1966年 Born Free (『野生のエルザ』)

作曲=ジョン・バリー

作詞=ドン・ブラック

LOVE THEME FROM "THE SANDPIPER"

(The Shadow Of Your Smile)

Lyric by PAUL FRANCIS WEBSTER

Music by JOHNNY MANDEL

METRO-GOLDWYN-MAYER and FILMWAYS
ELIZABETH TAYLOR
RICHARD BURTON
EVA MARIE SAINT
IN MARTIN RANSCHOFF'S PRODUCTION

the Sandpiper



COLUMBIAN
CHARLES BRONSON
ROBERT WEBBER
DANIEL TRUMBULL
MICHAEL WILSON
BRENE CAMP - LOUIS KAMP
MARTIN RANSCHOFF
VINCENTE MANELLI

WHEN PERFORMING THIS COMPOSITION PLEASE GIVE ALL PROGRAM CREDITS TO
MILLER MUSIC CORPORATION
1240 BROADWAY - NEW YORK 10, N.Y.



PRICE 75¢

1965年 The Shadow of Your Smile (『いそしぎ』)

作曲=ジョニー・マンデル

作詞=ポール・フランシス・ウェブスター

THE WINDMILLS OF YOUR MIND

THEME FROM "The Thomas Crown Affair"

Lyric by MARILYN and ALAN BERGMAN

Music by MICHEL LEGRAND



The Thomas Crown Affair
Steve McQueen
Faye Dunaway
A Norman Jewison Film
Paul Burke - Jack Weston
Music by Michel Legrand
Lyrics by Marilyn Bergman & Alan Bergman

United Artists Music

UNITED ARTISTS MUSIC CO., INC.
NEW YORK, N.Y.

55¢

20p

1968年 The Windmills of Your Mind (『華麗なる賭け』)

作曲=ミシェル・ルグラン

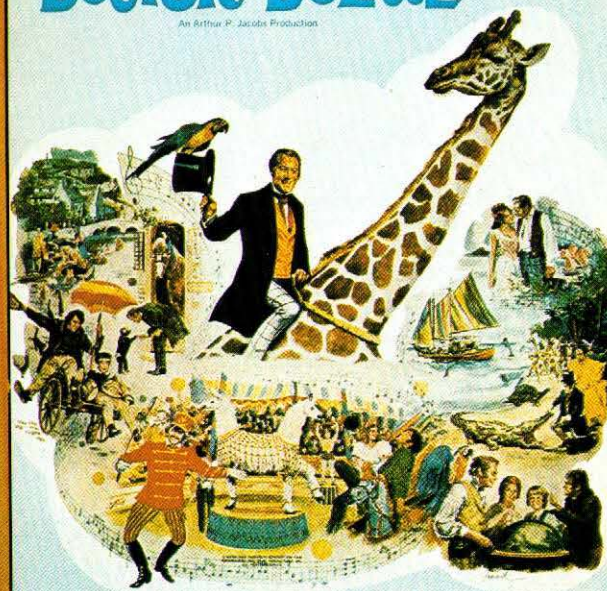
作詞=アラン & マリリン・バーグマン

TALK TO THE ANIMALS

Words and Music by LESLIE BRICUSSE

DOCTOR DOLITTLE

An Arthur P. Jacobs Production



WHEN PERFORMING THIS COMPOSITION PLEASE GIVE ALL PROGRAM CREDITS TO
HASTINGS MUSIC CORPORATION
2200 Avenue of the Stars - New York, N.Y. 10020

75¢

1967年 Talk to the Animals (『ドリトル先生不思議な旅』)

作曲・作詞=レスリー・ブリカス

シナトラは、歌手としての人気を背景に映画界入りし、一時壁にぶつかっていたが、その後演技派に転じて、昭和二十八年「地上より永遠に」でアカデミー助演賞を獲得、立ち直ったのは有名な話。そのシナトラが歌ったオスカー・ソングが、「愛の泉」のほか二つある。ナイトクラブの人気歌手でコメディアンだったジョー・E・ルイスの伝記映画「抱擁」で彼が歌った「オー・ル・ザ・ウェイ」と、心暖まる父性愛物語「波も涙も暖かい」で子供たちと歌う「ハイ・ホープス」。シナトラは、故ケネディ米大統領と親しかったこともよく知られているが、昭和三十年のアメリカ大統領選挙のとき、民主党は「ハイ・ホープス」(望みを高く)をキャンペーン・ソングに使い、見事、勝利を得た。シナトラの先輩ビング・クロスビーは、「スイート・レイラニ」、「ホワイト・クリスマス」(星にスイング)、「涼しき宵に」で、四回、オスカー・ソングに縁があった。ついでに触れると、オスカーを最も多く受けている主題歌作曲家はジェームズ・ヴァン・ヒューゼンの四回、作曲家ではサミー・カーン、ジョニー・マーサーのおおの四回である。

外国映画の主題歌にオスカーが授けられるのはきわめてまれなことだが、アカデミー賞規約の改正もあって、昭和三十五年、初めてギリシャ映画「日曜はダメよ」で、メリナ・メルクリリが歌った、マノス・ハジダキス作詞作曲の主題歌が受賞した。今や売れっ子映画音楽作家の一人ヘンリー・マンシーニは、昭和三十六年、「ティファニーで朝食を」で、劇映画音楽賞を獲得すると同時に、「ムーン・リバー」で主題歌賞と、両手に花の榮譽に輝いた。彼はその翌年、「酒とバラの日々」で連続受賞、その後も「シャレード」「ディア・ハート」「グレート・レース」で何度かノミネートされ、マンシーニ時代を現出させた。彼の手法は、主題歌をスターに歌わせたり、歌手を起用して歌を挿入したり、ということをやらず、オスカー・ソングとコーラスを使ってサウンドトラック用の録音をまざる。サントラのレコード化は認めず、別にスタジオで、オリジナル・スコアを使って、自ら指揮するオーケストラとコーラスにより、レコード用の吹込みを行なう。昭和四十年ごろから、英国制作のアメリカ映画や国際合作映画がふえてくると、欧州の作曲家が顔を出す機会もふえてくる。英国のジョン・バリーによる「野生のエルザ」、レスリー・ブリカスの「ドリトル先生不思議な旅」、フランスのミシェル・ルグランの「華麗なる賭け」などである。

★製作監督(前作に続き)同作の「ピンクパンサー」シリーズ

ギヤグもスケールも100倍になって
日本列島を笑いの洪水で沈没させます

世界が待った最新作
公開はもうすぐ!

ピンクパンサー3

ピーター・セラーズ
ハーバート・ロム
パート・ウオーク
コリン・プレイクリー
レスリー・アン・ダウン

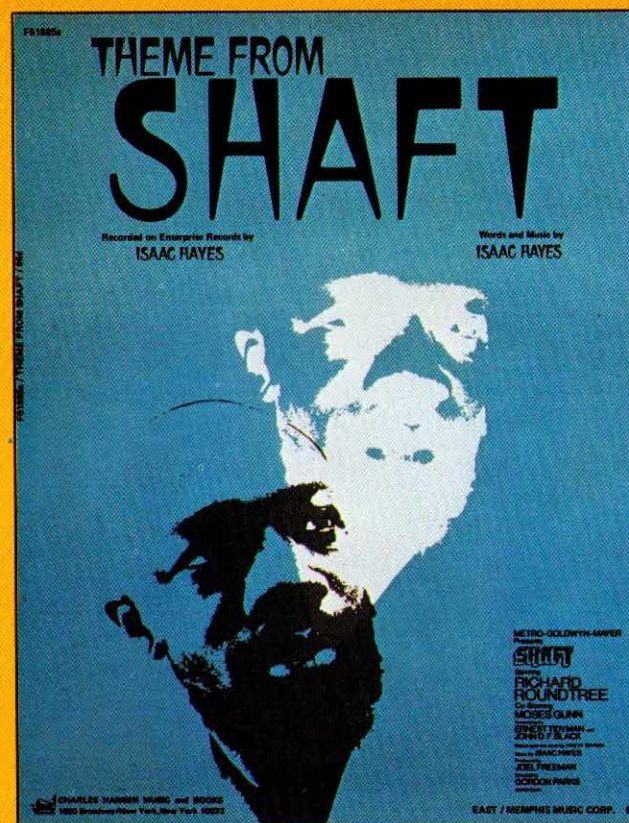
「THE PINK PANTHER STRIKES AGAIN」
共同製作トニー・アダムス●音楽ヘンリー・マンシーニ
脚本ブレイク・エドワーズ/フランク・ウォルドマン
United Artists ユナイテッド映画
陽春全国縦断ロードショー

みゆき座 新宿文化
渋谷文化 横浜相鉄



1972年 Morning After (『ポセイドン・アドベンチャー』)
作曲=ジョエル・ハーシュホーン
作詞=アル・カシャ

過去六回の受賞曲は、まだ記憶に新しいところ。それ以前とは傾向ががらりと変わって、ポピュラー・ソングや流行リズムの影響がみられよう。「ふたりの誓い」は、人気デュエット、ザ・カーペンターズが歌って、ビッグ・ヒット。ソウル・ミュージックが映画音楽の分野にも進出。アイザック・ヘイズの「黒いジャガー」が、リズム&ブルース、ソウルを通じて初のオスカー・ソングとなった。もっともこの年、昭和四十六年は、「コッチおじさん」ほかの対抗作品がいずれも弱く、主題歌不作の年でもあった。パニック映画大流行を反映させたのが、「ポセイドン・アドベンチャー」の「モーニング・アフター」と「タワリング・インフェルノ」。いずれも、モーリン・マクガヴァーンが歌ったもので、それまで無名だった彼女を一躍スター歌手にしてしまった。その間にバーブラ・ストライサンドが歌って「追憶」が入ったが、これは久しぶりにオーソドックスなラブ・バラッドであった。そして一番新しいところが「ナッシュビル」の「アイム・イージー」。バーブラの「ファニー・レディ」やダイアナ・ロスの「マホガニー物語」のテーマを退けての受賞で、カントリー・ソングの底力を見せた一幕であった。



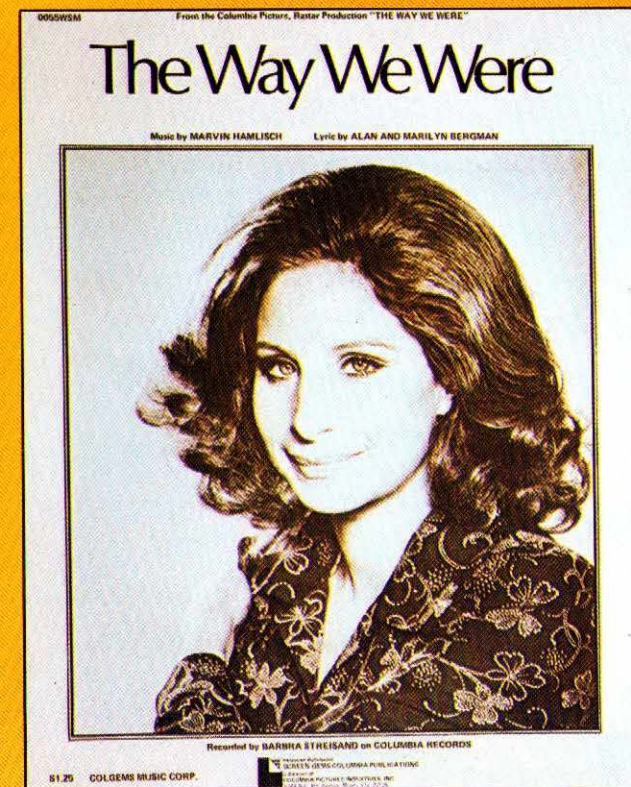
1971年 Theme from 'Shaft' (『黒いジャガー』)
作曲・作詞=アイザック・ヘイズ



1974年 We May Never Love Like This Again (『タワリング・インフェルノ』)
作曲・作詞=アル・カシャ、ジョエル・ハーシュホーン



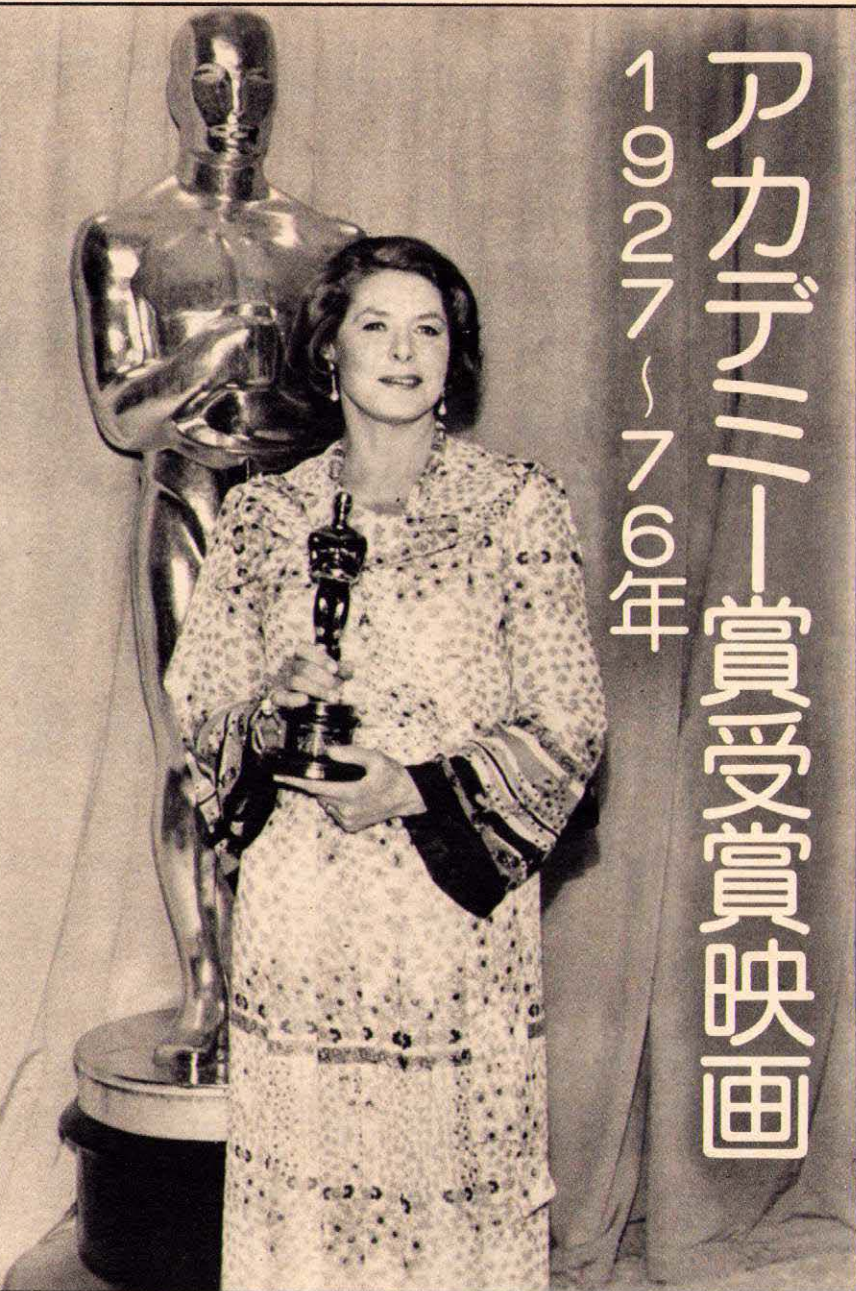
1970年 For All We Know (『ふたりの誓い』)
作曲=フレッド・カーリン
作詞=ロブ・ウィルソン/アーサー・ジェームズ



1973年 The Way We Were (『追憶』)
作曲=マーヴィン・ハムリッシュ
作詞=アラン & マリリン・バーグマン

オスカーの50年

構成 野口久光



『オリент急行殺人事件』で3度目のオスカーを手にしたイングリッド・バーグマン

アカデミー賞受賞映画 1927〜76年

アカデミー賞半世紀の歩み

映画ファンにとってのしみな、そして気もめることの一つに毎年行なわれる「アカデミー賞」の発表がある。毎年四月に前年度最良の作品をはじめ、監督、主演男女優、脇役男女優、シナリオ・ライターから撮影監督、作曲家に到る数多くの部門賞がハリウッドで発表と式典を兼ねて行なわれてきた。アメリカではその模様が全米にテレビで中継放送され、新聞も大きく報道する。その結果は日本にも翌日の新聞に載り、映画や娯楽雑誌は写真とともに受賞のトップなどを華やかに紹介するのがいつからかしきたりになっている。

「アカデミー賞」の賞牌にあたる「オスカー像」も映画ファンにおなじみであるが、この映画界の世界的な行事も一九七七年には発足以来五十年を迎えようとしている（一九七七年度の作品を対象に選出するのは一九七八年の春である）。そこでひと足早いことになるが、アカデミー賞の半世紀を写真と記録によって振り返ってみようというわけである。同時に、そもそもアカデミー賞というものが、いったんどういう組織体でどういうやり方で「賞」を決めるのかということも改めてご紹介することにしよう。

まず、「アカデミー」という略称で呼ばれている組織だが、そのフル・ネームは「アカデミー・オブ・モーション・ピクチャ・アーティスト・アンド・サイエンシズ」、つまり「映画芸術および科学振興会」ともいうべき組織団体、協会で、アメリカでの略称はAMPAS（アンパス）である。

この協会の創立は今から五十年前の一九二七年で、当時そしてその後も長い間MG Mの社長、会長をつとめてきた故ルイス・B・メイヤーがハリウッドの主な会社の首脳、第一線の監督、スター、技術関係者に呼びかけて設立、映画の芸術性を高め、科学面でのより一層の研究、進歩を目指す推進機関としてスタートしたのだった。発足当時のメンバーは三十

4071ISM

From The Motion Picture "NASHVILLE"

I'M EASY

Words and Music by KEITH CARRADINE

ACADEMY
AWARD
WINNER



abc Music

AMERICAN BROADCASTING MUSIC, INC.
LION'S GATE MUSIC CO. / EASY MUSIC

\$1.50

1975年

I'm Easy (『ナッシュビル』)

作曲・作詞=ケイス・キャラダイン

1927 ~28 第1回

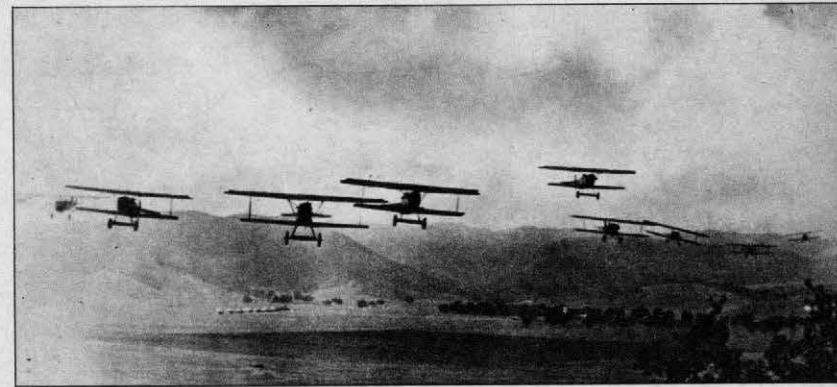
作品賞 『つばさ』(技術効果賞)
主演男優賞 エミール・ヤニングス(『肉体の道』『最後の命令』)
主演女優賞 ジャネット・ゲイナー(『第七天国』『街の天使』)
監督賞 フランク・ボーザージ(『第七天国』) ルイス・マイル
ストン(『美人国』二人行脚)
「作品賞候補」『最後の命令』『裏切者』『第七天国』(脚本賞)『肉
体の道』
〔以下、本欄では、多くの授賞部門のうち主要項目だけを掲げ、
他部門でも受賞した作品は括弧内にそれを示した。〕



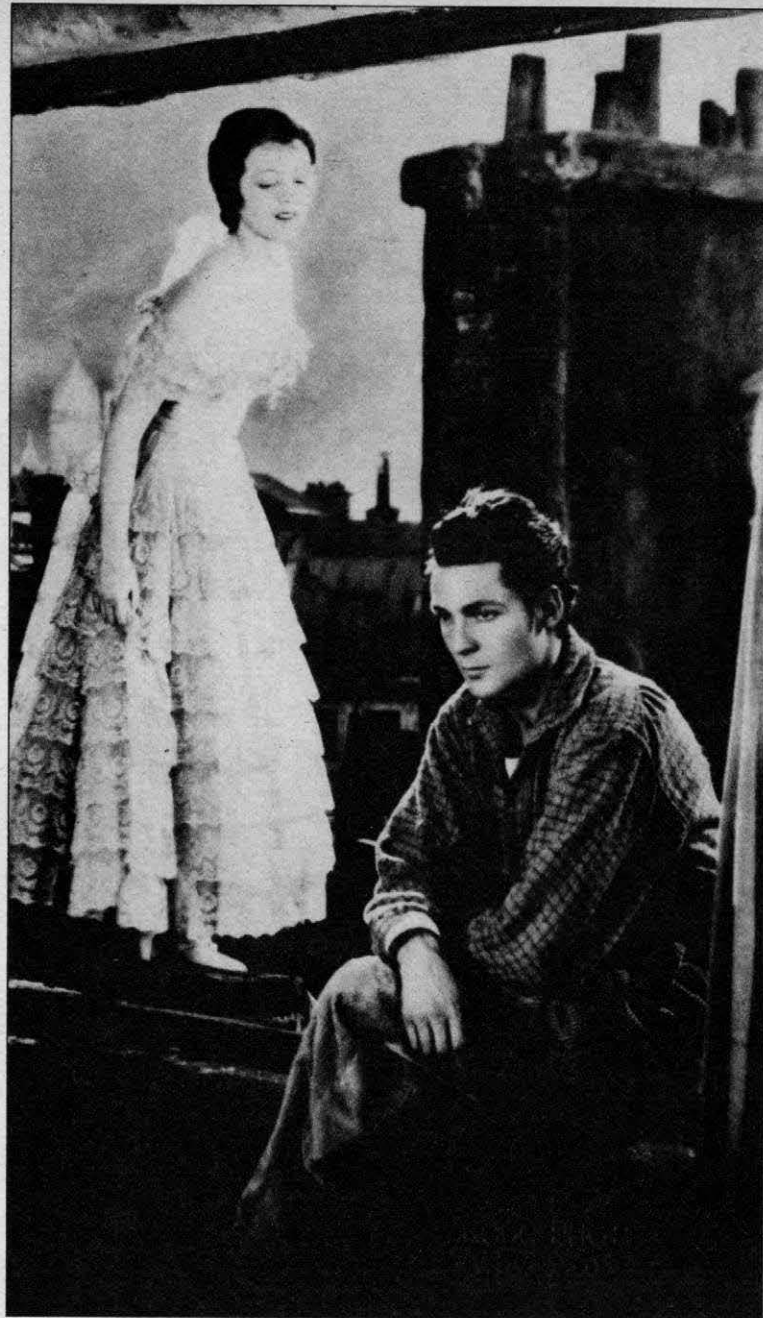
第1回の作品賞の栄を獲得した『つばさ』(W・A・ウェルマン監督)



名優ヤニングスはV・フレミングの『肉体の道』
(写真)とスタンバーグ『最後の命令』で主演賞を



航空シーンなど 当時としては画期的な撮影効果をみせた『つばさ』は技術効果賞も



監督賞を受けたF・ボーザージ『第七天国』 左=ジャネット・ゲイナー 右=チャ
ールズ・ファレル

第一回のアカデミー賞が発表された一九二八年(昭和三年)は映画が発明されてから三十三年間続いたサイレント映画時代の最後の年となった。すでに二年前からワーナーが試作的なトーキーを発表し、前の年の秋に公開したハート・トーキーの劇映画『ジャズ・シンガー』はセンセーショナルな話題を呼んでいたが、ハリウッドのほとんどの大会社幹部は、トーキーに対する異常な反響を一時的な現象とみて、ワーナーのあとを追おうとはしなかった。

「カス」などが封切られている。大多数の映画人やファンは、音のない映画こそ映画に最もふさわしい形式であると信じていた。十三部門のアカデミー賞受賞者、作品もまさにサイレント映画の黄金時代の成果と呼ぶのにふさわしいものであった。

ところが一年後の一九二九年度の第二回アカデミー受賞作品や人材をみると、大多数がトーキー作品とその出演者に変化している。つまりハリウッドの大会社は、一九二八年後半にいつせいにサイレント映画の製作を中止し、トーキー製作に切りかえたのである。

第一回に『最後の命令』と『肉体の道』で主演男優賞をとったドイツ出身のエミール・ヤニングスは、英語がまともにしゃべれないためにトーキー俳優として失格、翌年にはドイツ

に帰らなければならなかった。このほかにも舞台経験のない無声映画スタートーキーとともにハリウッドを去ったり、主役から一歩に端役に落とされた人もかなりいた。代わってブロードウェイの舞台俳優や歌手、ヴォードヴィリアンたちが、新しいトーキー時代のスターとして迎えられたのであった。

無声映画黄金時代がほとんど突如消え去るうとしていた一九二八年は、実はトーキー時代の夜明けだったのである。その第一回の特別賞受賞がトーキーの試作的な第一作『ジャズ・シンガー』で、その後もトーキーに反対し続けたチャップリンに贈られたのはなかなか意味深長であるとおもう。

アカデミー賞はこうしたハリウッド始まって以来の激動期に歴史的なスタートを切ったのだ。 (野口)

六人、初代会長は無声映画時代の大スター、ダグラス・フェアバンクス(シーニア)だった。その資金はハリウッドの映画会社、メンバーが持ち寄り、会合や専門家の研究会などのために会場を提供したり、大規模なフィルム・ライブラリー、資料館を充実して行くことであつた。そこにはハリウッド映画の芸術性を高め、技術面での新しい開発研究という立派な趣旨とともに、アメリカ映画の芸術性、映画産業の力を世界に誇示したいというもう一つの目的もあつたわけで、それが翌一九二八年から年中主催行事として行なわれるようになった優秀作品、すぐれた監督、俳優、技術者などを選出、授賞する「アカデミー賞」である。

第一回の「アカデミー賞」は、一九二八年に前年からその年にかけての作品を対象に初代メンバーとその推薦による選出委員によって選ばれ、式典もAMPAS内部で行なわれたほど地味なハリウッド映画界内輪の行事であつたが、結果の発表は大きな反響を呼び、翌二九年からは一般の要望に応じて授賞式の模様をラジオによって放送されるようになった。

そして、AMPASのメンバーも増え、現在は約三千人の会員を擁するに至っている。このメンバーのなかから選ばれた専門委員により候補作品、受賞候補者が選ばれ、作品の選出は全員の投票によって決められ、授賞式当日まで伏せられ、式場ではじめてその決定を発表するという方法がとられている。

「アカデミー賞」は発足数年にして世界映画界でも最も多くの人々、ファンの関心の的となったが、テレビ時代に入つた一九五三年からは式典がテレビで中継放送されるようになり、一九六七年からはカラーで放送されるようになって、アメリカでは最高の視聴率を記録しているという。

本来、映画芸術・技術の向上、映画の教育性、文化性の高揚を目的として発足したAMPASではあるが、アカデミー賞の行事はアメリカを代表する産業、企業の一つであるハリウッド映画界の人材のなかか

ら最もすぐれたアーティスト、技術者を毎年選んで賞を贈ることによって業界人にいい刺激を与え、ともに、映画企画家にとって最も大切な商品であるスターや監督のイメージを国の内外で高めようというねらいもあり、それがこの半世紀のあいだに並々ならぬ成果をあげてきたといえよう。

「アカデミー賞」の受賞部門は発足当時臨時の特別賞を入れて十三部門であつたが、年とともに部門を増やし、細分化してきて、一九三三年まではなかつた音楽部門も一九三四年にはあらたに設立され、編曲賞と主題歌賞がおくられることになった。また、はじめは対象がアメリカ映画に限られていたが、これも一九三八年からは外国映画も対象に加えるようになった。しかし、後に一九四七年からは外国映画賞として独立した部門がつくられている。

ハリウッドの業界人によって選出されるということから「アカデミー賞」は娯楽性に重きを置いた作品や人材が選ばれる傾向があることは否めないが、五十年を振りかえってみると、そこにい意味にも悪い意味にもアメリカ映画像がはっきりと描き出されることはたしかである。



レマルクのベストセラーを映画化して監督賞・作品賞に輝いた『西部戦線異状なし』(L・マイルストン)

1929 ~30 第3回

作品賞 『西部戦線異状なし』
主演男優賞 ジョージ・アリス(『デイスレリ』)
主演女優賞 ノーマ・シアラー(『結婚双紙』)
監督賞 ルイス・マイルストン(『西部戦線異状なし』)
【作品賞候補】『ビッグハウス』(脚本賞・録音賞)『デイスレリ』
『結婚双紙』『ラブ・バレード』



「デイスレリ」(A・E・グリーン)で19世紀英国の政治家にふんし主演賞を受けたジョージ・アリス



R・Z・レナード監督『結婚双紙』で主演女優賞を贈られたノーマ・シアラー
左はチェスター・モリス



監督賞を贈られた『情炎の美姫』(F・ロイド)

1928 ~29 第2回

作品賞 『ブロードウェイ・メロディ』
主演男優賞 ウォーナー・バクスター(『懐しのアリゾナ』)
主演女優賞 メアリー・ピックフォード(『コケット』)
監督賞 フランク・ロイド(『情炎の美姫』)
【作品賞候補】『アリバイ』『ハリウッド・レビュー』『懐しのアリゾナ』
『愛国者』(脚本賞)



トーキー西部劇『懐しのアリゾナ』(R・ウォルシュ/I・カミングス)のウォーナー・バクスター(右)とエドモンド・ロウ



『コケット』(S・テイラー)で主演女優賞を受けたピックフォード(右)



作品賞受賞作『ブロードウェイ・メロディ』(E・グールドینگ)のアニタ・ベイジ(左)とベッシー・ラヴ



V・パウムのベストセラーによる『グランド・ホテル』（エドマンド・グールドینگ監督）はグレタ・ガルボとジョン・バリモアの豪華な顔あわせ



『バッド・ガール』でF・フォーサージは再び監督賞を



R・マムーリアン監督によりハイド氏と化したフレドリック・マーチ 左はミリアム・ホプキンス



ヘレン・ヘイズ(右)が主演女優賞を贈られた『マデロンの悲劇』(E・セルウィン監督)は彼女の夫チャールズ・マッカーサーのシナリオによるもの

1931
~32

第5回

作品賞 『グランド・ホテル』
主演男優賞 フレドリック・マーチ（『ジークル博士とハイド氏』）
ウオーレス・ピアリー（『チャンプ』）
主演女優賞 ヘレン・ヘイズ（『マデロンの悲劇』）
監督賞 フランク・ボーザージ（『バッド・ガール』）
『作品賞候補』 『人類の戦士』 『バッド・ガール』（脚本賞）
『チャンプ』（脚本賞） 『特輯社会面』 『君とひととき』 『上海特急』（撮影賞） 『陽気な中尉さん』

1930
~31

第4回

作品賞 『シマロン』（脚本賞・美術監督賞）
主演男優賞 ライオネル・バリモア（『自由の魂』）
主演女優賞 マリー・ドレスラー（『惨劇の波止場』）
監督賞 ノーマン・タウログ（『スキピイ』）
『作品賞候補』 『女性に捧ぐ』 『犯罪都市』 『スキピイ』 『トレイダ！・ホーン』



3つのオスカーを得た『シマロン』（W・ラグルズ監督） リチャード・ディックス(右)は主演男優賞にノミネートされた



C・ブラウンの『自由の魂』で主演男優賞を受けたライオネル・バリモアはジョン・バリモアの兄 右はノーマ・シアラー



かつてチャップリンの『醜女の深情』で主演していたマリー・ドレスラー（1869~1934）は 受賞時61歳だった



『スキピイ』のジャッキー・クーバー(左)とロバート・クーガン

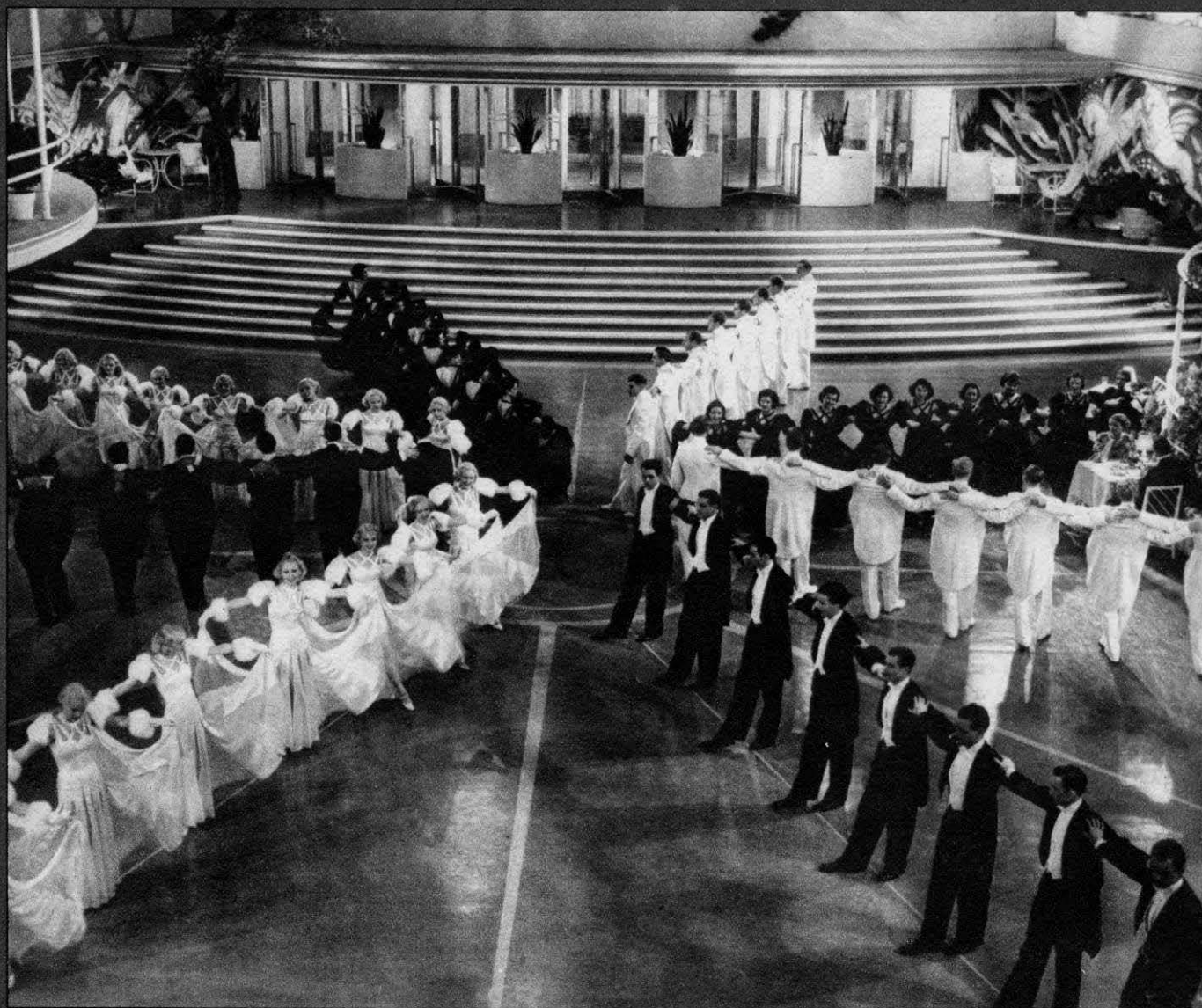


この年のおもなオスカーをさらった『或る夜の出来事』のクラーク・ゲーブルとクロード・コルベール

1934

第7回

作品賞 『或る夜の出来事』(脚本賞・録音賞)
 主演男優賞 クラーク・ゲーブル(『或る夜の出来事』)
 主演女優賞 クロード・コルベール(『或る夜の出来事』)
 監督賞 フランク・キャブラ(『或る夜の出来事』)
 「作品賞候補」『白い蘭』『クレオパトラ』(撮影賞)『お姫様大行進』
 『コンチネンタル』(これがアメリカ艦隊『ロスチャイルド』模倣の人生『恋の一夜』音楽賞)『影なき男』『奇傑パンチョ』『ホワイト・ペレイド』



主題歌賞を受けた『コンチネンタル』(M・サンドリッチ監督)はアステア/ロジャーズのコンビの代表作となった



『カヴァルケード』に主演したクライヴ・ブルックはイギリス出身のベテラン(右はダイアナ・ウィニヤード)

1932

~33

第6回

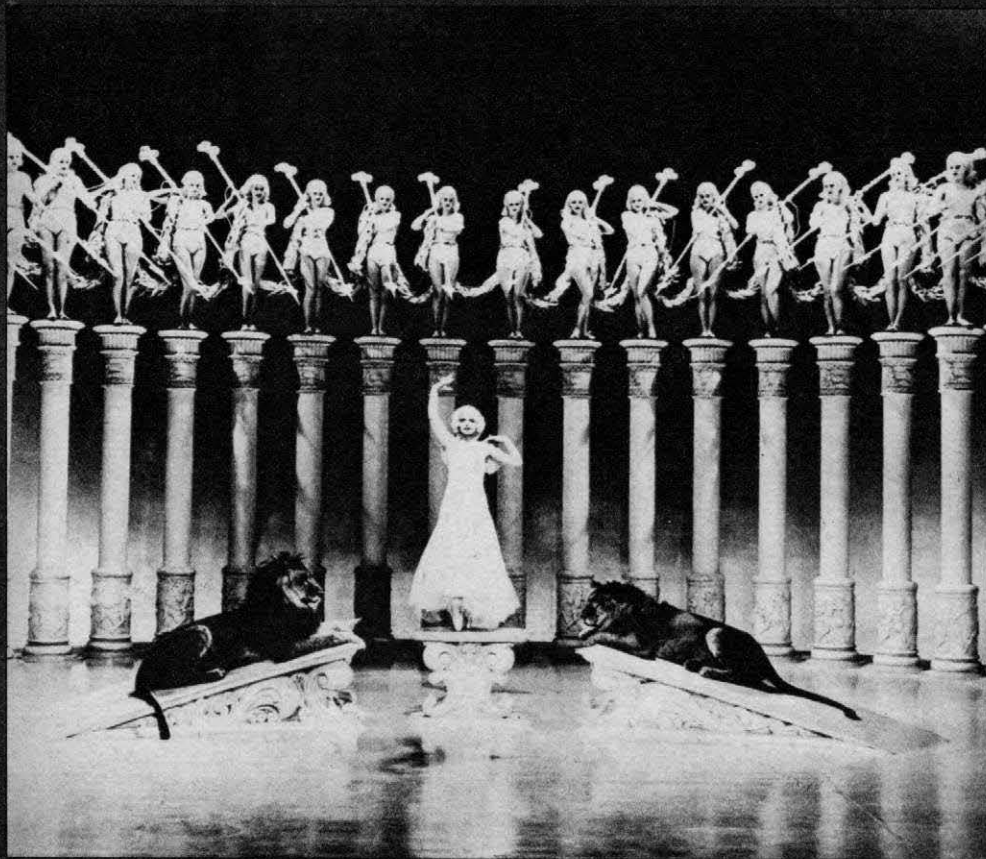
作品賞 『カヴァルケード』(美術監督賞)
 主演男優賞 チャールズ・ロートン(『ヘンリー八世の私生活』)
 主演女優賞 キャサリン・ヘップバーン(『勝利の朝』)
 監督賞 フランク・ロイド(『カヴァルケード』)
 「作品賞候補」『戦場よさらば』(撮影賞・録音賞)『四十二番街』『仮面の米国』『一日だけの淑女』『若草物語』(脚本賞)『ヘンリー八世の私生活』『永遠に微笑む』『妾は別よ』『あめりか祭』



A・コルダ監督『ヘンリー八世の私生活』でイギリス人として初の主演男優賞を受けたチャールズ・ロートン



映画入りして3本目の『勝利の朝』(L・シャーマン監督)で見事オスカーを手にしたキャサリン・ヘップバーン 右はダグラス・フェアバンクス



豪華な踊りと音楽で作品賞を贈られた『巨星ジークフェルド』(R・Z・レナード監督)



監督賞『オペラ・ハット』 ゲーリー・クーバー(左)とジーン・アーサーが主演していた

ウィーン生まれのルイゼ・ライナーは
翌年も『大地』(S・フランクリン監督)でオスカーを得た

1936

第9回

作品賞 『巨星ジークフェルド』
主演男優賞 ポール・ムーニ(『科学者の道』)
主演女優賞 ルイゼ・ライナー(『巨星ジークフェルド』)
助演男優賞 ウォルター・ブレナン(『大自然の凱歌』)
助演女優賞 ゲイル・ソンダーガード(『風雲児アドヴァース』)
監督賞 フランク・キャブラ(『オペラ・ハット』)
「作品賞候補」『風雲児アドヴァース』(撮影賞・編集賞・音楽賞)『孔雀夫人』(美術監督賞)『結婚クーデター』『オペラ・ハット』『ロミオとジュリエット』『桑港』(録音賞)『科学者の道』(脚本賞)『二都物語』



『科学者の道』(W・ディーターレ)でバスター・ウィルにふんじた主演賞のポール・ムーニ



1935

第8回

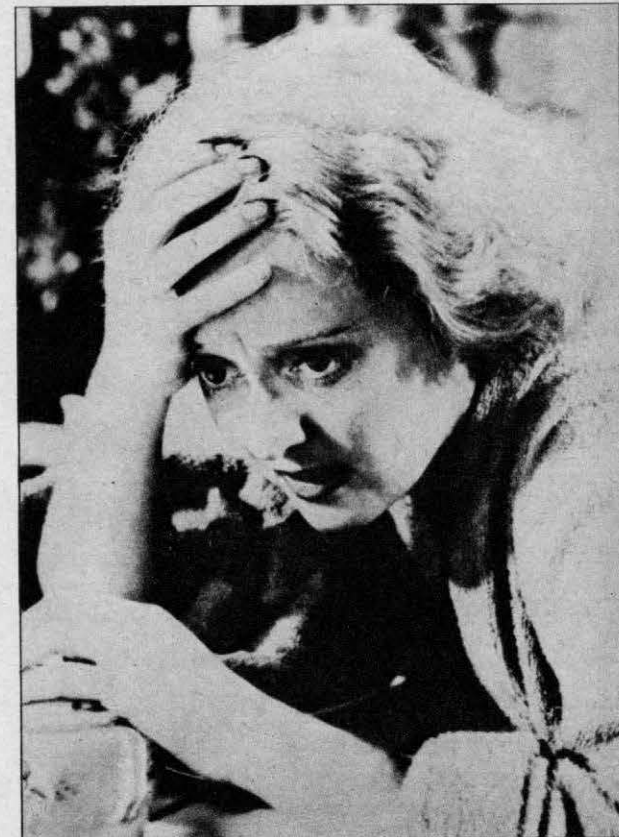
作品賞 『戦艦バウンティ号の叛乱』(戦前の邦題は『南海征服』)
主演男優賞 ヴィクター・マクラグレン(『男の敵』)
主演女優賞 ベティ・デイヴィス(『青春の抗議』)
監督賞 ジョン・フォード(『男の敵』)
「作品賞候補」『乙女よ嘆くな』『踊るブロードウェイ』『海賊ブラッド』『孤児タビッド』『男の敵』(脚本賞・音楽賞)『噫無情』『ベンガルの槍騎兵』『真夏の夜の夢』(撮影賞・編集賞)『浮かれ姫君』(録音賞)『人生は四十二から』



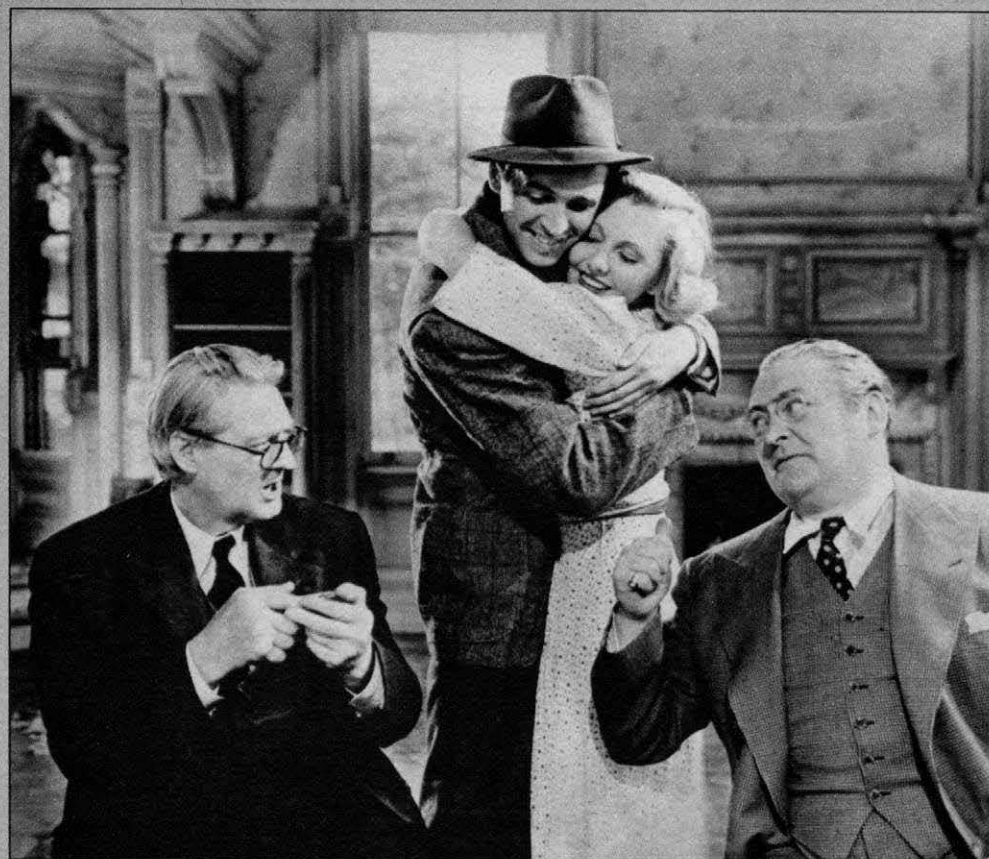
作品賞受賞のF・ロイド監督『戦艦バウンティ号の叛乱』でのクラーク・ゲブル(右)とチャールズ・ロートン



監督賞受賞作品『男の敵』で主演賞を受けたヴィクター・マクラグレン



『青春の抗議』(A・グリーン監督)でオスカーを得た
若き日のベティ・デイヴィス



『我が家の楽園』 左からライオネル・バリモア ジェームズ・スチュアート ジーン・アーサー エドワード・アーノルド



223 ベティ・デイヴィスはW・ワイラー監督『黒蘭の女』で再度受賞



N・タウログの『少年の町』で主演賞を得たスペンサー・トレイシーとミッキー・ルーニー

1938

第11回

作品賞 『我が家の楽園』
 主演男優賞 スペンサー・トレイシー(『少年の町』)
 主演女優賞 ベティ・デイヴィス(『黒蘭の女』)
 助演男優賞 ウォルター・ブレナン(『ケンタッキー』)
 助演女優賞 フェイ・ベインター(『黒蘭の女』)
 監督賞 フランク・キャブラ(『我が家の楽園』)
 『作品賞候補』 『ロビン・フッドの冒険』(美術監督賞・編集賞・音楽賞) 『世紀の楽園』(音楽賞) 『少年の町』(脚本賞) 『城砦』(四人の姉妹) 『太いなる幻影』 『黒蘭の女』 『ビッグマリオン』 『テスト・パイロット』



V・フレミング監督『我が海の子』で主演賞を受けたスペンサー・トレイシー 右はフレディ・バーソロミュー



『ゾラの生涯』で文豪にふんじたポール・ムーニ



監督賞を受賞した『新婚道中記』(L・マッケリー) ケイリー・グラント(左)がアイリーン・ダンと

1937

第10回

作品賞 『ゾラの生涯』(脚本賞)
 主演男優賞 スペンサー・トレイシー(『我が海の子』)
 主演女優賞 ルイゼ・ライナー(『大地』)
 助演男優賞 ジョセフ・シルドクラウト(『ゾラの生涯』)
 助演女優賞 アリス・ブラディ(『シカゴ』)
 監督賞 レオ・マッケリー(『新婚道中記』)
 『作品賞候補』 『新婚道中記』 『我が海の子』 『デッド・エンド』 『大地』 (撮影賞) 『シカゴ』 『失われた地平線』(美術監督賞・編集賞) 『オーケストラの少女』(音楽賞) 『ステージ・ドア』 『スタア誕生』(脚本賞)

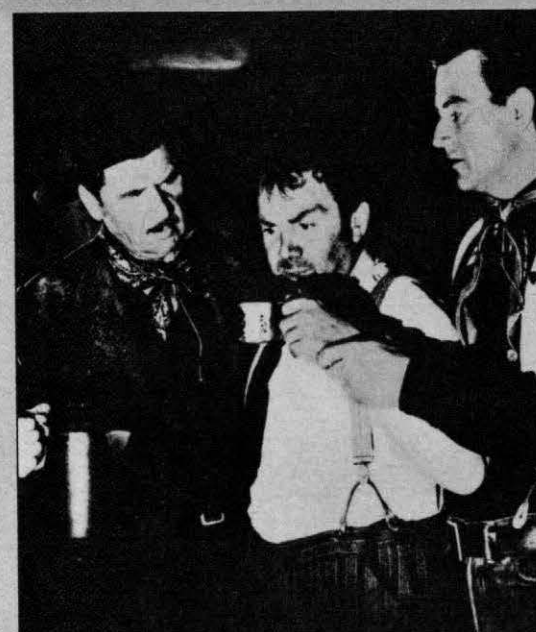


作品賞・脚本賞の『ゾラの生涯』(監督=W・ディーターレ 脚本=I・ラバー)で助演賞を得たJ・シルドクラウト



主題歌賞『ワイキキの結婚』(F・タトル監督)のビング・クロスビー(右)とシャーリー・ローズ

作品賞 『風と共に去りぬ』(脚本賞・撮影賞・美術監督賞・編集賞)
 主演男優賞 ロバート・ドーナット(『チップス先生さようなら』)
 主演女優賞 ヴィヴィアン・リー(『風と共に去りぬ』)
 助演男優賞 トーマス・ミッチェル(『駅馬車』)
 助演女優賞 ハッティ・マクダニエル(『風と共に去りぬ』)
 監督賞 ヴィクター・フレミング(『風と共に去りぬ』)
 「作品賞候補」『愛の勝利』、チップス先生さようなら』『邂逅』『スミス都へ行く』(脚本賞)、『ニノチカ』、甘日鼠と人間、『駅馬車』(音楽賞)、『オズの魔法使』(音楽賞)、『嵐ヶ丘』



J・フォード監督『駅馬車』でトーマス・ミッチェル(中央)は飲んだくれの医師を演じて助演賞を贈られた
 右端はジョン・ウエインのリンゴ・キッド
 左はリンゴを追う役人のジョージ・バンクロフト

大作『風と共に去りぬ』で主演女優賞を贈られた
 ヴィヴィアン・リー バトラー役のクラーク・ゲブルと



『風と共に去りぬ』の一場面 右端が助演女優賞のハッティ・マクダニエル 左端のトーマス・ミッチェルは『駅馬車』で助演男優賞を受けた



S・ウッド監督「チップス先生さようなら」に主演してオスカーを得たロバート・ドーナット

一九三九年(昭和十四年)のハリウッドはトーキー時代に突っ込んで十一年目、この十年間に無声映画の約束事、形式を頑強に固執したのはチャップリンただひとりだった。その『モダン・タイムス』(一九三六年)で実ははじめて歌い、トーキーへの関心を示し、次の『チャップリンの独裁者』(一九四〇年)では六分にわたる大演説をぶったのだった。

一九三三年から一九四三年までの十一年間は作品賞候補は毎年十本ずつ選ぶことになっていたが、一九三九年から太平洋戦争の始まった一九四一年までの三年間の候補作品をみると、映画がトーキー初期に目立つた舞台から完全に脱皮し、技術的にも作品の内容も充実した作品が出揃った時代だったことを改めて痛感させられる。

一九三九年に十の部門でアカデミー賞をとった『風と共に去

りぬ』は大衆娯楽映画の歴史的傑作であるとともに、ハリウッドの人力、資力の強大さをこんなにち見ても改めて感じさせられるこの時代の象徴的な傑作といえよう。同じ年にアカデミー作品賞を逸した候補作品にはフォードの『駅馬車』、ワイラーの『嵐ヶ丘』、キャブラの『スミス都へ行く』をはじめ、『チップス先生さようなら』、『ニノチカ』、『邂逅』、『オズの魔法使』、『甘日鼠と人間』、『愛の勝利』など、こんなに名作とされている作品が多く含まれている。

翌一九四〇年の受賞作はヒッチコックの『レベッカ』だったが、賞を逸した作品にフォードの『怒りの葡萄』、果てなき船路をはじめ、『チャップリンの独裁者』、これもヒッチコックの『海外特派員』、そして『月光の女』、『フィラデルフィア物語』、『我等の町』、『恋愛手帖』と、この年も優秀作品が少なく

ない。

続く一九四一年がまたすごい。受賞作はフォードの『わが谷は緑なりき』だったが、それを上回る名作オースン・ウェルズの『市民ケーン』をはじめ、ヒッチコックの『断崖』、ワイラーの『偽りの花園』、ジョン・ヒューストンの出世作『マルタの鷹』ほか、『塵に咲く花』、『ヨーク軍曹』、『わが道は遠けれど』、『幽霊紐育を歩く』、『暁を辰せ』が候補作品にあがっている。これは、ハリウッドが無声からトーキー製作に踏み切った一九二九年秋にウオール街を突然襲った経済恐慌が尾を引いた、五年余にわたる不況の時代を、ようやく乗り切った好況時代を迎えたアメリカの経済力、アメリカ人の精神的な成長、ゆとりの表われともみられるが、この時代の作品は今見ても立派な作品が少なくない。(野口)



ダンスで売ってきたジンジャー・ロジャーズが『恋愛手帖』(S・ウッド)で初めてドラマの分野で認められ 主演賞を獲得



『怒りの葡萄』で助演賞を贈られたJ・ダーウェル(左から3人目)



作品賞にノミネートされた『凡て此の世も天国も』(A・リトヴァク)でのシャルル・ボワイエとベティ・デイヴィスの顔合わせ



G・キューカー監督『フィラデルフィア物語』で主演賞を受けたジェームズ・スチュアート(右はキャサリン・ヘップバーン)



ヒッチコック渡米第1作『レベッカ』は作品賞と撮影賞を 左からローレンス・オリヴィエとジョーン・フォンテーン



J・フォードの監督賞作品『怒りの葡萄』に主演したヘンリー・フォンダ

1940

第13回

作品賞 『レベッカ』(撮影賞)
主演男優賞 ジェームズ・スチュアート(『フィラデルフィア物語』)
主演女優賞 ジンジャー・ロジャーズ(『恋愛手帖』)
助演男優賞 ウォルター・ブレナン(『西部の男』)
助演女優賞 ジェーン・ダーウェル(『怒りの葡萄』)
監督賞 ジョン・フォード(『怒りの葡萄』)
「作品賞候補」 『凡て此の世も天国も』(海外特派員) 『怒りの葡萄』
(監督賞) 『恋愛手帖』 『チャップリンの独裁者』 『月光の女』 『果てなき船路』 『我等の町』 『フィラデルフィア物語』(脚本賞)



オースン・ウェルズ（右）が監督・主演した『市民ケーン』は脚本賞受賞 シナリオはウェルズとハーマン・マンキーウィッツ



J・ヒューストンの初監督作品『マルタの鷹』（作品賞候補）でハンフリー・ボカートがサム・スペード探偵に



H・ホークス監督の伝記映画『ヨーク軍曹』で主演男優賞を得たゲリー・クーバー（左）



6つの賞を獲得したフォード監督『わが谷は緑なりき』 ドナルド・クリスプ（左）は老炭坑夫役で助演賞を



ヒッチコック監督『断崖』で夫のケイリー・グラントが自分を殺そうとしていると思うに至った人妻の役でジョン・フォンテインが主演賞に



『わが谷は緑なりき』 炭夫の娘モーリン・オハラと彼女を愛する牧師のウォルター・ビジョン

1941

第14回

作品賞 『わが谷は緑なりき』（撮影賞・美術監督賞・装置賞）
 主演男優賞 ゲーリー・クーバー（『ヨーク軍曹』）
 主演女優賞 ジョーン・フォンテイン（『断崖』）
 助演男優賞 ドナルド・クリスプ（『わが谷は緑なりき』）
 助演女優賞 メアリー・アスター（『偉大な嘘』）
 監督賞 ジョン・フォード（『わが谷は緑なりき』）
 「作品賞候補」『塵に咲く花』（美術監督賞）『市民ケーン』（脚本賞）
 『幽霊紐育を歩く』（脚本賞）『偽りの花園』『マルタの鷹』『わが道は遠けれど』『ヨーク軍曹』（編集賞）『断崖』



作品賞・監督賞そして脚本賞受賞の『カサブランカ』（M・カーティス監督）でのイングリッド・バーグマンとハンフリー・ボガード

1943

第16回

作品賞 『カサブランカ』（脚本賞）
 主演男優賞 ポール・ルーカス（『ラインの監視』）
 主演女優賞 ジェニファー・ジョーンズ（『聖処女』）
 助演男優賞 チャールズ・コバーン（『多いほど幸せ』）
 助演女優賞 カティナ・バクシノウ（『誰が為に鐘は鳴る』）
 監督賞 マイケル・カーティス（『カサブランカ』）
 「作品賞候補」『誰が為に鐘は鳴る』『ヴン・キャン・ウェイト』『町の人気者』（脚本賞）『イン・ホイッチ・ウィー・サーヴ』『キュリー夫人』『多いほど幸せ』『牛泥棒』『聖処女』（撮影賞・美術監督賞・音楽賞）『ラインの監視』



作品賞にノミネートされた『誰が為に鐘は鳴る』（S・ウッド監督）のゲアリー・クーバーとイングリッド・バーグマン



ブロードウェイでのヒット作を映画化した『ラインの監視』（H・シュムリン監督）で在米反ナチ活動家を演じて主演賞を受けたポール・ルーカス（右）



ルルドの奇蹟を描いた『聖処女』（H・キング監督）で聖女ベルナデットにふんしオスカーを得たジェニファー・ジョーンズ



多くのオスカーに輝く『ミニヴァー夫人』（W・ワイラー）で主演女優賞を受けたグリア・ガースン（右）



作品賞にノミネートされた『心の旅路』（M・ルロイ監督）でもグリア・ガースンは記憶喪失した夫ロナルド・コールマン（右）につくす妻を美しく演じていた

1942

第15回

作品賞 『ミニヴァー夫人』（撮影賞・脚本賞）
 主演男優賞 ジェームズ・キャグニー（『ヤンキー・ドゥードル・ダンディ』）
 主演女優賞 グリア・ガースン（『ミニヴァー夫人』）
 助演男優賞 ヴァン・ヘフリン（『ジョニー・イーガー』）
 助演女優賞 テレサ・ライト（『ミニヴァー夫人』）
 監督賞 ウィリアム・ワイラー（『ミニヴァー夫人』）
 「作品賞候補」『インヴェーターズ』（脚本賞）『嵐の青春』『すばらしきアンバーズン家の人々』『バード・バイバー』『打撃王』『心の旅路』『町の話』『ウェーキ島』『ヤンキー・ドゥードル・ダンディ』（録音賞）

ジェームズ・キャグニー（左）は『ヤンキー・ドゥードル・ダンディ』（M・カーティス監督）で主演男優賞を





B・ワイルダー監督『失われた週末』はアルコール中毒の恐るべき世界を描きあげて多くのオスカーを獲得した

1945

第18回

作品賞 『失われた週末』（脚本賞）
 主演男優賞 レイ・ミランド（『失われた週末』）
 主演女優賞 ジョーン・クロフォード（『ミルドレッド・ピアース』）
 助演男優賞 ジェームズ・ダン（『ブルックリン横丁』）
 助演女優賞 アン・リヴェア（『緑園の天使』）
 監督賞 ヒラー・ワイルダー（『失われた週末』）
 「作品賞候補」『錨を上げて』（音楽賞）『聖メリイの鐘』（録音賞）
 「ミルドレッド・ピアース」『白い恐怖』（音楽賞）



音楽賞の『錨を上げて』はG・シドニー監督のミュージカル
 ジーン・ケリー（右）とフランク・シナトラ（左）が主演



『失われた週末』でアル中の作家を演じて主演男優賞を受けたレイ・ミランド



『我が道を往く』の続編『聖メリイの鐘』（L・マッケアリー）の
 ビング・クロスビーとイングリッド・バーグマン



作品賞・監督賞・脚本賞の『我が道を往く』（L・マッケアリー監督）で主演賞のビング・クロスビー（右）と
 助演賞のバリー・フィッツジェラルド



『我が道を往く』で下町の悪童を合唱やスポーツで善導する副牧師クロスビー



C・オデッツが監督した『孤独な心のほか何もし』で助演賞のエセル・バリ
 モア（中央）左はケイリー・グラント 右はバリー・フィッツジェラルド

1944

第17回

作品賞 『我が道を往く』（脚本賞）
 主演男優賞 ビング・クロスビー（『我が道を往く』）
 主演女優賞 イングリッド・バーグマン（『ガス燈』）
 助演男優賞 バリー・フィッツジェラルド（『我が道を往く』）
 助演女優賞 エセル・バリモア（『孤独な心のほか何もし』）
 監督賞 レオ・マッケアリー（『我が道を往く』）
 「作品賞候補」『深夜の告白』『ガス燈』（美術監督賞）『君去りし後』（音楽賞）『ワイルズン』脚本賞・撮影賞・美術監督賞・録音賞・編集賞



G・キューカー監督のスリラー『ガス燈』で主演賞を受けた
 イングリッド・バーグマン 左は珍しく悪役のボワイエ



オスカーを3つ獲得したE・カザン監督「紳士協定」で主演のグレゴリー・ベック（左）



演技にうちこみ余りオセロながら女を殺し自殺する俳優を演じた『二重生活』（G・キューカー監督）で主演賞のロナルド・コールマン



主題歌賞の『南部の唄』（W・ディズニー）



『ミネソタの娘』（H・C・ボッター監督）で主演女優賞のロレッタ・ヤング
左は恋人の代議士になるジョセフ・コットン

1947 第20回

作品賞 「紳士協定」
主演男優賞 ロナルド・コールマン（『二重生活』）
主演女優賞 ロレッタ・ヤング（『ミネソタの娘』）
助演男優賞 エドマンド・グウェン（『三十四丁目の奇蹟』）
助演女優賞 セレスト・ホーム（『紳士協定』）
監督賞 イリア・カザン（『紳士協定』）
「作品賞候補」『気まぐれ天使』（録音賞）『十字砲火』（大いなる遺産）（撮影賞・美術監督賞）『三十四丁目の奇蹟』（脚本賞）



作品賞は多くのオスカーに輝く『我等の生涯の最良の年』（W・ワイラー）で主演賞のフレドリック・マーチ（右）と助演賞のハロルド・ラッセル（左）



『遙かなる我が子』（M・ライゼン監督）でオリヴィア・デ・ハヴィランドは少女から中年までを演じて主演賞を



C・ブラウンの『仔鹿物語』は撮影賞などを得た 右から農夫グレゴリー・ベック 妻ジェーン・ワイマン 息子クロード・ジャーマンJr



モーム原作の『剃刀の刃』（E・グールド監督）で助演女優賞のアン・バクスター 左はタイロン・パワー

1946 第19回

作品賞 「我等の生涯の最良の年」（脚本賞・編集賞 音楽賞）
主演男優賞 フレドリック・マーチ（『我等の生涯の最良の年』）
主演女優賞 オリヴィア・デ・ハヴィランド（『遙かなる我が子』）
助演男優賞 ハロルド・ラッセル（『我等の生涯の最良の年』）
助演女優賞 アン・バクスター（『剃刀の刃』）
監督賞 ウィリアム・ワイラー（『我等の生涯の最良の年』）
「作品賞候補」『ヘンリー五世』素晴らしき哉！人生『剃刀の刃』
『仔鹿物語』（撮影賞・美術監督賞）

作品賞 『ハムレット』(美術監督賞・衣裳デザイン賞)
 主演男優賞 ローレンス・オリヴィエ(『ハムレット』)
 主演女優賞 ジェーン・ワイマン(『ジョニイ・ペリンダ』)
 助演男優賞 ウォルター・ヒューストン(『黄金』)
 助演女優賞 クレア・トレヴァー(『キー・ラーゴ』)
 監督賞 ジョン・ヒューストン(『黄金』)
 「作品賞候補」『ジョニイ・ペリンダ』『赤い靴』(美術監督賞・音楽賞)
 『蛇の穴』(録音賞)『黄金』(脚本賞)



3つのアカデミー賞に輝いたJ・ヒューストン監督の『黄金』(脚本はヒューストン自身とロバート・ロッセン)ハンフリー・ボガート(左)は砂金ゆえに身を減ぼす



『ジョニイ・ペリンダ』(J・ネグレスコ監督)で主演女優賞を受けたジェーン・ワイマン



息子の監督賞受賞作『黄金』で助演男優賞を贈られたウォルター・ヒューストン



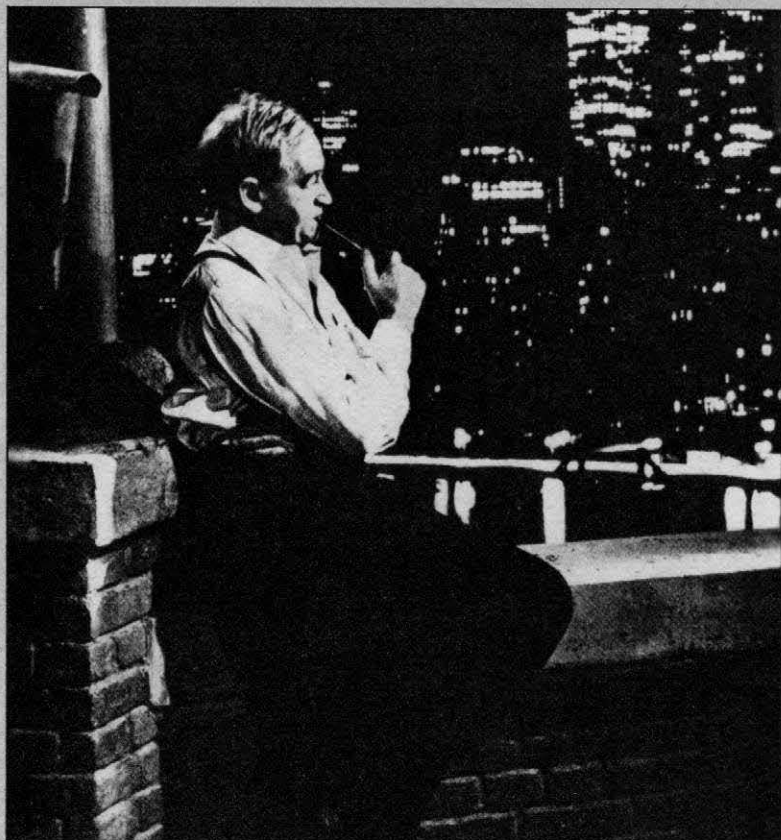
美術賞・音楽賞のバレエ映画『赤い靴』(M・パウエル監督) アントン・ウォールブルック(右)と主演したイギリスのバレリーナ モイラ・シアラー



ヒューストンの『キー・ラーゴ』で助演賞のクレア・トレヴァー(中央) 左はハンフリー・ボガート



『ハムレット』を監督・主演し多くのオスカーを得たローレンス・オリヴィエ



ジュールス・ダッシン監督のオール・ロケ作品『裸の町』(撮影賞・編集賞)で主役の老警部を演じたバリー・フィツジェラルド

一九四八年(昭和二十三年)は第三次大戦が終わって三年目、日本が緒戦の大戦果と思いついていた真珠湾奇襲はアメリカ人の戦意を駆り立てる効果のほうはるかに大きかった。映画製作の資材にも事欠く有様だった日本とは反対に、ハリウッドは、前線の将兵慰問のためのオール・カラーの娯楽映画、ミュージカル映画を量産していた。反ナチ映画や対日戦を扱った作品も少なくはなかったが、戦時中の三年間にアカデミー賞をとった作品が『ミニヴァー夫人』(一九四二年)、『カサブランカ』(一九四三年)、『我が道を往く』(一九四四年)という、むしろ地味な心境的な作品なのが注目される。

『我が道を往く』はおんぼろ教会に赴任した副牧師が持ち前の機智とユーモアで教会をとりまくもめ事や人間関係をうまくまとめてしまうという心温まるヒューマン・ストーリーで、戦争さなかの作品とはおもえない。これらの作品を戦後になって見せられたわれわれは、こういう作品がアカデミー賞をとったところにもアメリカ人の心のゆとりを感じさせられたのだ。

それはそれとして、戦争が終わった年の受賞作『失われた週末』(一九四五年)がまたアル中の話というのもおもしろい。翌年の『我等の生涯の最良の年』は三人の復員兵の生きざまをリアルに描き、間接的に戦争を描いていたが、これはアメリカ映画には珍しい国策映画、国民映画の匂いがしていた。さて一九四八年の受賞作品はアカデミー賞の歴史あつて以来



2年連続して監督賞を受けたマンキーウィツの『イヴの総て』。左からセレスト・ホルム ヒュー・マーロー
ベティ・デイヴィス

1950

第23回

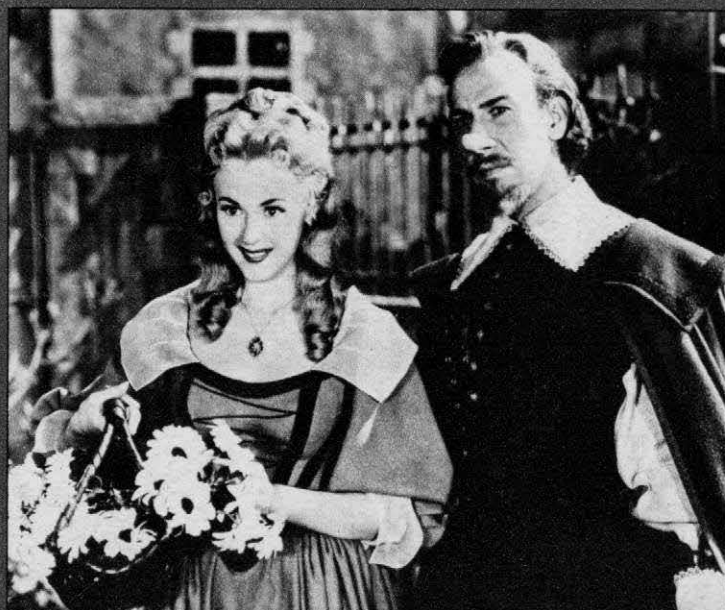
作品賞 「イヴの総て」(脚本賞・衣裳デザイン賞・録音賞)
主演男優賞 ホセ・ファーラー(『シラノ・ド・ベルジュラック』)
主演女優賞 ジュディ・ホルデイ(『きのうの誕生』)
助演男優賞 ジョージ・サンダース(『イヴの総て』)
助演女優賞 ジョゼフィン・ハル(『ハーヴェイ』)
監督賞 ジョゼフ・L・マンキーウィツ(『イヴの総て』)
【作品賞候補】 「きのうの誕生」(花嫁の父)『キング・ソロモン』(撮
影賞・編集賞)「サンセット大通り」(脚本賞・美術監督賞・音楽賞)



B・ワイルダーの名作『サンセット大通り』に主演のグロリア・スワンスン(左)



『イヴの総て』のアン・バクスター(右)とジョージ・サンダース



初めて主役を演じた『シラノ・ド・ベルジュラック』(M・ゴードン)で見事
オスカーを獲得したホセ・ファーラー 左はメイラ・パワーズ



『オール・ザ・キングスメン』(R・ロッセン)で主演賞を受けたプロドリック・クロフォード(右)



ディーン・ジャガー(左)はH・キング監督『頭上の敵機』で助演賞を 右はグレゴ
リー・ベック



2つのオスカーを得た『三人の妻への手紙』(J・L・マンキーウィツ) ジェーン・
クレイン(左)とポール・ダグラス

1949

第22回

作品賞 「オール・ザ・キングスメン」
主演男優賞 プロドリック・クロフォード(『オール・ザ・キングス
メン』)
主演女優賞 オリヴィア・デ・ハヴィランド(『女相続人』)
助演男優賞 ディーン・ジャガー(『頭上の敵機』)
助演女優賞 マーセデス・マッケンブリッジ(『オール・ザ・キン
グスメン』)
監督賞 ジョゼフ・L・マンキーウィツ(『三人の妻への手紙』)
【作品賞候補】 「戦場」(脚本賞・撮影賞)「女相続人」(美術監督賞・
衣裳デザイン賞・音楽賞)「三人の妻への手紙」(脚本賞)「頭上の敵
機」(録音賞)



W・ワイラー監督『女相続人』で再び主演女優賞
を得たオリヴィア・デ・ハヴィランド



J・ヒューストン監督『アフリカの女王』で主演男優賞を贈られたハンフリー・ボガード キャサリン・ヘップバーンと



イリア・カザン監督『欲望という名の電車』で助演女優賞を受けたキム・ハンター (左) マーロン・ブランド (中央) の妻でヴィヴィアン・リー (右) の妹を演じた



監督賞『陽のあたる場所』(G・スティーヴンズ)のエリザベス・テラーとモンゴメリー・クリフト



外国映画賞を得た『羅生門』(黒沢明)の三船敏郎と加東大介



多くのオスカーをかちえた『巴里のアメリカ人』(V・ミネリ)のバリ娘レスリー・キャロンとアメリカ人ジーン・ケリー



『巴里のアメリカ人』の舞踊シーン ご存知ガーシュインの音楽にジーン・ケリー振付け 中央はジョルジュ・ゲタリー

1951

第24回

作品賞 『巴里のアメリカ人』(脚本賞・撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・音楽賞)
 主演男優賞 ハンフリー・ボガード(『アフリカの女王』)
 主演女優賞 ヴィヴィアン・リー(『欲望という名の電車』)
 助演男優賞 カール・マルデン(『欲望という名の電車』)
 助演女優賞 キム・ハンター(『欲望という名の電車』)
 監督賞 ジョージ・スティーヴンズ(『陽のあたる場所』)
 「作品賞候補」『暁前の決断』『陽のあたる場所』(脚本賞・撮影賞・衣裳デザイン賞・編集賞・音楽賞)『クオ・ヴァディス』『欲望という名の電車』(美術監督賞)
 外国映画賞 『羅生門』(日)

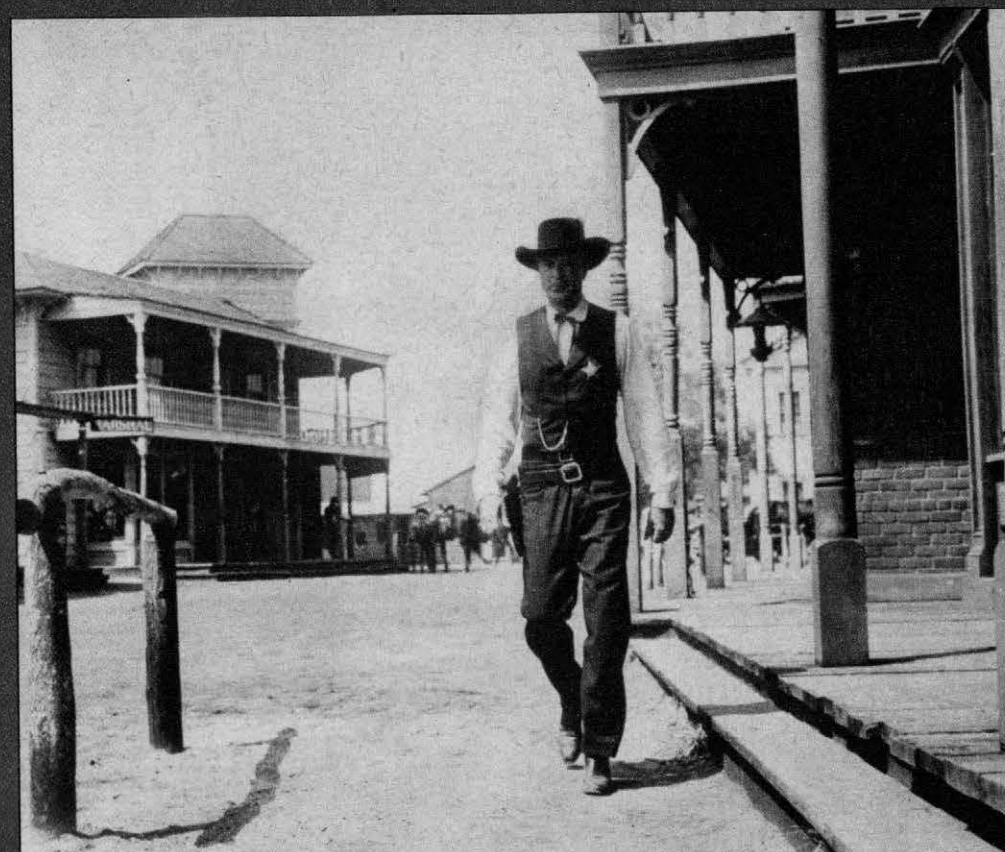


C・B・デミル監督のサーカス映画『地上最大のショウ』の団長チャールトン・ヘストンと一座の花形ベティ・ハットン

1952

第25回

作品賞 『地上最大のショウ』(脚本賞)
 主演男優賞 ゲーリー・クーバー(『真昼の決闘』)
 主演女優賞 シャーリー・ブース(『愛しのシバよ帰れ』)
 助演男優賞 アンソニー・クイン(『革命児サバタ』)
 助演女優賞 グロリア・グレアム(『悪人と美女』)
 監督賞 ジョン・フォード(『静かなる男』)
 「作品賞候補」『真昼の決闘』(編集賞・音楽賞)『黒騎士』『赤い風車』(美術監督賞・衣装デザイン賞)『静かなる男』(撮影賞)
 外国映画賞 『禁じられた遊び』(仏)



F・ジンネマン監督『真昼の決闘』(再公開のタイトルは『ハイ・ヌーン』)で主演賞のゲーリー・クーバー



『革命児サバタ』(E・カザン)でサバタ(マーロン・ブランド)の兄を演じたアンソニー・クイン(左)は助演賞を受けた



『愛しのシバよ帰れ』(ダニエル・マン)で主演女優賞のシャーリー・ブース(左から2番目) 左はバート・ランカスター 右端はテリー・ムーア



外国映画賞『禁じられた遊び』(R・クレマン)のブリジット・フォッセー



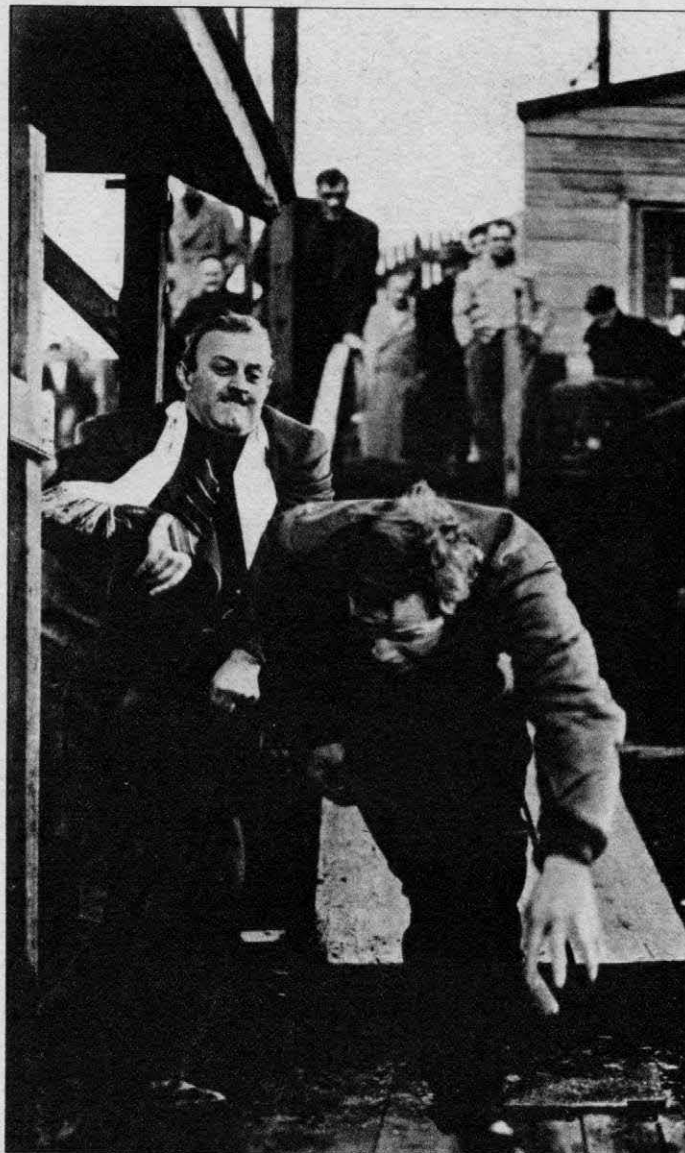
『波止場』(E・カザン)でマーロン・ブランド(中央)の恋人役を演じ、助演女優賞を受けたエヴァ・マリー・セイント



『喝采』(G・シートン)で歌手ビング・クロスビー(左)を立ち直らせる妻を演じてグレース・ケリーが主演賞を



J・L・マンキーウィッツ監督『裸足の伯爵夫人』で助演男優賞のエドモンド・オブライエン 右は主役のエヴァ・ガードナー

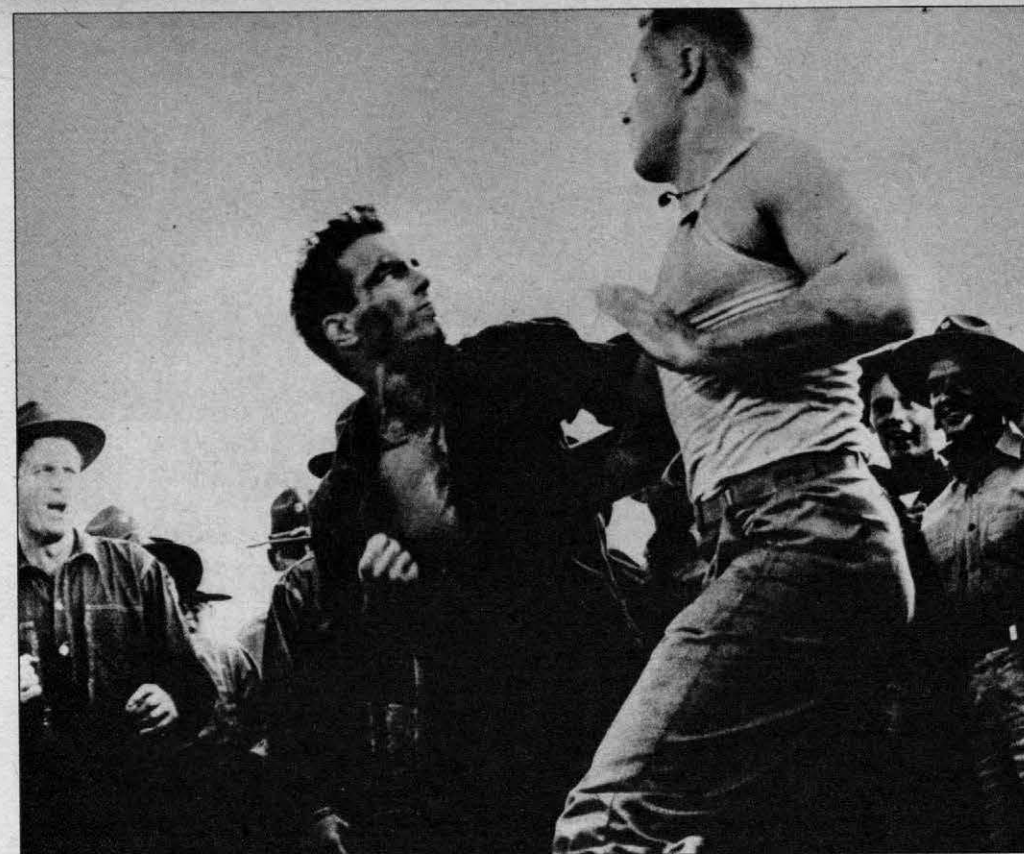


『波止場』のボスのリー・J・コップ(左)とブランドの格闘場面

1954

第27回

作品賞 『波止場』(脚本賞・撮影賞・美術監督賞・編集賞)
 主演男優賞 マーロン・ブランド(『波止場』)
 主演女優賞 グレース・ケリー(『喝采』)
 助演男優賞 エドモンド・オブライエン(『裸足の伯爵夫人』)
 助演女優賞 エヴァ・マリー・セイント(『波止場』)
 監督賞 イリア・カザン(『波止場』)
 「作品賞候補」『ケイン号の叛乱』『喝采』(脚本賞)『掠奪された七人の花嫁』(音楽賞)『愛の泉』(撮影賞)
 外国映画賞 『地獄門』(日)



軍隊の内幕を描いたF・ジンネマン監督『地上より永遠に』でのモンゴメリー・クリフト(中央)の格闘シーン



『ローマの休日』(W・ワイラー)のオードリーとG・ベック



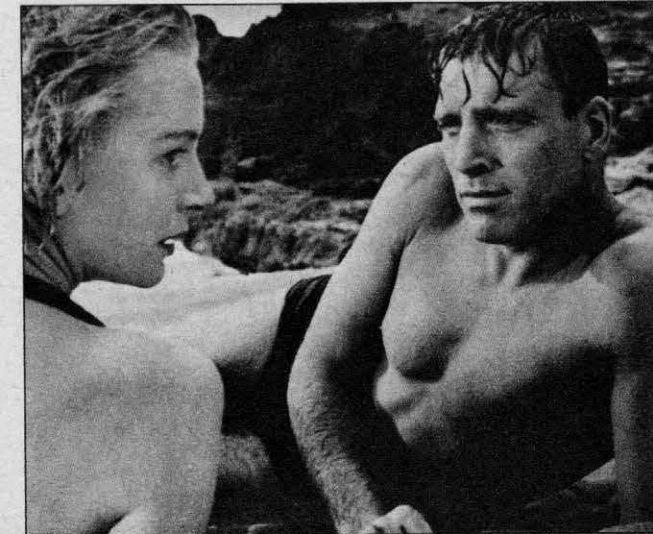
『シェーン』(G・スティーヴンズ)のフラン・ラッドとブランドン・デ・ウィルデ



『地上より永遠に』で助演賞を獲得したフランク・シナトラ(右)



B・ワイルダ監督『第十七捕虜収容所』で主演賞を受けたウィリアム・ホールデン(中央)



『地上より永遠に』で隊長の妻デボラ・カーとできているパート・ランカスター

1953

第26回

作品賞 『地上より永遠に』(脚本賞・撮影賞・録音賞・編集賞)
 主演男優賞 ウィリアム・ホールデン(『第十七捕虜収容所』)
 主演女優賞 オードリー・ヘップバーン(『ローマの休日』)
 助演男優賞 フランク・シナトラ(『地上より永遠に』)
 助演女優賞 ドナ・リード(『地上より永遠に』)
 監督賞 フレッド・ジンネマン(『地上より永遠に』)
 「作品賞候補」『ジュリアス・シーザー』(美術監督賞)『聖衣』(美術監督賞・衣裳デザイン賞)『ローマの休日』(脚本賞・衣裳デザイン賞)『シェーン』(撮影賞)

作品賞 『マーティ』（脚本賞）
 主演男優賞 アーネスト・ボーグナイン（『マーティ』）
 主演女優賞 アンナ・マニャーニ（『バラの刺青』）
 助演男優賞 ジャック・レモン（『ミスタア・ロバーツ』）
 助演女優賞 ジョー・ヴァン・フリート（『エデンの東』）
 監督賞 デルバート・マン（『マーティ』）
 「作品賞候補」 『慕情』（衣装デザイン賞・音楽賞）『ミスタア・ロバーツ』『ピクニック』（美術監督賞・編集賞）『バラの刺青』（撮影賞・美術監督賞）
 外国映画賞 『宮本武蔵』（日）



『エデンの東』（E・カザン）でジェームズ・ディーン（右）の母親役に助演賞を贈られたジョー・ヴァン・フリート



デルバート・マン監督第1作『マーティ』で主演男優賞のアーネスト・ボーグナイン
 右は母親役のエスター・ミンチオツティ



『ミスタア・ロバーツ』（J・フォード/M・ルロイ）で助演賞を受けた
 ジャック・レモン 下はウィリアム・パウエル



『バラの刺青』（ダニエル・マン）でイタリアのアンナ・マニャーニが主演女優賞に 右はバート・ランカスター

一九五〇年代のアメリカ映画、ハリウッドの状況を今かえりみると、三〇年代後半の覇気、四〇年代のあわただしい戦時下、戦後の作品にみられたヒューマニズムが希薄な気がしてならない。戦後の戦勝気分、インフレ・ムードのなかで、四〇年代の末近く、戦争のために棚上げになっていたテレビの実用化時代が到来、映画産業にとって由々しい問題を投げかけたのだ。テレビそのものもはじめは珍しかったが、スポーツの中継、人気歌手や第一線のコメディアンによるシリーズ番組、旧作映画の放映は、映画館で映画を見るのに駐車場さがしや高い駐車料金を払わなければならなかったアメリカの都会で、茶の間に娯楽物やスポーツ鑑賞ができるテレビは映画にとって大きな脅威となった。

「ブ」(シネスコ)方式のワイド映画がつくられ、さらには「ウイスタヴィジョン」、70ミリ、超ワイド映画などが次々に登場したのも、すべてテレビ攻勢に対する巻きかえし作戦のあらわれだった。しかし、ワイド・スクリーン映画をはじめて見た時には驚嘆の声をあげたファンも、二度三度と見て行くうちにその大きさに馴れて驚かなくなった。それでもワイド・スクリーンを効果的に生かせとばかり、スベクタクル映画がさかんに作られたのもこの五〇年代のことである。もちろんカラー映画優先、音響はステレオと、あの手この手で映画ファンを映画館に釘づけにしようとする苦策をねった時代でもあったが、五〇年代の受賞作品に『地上より永遠に』（一九五三年）、『波止場』（一九五四年）、『マーティ』（一九五五年）、『戦場にける橋』（一九五七年）の四作品は質的にも上々として、『巴里のアメ

リカ人』（一九五一年）、『地上最大のシヨウ』（一九五二年）、『八十日間世界一周』（一九五六年）、『ベン・ハー』（一九五九年）の受賞はこれらの年の作品の貧困をあきらかに物語っている。しかしむしろ受賞を逃した作品のなかに『陽のあたる場所』（一九五一年）、『欲望という名の電車』（一九五一年）、『真昼の決闘』（一九五二年）、『シエーン』（一九五三年）、『ミスタア・ロバーツ』（一九五五年）、『ピクニック』（一九五五年）、『十二人の怒れる男』（一九五七年）など質的に高い作品があった。このあたりにハリウッドの業界人が投票者であるための選出の角度のズレが感じられるのである。結局アカデミー賞はハリウッド映画界内部のお祭りであり、作品の芸術性や進歩性を前向きに評価する行事ではないことを一応知っておくべきであろう（野口）



『イヴの三つの顔』(N・ジョンソン)で主演賞のジョアン・ウッドワード



多くのオスカーを獲得した『戦場にかかる橋』(D・リーン)で主演賞のアレック・ギネス

1957

第30回

作品賞 『戦場にかかる橋』(脚本賞・撮影賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 アレック・ギネス(『戦場にかかる橋』)
 主演女優賞 ジョアン・ウッドワード(『イヴの三つの顔』)
 助演男優賞 レッド・バートンズ(『サヨナラ』)
 助演女優賞 ナンシー・メイ(『サヨナラ』)
 監督賞 デイヴィッド・リーン(『戦場にかかる橋』)
 「作品賞候補」『青春物語』『サヨナラ』(美術監督賞・録音賞)『十二人の怒れる男』『情婦』
 外国映画賞 『カピリアの夜』(伊)



『戦場にかかる橋』のワン・シーン 中央は早川雪州



J・ヴェルヌ原作『八十日間世界一周』(M・アンダースン)はトッドAOシステムによる大型画面の娯楽作品

1956

第29回

作品賞 『八十日間世界一周』(脚本賞・撮影賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 ユル・ブリンナー(『王様と私』)
 主演女優賞 イングリッド・バーグマン(『追想』)
 助演男優賞 アンソニー・クイン(『炎の人ゴッホ』)
 助演女優賞 ドロシー・マローン(『風と共に散る』)
 監督賞 ジョージ・スティーヴンス(『ジャイアンツ』)
 「作品賞候補」『友情ある説得』『ジャイアンツ』『王様と私』(美術監督賞・衣裳デザイン賞・録音賞・音楽賞)『十戒』(特撮効果賞)
 外国映画賞 『道』(伊)



監督賞受賞作『ジャイアンツ』(G・スティーヴンス)のジェームズ・ディーンとマーセデス・マッケンブリッジ



『八十日間世界一周』の一場面 左からシャーリー・マクレーン デイヴィッド・ニーヴン カンティンフラス



『追想』(A・リトヴァク)で再度オスカーを得たイングリッド・バーグマンとユル・ブリンナー



ミュージカル『王様と私』(W・ラング)で主演賞受賞のユル・ブリンナー 右はデボラ・カー

1958

第31回

作品賞 『恋の手ほどき』(脚本賞・撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 デイヴィッド・ニーヴン(『旅路』)
 主演女優賞 スーザン・ヘイワード(『私は死にたくない』)
 助演男優賞 バール・アイヴズ(『大いなる西部』)
 助演女優賞 ウェンディ・ヒラー(『旅路』)
 監督賞 ウィンセント・ミネリ(『恋の手ほどき』)
 「作品賞候補」『メイム叔母さん』『熱いトタン屋根の猫』『手錠のま』
 外国映画賞 『ぼくの伯父さん』(仏)



『旅路』(デルバート・マン)で助演女優賞を受けたウェンディ・ヒラー
 右はバート・ランカスター



『私は死にたくない』(R・ワイズ)で無罪を叫ぶ死刑囚を演じたスーザン・ヘイワードが主演女優賞に



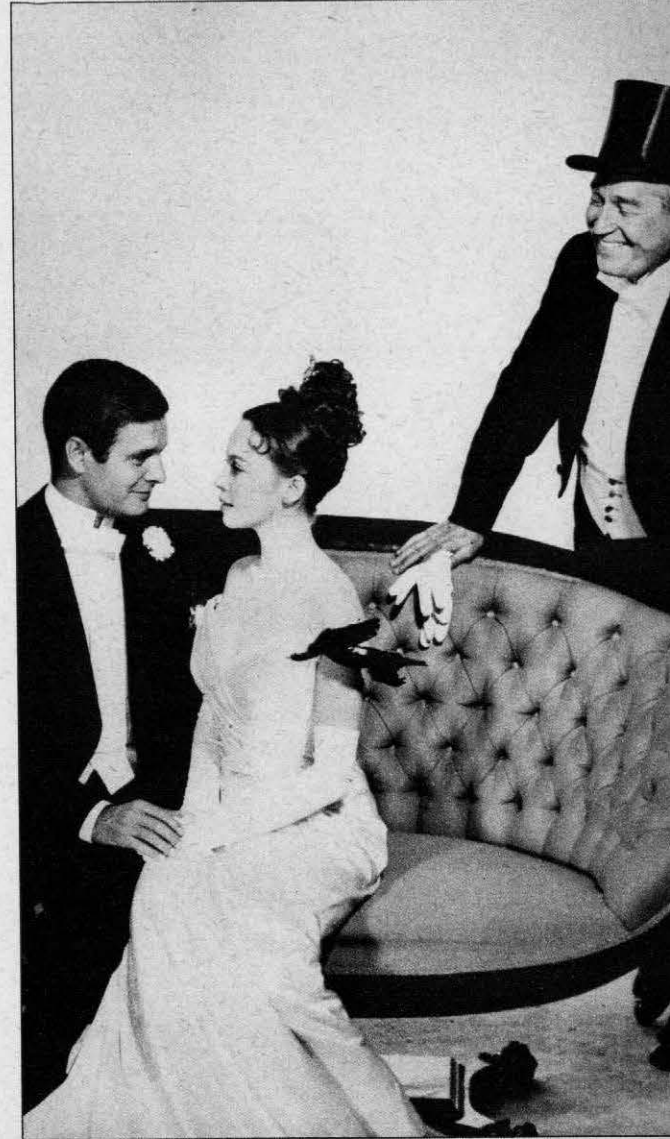
ミュージカル映画『恋の手ほどき』(V・ミネリ)で歌うモーリス・シュヴァリエ
 とハーミオン・ジンゴールド



『旅路』で主演賞のデイヴィッド・ニーヴン 左はデボラ・カー



『大いなる西部』(W・ワイラー)で助演男優賞のバール・アイヴズ
 左はジーン・シモンズ



『恋の手ほどき』 左からルイ・ジュールダン
 レスリー・キャロン モーリス・シュヴァリエ



イギリス映画『年上の女』(J・クレイトン)で主演女優賞を贈られたシモーヌ・シニョレ 左はローレンス・ハーヴェイ



『アンネの日記』でアンネを演じたミリー・パーキンスと恋人役リチャード・ベイマー



衣裳賞を受けた『お熱いのがお好き』(B・ワイルダー)のジャック・レモン(左)とマリリン・モンロー



『アンネの日記』(G・スティーヴンズ)でシェリー・ウィンタース(右)は助演賞を



主題歌賞を獲得したF・キャブラ『波も涙も暖かい』のフランク・シナトラ(左)



W・ワイラー監督のスペクタクル『ベン・ハー』は多数のオスカーを獲得した



『ベン・ハー』で主演賞を受けたチャールトン・ヘストン

1959

第32回

作品賞 『ベン・ハー』(撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・サウン
ド賞・編集賞・特撮効果賞・音楽賞)
主演男優賞 チャールトン・ヘストン(『ベン・ハー』)
主演女優賞 シモーヌ・シニョレ(『年上の女』)
助演男優賞 ヒュー・グリフィス(『ベン・ハー』)
助演女優賞 シェリー・ウィンタース(『アンネの日記』)
監督賞 ウィリアム・ワイラー(『ベン・ハー』)
「作品賞候補」『或る殺人』『アンネの日記』(撮影賞・美術監督賞)
『尼僧物語』『年上の女』(脚本賞)
外国映画賞 『黒いオルフェ』(仏)

●新幹線大爆破



16mm版劇映画のご案内

日本の映画はもとより外国の映画も
たくさん集めて、皆様方のご利用を
おまちしております。
映画鑑賞会のご計画がたちましたら
ご相談くださいませ。

●当社在庫リスト御請求ください。

●旅 愁



TEL 名古屋 052-221-1691代
TEL 一宮 0586-77-2655代

CKフィルム・ライブラリー

中部日本教映 株式会社

本社 名古屋市中区栄1の16の2 東宝ビル4F 一宮分室 一宮市若竹1丁目1番5号



『バターフィールド8』(ダニエル・マン)でコールガールを演じて主演女優賞を受けたリズ



ビリー・ワイルダーの『アパートの鍵貸します』のジャック・レモン



『エルマー・ガントリー』で主演賞のバート・ランカスター
左は助演賞のシャーリー・ジョーンズ



『エルマー・ガントリー』(R・ブルックス)の売春婦役で助演賞
を受けたシャーリー・ジョーンズ(右)



主題歌賞を受けた『日曜はダメよ』(J・ダッシン)の
陽気な娼婦メリナ・メルクーリ

1960

第33回

作品賞 『アパートの鍵貸します』(脚本賞・美術監督賞・編集賞)
主演男優賞 バート・ランカスター(『エルマー・ガントリー』)
主演女優賞 エリザベス・テイラー(『バターフィールド8』)
助演男優賞 ビーター・ユスティノフ(『スバルタカス』)
助演女優賞 シャーリー・ジョーンズ(『エルマー・ガントリー』)
監督賞 ビリー・ワイルダー(『アパートの鍵貸します』)
[作品賞候補] 『アラモ』(サウンド賞) 『エルマー・ガントリー』(脚本賞) 『息子と恋人』(撮影賞) 『サンタウナース』
外国映画賞 『処女の泉』(スウェーデン)

作品賞 『ウエスト・サイド物語』(撮影賞・美術監督賞・衣装デザイン賞・サウンド賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 マクシミリアン・シェール(『ニュールンベルグ裁判』)
 主演女優賞 ソフィア・ローレン(『ふたりの女』)
 助演男優賞 ジョージ・チャキリス(『ウエスト・サイド物語』)
 助演女優賞 リタ・モレノ(『ウエスト・サイド物語』)
 監督賞 ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ(『ウエスト・サイド物語』)
 【作品賞候補】『フアン』、『ナパロンの要塞』(特撮効果賞)、『ハスラー』(撮影賞・美術監督賞)、『ニュールンベルグ裁判』(脚本賞)
 外国映画賞 『鏡の中にある如く』(スウェーデン)



ミュージカル『ウエスト・サイド物語』で助演女優賞のリタ・モレノ(中央)



『ウエスト・サイド物語』助演男優賞のジョージ・チャキリス(中央)



S・クレイマー監督の大作『ニュールンベルグ裁判』



V・デシーカ監督『ふたりの女』でソフィア・ローレンが主演賞に



『ナパロンの要塞』(J・L・トンプソン)のアンソニー・クイン(手前)とグレゴリー・ペック(後ろ)

一九六〇年代に入るとハリウッドは往年の映画王国ハリウッドとは様相が変わってきた。映画会社という大資本をバックにした企業体が華やかなスターをつくり、専属としてかかえ、特約映画館の上映スケジュールに合わせて映画を定期刊行物か、美しく包装された食料品のように送り込むというシステムは通用しなくなってきた。才能のあるプロデューサーや監督、映画制作に意欲的な、資金をもつ一流のスターが、作りたい映画を作る時代に入ったのである。といってもアメリカのことは、作りたい映画とはいえ興行者がソッポを向くような独りよがりの作品を作ろうなどという物好きはいない。払った入場料に値するたのしさか、恐怖かスリルか、驚きを与える新鮮な映画でなければならぬというのことは誰だって百も承知である。

一九六〇年代の目立った作品傾向は、70ミリ方式による大作

と素材やテーマの新鮮さ、カラー・フィルムの革命的な感光度の向上、倍率の高いズーム・レンズの完成などによる撮影時の好条件によって従来のセット撮影中心主義から屋外シートのロケーション撮影と併行して屋内撮影も実物の屋内で行なうようになり、技術、表現の面で映画が新しい視野を拓いてきたことも注目しなければならない。

一九六〇年代の新しい作品傾向のなかで特に目立つのは、質の高い大作ミュージカル映画が数こそ少ないが六〇年代を通じてアカデミー作品賞を毎年のようにさらっていることである。

すなわち、六一年の『ウエスト・サイド物語』、六四年の『マイ・フェア・レディ』、六五年の『サウンド・オブ・ミュージック』、六八年の『オリバー!』がそれぞれあり、オスカーを逸した候補作にも『ミュージック・マン』(一九六二

年)、『マリ・ボピンズ』(一九六四年)、『ドリトル先生の不思議な旅』(一九六七年)、『フアン』(一九六八年)、『ハロー・ドーリー!』(一九六九年)などがあつた。またすぐれた劇映画の大作としてはディヴィッド・リーンの『アラビヤのロレンス』(一九六二年)、『ドクトル・ジバゴ』(一九六五年)の二作にとどめを刺すが、失敗作・悪作の声もある『クレオパトラ』(一九六三年)、『それにシネラマ方式による最初の劇場画というふれ込みの『西部開拓史』(一九六三年)までが興行界で幅を利かせた。

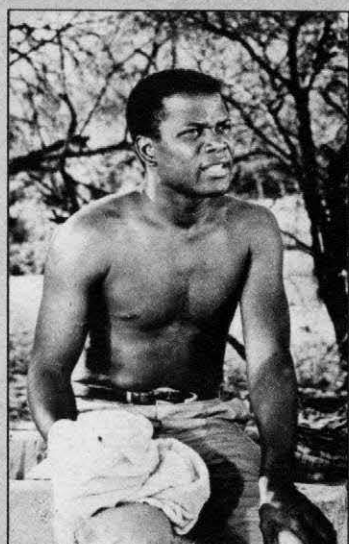
しかし中級・小粒の作品に『卒業』(一九六七年)、『明日に向って撃て!』(一九六九年)、『その男ゾルバ』(一九六四年)、『アルフィー』(一九六六年)、『俺たちに明日はない』(一九六七年)、『冬のライオン』(一九六八年)など記憶すべき作品が少なくなかった。(野口)



イギリスの新しい才能を示した『トム・ジョーンズの華麗な冒険』(T・リチャードスン監督)



『予期せぬ出来事』のM・ルサフォード



『野のユリ』のシドニー・ポワチエ



テキサスを舞台にした『ハッド』中央がメルヴィン・ダグラス



『ハッド』(M・リット監督)のバトリシア・ニール

1963

第36回

作品賞 『トム・ジョーンズの華麗な冒険』(脚本賞・音楽賞)
 主演男優賞 シドニー・ポワチエ(『野のユリ』)
 主演女優賞 バトリシア・ニール(『ハッド』)
 助演男優賞 メルヴィン・ダグラス(『ハッド』)
 助演女優賞 マーガレット・ルサフォード(『予期せぬ出来事』)
 監督賞 トニー・リチャードスン(『トム・ジョーンズの華麗な冒険』)
 「作品賞候補」 『アメリカアメリカ』(美術監督賞)『クレオパトラ』
 (撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・特撮効果賞)『西部開拓史』
 (脚本賞・サウンド賞・編集賞)『野のユリ』
 外国映画賞 『8½』(伊)

1962

第35回

作品賞 アラビアのロレンス(撮影賞・美術監督賞・サウンド賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 グレゴリー・ペック(『アラバマ物語』)
 主演女優賞 アン・バンクロフト(『奇蹟の人』)
 助演男優賞 エド・ベグリー(『渇いた太陽』)
 助演女優賞 パティ・デューク(『奇蹟の人』)
 監督賞 デヴィッド・リーン(『アラビアのロレンス』)
 「作品賞候補」 『史上最大の作戦』(撮影賞・特撮賞)『ミュージック・マン』(音楽賞)『戦艦バウンティ』『アラバマ物語』(脚本賞・美術監督賞)
 外国映画賞 『シベールの日曜日』(仏)



デヴィッド・リーン監督が英雄ロレンス(ピーター・オトゥール)の波乱の半生を雄大に描いた『アラビアのロレンス』



『奇蹟の人』のアン・バンクロフト(右)とパティ・デュークの熱演

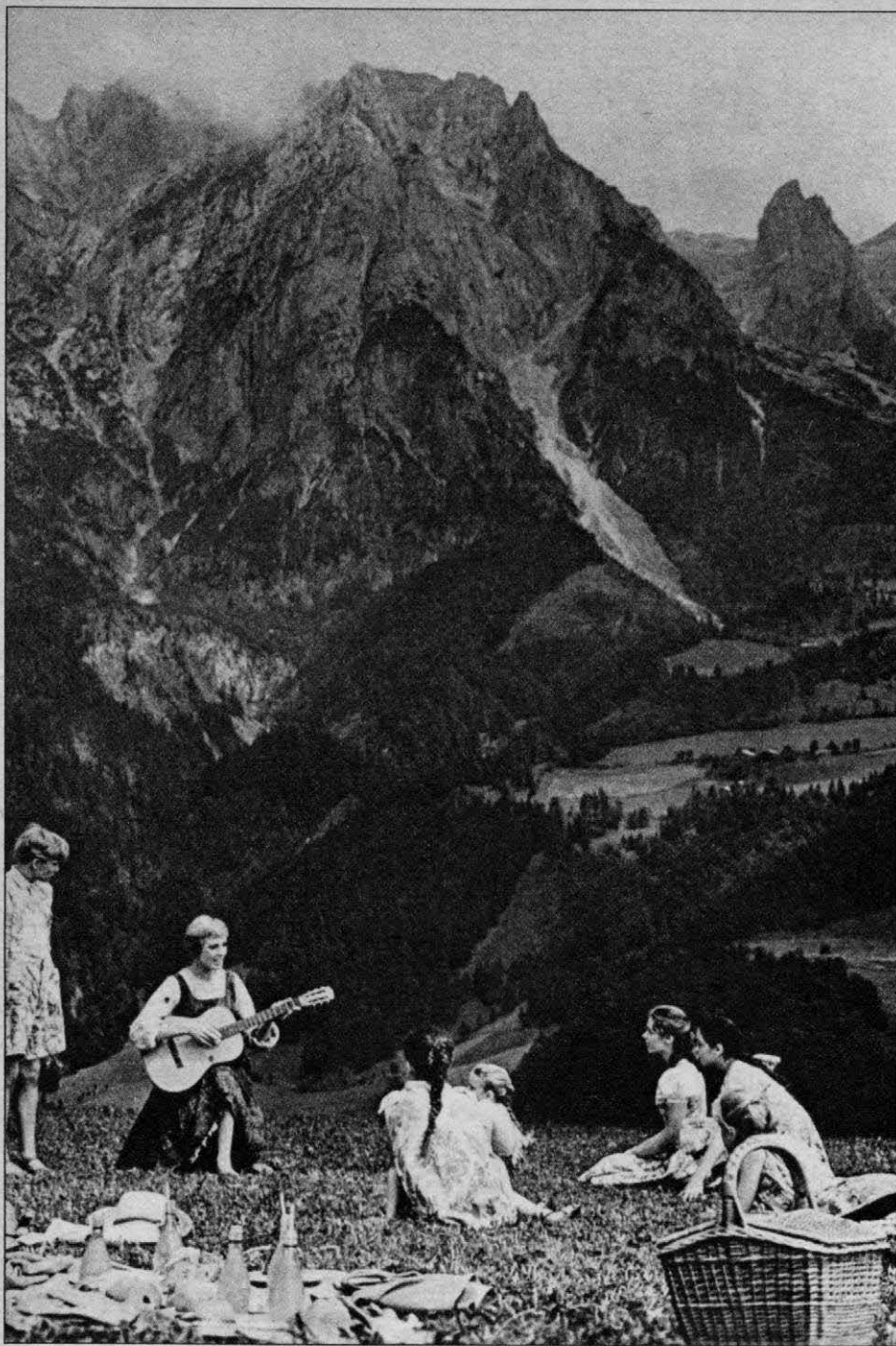


『アラバマ物語』で弁護士を演ずるグレゴリー・ペック



各国のスターが熱演したスペクタクル戦争映画『史上最大の作戦』は往時の激戦を迫力をもって再現していた





O・ハマースタインとR・ロジャーズの最後のミュージカルの映画化『サウンド・オブ・ミュージック』(R・ワイズ監督) 左から2人目が好演のジュリー・アンドリュース



主題歌で音楽賞を得た『いそしぎ』



パステルナークの小説をD・リーン監督が映画化した『ドクトル・ジバゴ』



『キャット・パルー』のリー・マーヴィン

1965

第38回

作品賞 『サウンド・オブ・ミュージック』(編集賞・音楽賞・サウンド賞)
 主演男優賞 リー・マーヴィン(『キャット・パルー』)
 主演女優賞 ジュリー・アンドリュース(『サウンド・オブ・ミュージック』)
 助演男優賞 マーティン・バルサム(『千人の道化師たち』)
 助演女優賞 シェリー・ウィンターズ(『いつか見た青い空』)
 監督賞 ロバート・ワイズ(『サウンド・オブ・ミュージック』)
 「作品賞候補」『ダーリング』(脚本賞・衣裳デザイン賞)『ドクトル・ジバゴ』(脚本賞・撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞)『愚か者の船』(撮影賞・美術監督賞)『千人の道化師たち』
 外国映画賞 『大通りの店』(チェコ)

1964

第37回

作品賞 『マイ・フェア・レディ』(撮影賞・美術監督賞・音楽賞・サウンド賞)
 主演男優賞 レックス・ハリスン(『マイ・フェア・レディ』)
 主演女優賞 ジュリー・アンドリュース(『メリー・ポピンズ』)
 助演男優賞 ビーター・ユスティノフ(『トプカピ』)
 助演女優賞 リラ・ケドローヴァ(『その男ゾルバ』)
 監督賞 ジョージ・キューカー(『マイ・フェア・レディ』)
 「作品賞候補」『ベケット』(脚本賞)『博士の異常な愛情』(メリー・ポピンズ)(編集賞・音楽賞)『その男ゾルバ』(撮影賞・美術監督賞)
 外国映画賞 『昨日・今日・明日』(伊)



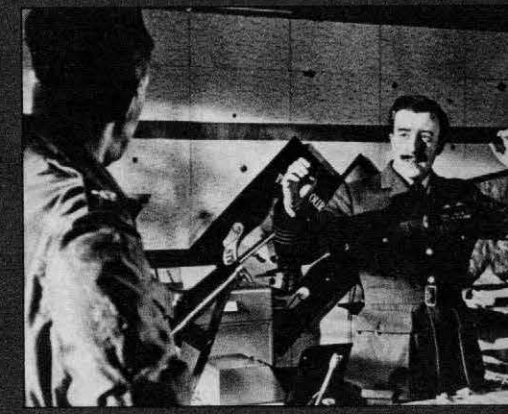
ヒット・ミュージカルを映画化した『マイ・フェア・レディ』(G・キューカー監督) 踊っているのがレックス・ハリスンとオードリー・ヘップバーン



アニメーションなどの特殊技術を効果的に使った『メリー・ポピンズ』 右がジュリー・アンドリュース 左はディック・ヴァン・ダイク



『その男ゾルバ』のリラ・ケドローヴァ(手前)



『博士の異常な愛情』



監督賞に輝いた『卒業』 左から主役のキャサリン・ロスとダスティン・ホフマン



『俺たちに明日はない』のエステル・パースンズ (左から2人目)



主題歌賞を得た『ドリトル先生不思議な旅』



『夜の大捜査線』N・ジュイスン監督のロッド・スタイガー (左)



『招かれざる客』(S・クレイマー監督)のキャサリン・ヘップバーン

1967

第40回

作品賞 『夜の大捜査線』(脚本賞・編集賞・サウンド賞)
 主演男優賞 ロッド・スタイガー(『夜の大捜査線』)
 主演女優賞 キャサリン・ヘップバーン(『招かれざる客』)
 助演男優賞 ジョージ・ケネディ(『暴力脱獄』)
 助演女優賞 エステル・パースンズ(『俺たちに明日はない』)
 監督賞 マイク・ニコルズ(『卒業』)
 「作品賞候補」 『俺たちに明日はない』(撮影賞) 『ドリトル先生不思議な旅』(特撮視覚効果賞) 『卒業』 『招かれざる客』(脚本賞)
 外国映画賞 『監視された列車』(チェコ)



この年のアカデミー各賞のほか数々の国際賞を獲得した『わが命つきるとも』 中央にひざまずいているのがポール・スコフィールド



『バージニア・ウルフなんかこわくない』のエリザベス・テイラー (左) とリチャード・バートン



主題歌賞の『野生のエルザ』



助演女優賞に輝くサンディ・デニス



手前がポール・スコフィールド(『わが命つきるとも』)

1966

第39回

作品賞 『わが命つきるとも』(脚本賞・撮影賞・衣裳デザイン賞)
 主演男優賞 ポール・スコフィールド(『わが命つきるとも』)
 主演女優賞 エリザベス・テイラー(『バージニア・ウルフなんかこわくない』)
 助演男優賞 ウォルター・マッソー(『恋人よ帰れ、わが胸に』)
 助演女優賞 サンディ・デニス(『バージニア・ウルフなんかこわくない』)
 監督賞 フレッド・ジンネマン(『わが命つきるとも』)
 「作品賞候補」 『アルフィー』 『アメリカ大陸作戦』 『砲艦サンパブロ』
 『バージニア・ウルフなんかこわくない』(撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞)
 外国映画賞 『男と女』(仏)

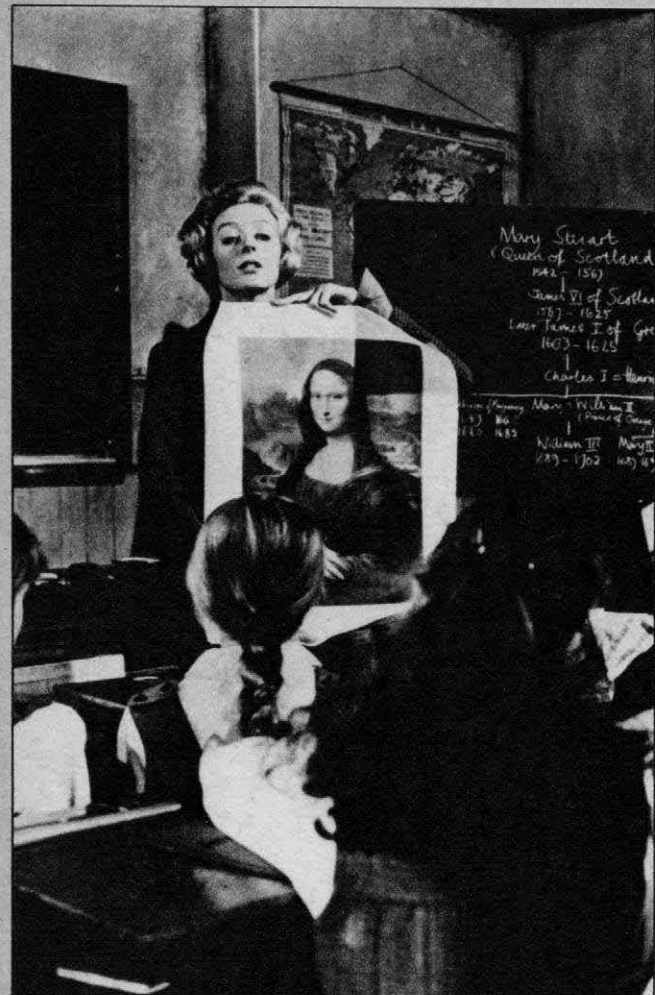


イギリスのシュレシンジャー監督の渡米第1作『真夜中のカーボーイ』が作品・監督賞に輝いた ダスティン・ホフマン(左)とジョン・ヴォイト

1969

第42回

作品賞 『真夜中のカーボーイ』(脚本賞)
 主演男優賞 ジョン・ウエイン(『勇気ある追跡』)
 主演女優賞 マギー・スミス(『ミス・ブローディの青春』)
 助演男優賞 ギグ・ヤング(『ひとりぼっちの青春』)
 助演女優賞 ゴールディ・ホーン(『さぼてんの花』)
 監督賞 ジョン・シュレシンジャー(『真夜中のカーボーイ』)
 「作品賞候補」『1000日のアン』(衣装デザイン賞)『明日に向かって撃て!』(脚本賞・撮影賞・音楽賞)『ハロー・ドーリー!』(美術監督賞・音楽賞・サウンド賞)『Z』(編集賞)
 外国映画賞 『Z』(アルジェリア・仏)



名作・舞台劇の映画化『ミス・ブローディの青春』のマギー・スミス



『勇気ある追跡』の片目の保安官 ジョン・ウエイン



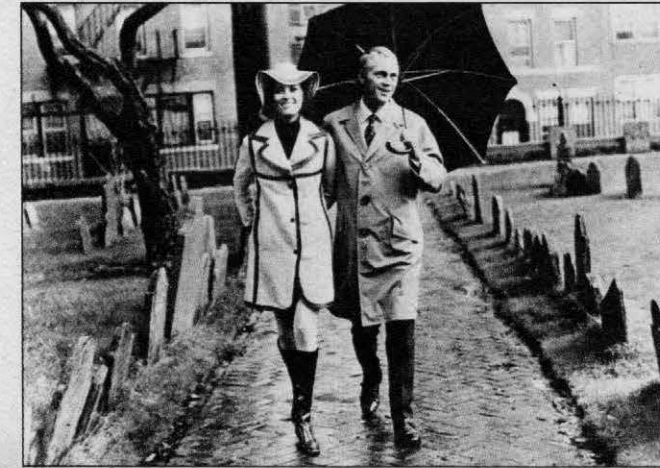
W・ゴールドマン脚本 G・ロイ・ヒル監督の『明日に向かって撃て!』



ディッケンズの原作が舞台になったミュージカルの映画化『オリバー!』



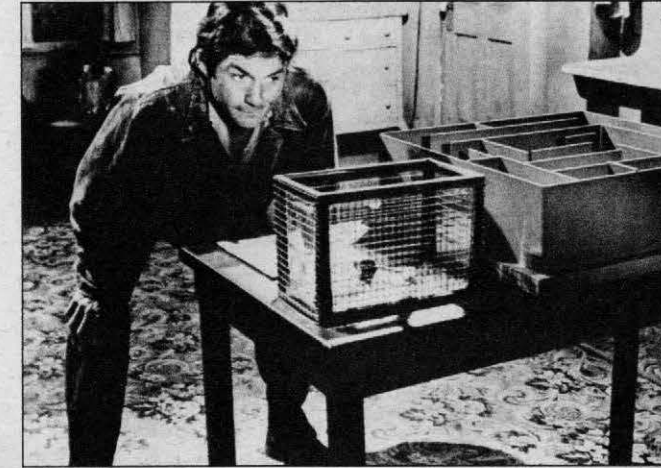
主演女優賞を二分はされたがキャサリン・ヘップバーンの受賞は3度目



主題歌賞は『華麗なる賭け』



『オリバー!』に主演のマーク・レスター(右から2人目)



『まごころを君に』(ラルフ・ネルスン監督)のクリフ・ロバートソン

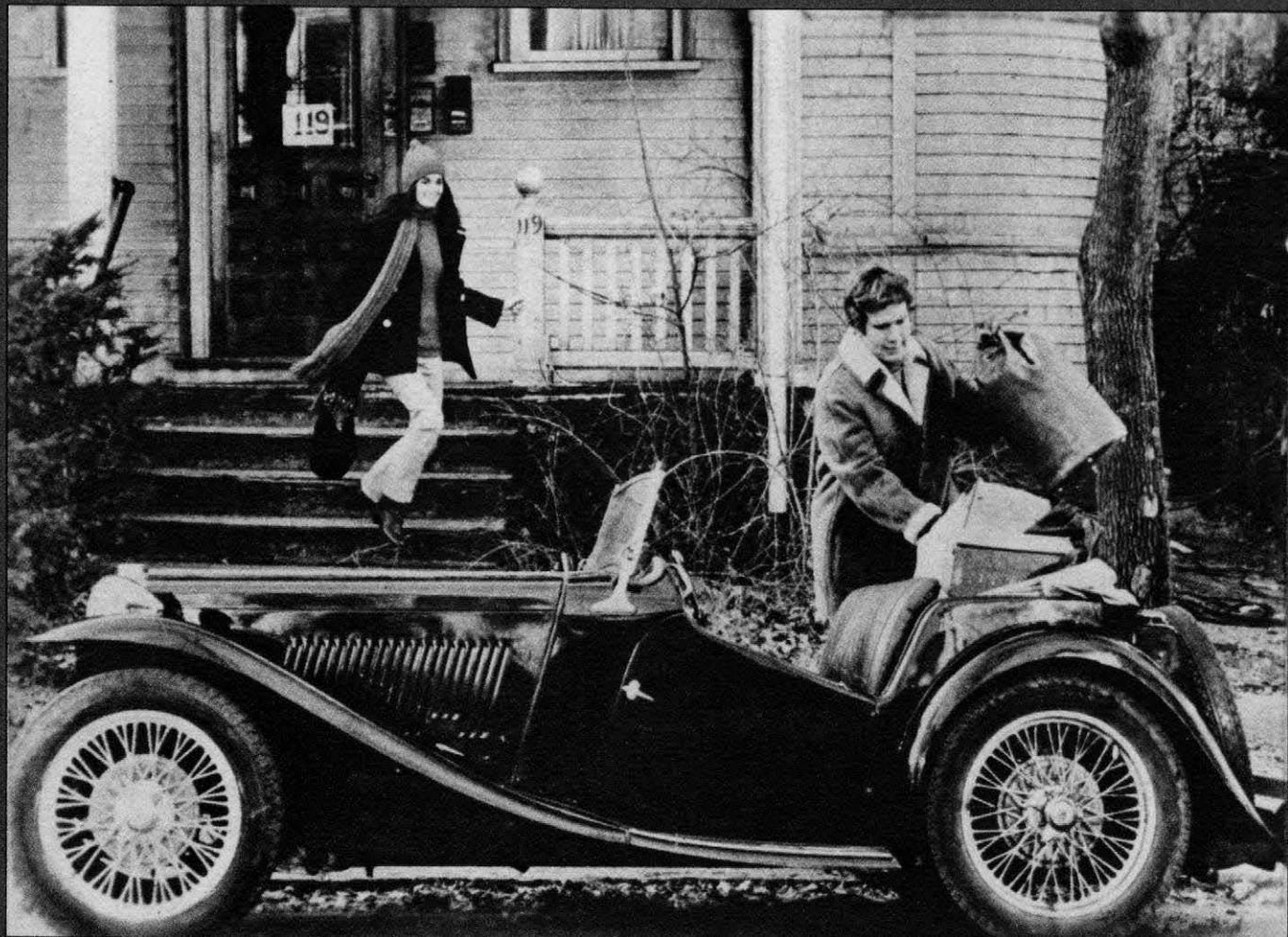
1968

第41回

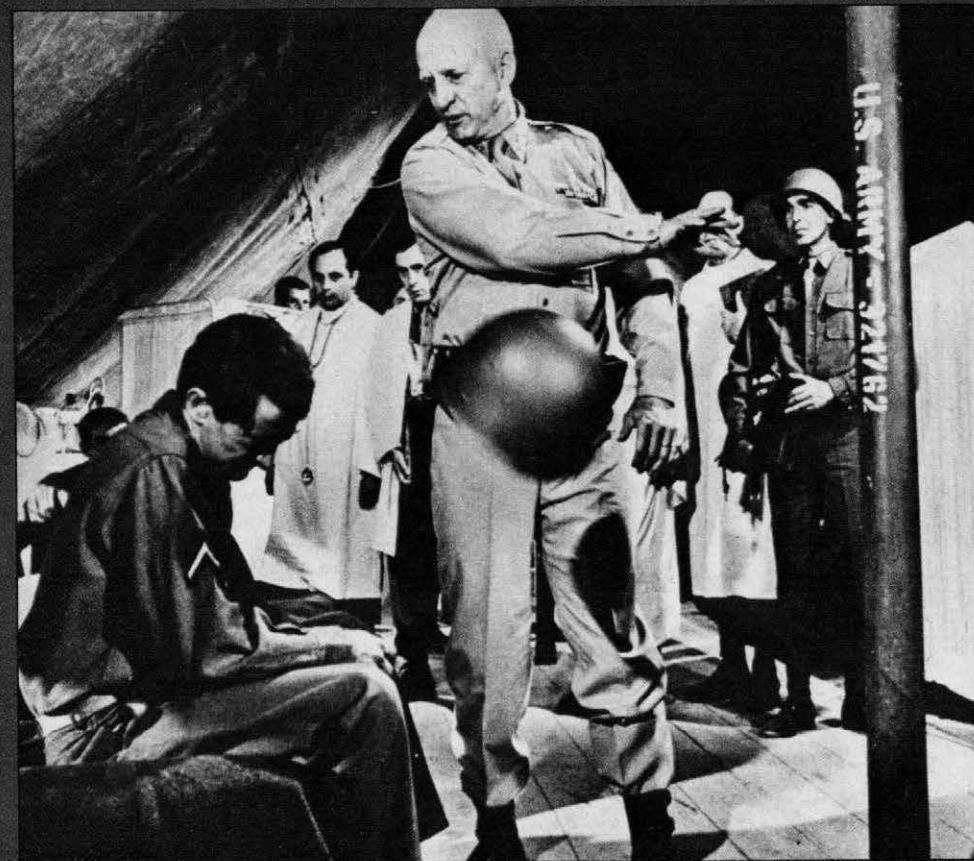
作品賞 『オリバー!』(美術監督賞・音楽賞・サウンド賞)
 主演男優賞 クリフ・ロバートソン(『まごころを君に』)
 主演女優賞 キャサリン・ヘップバーン(『冬のライオン』) パープ
 ラ・ストライサンド(『ファニー・ガール』)
 助演男優賞 ジャック・アルバートソン(『主題はバラ』)
 助演女優賞 ルース・ゴードン(『ローズマリーの赤ちゃん』)
 監督賞 キャロル・リード(『オリバー!』)
 「作品賞候補」『ファニー・ガール』(冬のリオン(脚本賞・音楽賞))
 『レーチェル』 『レーチェル』 『ロミオとジュリエット』(撮影賞・衣装デザイン賞)
 外国映画賞 『戦争と平和』(ソ連)



イギリスとの合作『恋する女たち』(ケン・ラッセル監督)のグレンダ・ジャクソン



フランシス・レイの甘美な音楽で音楽賞を得た『ある愛の詩』ライアン・オニール(右)とアリ・マッグロー



第2次大戦の勇将パットン將軍の波乱の半生を描いた『パットン大戦車軍団』は7部門のオスカーを獲得



脚本賞の『マッシュ』(ロバート・アルトマン監督)



ノミネートされたとき辞退していたG・C・スコットに断固主演男優賞が決定された

1970

第43回

作品賞 『パットン大戦車軍団』(脚本賞・美術監督賞・編集賞・サウンド賞)
 主演男優賞 ジョージ・C・スコット(『パットン大戦車軍団』)
 主演女優賞 グレンダ・ジャクソン(『恋する女たち』)
 助演男優賞 ジョン・ミルズ(『ライアの娘』)
 助演女優賞 ヘレン・ヘイズ(『大空港』)
 監督賞 フランクリン・J・シャフナー(『パットン大戦車軍団』)
 「作品賞候補」『大空港』『ファイブ・イヤーズ・ピーセス』『ある愛の詩』(音楽賞)『M★A★S★H(マッシュ)』(脚本賞)
 外国映画賞 『殺人捜査(伊)』

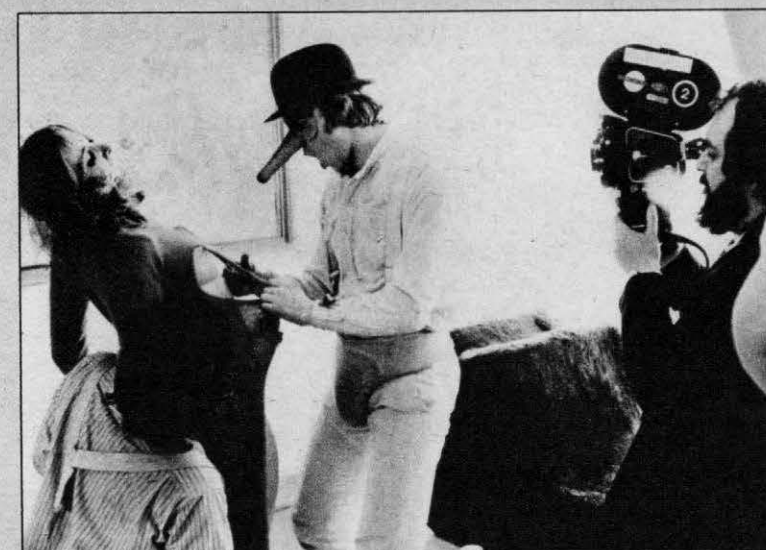
1971

第44回

作品賞 『フレンチ・コネクション』（脚本賞・編集賞）
 主演男優賞 ジーン・ハックマン（『フレンチ・コネクション』）
 主演女優賞 ジェーン・フォンダ（『コールガール』）
 助演男優賞 ベン・ジョンソン（『ラスト・ショー』）
 助演女優賞 クロリス・リーチマン（『ラスト・ショー』）
 監督賞 ウィリアム・フリードキン（『フレンチ・コネクション』）
 『作品賞候補』 『時計じかけのオレンジ』 屋根の上のパイオリン弾き
 『撮影賞・音楽賞・サウンド賞』 『ラスト・ショー』 『ニコライとアレクサンドラ』（美術監督賞・衣装デザイン賞）
 外国映画賞 『悲しみの青春』（伊）



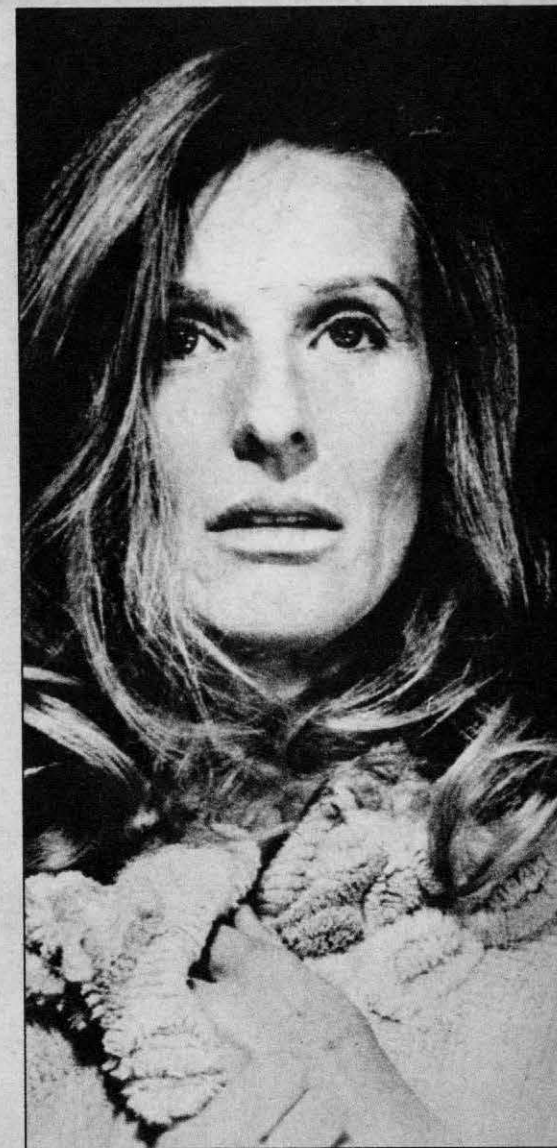
殺人と性倒錯など特異な題材を描いた『コールガール』（A・J・パクラ監督）のジェーン・フォンダ



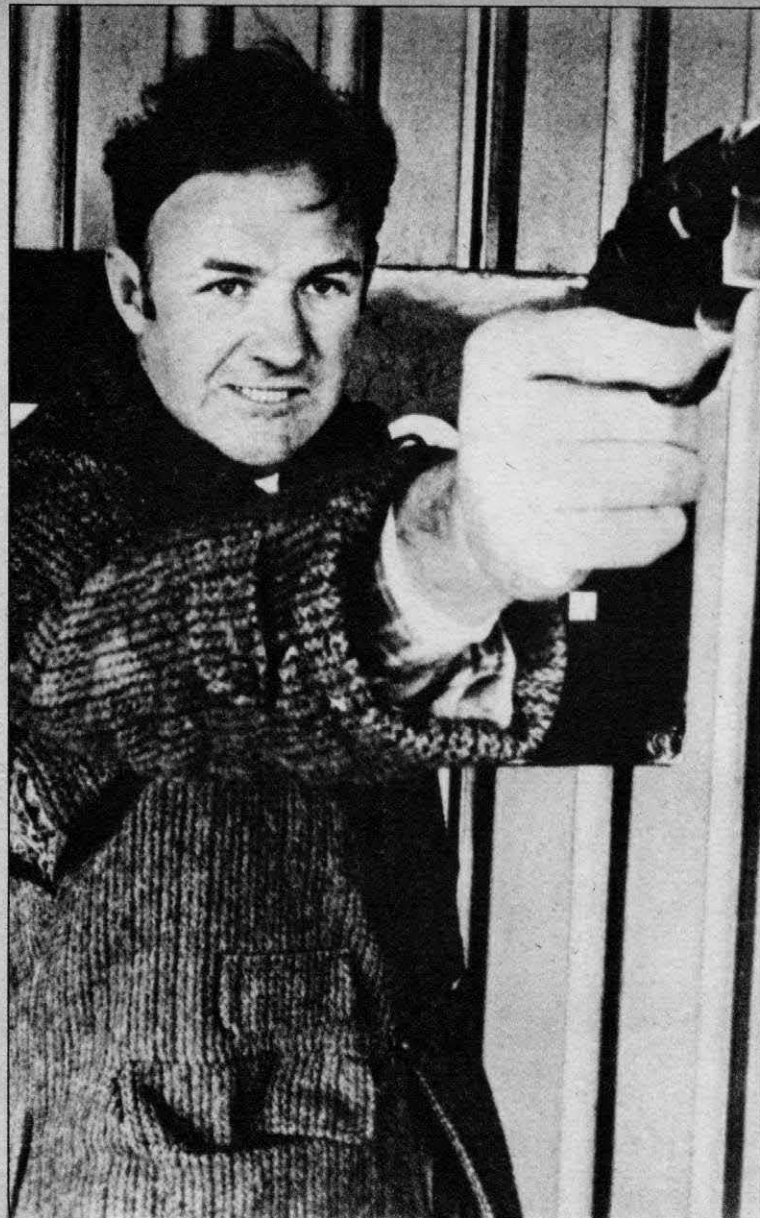
作品・監督賞にノミネートされていたが授賞ならなかった『時計じかけのオレンジ』



男・女優ふたりの助演賞に輝いた『ラスト・ショー』（P・ボグダノヴィッチ監督）のベン・ジョンソン（中央）



『ラスト・ショー』のクロリス・リーチマン



『フレンチ・コネクション』（W・フリードキン監督）でのドイル刑事はジェーン・ハックマンの当たり役になった



ロック調の主題歌で受賞した『黒いジャガー』

一九七〇年代に入って一九七一年、アカデミー賞の行事は四十四回目を迎えた。
 一九六〇年代の後半から映画の斜陽、ハリウッド王国の衰退がジャーナリズム、マスコミで話題になっていたが、七〇年、エスカレートするアメリカ映画のボルノ化を尻目に純情映画『ある愛の詩』が大ヒット、映画界の将来にあらたな希望を与えたのだった。
 そして六〇年代末期から七〇年代にかけての授賞対象になった作品を見渡すと、監督の若返りが目立ち、世代交替の時代に入ったことが目につく。『真夜中のカーボーイ』（一九六九年）のジョン・シュレシンジャー、『バットン大戦車軍団』（一九七〇年）のフランク・ロビンソン、『ゴッドファーザー』（一九七二年）のフランシス・フォード・コッポラ、『ス

ティング』（一九七三年）のジョージ・ロイ・ヒルなどオスカー受賞作の監督はいずれも四十代、一九七一年度の受賞作『フレンチ・コネクション』のウィリアム・フリードキンに至ってはテレビのドキュメンタリー畑出身、三十三歳の若さだった。フリードキンは監督・作品賞、主演男優賞（ジェーン・ハックマン）、脚本賞と主な部門を独り占めにし、前評判の高かった『屋根の上のヴァイオリン弾き』『ラスト・ショー』『時計じかけのオレンジ』『ニコライとアレクサンドラ』に圧勝したのだった。
 この年のアカデミー賞授賞式のハイライトは予想通り、二十年前アメリカを追われるようにして去ったチャールズ・チャップリンを招待、多年の映画芸術への貢献を賛え贈る特別賞授賞だった。間もなく八十三歳の誕生日を迎えようとしてい

たチャップリンは二十年ぶりに第二の故郷アメリカの土を踏み、この式典に臨んだが、受賞の瞬間会場を埋めていたすべての来客が総立ちとなって拍手が四分間も続いたのだった。かつての映画製作の仲間、後輩たちに温かく迎えられるチャップリンに『特別賞』が与えられるのは一九二七年の第一回の時の『サーカス』以来のことであり、まさにオスカー史上最も感激的な場面となったのだった。高齡のチャップリンは涙を浮かべてそのよろこびにしばし声もなかったが、彼の言葉を期待して拍手を静めた三千の式典参加者である映画人たちに向かって彼はためらいをみせながら、挨拶の言葉をのべた。『言葉というものはむだで無力なものです。私はただここに招いていただいた栄誉に感謝の気持ちでいっぱいです。すくきな心温かい皆さまありがとうございます……』と。



30年代のしゃれたムードをつくり出し7部門の受賞を果たした『スティング』のポール・ニューマン(右)とロバート・レッドフォード



惜しくも受賞を逸した『アメリカン・グラフィティ』



超心理現象による恐怖映画『エクソシスト』

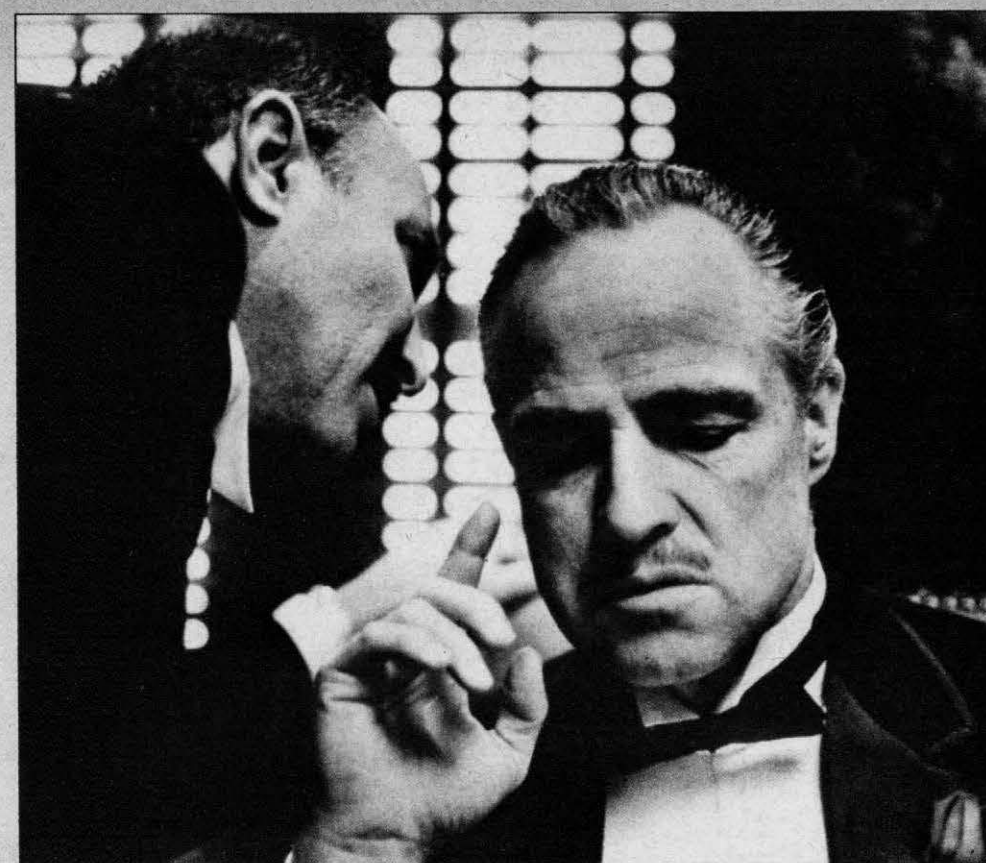


主題歌賞の『追憶』

1973

第46回

作品賞 『スティング』(脚本賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・編集賞・音楽賞)
 主演男優賞 ジャック・レモン(『その虎を救え』)
 主演女優賞 グレンダ・ジャクスン(『ウィークエンド・ラブ』)
 助演男優賞 ジョン・ハウスマン(『ペーパー・チェイス』)
 助演女優賞 テイタム・オニール(『ペーパー・ムーン』)
 監督賞 ジョージ・ロイ・ヒル(『スティング』)
 作品賞候補 『アメリカン・グラフィティ』『叫びとささやき』(撮影賞)『エクソシスト』(脚本賞・サウンド賞)『ウィークエンド・ラブ』
 外国映画賞 『アメリカの夜』(仏)



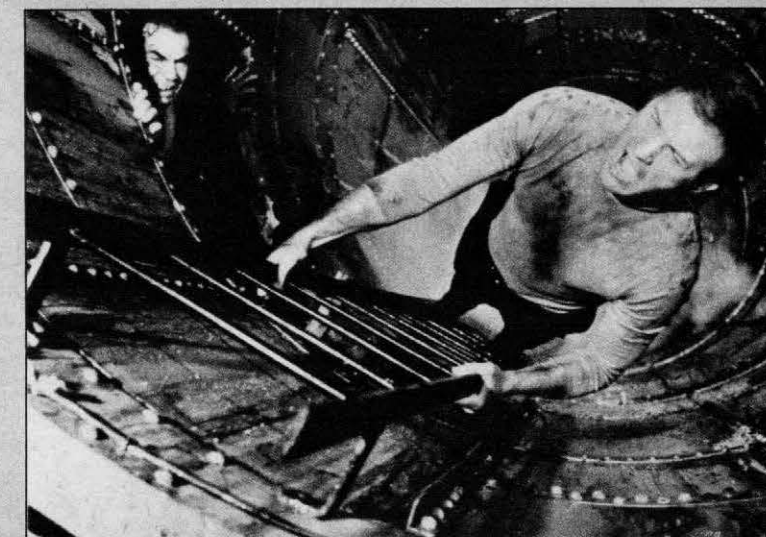
『ゴッドファザー』(F・F・コッポラ監督)で主演男優賞を決定されながら受賞を拒否して話題を呼んだマロン・ブランド(右)



『キャバレー』の司会役で好演のジョエル・グレイ



ライザ・ミネリ(右から2人目)のほか7部門のアカデミー賞に輝く『キャバレー』



特撮賞の『ポセイドン・アドベンチャー』

1972

第45回

作品賞 『ゴッドファザー』(脚本賞)
 主演男優賞 マーロン・ブランド(『ゴッドファザー』)
 主演女優賞 ライザ・ミネリ(『キャバレー』)
 助演男優賞 ジョエル・グレイ(『キャバレー』)
 助演女優賞 アイリーン・ヘッカート(『バタフライはフリー』)
 監督賞 ポプ・フォッシー(『キャバレー』)
 作品賞候補 『キャバレー』(撮影賞・美術監督賞・サウンド賞・編集賞・音楽賞)『脱出』(移民たち)『サウンダー』
 外国映画賞 『ブルジョワジーの秘かな愉しみ』(仏)



精神病院を舞台にした特異な題材で アカデミー賞の5部門で受賞した『カッコーの巣の上で』のジャック・ニコルソン



『狼たちの午後』のアル・パシーノ



『シャンブー』のリー・グラント(右)



『サンシャイン・ボーイズ』(ハーバート・ロス監督)のジョージ・バーンズ(左)

1975

第48回

作品賞 『カッコーの巣の上で』(脚本賞)
 主演男優賞 ジャック・ニコルソン(『カッコーの巣の上で』)
 主演女優賞 ルイズ・フレッチャー(『カッコーの巣の上で』)
 助演男優賞 ジョージ・バーンズ(『サンシャイン・ボーイズ』)
 助演女優賞 リー・グラント(『シャンブー』)
 監督賞 ミロシュ・フォルマン(『カッコーの巣の上で』)
 『作品賞候補』 『バリー・リンドン』(撮影賞・美術監督賞・衣裳デザイン賞・音楽賞) 『ジョーズ』(編集賞・サウンド賞・音楽賞) 『ナッシュビル』(音楽賞) 『狼たちの午後』(脚本賞) 『シャンブー』 『サンシャイン・ボーイズ』
 外国映画賞 『デルス・ウザーラ』(ソ連)



『カッコーの巣の上で』の冷徹な看護婦 ルイズ・フレッチャー

1974

第47回

作品賞 『ゴッドファーザー PART II』(脚本賞・美術監督賞・音楽賞)
 主演男優賞 アート・カーニー(『ハリーとトント』)
 主演女優賞 エレン・バースティン(『アリスの恋』)
 助演男優賞 ロバート・デ・ニロ(『ゴッドファーザー PART II』)
 助演女優賞 イングリッド・バーグマン(『オリエント急行殺人事件』)
 監督賞 フランシス・フォード・コッポラ(『ゴッドファーザー PART II』)
 『作品賞候補』 『チャイナタウン』(脚本賞) 『カンパセーション……盗聴……』 『レニー・ブルース』 『タワーリング・インフェルノ』(撮影・編集賞)
 外国映画賞 『アマルコルド』(伊)



ふたたび大きな反響を呼んだ『ゴッドファーザー PART II』にもオスカーが与えられた 中央が主役のアル・パシーノ



『ハリーとトント』(P・マザースキー監督)のアート・カーニー

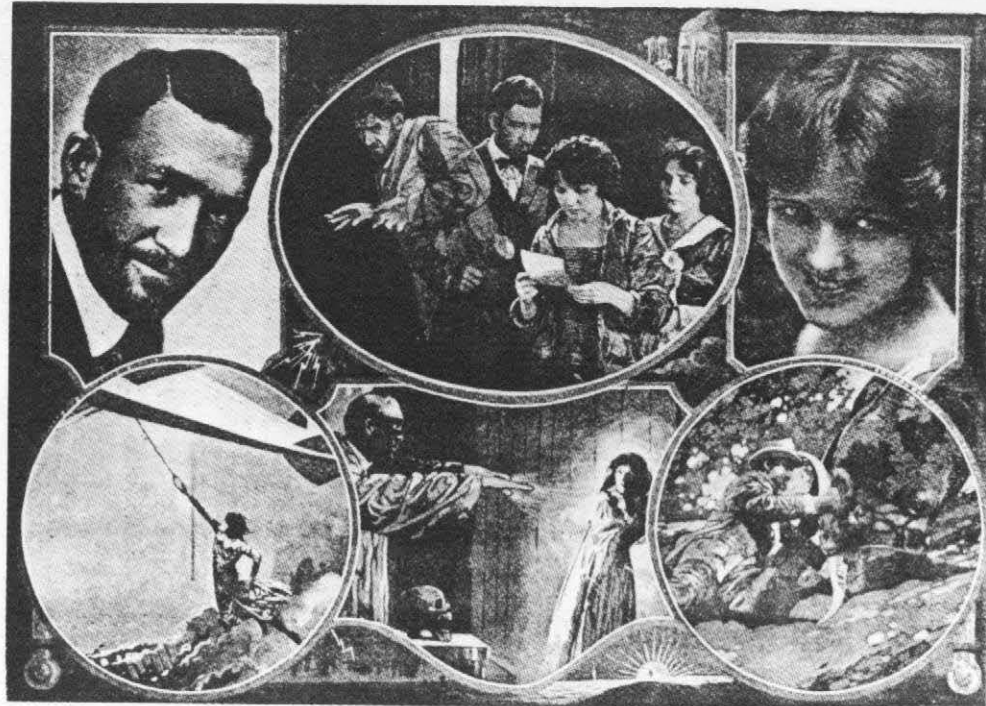


『アリスの恋』(M・スコース監督)のエレン・バースティン



『オリエント急行殺人事件』 中央奥にイングリッド・バーグマン

★サイレント
『神秘の幻影』全十五編
思い出の連続活劇



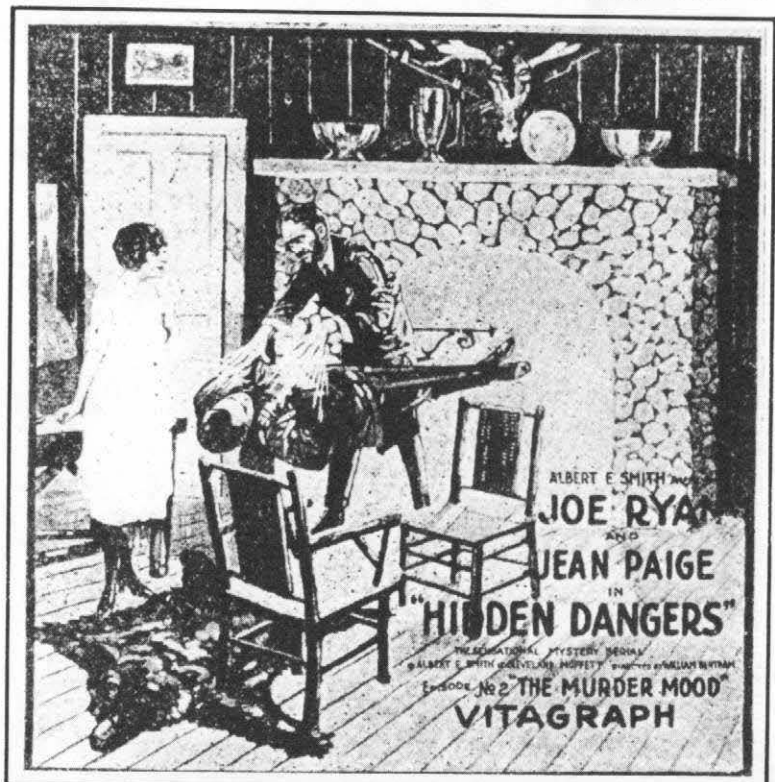
主演スター（左上ジョニー・ライアン 右上ジーン・ペイジ）とこのシリーズの4つの山場を紹介した表紙

サイレント映画時代に流行した連続活劇とは、一編ごとにクライマックスが置かれ、興奮のうちに次編が待たれるような仕組みになっていた。ここに紹介するイラストレーションは、当時、宣伝用に作られたパンフレットの表紙に描かれていたもので、主人公の危機に見舞われる状況が端的に物語られていて興味深い。なお、この『神秘の幻影』（ウィリアム・バートラム監督）は日本では大正10年に封切られた。

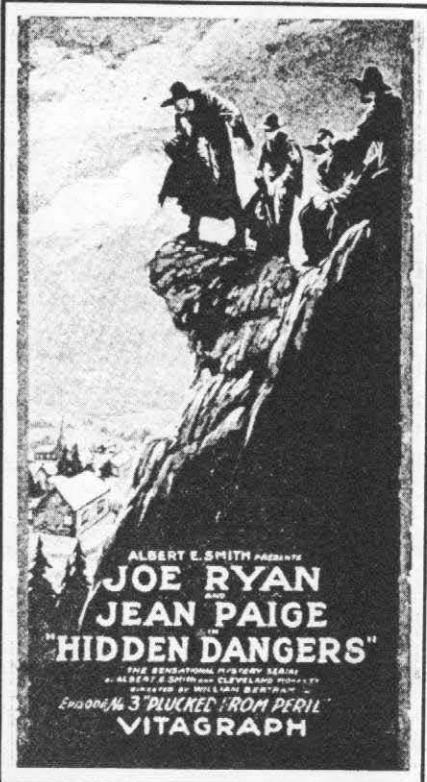
資料提供 鳥羽幸信氏



第1話 プロローグ



第2話 殺しの雰囲気



第3話 危機を脱がれて

6月曜ロードショー
月曜日ヨル9:02 解説:荻 昌弘

アカデミー受賞作をはじめ話題の名作が今年もズラリ



●'67アカデミー監督賞（マイク・ニコルズ）

卒業

出演/ダスティン・ホフマン
キャサリン・ロス
アン・バンクロフト

●'56アカデミー作品賞
脚色賞（ジェームズ・ボア/ジョン・ファーロー/S・J・ペレルマン）
編集賞（ジーン・ルッジェロ/ポール・ウェザーワックス）
音楽賞（ビクター・ヤング）

八十日間世界一周

監督/マイケル・アンダーソン
出演/デビッド・ニーブン
シャーリー・マックレーン
シャルル・ボワイエ

●'59アカデミー外国語映画賞

黒いオルフェ

監督/マルセル・カミュ
出演/マルベッサ・ドーン
ブレノ・メロ



街の灯

監督/チャールズ・チャップリン
出演/チャールズ・チャップリン
バージニア・チェリル

戒厳令

監督/コスタ・ガブラス
出演/イブ・モンタン
レナート・サルバトーリ

3月のスケジュール

3/7 クインメリー号大爆破

監督/デヴィッド・ローウェルリッチ
出演/ロバート・スタック/デヴィッド・ヘディソン/ラルフ・ペラミー

3/14 ソルジャー・ボーイ

監督/リチャード・コンプトン
出演/ジョー・ドン・ペイカー/ホール・コスロ/エリオット・ストリート

3/21 マーフィの戦い

監督/ピーター・イエーツ
出演/ピーター・オートール/シェーン・フィリップス

3/28 さらば荒野

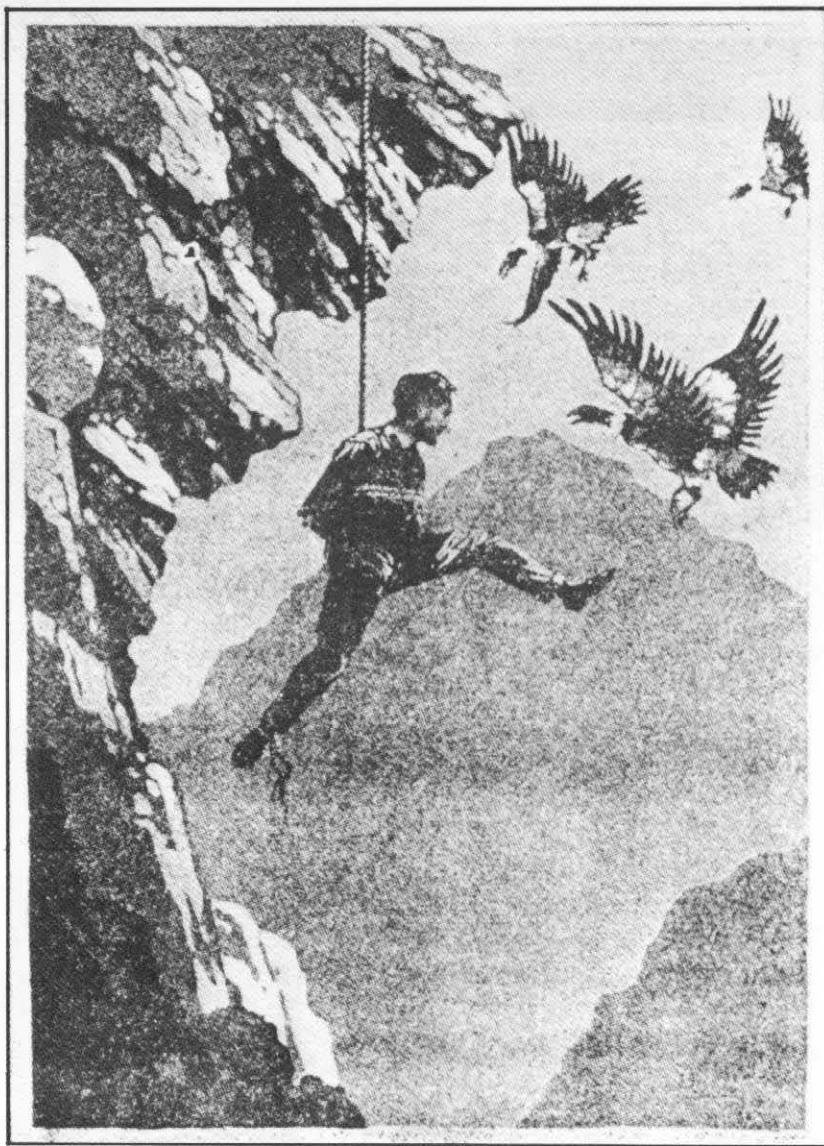
監督/ドン・メドフォード
出演/キャンディス・バーゲン/オリヴィア・リード/ジーン・ハックマン

007サンダーボール作戦

チキ・チキ・バン・バン

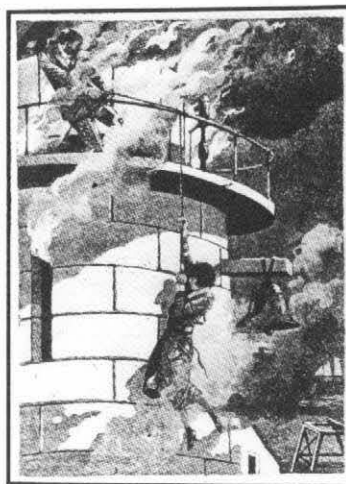
恋人たちの曲-悲愴-

フェリーニのローマ



第12話 あわや ハゲタカの餌食に……

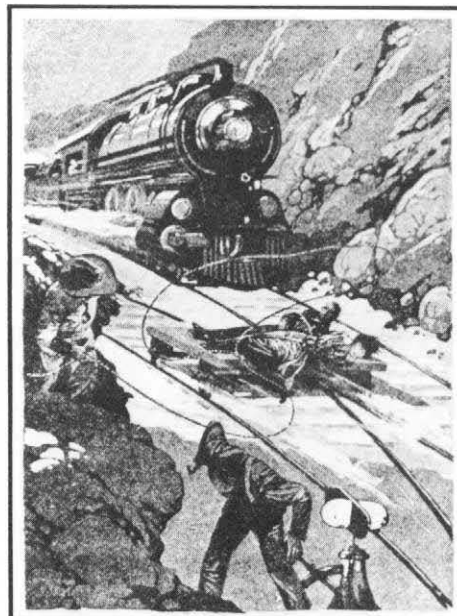
第14話 燃え上がる
火の手の中でヒロイン
を助けようとする
勇敢なヒーロー



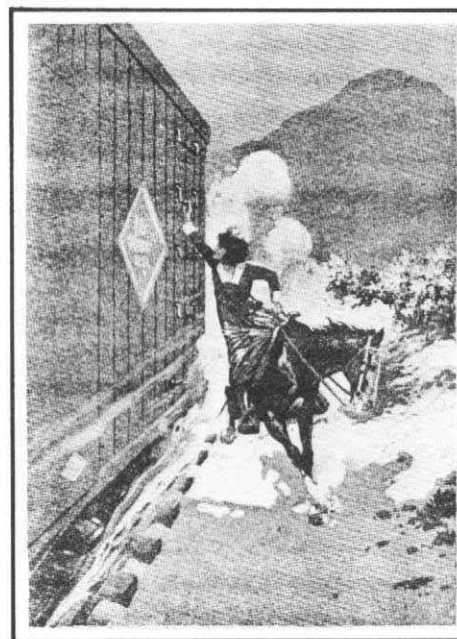
第15話 あわや
ヒロインはヒーローの
衝突のその瞬間
たのでありました



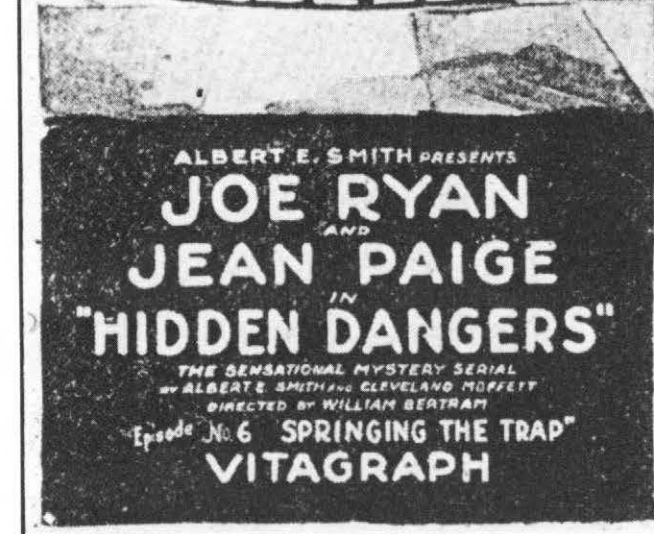
第10話 間一髪のところ救いの手が……



第11話 ヒーローとヒロインは残酷な敵の罠に



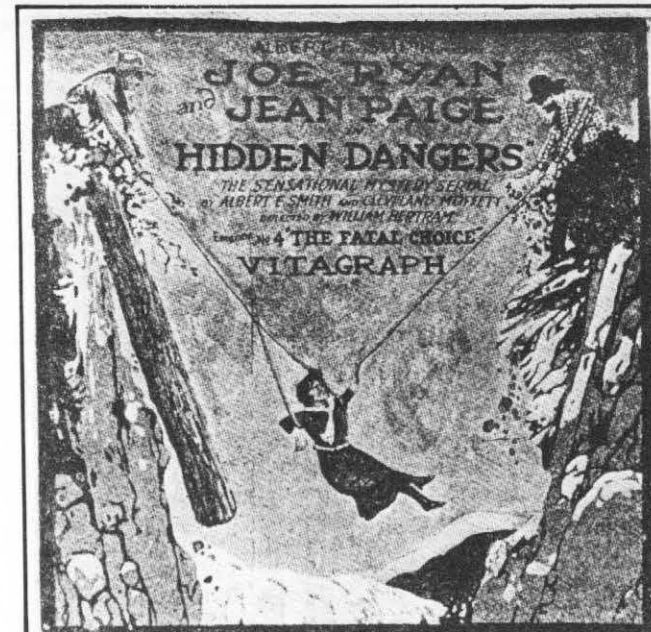
第13話 頑張れ! ヒロインの必死の逃亡



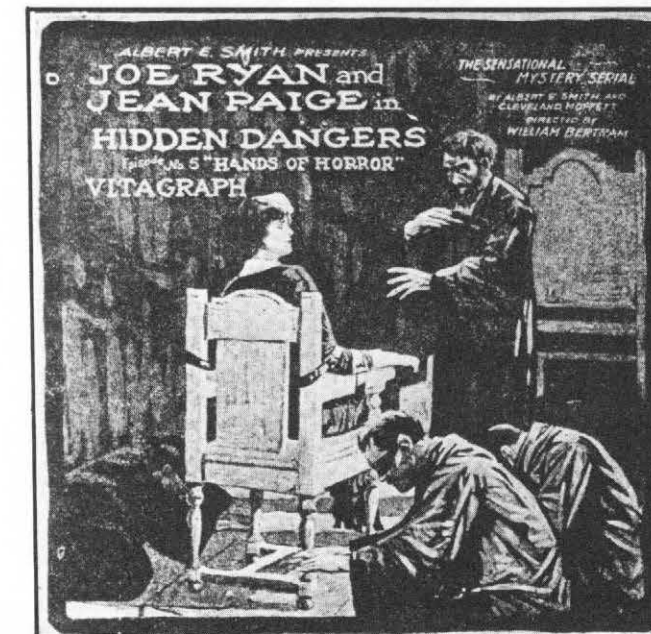
第6話 はね上がる罠——主人公を待ちうけていたものは……



第9話 難を逃れてよじのぼったものの……彼女の運命は



第4話 運命のわかれ道——危うし! ヒロイン



第5話 恐怖の魔手——死を予告されたヒロイン



第8話 悪漢どもの追跡をふり払い必死に逃亡するヒロイン



第7話 炎のカーテンと動く床に乗って逃がれるインド人たち

年表 外国映画の歴史

構成 岩本憲児

☆外国映画界の動き

一八九一年 アメリカのエディソンが研究助手ディクソンの協力でキネトスコップ（のぞき穴式）を発明し、九四年にニューヨークで一般公開する。エディソンは九三年に、世界最初の屋内映画撮影所「ブラック・マリヤ」も建設した。一八九五年十二月二十八日、フランスのリュミエール兄弟がパリでシネマトグラフ（スクリーン映写式）を公開する。一八九六年 フランスのメリエスが最初のトリック映画をつくりはじめる。
一九〇三年 アメリカのポーターが「大列車強盗」で最初の西部劇をつくりだす。
一九〇五年 フランスのコメディアン、マックス・ランデが映画にデビュー。
一九〇八年 フランスではコールが漫画映画「ファンタスマゴリ」シリーズを手がけ、ル・フィルム・タル社の「ギーズ侯爵の暗殺（カルメット・ル・バルジ）」など文芸映画が流行する。また、最初の連続映画「ニッケル・カーター」（ジャック・シリウス）も始まる。同年、アメリカではグリフィスが「ドリーの冒険」で映画への道をスタート。イギリスではスミスがキネマカラーを発明。アンブロジー社（伊）の「ボンベイ最後の日」（マッジ）が世界的好評を博す。
一九一〇年から一二年ごろにかけて、アメリカでスター・システムが確立される。

☆外国映画主要作品

一八九五年（仏）『工場の出口』『赤ん坊の食事』『塀の取り壊し』『水をかけられた水まくり』『列車の到着』（以上、リュミエール）（米）『このころまでのキネトスコップ作品』『鳩の飼育』『朝の入浴』『スコットランドのメアリー女王の死刑執行』『ある婦人のくもがくれ』（メリエス）
一八九六年（仏）『ドレフュス事件』『シンデレラ』（メリエス）
一九〇二年（米）『アメリカの消防士の生活』（ポーター）（仏）『月世界旅行』（メリエス）
一九〇五年（英）『名犬ロバー』（ヘプワース）、『モーターリスト』（ポール・ブリス）、『チャールズ・ビーリスの生涯』（ハガー）（伊）『ローマの占領』（アルベリニ）
一九一一年（米）『イノック・アーデン』（グリフィス）（仏）『ジゴマ』（ジャック・セ）（英）『スコットの南極探検』（ボンディング）（露）『セヴァストポリールの防衛』（ハン・ジョンコフ／ゴンチャロフ）

☆日本映画界の動き

一八九六年 キネトスコップが神戸で初上映される。
一八九七年 シネマトグラフ、ヴァイタグラフの初上映が相次ぐ。
一八九九年 最初の日本製映画が公開される。
一九〇三年 最初の常設映画館「浅草電気館」が開業する。
一九〇四年 吉沢商店ほかで、日露戦争の実写映画が競ってつくられる。
一九〇八年 牧野省三、本能寺合戦で映画活動に入る。
一九〇九年 眼玉の松ちゃん、こと尾上松之助、『善悪忠信』で映画にデビュー。
一九一一年 『ジゴマ』が大流行する。

1912

（米） マック・セネットがキーストン社を設立、キーストン・コメディ時代の幕が開く。ユニヴァーサル映画社創立。最初の連続映画「何がメアリーに起ったか？」がはじまる。
（仏） サラ・ベルナル主演の「エリザベス女王」（フィルム・タル社）がアメリカに輸出され、大成功をおさめる。
（伊） 「クオ・ヴァーディス」（グアットソーニ）、『ボンベイ最後の日』（アン・ブロジーノ）など史劇映画が盛んになる。

（米） 『見えざる敵』（グリフィス）（仏） 『あるがままの人生』（シリウス）（ワイヤード）

エム・パティ商会、吉沢商店、横田商会、福宝堂の四社が合併して、日本活動写真株式会社（日活）を設立。創立記念に『忠臣蔵（牧野）』製作。『ジゴマ』上映禁止さる。

1913

（米） チャップリン、キーストン社と映画出演の契約を結ぶ。連続映画「キーストンの冒険（グランドン）」の成功により、連続映画が流行する。
（仏） この年から翌年にかけて、連続映画「ファンタマ」（ワイヤード）が人気をよぶ。
（独） 怪奇ファンタジー映画「ブラーグの大学生」（ウエグナー）が評判になる。

（米） 『ベッスリアの女王』（グリフィス）、『スクォーマン』（デミル）、『ゲティスバーグの戦い』（インス）
（仏） 『プロテア』（ジャック・セ）（伊） 『アントニーとクレーオトラ』（グアットソーニ）（英） 『デイヴィッド・カパーウィールド』（ヘプワース）（スウェーデン） 『インゲボリー・ホルム』（シェーストレム）（デンマーク） 『アトランチス』（フロム）

日活、向島撮影所建設。また、付属弁士養成所も開設。日本キネトフォン社設立、デイス式トーキーを試みる（翌年公開）。

1914

（米） チャップリン、スクリーンに登場。パール・ホワイト主演の連続映画「ボーリンの危機」（カスニエ／マッケンジー）が冒険活劇を展開し、大ヒットする。ワイリアム・S・ハートが西部劇スターへの道を歩みはじめる。
（伊） 史劇映画の大作「カピリア」（バスターローネ）が公開され、大成功をおさめる。この作品同様、フォスコの名でバスターローネは「火」を発表、女優ビーナ・メニッケリをスターの座におしあげた。

（米） 『アルコール先生自動車競争の巻』（チャップリン）、『海神の娘』（プレノン）（伊） 『闇に落ちた人々』（マルトリオ）（独） 『ゴレム』（ガレン／ウエゲナ）（露） 『未来主義者のキャバレーNo.13におけるドラマ』（ろばの尻尾）（グループ）

天然色活動写真株式会社（天活）設立、キネマカラーで『義経千本桜』（吉野二郎）を発表。日活の新派調「カチューシャ」（細山喜代松）がヒットし、女形立花貞一郎が人気スターになる。

1915

（米） 南北戦争に題材をとったグリフィスの大作『国民の創生』公開。ダグラス・フェアバンクスが映画にデビュー。
（仏） 前衛映画の先駆的作品「チューブ博士の狂気」（カンズ）、女盗賊を主人公にした連続映画「ドラール」（ワイヤード）がつくられる。
（伊） セレナ、リアリズム映画の秀作「アッスンタ・スピナ」（フランチェスカ・ベルティニ主演）を発表。

（米） 『チート』（デミル）（伊） 『椿姫』（セレナ）（英） 『ジェーン・ショア』（バーカー）

『ファンタマ』、『マスター・キー』、『名金』など、外国製連続映画が公開される。

1916

（米） 四つのエピソードを同時進行させたグリフィスの画期的な大作『イントレランス』が公開される。ユニヴァーサル映画社がブルーバード映画の製作を開始する。チャップリン、ミューチュアル社と契約。
（仏） フェデー、『女の頭と賢い女』で監督としてデビュー。
（伊） 未来主義映画「不実な魅力」（ブラガリア）がつくられる。
（スウェーデン） 『波高き日』（シェーストレム）の評価高く、スウェーデン映画の黄金時代はじまる。

（米） 『シヴィライゼーション』（インス）、『消防夫』（チャップリン）（仏） 『ジュテックス』（ワイヤード）

小林喜三郎、小林商会を設立し、連鎖劇全盛時代をつくる。また、帝劇で『カピリア』（一九一四）を上映し、高額入場料五円（特等）で話題になる。

1917

（米） ジョン・フォード、バスター・キートンら、映画での活動をはじめめる。チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル、ハロルド・ロイドらの喜劇が盛んにつくられる。
（独） 財閥と政府の共同出資によるウーファ映画社設立。

（米） 『移民』（チャップリン）、『ジャン・ダーク』（デミル）（露） 『強い人』（メイエルホルド）（スウェーデン） 『生恋死恋』（シェーストレム）

井上正夫監督・主演の『大尉の娘』（小林商会）、日本映画の革新を試みるが、女形は存続。警視庁、活動写真取締規則 公布。最初の漫画映画つくられる。

1918

（米） ファースト・ナショナル社へ移ったチャップリン、『犬の生活』、『担え銃』など傑作をつくる。グリフィス、イギリスで連合軍のために『世界の心』を撮る。
（独） 一時代を画したパテ映画社、製作を中止。
（独） ポーラ・ネグリの主演のルビッチュ作品『呪の眼』、『カルメン』公開。

（米） 『鬼火ロウドン』（バーカー）、『アルプス風』（シエトロハイム）、『青い鳥』（ターナー）（仏） 『第十交響曲』（カンズ）（伊） 『さらば青春』（ジェニナ）（ソ連） 『セルギー神父』（プロタザノフ）、『技師ブライトの計画』（クレシヨフ）

田中栄三の革新映画『生ける屍』（日活）公開。帰山教正、純映画劇の製作を提唱し、シナリオによる準備、女優の採用などによって第一作『生の輝き』、第二作『深山の乙女』（いずれも天活）を完成、翌年公開する。

1927	1926	1925	1924	1923	1922	1921	1920	1919
<p>〔米〕 ワーナー・ブラザーズ映画社のデイスクリット・トーキー「ジャズ・シンガー」(アル・ジョルスン主演、クロムスランド監督)が公開され、大成功となる。フォックス映画社はフィルム・サウンド・トーキーを開発。以後、アメリカ映画のトーキー化が急速に進む。クララ・ボウ、「あれ」(バジャール)に主演して、「イット・ガール」なるこぼれを流行させる。グレン・ガルボ、「肉と悪魔」(C・ブライアン)でジョーン・ギルバートとはじめてコンビを組む。映画芸術科学アカデミー創設。</p> <p>〔仏〕 ガンス、三面スクリーンに映写する「トリプル・エクラン」の「ナポレオン」を完成。</p> <p>〔独〕 ルットマン、実験的ドキュメンタリー「柏林—大都会交響楽」を発表。</p>	<p>〔米〕 ワーナー・ブラザーズ映画社の「ドン・ジュアン」(クロスランド)で音楽のトーキー化(デイスクリット)に先鞭をつける。スタン・ローレルとオリヴァー・ハーディのコンビがはじまり、ジョーン・クロフォードがスターへの道を歩みはじめる。キートンの傑作「キートン将軍」(「キートン」の大列車追跡、ブルックマン/キートン)、「サイレント」期最後の超大作「ベン・ハー」(ニプロ)など公開。ルドルフ・ヴァレンチノ急死。</p> <p>〔英〕 ヒッチコック、最初のスリラー「下宿人」を撮る。</p> <p>〔独〕 未来都市を描くラングの大作「メトロポリス」公開。</p> <p>〔ソ連〕 「母」によって、ブドフキンの名がエイゼンシュテインについて世界に知られる。</p>	<p>〔米〕 チャップリンの傑作「黄金狂時代」、第一次大戦をあつかった戦争大作「ビッグ・パレード」(K・ウィター)、「メリー・ウィドウ」(シュトロハイム)などヒットする。</p> <p>〔仏〕 フィヤード、マックス・ランデラ死去。</p> <p>〔英〕 ヒッチコック、「快楽の園」で監督としてデビュー。</p> <p>〔伊〕 三度目の映画化、大作「クオ・ヴァーディス」(アンブロジョ他)公開。しかし不成功に終り、製作社は倒産、イタリア映画は不振をきわめる。</p> <p>〔ソ連〕 エイゼンシュテインの第一作「ストライキ」公開、年末には「戦艦ポチョムキン」も完成する。</p>	<p>〔米〕 コロンビア映画社、MGM映画社など創立。フォード、「アイアン・ホース」で監督の地位を確立。ルビッチのソフィスティケートディッド・コメディ「結婚哲学」が好評を博す。</p> <p>〔仏〕 「幕間」(クレール)、「パレ・メカニク」(レジエ)など、アヴァンギャルド映画が盛んになる。ルノワール、「水の娘」で監督としてデビュー。</p> <p>〔独〕 ラングの大作「ニーベルンゲン」二部作完成。ムルナウの代表作で、無字幕映画「最後の人」公開。</p> <p>二部あまりの長尺のため、翌年、短縮版が一般公開された。</p> <p>〔スウェーデン〕 グレン・ガルボ、「イエスタ・ペルリン」伝説(「ステイル」)でスクリーンに登場。</p>	<p>〔米〕 ハロルド・ロイド、「用心無用」ほかで人気スターとなる。アメリカ開拓史の一ページを描く最初の大作「幌馬車」(クルーズ)、「ヒット・スベクタス」超大作「十誡」(デミル)、「徹底したリアリズム描写の」(グランド・シネマ)、「シネマ・パブリック」が出演しないチャップリン作品「巴里の女性」ほか、アメリカ映画は多岐にわたる。ドイツから、スターのポーラ・ネグリー、監督のルビッチが移住し、作品を発表。</p> <p>〔仏〕 クレールが「眠るパリ」で監督としてデビュー。デリュック、シネクラブを組織。「鉄道の白薔薇」(ガンス)第二部が完成したが、「シネクラブ」でスクリーンに登場。</p>	<p>〔米〕 ハリウッド「不道徳論」の自衛策として、アメリカ映画製作者配給者協会は郵政長官W・ヘイズを会長に招く。</p> <p>〔仏〕 フラッシュバックの技法を用いて視覚的リズムを生み出したガンスの最高傑作「鉄道の白薔薇」完成(第一部)。</p> <p>〔ソ連〕 ヴェルトフのニューズ映画シリーズ「キノ・ブラウダ」はじまる。中央国立写真・映画局(ゴスキノ)設立される。</p>	<p>〔米〕 「黙示録の四騎士」(イングラム)でルドルフ・ヴァレンチノ、スターの座をしめる。フラハティ、エスキモ人の生活を長期にわたって記録したドキュメンタリー「極北のナヌーク」(「極北の怪異」)を完成(公開は翌年)。</p> <p>〔仏〕 「エル・ドラド」(レリビエ)など、「フォトジェニー」派の作品があらわれる。</p> <p>〔独〕 ラング、最初の問題作「死滅の谷」を発表。リヒターの「リズム21」エッセーの「対角線交響曲」など、絶対映画とよばれる実験映画がつくられる。</p>	<p>〔米〕 「クレシヨフ」が結成され、モンタージュの実験をはじめ「スウェーデン」シネストレムの代表作「靈魂の滅亡」、海外にその名を知られる。</p>	<p>〔米〕 グリフィス、チャップリン、ダグラス・フェアバンクス、メアリー・ピックフォードの四人でユナイテッド・アーティスツ社を設立。</p> <p>〔独〕 表現主義映画の代表作「カリガリ博士」(ワイネ)が製作され、「狂」注目をあびる。</p> <p>〔英〕 短編の科学映画「自然の秘密」シリーズはじまる。</p> <p>〔ソ連〕 映画事業の国有化が進み、モスクワに国立映画学校(のちの映画大学)が開校する。</p>
<p>〔米〕 「結婚進行曲」(シュトロハイム)、「サンライズ」(ムルナウ)、「第七天国」(ボザージ)、「暗黒街」(スタンバーグ)、「イタリヤの妻の帽子」(クレール)、「港町にて」(カヴァルカンティ)、「貝殻と僧侶」(デュラック)、「ソ連」(「大事業同盟」(コジンスツエフ/レトラウベルグ)、「聖ペテルブルクの最後」(ブドフキン)。</p>	<p>〔米〕 「オベラの怪人」(ジュリアン)、「モアナ」(フラハティ)、「黒い海賊」(バーカー/フェアバンクス)、「女優ナナ」(ルノワール)、「時のほか何物もなし」(カヴァルカンティ)、「独」(「ファウスト」(ムルナウ)、「心の不思議」(パブスト)、「アクメッド王子の冒険」(影絵映画 ライニガー)「ソ連」(「掟に従って」(クレシヨフ)。</p>	<p>〔米〕 「セヴン・チャンス」(「キートンの板面棒」キートン)、「ロイドの人気者」(「ニューメイヤー/ロイド」)、「救いを求める人々」(「スタンバーグ」(「仏」)、「生けるバスカル」(レリビエ)、「にんじん」(「デュヴィエ」)、「純粋映画の五時間」(「シメット」(「独」)、「ウァリエ」(「デュボン」)、「喜びなき街」(「パブスト」)。</p>	<p>〔米〕 「忍術キートン」(キートン/クリスプ)、「バグダットの盗賊」(ウォルシュ)、「仏」(「洪水」(「デュラック」)、「遺作」(「独」)、「裏町の怪老」(「レニ」)、「ソ連」(「ボリシエウイ」の国におけるウエスト氏の異常な冒険」(「クレシヨフ」(「スイス」)、「雪崩」(「フエデー」)。</p>	<p>〔米〕 「荒武者キートン」(キートン/ブライストン)、「ノートルダムの怪男」(ワースリー)、「仏」(「まごころ」(「エプスタン」)、「ほほえむブライ夫人」(「デュラック」)、「独」(「悪魔の街」(「グレン」)、「ソ連」(「赤い小悪魔」(「ベレスチアーニ」)。</p>	<p>〔米〕 「愚かなる妻」(シュトロハイム)、「ロビン・フック」(「ドワン」)、「豪勇ロイド」(「ニューメイヤー」)、「愚者の楽園」(「デミル」)、「給料日」(「チャップリン」(「伊」)、「過去からの呼び声」(「リゲッリ」(「独」)、「ドクトル・マブゼ」(「ラング」)、「吸血鬼ノスフェラトゥ」(「ムルナウ」)。</p>	<p>〔米〕 「三銃士」(ニプロ)、「モヒカン族の最後」(「タナー」)、「仏」(「狂熱」(「デリュック」)「ソ連」(「国内戦の歴史」(「ヴェルトフ」)。</p>	<p>〔米〕 「東への道」(グリフィス)、「キッド」(「チャップリン」)、「男性と女性」(「デミル」)、「宝島」(「タナー」)、「仏」(「海の人」(「レリビエ」)、「伊」(「硝子の家」(「リゲッリ」)、「独」(「巨人ゴーレム」(「ガレン」/「ウエゲナー」)。</p>	<p>〔米〕 「サンニー・サイド」(「チャップリン」)、「散り行く花」(「グリフィス」)、「仏」(「戦争と平和」(「ガンス」)、「伊」(「火鉢」(「ジュエニア」)、「独」(「硝子の家」(「リゲッリ」)、「スウェーデン」(「吹雪の夜」(「ステイル」)、「ソ連」(「ポリクシーカ」(「サニン」)。</p>
<p>林長二郎(のちの長谷川一夫)、「稚児の剣法」(松竹・大塚)で売り出す。伊藤大輔、大河内伝次郎主演の「忠次旅日記」三部作(「日活」)、「下郎」で大いに人気を博す。市川右太衛門プロ設立。小山内薫、「黎明」(昭和キネマ)でトーキー映画を試みる。</p>	<p>衣笠貞之助、川端康成・横光利一の協力で前衛映画「狂った一頁」を撮る。アメリカから帰国した阿部豊が「陸の人魚」(日活)、「足にさわった女」(同)などのモダンイズムで注目される。</p>	<p>脚本「寿々喜多呂九平」監督「二川文太郎」のコンビによる「影法師」(阪東妻三郎主演)は、マキノの時代劇が急成長する。また、阪妻プロは寿々喜多、二川のコンビで「雄呂血」を発表、剣戟乱闘映画が人気をよんでいく。「街の手品師」(日活・村田実)好評を博す。</p>	<p>城戸四郎、松竹蒲田撮影所長に就任。松竹映画は野村芳亭の新派悲劇調から、島津保次郎の明るい現代劇へ転換する。帝キネの「龍の島」(松本英二)が大ヒットし、小唄映画が流行しはじめる。</p>	<p>大震災のため、「鶴鶴の舞」(田中)、「人間苦」(鈴木謙作)、「霧の港」(溝口健二)などの異色作を最後に日活向島は解散、京都に移転する。「船頭小唄」(池田義臣)を大ヒットさせた松竹蒲田も一時的に京都へ移転。</p>	<p>松竹蒲田の女性映画が隆盛になり、対抗上、日活向島も「妻と妻」(田中)、「京屋橋店」(同)などから女形の廃止、女優の採用へと向う。牧野、「実録忠臣蔵」(牧野教育映画)で時代劇を改革する。</p>	<p>小山内薫指導の松竹キネマ研究所が「路上の靈魂」(村田実)を発表、日本映画の革新が具体化される。「虞美人草」(ヘンリー小谷)の票島すみ子が日本最初のスター女優となる。</p>	<p>大正活動写真株式会社(大活)設立、谷崎潤一郎(原作)・トーマス栗原(監督)のコンビで「アマチュア倶楽部」を発表。「尼港最後の日」(日活・坂田重則)ヒットする。松竹キネマ、帝国キネマなど創立。</p>	<p>カメラマン枝正義郎も「哀の曲」(天活)で独自の演出をみせる。「イントレランス」が帝劇で上映され、入場料十円の高額が話題になる。国際活映株式会社(国活)が設立され、天活を吸収する。</p>

1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	1928						
<p>〔米〕 テクニカラーによる最初の長編劇映画「虚栄の市」(マムリーアン)公開。二十世紀フォックス社設立。フォード、「男の敵」で高い評価を受ける。多芸なコメディアン、ウィル・ロジャーズ、事故死。</p> <p>〔仏〕 フェデー、デュヴィヴィエ、ルノワールらの活躍がきわだってくる。「地の果てを行く」(デュヴィヴィエ)でジャン・ギャバン、人気を博す。</p> <p>〔ソ連〕 社会主義リアリズムが提唱される。</p>	<p>〔米〕 MGM映画社、「ブロードウェイ・メロディ」(ボーマン)でミュージカル映画をスタートさせる。アカデミー賞第一回授賞式で、作品賞に「つばさ」(ウェルマン)、監督賞にボーズジョージ(「第七天国」)などが受賞。デイズ・オブ・ミッド・モースの「蒸気船ウィリー号」もトーキー(フィルム式)でデビュー。だが、「群衆」(K・ウィター)、「サーカス」(チャップリン)などサイレント映画の秀作もつくられた。</p> <p>〔仏〕 トーキー開発に立ち遅れたフランスは、イギリスでアメリカ方式の「三反面」(ユゴン)を、また、トビエ・スティーヴの「女王の頭飾り」(ラヴエル)を製作し、「夜はぼくたちのもの」(ルーセル)によってトーキー化を本格化する。</p> <p>〔英〕 サイレントでつくられたヒッチコックの「ゆすり」がトーキー化され、イギリスにおけるトーキー映画の第一作となる。グリアソン、「流し網漁船」を発表し、イギリス・ドキュメンタリー映画運動のリーダーとなる。</p> <p>〔独〕 マルレーネ・ディートリッヒ主演の「トニー・トニー・トニー」にキスを(ランド)が大ヒットし、ルットマンも、大都会「ドキュメンタリー・シリーズ」の系列にある「世界のメロディー」をトーキーで発表する。</p> <p>〔ソ連〕 ショーリン式、ターゲル式など、独自のトーキー開発を進める。エイゼンシュテインら、欧米の旅へ出発。</p>	<p>〔米〕 各社きそってレビュー映画製作に力を入れるが、「西部戦線異状なし」(マイルストン)のようなトーキー映画の秀作も誕生。また、エドワード・G・ロビンソン主演の「犯罪王」(ルロイ)の成功を皮切りに、ギャング映画が流行しはじめ、映画界は自主規制の公文書(実施は一九三四年から)をよぎなくされる。ジョン・ハロー、「地獄の天使」(ヒューズ)に抜擢され、一躍三十年代前半のセックス・シンボルとなる。</p> <p>〔仏〕 クレール、最初のトーキー「巴里の屋根の下」ですぐれたトーキー処理をみせ、主題歌は一世をふうびする。シュルレアリスム映画「黄金時代」(L・ブニエール)、コクトー最初の映画「詩人の血」など、アヴァンギャルド映画最後の輝きをみせる。</p> <p>〔独〕 パプストは反戦映画の傑作「西部戦線一九一八年」を、スタンバークはマルレーネ・ディートリッヒ起用の「嘆きの天使」を発表。</p> <p>〔ソ連〕 エイゼンシュテインらアメリカへ、そして年末にはメキシコへ入国。ヴェルトフ、トーキーのドキュメンタリー「ドンパス交響曲」(熱情)を発表。</p>	<p>〔米〕 キャング映画の増加とともに、ベラ・ルゴシ主演の「魔人ドラキュラ」(ブラウニング)、ボリス・カーロフ主演の「フランケンシュタイン」(ホーラー)など怪奇映画のブームがはじかれる。エディン・スミス(「活躍がさわだつ」)、「自由を我等に」など、前年につづきクレールの活躍がさわだつ。</p> <p>〔独〕 社会矛盾の反映か、「三文オペラ」(パプスト)、「M」(ラング)などの暗い作品と、「会議は踊る」(シャレル)、「狂乱のモンテカルロ」(シュワルツ)などの明るいミュージカル作品と、二極化の傾向を示す。</p> <p>〔ソ連〕 最初のトーキー映画「一人」(コジンツェフ/L・トラウベルグ)公開、ついで「人生案内」(エック)の成功により、トーキー化へ進む。</p>	<p>〔米〕 デイズ・オブ・ミッド・モースの「蒸気船ウィリー号」を、映画各社、大恐慌により経営悪化。「御元談でし」(タウログ)ほかで、マルクス兄弟の人気がある。</p> <p>〔仏〕 ヴィゴの「操行ゼロ」、検問当局により上映禁止となる。</p> <p>〔英〕 ハンガリー出身の国際映画人、アレグザンダー・コルダがロンドン・フィルムを設立し、プロデューサーとしてすぐれた手腕を発揮する。フラハティがグリアソンに招かれ、ドキュメンタリー映画を撮る。</p> <p>〔ソ連〕 第一回ウエネツィア国際映画祭でエック(「人生案内」)が最優秀監督賞を受賞。</p> <p>〔スペイン〕 L・ブニエール、フランスより帰国して「糧なき土地」を撮る。</p>	<p>〔米〕 「紐育の波止場」(スタンバーグ)、「風」(シェース・トレン)、「キートンの蒸気船」(「キートンの船長」ラス・イスナ)、「英」(「流れ星」(アスキス)、「仏」(「マッ・チネリの少女」(ルノワール)、「大地の果て」(エプスタン)、「独」(「午前の幽霊」(リヒター)、「ソ連」(「アジアの嵐」(V・ブドフキン)、「ズウェニゴラ」(ドウジェンコ)、「上海ドキュメント」(プリオーフ)。</p> <p>〔米〕 「喝采」(マムリーアン)、「ハレルヤ」(K・ウィター)、「ラヴ・バレー」(ルビッチ)、「ヴァージニア」(フ・レミング)、「独」(「月世界の女」(ラング)、「淪落の女の日記」(バプスト)、「アスファルト」(J・マイ)、「日曜日の人々」(シオドマク)、「ソ連」(「カメラを持った男」(「これがロシヤだ」) ウェルトフ)、「武器庫」(ドウジェンコ)、「全線」(「古きものと新しきもの」) エイゼンシュテイン)、「トウルクシア」(トウーリ)、「オランダ」(「雨」(イウエンス)。</p>	<p>〔米〕 「アンナ・クリスティ」(ブラウン)、「リリオム」(ボーズジョージ)、「モロコ」(スタンバーグ)、「砂漠の生霊」(ワイラー)、「極楽島満員」(マッペン)、「仏」(「資本家ゴルダ」(デューヴィエ)、「巴里の子」(ビュジョル/コロンビエ)、「黄色の部屋」(レルビエ)、「ニスについて」(ヴィゴ)、「英」(「ジュノーと孔雀」(ヒッチコック)、「アトランティック」(デューボン)、「独」(「ガソリン・ボーイ三人組」(ティール)、「最後の中隊」(ベリンハルト)、「ソ連」(「大地」(ドウジェンコ)。</p>	<p>〔米〕 「街の灯」(チャップリン)、「市街」(マムリーアン)、「民衆の敵」(ウェルマン)、「犯罪都市」(マイルストン)、「聞説X27」(スタンバーグ)、「シマロン」(ラグルズ)、「陽気な中尉さん」(ルビッチ)、「いんちき商売」(マクラーウ/マルクス兄弟)、「仏」(「お月様のジャン」(シュール)、「世界の終り」(ガンス)、「牝犬」(ルノワール)、「独」(「炭坑」(パプスト)、「少年探偵団」(ランプレヒト)、「制服の処女」(ザガン)、「ソ連」(「黄金の山」(ユトケウイチ)。</p>	<p>〔米〕 「暗黒街の顔役」(ホークス)、「仮面の米国」(ルロイ)、「グランド・ホテル」(グールド)、「ジョー・キル博士とバード氏」(マムリーアン)、「バッド・ガール」(「戦場よさらば」(ボーズジョージ)、「雨」(マイルストン)、「チャンプ」(K・ウィター)、「仏」(「にんじん」(デューヴィエ)、「巴里祭」(クレール)、「素晴らしき放浪者」(「水から救われたアデー」(ルノワール)、「フアン」(「M・アレグレ」)、「吸血鬼」(ドライヤー)、「伊」(「殿方は嘘吐き」(カメリーニ)、「工業英国」(フラハティ)、「ソ連」(「イワン」(ドウジェンコ)、「呼応計画」(ユトケウイチ/エルムレル)。</p>	<p>〔米〕 「カヴァルケード」(F・ロイド)、「四十二番街」(ベロン/バークリー)、「ゴルド・ディン」(「ルロイ/バークリー」(「仏」)、「リリオム」(ラング)、「ド・ン・キホーテ」(パプスト)、「英」(「ヘンリー八世の私生活」(コルダ)、「独」(「ワルツ合戦」(ベルガー)、「恋愛三昧」(オフルス)、「オーストリア」(「未完成交響楽」(フォルスト)、「ソ連」(「国境の町」(バルネット)、「脱走者」(ブドフキン)。</p>	<p>〔米〕 「メリー・ウイドウ」(ルビッチ)、「情熱なき犯罪」(「ヘクト/マッカーサー」)、「奇傑パンチ」(「コンウェイ)、「肉弾鬼中隊」(フォード)、「仏」(「最後の億万長者」(クレール)、「商船デナシチ」(「デューヴィエ)、「乙女の湖」(M・アレグレ)、「英」(「暗殺者の家」(ヒッチコック)、「アラン」(フラハティ)、「ソ連」(「チャバエフ」(ワシーリエフ兄弟)、「陽気な連中」(アレクサンドロフ)。</p>	<p>〔米〕 「戦艦バウンティ号の叛乱」(「南海征服」F・ロイド)、「ベンガルの騎兵」(ハサウェイ)、「孤児ダビド物語」(「ケンカ」)、「トップ」(「サンドリック」(「仏」)、「ミモザ館」(「女だけの都」(フェデー)、「ラング」(「ユ氏の犯罪」(ルノワール)、「うたかたの恋」(リトヴァ)。</p>	<p>土橋式トーキー「マダムと女房」(松竹・五所平之助)大成功をおさめる。「東京の合唱」(松竹・小津)、「仇討選手」(日活・内田)、「続大岡政談 魔像解決編」(同・伊藤)、「黎明以前」(松竹・衣笠)。</p> <p>PCL(のちの東宝)、「トーキーの開発にのりだし、東京砧村にスタジオを建設。『生れてはみたけれど』(松竹・小津)、「国土無双」(千恵蔵プロ・伊丹万作)、「抱寝の長脇差」(寛寿郎プロ・山中貞雄)。</p> <p>映画の国策化が国会で建議される。入江たか子主演の「滝の白糸」(新興キネマ・溝口)好評を博す。「君と別れて」(松竹・成瀬)、「男」(盤嶽の一生) (日活・山中)、「丹下左膳」(同・伊藤)、「河向の青春」(音画芸術研究所・木村莊十二)。</p> <p>日活、東京の調布多摩川撮影所を買収して現代劇部を移転。内務省、映画統制委員会を設置。野村芳亭氏。「新撰組」(日活・稲垣浩)、「沈丁花」(松竹・野村)、「隣の八重ちゃん」(同・島津)、「浮草物語」(同・小津)。</p> <p>新興キネマの現代劇部、東京へ移転。財団法人大日本映画協会発足し、国策映画の支援体制を固める。「妻よ薔薇の国」(成瀬)、「エノケンの近藤勇」(山本嘉次郎)などPCL映画が活躍しはじめる。山中貞雄、日活で</p>	<p>マキノ正博、山上伊太郎の脚本をえて「鎌倉鶴」(「崇禎寺馬場」)、「浪人街」(「二話とたてつけに力作を発表。『村の花嫁』(五所平之助)、「彼と東京」(牛原虚彦)など、松竹に「蒲田調」が発表されはじめる。片岡千恵蔵プロ、嵐寛寿郎プロ設立。</p> <p>『生ける人形』(日活・内田吐夢)がヒットし、「都会交響楽」(同・溝口)、「斬人斬馬剣」(松竹・伊藤)など傾向映画が流行しはじめる。小津安二郎、「大学は出たけれど」(松竹)を発表。プロキノ(日本プロレタリア映画同盟)創立。</p> <p>鈴木重吉の「何が彼女をそうさせたか」(日本トーキー/帝キネ)大ヒットし、傾向映画が全盛期を迎える。「ふるさと」(日活・溝口)、「この太陽」(同・村田)など、日本製トーキー映画がはじめる。</p>

1960	1959	1958	1957	1956	1955	1954	1953	1952	1951	1950	1949																								
<p>〔米〕 旧作映画のテレビ放映。ジョン・ウェイン、主演兼監督の『アラモ』を発表。マック・セネット、クラーク・ゲーブルが死去。</p> <p>〔仏〕 クレール、映画人として初めてアカデミー・フランセーズの会員に選ばれる。ヌーヴェル・ヴァーグの気運にのって新人監督が多数輩出する。ベッケル、ジェラルド・フィリップが死去。</p> <p>〔英〕 『土曜の夜と日曜の朝』(ライオン)が発表され、フリー・シネマ。</p>	<p>〔米〕 ワイラー、七〇ミリの大作『ベン・ハー』を完成。テリミル死す。</p> <p>〔仏〕 『いとこ同士』(シャブロー)、勝手にしやがれ(ゴダール)など、ヌーヴェル・ヴァーグ、監督第一回作品『人間の運命』を発表。</p> <p>〔ソ連〕 ボンダルチュク、監督第一回作品『人間の運命』を発表。</p>	<p>〔米〕 映画の製作本数が激減する。キューブリック、『突撃』を発表。</p> <p>〔仏〕 『美しきセルジュ』(シャブロー)、あこがれ(短編、トリュフ)など、ヌーヴェル・ヴァーグが台頭しはじめる。人類学者ル・シュ、シネマ・ヴェリテのドキュメンタリー『私は黒人』を発表。</p> <p>〔英〕 『年上の女』(クレイトン)、怒りをこめてふり返れ(リチャード・ソン)など、怒れる若者たちによるフリー・シネマの運動がおこる。</p> <p>〔ポーランド〕 ワイダの代表作『灰とダイヤモンド』公開。</p>	<p>〔米〕 テレビの攻勢つづき、RKO社倒産。テレビ界から映画へ進出したルメットが『十二人の怒れる男』で注目をあびる。大作『戦場にかける橋』(リオン)がヒットする。</p> <p>〔仏〕 弱冠二十五歳の新人監督マルが『死刑台のエレベーター』でル・リキック賞を受賞。ヌーヴェル・ヴァーグの先駆となる。</p> <p>〔英〕 コルダ死す。</p> <p>〔ソ連〕 カラトゾフ、『戦争と貞操』を発表、映画界にも雪どけ。現象がおこる。</p>	<p>〔米〕 ジェームズ・ディーン、『エデンの東』(カザン)、理由なき反抗(N・レイ)、ジャイアンツ(G・スティーヴンズ)の二本で慧星のごとくスクリーンに登場して消えていく(事故死)。トッドAO方式による七〇ミリの映画のミュージカル『オクラホマ!』(シンネマン)公開。</p> <p>〔インド〕 ライ、処女作『大地のうた』を独力で完成。</p>	<p>主演の『現金に手を出すな』(ベッケル)など、暗黒街ものが流行する。</p> <p>〔伊〕 ジュリエッタ・マシーナとアンソニー・クイン共演の『道』(フェリーニ)、大きな感銘をあたえる。</p>	<p>〔米〕 パラマウント社、ウイスタヴィジョンによる大型映画第一作『ホワイト・クリスマス』(カーティス)を発表。マローン・ブランド、『波止場』(カザン)の演技で好評を博す。</p> <p>〔仏〕 ハリウッドを脱出したダッシンの『男の争い』、ジャン・ギャバン</p>	<p>〔米〕 テレビ攻勢への対抗策として、大型映画の開発が進み、『これがシネマだ』が公開される。チャップリン、赤狩り下のアメリカを脱出してヨーロッパへ。</p> <p>〔仏〕 戦災孤児を主人公にした『禁じられた遊び』(クレマン)が反響をよぶ。カメラマン論のアストリウツク、第一回監督作品『恋さんげ』を発表。</p> <p>〔伊〕 デリシカ、『ウンベルトD』で老人問題をとりあげる。アメリカを去ったルノワール、『黄金の馬車』を撮る。</p>	<p>〔米〕 立休映画の第一作『ブワナの悪魔』、シネマスコープの第一作『聖衣』(コスター)などが公開され、シネマスコープ(二十世紀フォックス社)が急速に普及する。アラン・ラッド主演の西部劇『シエラ』(G・スティーヴンズ)、オールドリー・ヘップバーン/グレゴリー・ペック共演の『ローマの休日』(ワイラー)などがヒット。</p> <p>〔伊〕 フェリーニの自伝的作品『青春群像』、ウイスタヴィの歴史劇『夏の嵐』公開。</p>	<p>〔米〕 非米活動委員会の第二回聴聞会が開かれ、多くの映画人が追放される。フラハティ死す。</p> <p>〔仏〕 最初の本格的色彩映画『青ひげ』(クリスティアン・ジャック)公開。ルイ・ジュエ死す。</p> <p>〔西独〕 第一回ベルリン国際映画祭開催。</p>	<p>〔米〕 テレビの普及により、映画が圧迫を受けはじめる。赤狩りによるハリウッドの十人の映画人たちが有罪判決を受ける。マローン・ブランド、『敗者の烙印』(リ・ザ・メン) ジンネマンでデビュー。</p> <p>〔仏〕 レネ、前年の『ヴァン・ゴッホ』につづく『ゲルニカ』を発表して注目をあびる。</p> <p>〔伊〕 『ミラノの奇蹟』(デシリーカ)など、ネオレアリズモが変貌をみせはじめる。</p>	<p>〔英〕 オースン・ウェルズ主演の『第三の男』(リード)、国際的にヒットする。映画金融公庫設立。</p> <p>〔伊〕 ロッセルリニ、バグマンを主役に『ストロンボリ』製作。</p>	<p>〔米〕 『オールザ・キングズメン』(ロッセン)、黄色いリボン(フォード)、三人の妻への手紙(マンキーウィッツ)、若草物語(ルロイ) (仏) 『悪魔の美しさ』(クレール)、鉄格子の彼方(クレマン)、火の接吻(カイヤット) (英) 『情熱の友』(リオン)</p>	<p>〔米〕 『イヴの絶て』(マンキーウィッツ)、サンセット大通り(ワイラー)、アニーと銃をとれ(シドニー・ポーター) (G・スティーヴンズ) (仏) 『愛人ジュリエット』(カルネ)、巴里の空の下セーヌは流れる(デュヴイウイエ) (伊) 『2ペンスの希望』(カステッパニ) (スウェーデン) 『令嬢ジュリー』(シェーペル)</p>	<p>〔米〕 『巴里のアメリカ人』(ミネリ)、欲望という名の電車(カザン)、探偵物語(ワイラー)、『陽のあたる場所』(G・スティーヴンズ) (仏) 『愛人ジュリエット』(カルネ)、巴里の空の下セーヌは流れる(デュヴイウイエ) (伊) 『2ペンスの希望』(カステッパニ) (スウェーデン) 『令嬢ジュリー』(シェーペル)</p>	<p>〔米〕 『雨に唄えば』(ドネン/ケリー)、『地上最大のショウ』(ディーン)、真昼の決闘(リ・ザ・メン) (マンキーウィッツ)、『ライムライト』(チャップリン) (仏) 『夜ごとの美女』(クレール)、『嘆きのテレズ』(カルネ)、『恐怖の報酬』(クルーズ) (英) 『超音ジェット機』(リオン) (スウェーデン) 『不良少女モニカ』(ペルイマン)</p>	<p>〔米〕 『地上より永遠に』(シンネマン)、ジュリアス・シーザー(マンキーウィッツ)、『紳士は金髪がお好き』(ホークス) (仏) 『狂熱の孤独』(Y・アレグレ)、『ぼくの伯父さんの休暇』(タチ) (英) 『ジュネヴィエーヴ』(コーネリアス) (伊) 『パンと恋と夢』(コメンチーニ)</p>	<p>〔米〕 『ダイヤルMを回せ』(ヒッチコック)、『喝采』(シートン) (仏) 『洪水の前』(カイヤット)、『悪魔のような女』(クルーズ) (英) 『文なし横丁の人々』(リード) (伊) 『青い大陸』(クイリチ)</p>	<p>〔米〕 『マーティ』(D・マン)、『黄金の腕』(プレミンジャー)、『暴力教室』(ブルックス) (仏) 『夜の騎士道』(クレール)、『居酒屋』(クレマン)、『ヘッドライト』(ウエルヌイユ) (英) 『旅情』(リオン) (伊) 『崖』(フェリーニ)</p>	<p>〔米〕 『八十日間世界一周』(M・アンダーソン)、『友情ある説得』(ワイラー) (仏) 『沈黙の世界』(J・Y・クストー/マル)、『ピカソ 天才の秘密』(クルーズ) (伊) 『鉄道員』(ジェルミ) (西独) 『菩提樹』(リーベシナイナ) (スウェーデン)、『第七の封印』(ペルイマン) (ソ連) 『オセロ』(ユトケイイチ)、『女狙撃兵マリユートカ』(チュフライ)</p>	<p>〔米〕 『昼下りの情事』(ワイラー)、『群衆の中の一つの顔』(カザン) (仏) 『宿命』(ダッシン)、『眼には眼を』(カイヤット)、『抵抗』(アレクソン) (伊) 『カベリアの夜』(フェリーニ)、『さすらい』(アントニオーニ) (ソ連) 『静かなるドン』(ケラーシモフ)</p>	<p>〔米〕 『恋の手ほどき』(ミネリ)、『くたばれ! ヤンキー』(G・アボット/ドネン)、『大いなる西部』(ワイラー)、『手錠のままの脱獄』(クレイマー)、『老人と海』(スタージュー) (仏) 『危険な曲角』(カルネ)、『ぼくの伯父さん』(タチ) (伊) 『わらの男』(ジェルミ) (チエコ)、『悪魔の発明』(ゼーマン)</p>	<p>〔米〕 『北北西に進路を取れ』(ヒッチコック)、『アンネの日記』(G・スティーヴンズ)、『お熱いのがお好き』(ワイラー) (仏) 『二十四時間の情事』(レネ)、『大人は判ってくれない』(トリュフォー)、『太陽がいっぱい』(クレマン) (伊) 『ロベール将軍』(ロッセルリニ) (ソ連) 『誓いの休暇』(チュフライ)</p>	<p>〔米〕 『サイコ』(ヒッチコック)、『栄光への脱出』(プレミジャー)、『アバートの鍵貸します』(ワイラー)、『スパルタカス』(キューブリック) (仏) 『ピアニストを撃て』(トリュフォー)、『オルフェの遺言』(コクトー)、『アメリカの裏窓』(レシヤンバック)、『唇によだれ』(ドニオルヴァルクローズ) (伊) 『若者のすべて』(ワイ</p>	<p>映倫(映画倫理規定管理委員会)発足。争議のため製作を中止していた東宝が製作を再開する。『青い山脈』(東宝・今井)、『野良犬』(新東宝・黒沢)、『晩春』(松竹・小津)、『破れ太鼓』(同・木下)。</p>	<p>『羅生門』、ヴェネツィア映画祭でグランプリを受賞。松竹、国産カラー映画『カルメン故郷に帰る』(木下)を発表。『麦秋』(松竹・小津)、『偽れる盛装』(大映・吉村)、『どっこい生きてる』(新星・今井)。</p>	<p>『西鶴一代女』(新東宝・溝口)、『ヴェネツィア映画祭で監督賞を受賞。戦犯を描いた小林正樹の『壁あつき部屋』公開延期。『生きる』(東宝・黒沢)、『稲妻』(大映・成瀬)、『現代人』(松竹・渋谷実)、『真空地帯』(新星・山本薩)。</p>	<p>佐田啓二、岸恵子主演の『君の名は』(松竹・大庭秀雄)、『今井正のひめゆりの塔』(東映)が大ヒットする。日活、製作再開を発表。『東京物語』(松竹・小津)、『雨月物語』(大映・溝口)、『煙突の見える場所』(エイト・プロ、五所)。</p>	<p>『地獄門』(大映・衣笠)、『カンヌ映画祭でグランプリを受賞。東映、二本立て製作・興行を開始。中村錦之助ら、人気スターになる。『二十四の瞳』(松竹・木下)、『女の園』(同)。</p>	<p>『七人の侍』(東宝・黒沢)、『近松物語』(大映・溝口)、『山椒太夫』(同)。</p>	<p>東映の児童向け中編映画『紅孔雀』(萩原遼)が大ヒットする。アメリカのシネマ第一作公開。『浮雲』(東宝・成瀬)、『夫婦善哉』(同・豊田)、『警察日記』(日活・久松静児)、『血槍富士』(東映・内田)、『ここに泉あり』(中央・今井)。</p>	<p>『太陽の季節』(日活・古川卓巳)、『処刑の部屋』(大映・市川崑)などの太陽族映画が社会問題化する。溝口健二死す。『真昼の暗黒』(現代プロ・今井)、『ビルマの罅』(日活・市川)、『台風騒動記』(山本プロ・山本薩)。</p>	<p>新東宝、嵐寛寿郎主演の『明治天皇と日露大戦争』(渡辺邦男)で空前の大当たりをとる。東映スコープ第一作『鳳城の花嫁』(松田定次)公開。他社も大型映画製作に踏み出す。『米』(東映・今井)、『喜びも悲しみも幾年月』(松竹・木下)、『気違い部落』(同・渋谷)。</p>	<p>カルロウィヴァリ映画祭で、『異母兄弟』(独立、家城巳代治)、『ヴェネツィア映画祭で、『無法松の一生』(東宝・稲垣)がグランプリを受賞。東映の長編映画第一作『白蛇伝』(載下泰次)公開。映画観客数、ピークに達する。石原裕次郎・アームおこる。『登山道』(松竹・木下)、『隠し砦の三悪人』(東宝・黒沢)。</p>	<p>映画観客が減少しはじめる。小林正樹の大作『人間の条件』(にんじんくらぶ) 第一、四部が公開される。『キクといサム』(大東・今井)、『野火』(大映・市川)、『にあんちゃん』(日活・今村昌平)。</p>	<p>大島渚の『青春残酷物語』ほか、吉田喜重、篠田正浩ら、松竹ヌーヴェル・ヴァーグが台頭する。大島の『日本の夜と霧』、四日目に上映中止。第二、東映発足。映画館数、製作本数ともにピークに達する。『裸の島』(近代映協・新藤兼人)、『豚と軍艦』(日活・今村)、『黒</p>

1972	1971	1970	1969	1968	1967
<p>〔米〕 マーロン・ブランド主演の『ゴッドファーザー』（コッポラ、空前の観客動員に成功。『ボセイドン・アドベンチャー』（ニーム）、パニック映画ブームの引きがねとなる。</p> <p>〔伊〕 フェリーニの自由奔放な自伝的映画『フェリーニのローマ』公開。ベルトルッチの『ラストタンゴ・イン・パリ』、芸術かワイセツかの大論争をまきおこす。</p> <p>〔ソ連〕 タルコフスキーの異色SF『惑星ソラリス』完成（七七年四月日本公開予定）。</p>	<p>〔米〕 マーロン・ブランド主演の『妖精たちの森』（ウイナー）公開。</p> <p>〔伊〕 『暗殺の森』（ベルトルッチ）、『ベニスに死す』（ヴィスコンティ）話題になる。</p>	<p>〔米〕 デスティン・ホフマン主演の異色西部開拓史『小さな巨人』（ベッセル、セックス人間を描く『愛の狩人』（ニコルズ）公開。『ラスト・ショー』（ボグダノヴィチ）、『おもいで』（マリガン）など、ノスタルジック映画が登場しはじめる。</p> <p>〔仏〕 前年の『ブルヴィル』につづき、コメディアンフェルナンデル死す。</p> <p>〔英〕 マーロン・ブランド主演の『妖精たちの森』（ウイナー）公開。</p> <p>〔伊〕 『暗殺の森』（ベルトルッチ）、『ベニスに死す』（ヴィスコンティ）話題になる。</p>	<p>〔米〕 ジュディ・ガーランド、ロバート・テイラー死す。ボランスキー夫人シャロン・テイラー殺害事件おこる。ピーター・フォンダ主演の手づくり映画『イージー・ライダー』（デニス・ホッパー）が評判になる。</p> <p>〔仏〕 ゴダール、ジガ・ヴェルトフ集団を結成。『Z』がカンヌ映画祭で衝撃をあたえる。</p> <p>〔英〕 アメリカ資本が製作費の九〇パーセントにまでおよぶ。</p>	<p>〔米〕 キューブリック、SFのシネマ大作『2001年 宇宙の旅』を発表。同じくSFの傑作『猿の惑星』（シャフナー）ヒットする。</p> <p>〔仏〕 五月革命のおおりでカンヌ映画祭は混乱し、中止となる。アルジェリアとの合作で、ギリシア出身のコスタ・ガウラスが『Z』を撮る。</p> <p>〔伊〕 バゾリーニの『テオレマ』公開。</p>	<p>〔米〕 『俺たちに明日はない』（ペン）、『卒業』（ニコルズ）が話題をよび「ニュー・シネマ」の呼称がうまれる。</p> <p>〔仏〕 デュヴィヴィエ死す。ゴダールら、ベトナム反戦映画『ベトナムから遠く離れて』を合作。</p> <p>〔スウェーデン〕 『私は好奇心の強い女』（シェーマン）、世界各国で検閲是非論争をおこす。</p>
<p>〔米〕 セックス描写が大幅に緩和される。バスター・キートン、モンゴメリ・クリフト、デイズ・ニール死す。</p> <p>〔仏〕 ロッセリーニがフランス国営放送局で『ルイ十四世の執権』を、トリュフォーがアメリカ資本で『華氏451』を、同じくクレマンが『バリは燃えているか』を製作。</p> <p>〔ソ連〕 タルコフスキーの問題作『アンドレイ・ルブリョフ』上映禁止（七一年に公開）。</p>	<p>〔米〕 映画観客数に回復のきざしが見えはじめる。ジュリー・アンドリュース主演のミュージカル大作『サウンド・オブ・ミュージック』（ワイズ）ヒット。</p> <p>〔英〕 アメリカ出身のレスター・ナックでカンヌ映画祭のグランプリを受賞。ボラランド出身のボランスキー、『反撥』を発表。</p> <p>〔ソ連〕 ボンダルチュクの大作『戦争と平和』第二・三部完成。</p>	<p>〔米〕 史上最高の製作費を使ったと称せられる七〇ミリ大作『クレオパトラ』（マンキーウィッツ）がエリザベス・テイラー主演で公開。</p> <p>〔仏〕 パリで日仏交換映画祭が開かれ、日本映画四一本が上映される。コクトー死す。</p> <p>〔伊〕 奔放なイメージによるフェリーニの傑作『8½』公開。</p>	<p>〔米〕 マーリン・モンロー死す。映画の製作本数が激減する。『クレオパトラ』の大幅な予算超過で二十世紀フォックス社が経営不振におちいる。</p> <p>〔仏〕 『シネマ・ヴェリテ』派の映画製作が盛んになる。ブリジット・バルドー主演の『私生活』（マル）が話題になる。</p> <p>〔英〕 リチャード・アトキンソン、フリー・シネマの代表作『長距離ランナー』の孤獨を演じる。</p> <p>〔ソ連〕 タルコフスキーの処女長編『僕の村は戦場だった』が世界の注目をあびる。</p>	<p>〔米〕 運動が活気を帯びてくる。</p> <p>〔伊〕 『甘い生活』（フェリーニ）、『情事』（アントニオニ）、『ふたりの女』（デ・シカ）が大きな話題となる。</p> <p>〔スウェーデン〕 『処女の泉』（ペルイマン）がセンセーションをまきおこす。</p>	<p>〔米〕 映画興業の不振つづく。七〇ミリ・ミュージカル映画『ウェスト・サイド物語』（ワイズ）、ヒットする。ゲリー・キューパー死す。</p> <p>〔仏〕 『去年マリエンバートで』（レネ）が話題になり、『わんぱく戦争』（ロベール）が大当たりする。</p> <p>〔英〕 映画観客が最盛期の三分の一に激減する。</p>

1966	1965	1964	1963	1962	1961
<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>
<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>	<p>〔米〕 『大脱走』（スタージェス）、博士の異常な愛情（キユーブリック）、『鳥』（ヒッチコック）、『五月の七日間』（フランケンハイマー）、『あなただけ今晩は』（ワイルダー）。</p> <p>〔仏〕 『気狂いピエロ』（ゴダール）、『ピエロ！ マリア』（マル）。</p> <p>〔伊〕 『真実の瞬間』（ロージ）。</p> <p>〔ソ連〕 『ハムレット』（コジツツェフ）。</p>

豪華
14大スター
総出演!



ロバート・レッドフォード
ジョン・ハックマン
ショーン・コネリー
ジェームズ・カーン
ライアン・オニール
ダーク・ボガード
ローレンス・オリビエ
マイケル・ケイン
エリオット・グールド
マクシミリアン・シェリ
ハーディー・クルーガー
アンソニー・ホプキンス
エドワード・フォックス
リブ・ウルマン

空前の製作費90億を投じた史上最大の超弩級戦争巨篇

〈ノルマンディ作戦〉を凌ぐ《マーケット・ガーデン作戦》の巨大なる全貌!

遙かなるアーネム橋を目前に、連合軍は遂にナチス・ドイツ軍空前の猛威に曝された

製作費◆映画史上空前の90億円
登場人員◆180,000人
戦車◆360輛
軍用機◆470機
大砲◆720門
自動銃◆19,480挺
弾丸◆1,200,000発
火薬◆19,250kg

★1976・12 クランク・アップ
★1977・6・15 全米1200館で一斉公開
★1977・夏 日本全国縦断ロードショー



製作ジョセフ・E・レビン
原作コーネリアス・ライアン
脚本ウィリアム・ゴールドマン
監督リチャード・アッテンボロー

編集後記

☆好評だった「グラフ 日本映画史」前後篇(昭51年6,9月刊)に続いて、アメリカ映画史をおとどける。
ヴァレンチノ、ディートリッヒ、ウエイン、アップバーン、モンロー、ディーン……、名前をあげるさへ懐かしいスターたちの系譜がタテ糸、1927年の創設以来50年を数えるアカデミー賞の回顧がヨコ糸。2つの糸で編まれた、この「目で見える映画史」の流れの中で、ひとそれぞれの思いにひたっていたら幸いである。(O)

☆ほかが山田宏一君との共同作業のもとに担当したのは、本誌の第1部にあたる「ああ神話のスターたち」である。目次にあるような何人かの執筆者、その他あまたの写真提供者の協力があってはじめて出来上がった。執筆者の平均年齢が30代の半ばなのは、スターと神話の関係を思い出話の時点ではなくとらえてみたかったからである。とりあげたスターや写真に、あの人はいない、あの映画がないという不満はさぞかし続出するであろう。なんせスターと映画の数は無限なのだから、乞うご容赦である。いちばん困ったのは、人名表記の問題である。新聞表記のバレンチノでは感じが出ないので、ヴァレンチノにあえて復活させていたのはまだしも、当時日本で誤用されていた表記、たとえばジョニー・ワイズミュラー(ワイズミュラーが正しいらしい)、マルクス兄弟(マルクスである)、セダ・バラ(シーダ・バラ)などをどう扱うかであった。結論としては幾つかのものは例外的に当時の慣用を考慮に入れることとしたが、その慣用とて一貫したものではない。(H)
☆映画が人々の心を掴み、大きな力を発揮してきたいばんの要素はスターによるわけだが、今こうして往年のスターのおもかげをまざまざと見ることは、スクリーンにカタルシスを求めてきた「時代の心情」を見ることにもなるのではなかろうか。本当は、全体をとおした人名・作品索引をつくり、読者の便宜をはかるつもりでいたが、事情で果たせなかった。それから映画作品の年代は、製作年度と公開年度のいずれかなどの理由で資料によって一定しておらず、判断をそれぞれの構成者によったため、不統一があるかもしれないので諒願いただきたい。(N)

★ひきつづき「グラフ ヨーロッパ映画史」を刊行の予定である。
訂正 P.67上段14行目の「一九六〇年代末に」を「一九六〇年の末に」と訂正します。

ああ神話のスターたち
グラフ アメリカ映画史
昭和52年2月28日発行
定価=1,500円
発行者=朝日新聞社 波多野公介
印刷所=凸版印刷株式会社
発行所=朝日新聞社
(東京・大阪・北九州・名古屋)
©朝日新聞社 1977

1976	1975	1974	1973
<p>〔米〕「エクソシスト」(フリードキン)の大ヒットでオカルト・ブームおこる。エドワード・G・ロビンソン、ウォード・ボウティン、フランク・シナトラ、ブルース・リー主演の空手映画「燃えよドラゴン」(クローズ)、空手映画ブームをつくる。</p> <p>〔仏〕メルヴィル・ポロ。注目をあびる。アシン・マニヤーニ死す。</p> <p>〔ソ連〕コジンツェフ、カラトゾフ死す。</p> <p>〔米〕「ゴッドファーザーPART II」。「カンパセーション……盗聴」など、コッポラの活躍がめだつ。また、「チャイナタウン」(ボランスキー)、「タワリング・インフェルノ」(ギラミニ)、「レニー・ブルース」(フオッシュ)ほか、アメリカ映画の多様性の底力をみせる。</p> <p>〔仏〕「エマニエル夫人」(ジャカン)が大ヒットし、「ファッシュ・ショナブル・ポロ」が流行しはじめる。</p> <p>〔伊〕ウィットリオリ・デシカ、ジェルミ・ミリス。フェリーニは「フェリーニのアマルコルド」を発表。</p> <p>〔米〕青年監督スπίルバーグの「ジョーズ」が爆発的にヒットし、「ジョーズ」旋風まきおこる。</p> <p>〔仏〕ポロ映画完全解禁。大島渚、フランス資本で「愛のコレード」の撮影に入る。</p> <p>〔伊〕バゾリーニが殺され、「ソドムの市」が遺作となる。</p> <p>〔ソ連〕黒沢明、「デルス・ウザーラ」を完成。モスクワ映画祭で金賞を受賞。</p> <p>〔米〕「カッコーの巣の上で」がアカデミー五部門で受賞。「オーメン」(ドナ)がヒットする。大作「キング・コング」(ギラミニ)完成。</p> <p>〔仏〕「愛のコレード」がカンヌ映画祭で評判になる。</p> <p>〔英〕リード死す。</p> <p>〔伊〕ヴィスコンティ死す。</p> <p>〔スウェーデン〕ペルイマン、母国を去る。</p>	<p>〔米〕「ザッツ・エンタテインメント」(ヘイリー)、「華麗なるギャツビー」(クレイトン)、「未来惑星ザルドス」(フアマン)、「大地震」(ロブソン)、「フロンティア・ペーじ」(ワイルダー)、「ガルシアの首」(ベッキンバー)、「星の王子さま」(ドネン)、「アリスの恋」(スコシズ)、「星の王子さま」(マル)、「三銃士」(レスター)。</p> <p>〔伊〕「アラビアンナイト」(バゾリーニ)。</p> <p>〔米〕「カッコーの巣の上で」(フォアマン)、「狼たちの午後」(ルメット)、「バリー・リンデン」(キューブリック)、「風とライオン」(ミリアス)、「伝」(「アデルの恋の物語」(トリュフォー)、「O嬢の物語」(ジャカン)。</p> <p>〔米〕「タクシードライバー」(スコシズ)、「大統領の陰謀」(バクラ)、「ミズーリ・ブレイク」(ベン)、「リッパステイク」(ジョンソン)。「伝」(「トリュフォーの思春期」(トリュフォー)。</p>	<p>〔米〕「ステイキング」(ヒル)、「スケアクロウ」(シャッツバーク)、「ペーパームーン」(ボグダノヴィッチ)、「アメリアン・グラフィティ」(ルーカス)、「パピヨン」(シヤフナー)。「伝」(「アメリカの夜」(トリュフォー)、「最後の晩餐」(フェレリ)。「伊」(「青い体験」(サンペリ)。</p>	<p>東映、仁侠路線から実録路線へ転換、「仁義なき戦い」(深作)シリーズがヒットする。早川雪洲死す。「津軽じよんがら節」(斎藤プロ)ATG・斎藤耕一)、「恍惚の人」(芸苑社・豊田)、「人間革命」(同・外田利雄)、「四畳半襖の裏張り」(日活・神代辰巳)。</p> <p>大映、徳間新社長体制で再出発。東宝の「日本沈没」(森谷司郎)が大ヒットする。「サンタカン八番娯館」(望郷)、「俳優座」(東宝・熊井)、「砂の器」(松竹・野村芳太郎)、「華麗なる一族」(芸苑社・山本薩)。</p> <p>興業収入で洋画が邦画の優位にたつ。東映、京都に映画村を開設。「祭りの準備」(綜映)、「映」ATG・黒木和雄)、「田園に死す」(人力飛行機)ATG・寺山修司)、「実録阿部定」(日活・田中登)、「金環蝕」(大映・山本薩)。</p> <p>黒沢明、文化功労賞受賞。角川書店、横溝プロムで「天神家の一族」(市川崑)を大ヒットさせる。日活、「鳴呼!! 花の応援団」(曾根中生)がヒット。大島の「愛のコレード」(検閲問題で話題をよぶ)、「大地の子守歌」(行動社/木村プロ・増村保造)。</p>